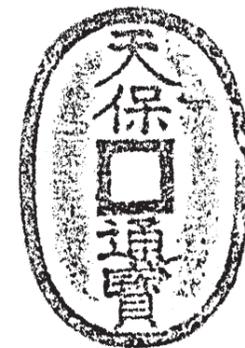


原田第1・2・40・41号墓地 中卷

—— 原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告 2 ——

筑紫野市文化財調査報告書

第79集



2004

筑紫野市教育委員会

原田第1・2・40・41号墓地

中卷

筑紫野市文化財調査報告書 第79集

2004

筑紫野市教育委員会



原田第1・2・40・41号墓地 中 卷

—— 原田駅前土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告 2 ——

筑紫野市文化財調査報告書

第79集

2004

筑紫野市教育委員会

序

筑紫野市教育委員会は、原田駅前土地区画整理事業に伴い、昭和63年度から平成12年度にかけて事業地内の埋蔵文化財発掘調査を実施して参りました。

本書は、そのうちの昭和63年度から平成3年度にかけて実施した江戸・明治時代の墓地の調査成果の一部であり、「原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告 2」としてとりまとめたものです。

既に、「1」において原田第1・2・40・41号墓地の遺構と、その『墓籍地図』・『墓籍』の報告を行っており、本書と併せて活用していただきたく存じます。

本書の作成にあたっては、専門的立場から7名の先生方より玉稿を賜りました。一般的に敬遠されがちな江戸・明治時代の墓地の調査ではありますが、先生方の報告には「えっ、そんなことまで分かるのか。」という驚きさえあります。そういう意味では、専門的研究のみならず、広く市民の方々の学習の一助になれば幸いに存じます。

なお、本書の刊行にあたっては、各執筆者および貴重な資料の公開を許可された伯東寺より、多大なるご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

筑紫野市教育委員会
教育長 高嶋 正 武

例 言

1. 本書は、筑紫野市施行原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査のうち、昭和63年度から平成3年度にかけて筑紫野市教育委員会が実施した、原田第1・2・40・41号墓地の発掘調査報告書の第2弾であり、「原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告2」にあたる。
2. 本書は、原田第1・2・40・41号墓地の調査に伴って行った新たな調査（分析・考察）の報告であり、書名を『原田第1・2・40・41号墓地 中巻』とした。
3. 本書の内容は、既刊『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』と関連するものであり、重複する内容については本書では省略した。
4. 本書の執筆は、各専門調査の報告は下記の通りであり、それ以外は森山が担当した。

第II章	第1節	鷲山智英
	第2節	唐木田芳文
	第3節	櫻木晋一
	第4節	比佐陽一郎
	第5節	長岡英一・伴清治・馬嶋秀行
	第6節	森山栄一
5. 各報告の遺跡名は、各執筆者の承諾を得て、森山の責で変更し統一した。
6. 頁数は全体を通して付したが、表・挿図・写真図版の番号は節ごとに付した。
7. 註釈および文献の体裁は森山の責で統一し、節ごとに記載した。
8. 『墓籍地図』・『墓籍』の公開にあたっては、伯東寺前住職小山憲栄氏の理解と協力を得た。
9. 本書の編集は、各報告執筆者と協議の上、森山が行った。
10. 表紙の題字は田中範隆前市長（原田駅前土地区画整理事業施工代表者）によるものである。

本文目次

第I章 調査の経過と組織	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織	2
第II章 調査の報告	3
第1節 原田第1・2・40・41号墓地の墓石に刻まれた法名・戒名についての一考察	4
第2節 原田第1・2・40・41号墓地における墓石の岩石調査	15
第3節 原田第1・2・40・41号墓地出土の六道銭	27
第4節 原田第1・2・40・41号墓地出土銅銭の材質調査について	56
第5節 原田第1・41号墓地出土義歯に関する報告	70
第6節 旧筑前国御笠郡原田村の『墓籍』について	83

表・挿図・写真図版目次

第I章 調査の経過と組織	
第1節 第1節 調査に至る経過	
第1表 特殊資料の内容と調査・報告者一覧表	1
第II章 調査の報告	
第1節 原田第1・2・40・41号墓地の墓石に刻まれた法名・戒名についての一考察	
第1表 原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の法・戒・俗名一覧表	4
第2表 原田第1・40・41号墓地出土墓石の俗名一覧表	10
第3表 明福寺過去帳一覧表(一部)	12
第1図 浄土宗系戒名墓石実測図(S=1/10)	5
第2図 浄土真宗系法名墓石実測図(S=1/10)	6
第3図 旧原田村菩提寺位置図(S=1/25,000)	9
第4図 永川家俗名墓石実測図(S=1/10)	11
第5図 永川家統柄復元図	12
第6図 法・戒・俗名の墓地別年代分布図	13
第2節 原田第1・2・40・41号墓地における墓石の岩石調査	
第1表 原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の岩型と年代	16
第1図 脊振山地南縁部の地質図	18
第2図 原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の岩型と年代との関係図	21
図版1 原田第1・40・41号墓地の墓石標本写真	23
図版2 原田墓地墓石の岩型A・B・Eの顕微鏡写真	24
図版3 原田墓地墓石の岩型E・Fの顕微鏡写真	25
図版4 原田墓地墓石の岩型F・G・Hの顕微鏡写真	26

第3節 原田第1・2・40・41号墓地出土の六道銭

第1表	墓別六道銭内訳一覧表	29
第2表	銭種内訳表	30
第3表	古寛永内訳表	30
第4表	新寛永内訳表	30
第5表	六道銭の枚数と比率	31
第6表	皇宋通寶の金属組成	32
第7表	寛永通寶の金属組成	34
第8表	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭分類一覧表①	36
第9表	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭分類一覧表②	37
第10表	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭分類一覧表③	38
第1図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)①	39
第2図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)②	40
第3図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)③	41
第4図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)④	42
第5図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑤	43
第6図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑥	44
第7図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑦	45
第8図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑧	46
第9図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑨	47
第10図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑩	48
第11図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑪	49
第12図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑫	50
第13図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑬	51
第14図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑭	52
第15図	原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)⑮	53
図版1	原田第1・2・40・41号墓地六道銭出土状況写真①	54
図版2	原田第1・2・40・41号墓地六道銭出土状況写真②	55

第4節 原田第1・2・40・41号墓地出土銅銭の材質調査について

第1表	分析結果一覧表①	63
第2表	分析結果一覧表②	64
第3表	分析結果一覧表③	65
第4表	分析結果一覧表④	66
第5表	元素の組み合わせによる分類表	67
第6表	銭種別検出元素一覧表	67
第1図	蛍光X線照射位置図(原寸)①	58
第2図	蛍光X線照射位置図(原寸)②	59
第3図	蛍光X線照射位置図(原寸)③	60
第4図	蛍光X線照射位置図(原寸)④	61

第5節 原田第1・41号墓地出土義歯に関する報告

図版1	原田第1号墓地第2号墓出土義歯	76
図版2	原田第1号墓地第2号墓出土義歯	77

図版 3	原田第1号墓地第2号墓出土義齒	78
図版 4	原田第1号墓地第2号墓出土義齒	79
図版 5	原田第1号墓地第2号墓・第41号墓地第6号墓出土義齒	80
図版 6	原田第41号墓地第6号墓出土義齒	81
図版 7	原田第41号墓地第6号墓出土義齒	82

第6節 旧筑前国御笠郡原田村の『墓籍』について

第1表	『墓籍』における墓地別標記一覧表	85
第2表	『墓籍』記載数および項目別分析対象数一覧表	86
第3表	墓地別所有形態・使用世紀一覧表	87
第4表	墓地別墓標内訳一覧表	89
第5表	年別(1840~1889年)墓標内訳一覧表	90
第6表	原田地区内改葬事例一覧表	91
第7表	墓地別墓坪数内訳一覧表	92
第8表	原田第1・2・40・41号墓地における墓石基礎寸法・墓壙寸法・『墓籍』坪数対比表	93
第9表	墓地別死者姓名表記法内訳一覧表	94
第10表	墓地別本人俗名による死者の性別一覧表	95
第11表	親族との関係で表記された死者の内訳一覧表	96
第12表	墓地別死者の親族の性別一覧表	97
第13表	性別夫婦組数一覧表	97
第14表	出産前後の死者一覧表	98
第15表	墓地別死者内訳一覧表	99
第16表	墓地別姓一覧表	100
第17表	性別死者数・死亡年・埋葬墓地一覧表	101
第18表	墓地別単位期間死者数一覧表	102
第19表	死者数と墓地数の対比表	103
第20表	時代別姓出現率一覧表	106
第21表	原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の死者年齢および平均年齢一覧表	108
第22表	年別死者内訳一覧表	109
第1図	『墓籍地図』表紙	83
第2図	第2号墓地墓籍	84
第3図	墓標内訳比グラフ	88
第4図	年別(1840~1889年)墓標内訳比グラフ	90
第5図	坪数内訳比グラフ	92
第6図	本人俗名表記における死者の男女比グラフ	96
第7図	親族と死者との関係図	97
第8図	原田第40号墓地第25号墓・第1号壺棺実測図(S=1/30)	98
第9図	墓地別死者内訳グラフ	99
第10図	死者内訳グラフ	100
第11図	墓地別死亡年分布図	104
第12図	開設時期別墓地分布図(S=1/10,000)	105
第13図	性別死亡年分布図	107
第14図	年別死者数変遷図	110

第 I 章 調査の経過と組織

第 1 節 調査に至る経過

昭和63年度から平成3年度にかけて発掘調査した原田第1・2・40・41号墓地の調査成果の一部は、現地調査から12年経った平成15年度に『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』^{※1)}として刊行した。『上巻』の内容は遺構の調査成果を主とし、関連資料として4ヶ所の『墓籍地図』・『墓籍』の調査成果も併せて掲載した。

なお、整理を進めていた遺物や資料の中には特殊なものも含まれており、専門的な分析や考察といった新たな調査の必要性が生じてきた。このため、平成14・15年度において外部の専門家に調査と報告文執筆を依頼した。

当初、遺物の事実報告と特殊遺物・資料の調査成果を併せて『下巻』として刊行する予定であったが、諸般の事情により、第1表の内容についての調査（分析・考察）成果の報告を『中巻』として刊行することとした。出土遺物の事実報告と残りの特殊資料の調査成果については、『下巻』として次回刊行する予定である。

第1表 特殊資料の内容と調査・報告者一覧表

特殊資料の内容	調査・報告者	備 考
墓石の法・戒名	鷺山智英	2003年4月依頼 — 2004年2月提出
墓石の石材	唐木田芳文	2003年5月依頼 — 2004年2月提出
六道銭	櫻木晋一	2003年4月依頼 — 2004年2月提出
六道銭の材質	比佐陽一郎	2003年9月依頼 — 2004年2月提出
義歯	長岡英一・伴 清治・馬嶋秀行	2002年9月依頼 — 2003年3月提出
『墓籍』 全て	森山栄一	2004年7月脱稿

墓石に関しては、現地調査時より墓石の形態と墓石の材質の2点については意識していた。しかし、墓石の形態に関しては、その大半が1面に墓碑面を設けただけの自然石であり、角柱状の切石も少数であったため、形態分類するまでの資料とはなり得なかった。このため、旧原田村に所在する墓地の全ての墓石を調査することなしに形態分類は困難と考え、本書での考察は行わなかった。

墓石の材質については、自然石の墓石の大半が花崗岩であり、北部九州における花崗岩が15種類（岩体）に識別されている^{※2)}ことは、以前より唐木田氏より教示を受けていたため、石材の鑑定を行うことで墓石の石材の供給源が解明でき、さらに死亡年を基に供給源の変遷が確認できるものと考えた。このため、当教育委員会において墓石のサンプリングとプレパラート作製を行い両資料を唐木田氏に預けてその鑑定と報告文の執筆を依頼した。

墓石の調査で行った墓碑銘の解読作業において死者名の表記法に俗名と戒名の2種類があることを知り、また、当初単純に戒名と呼んでいたものも厳密には宗派によっては法名と呼ばれており、法・戒名の表記法にも違いがあることを鷺山氏より教示を受けた。このため、調査した墓石の墓碑

銘の再解読を鷺山氏に依頼し、『上巻』で報告した。また、鷺山氏より指摘された法・戒名と俗名の違いから宗派と家との関係が把握できるものと考え、改めて鷺山氏に法・戒名についての考察と報告文の執筆をお願いした。

六道銭については、現地調査時からその重要性を櫻木氏より教示を受けてきた。このため、櫻木氏より六道銭調査の指導を受け、櫻木氏には出土銭の分類と経済学的考察の報告文の執筆をお願いした。

また、六道銭に関しては、現地調査より10年以上の歳月が経ち、その事例も増え、六道銭研究も進歩してきた。その一つが、銅銭の材質調査である。櫻木氏も従来の古銭学的分類とともに化学分析の必要性を強く主張されていた。このため、当教育委員会では福岡市埋蔵文化財センターの協力を得て、一部ではあるが出土六道銭の材質調査を平成15年度に行った。なお、その分析データは専門的であるため、分析作業の指導をしていただいた比佐氏にその解釈と報告文の執筆をお願いした。

義歯の出土は全く予想していなかったうえ、その出土例も当時知らなかった。平成12年、鹿児島紡績所跡D地点の出土例を知り、その鑑定・報告^{文3)}をされた長岡氏に義歯3点の鑑定と報告文の執筆をお願いした。

『墓籍』については、『上巻』において原田第1・2・40・41号墓地だけの墓籍の調査を実施し報告したが、明治22年に編集された44ヶ所の墓地全ての墓籍の内容を調査することで、近世から近代にかけての旧原田村の様子が窺えるものと考え、当教育委員会が調査し、本書において報告することとした。

- 文献 1. 筑紫野市教育委員会 『原田第1・2・40・41号墓地 上巻 -原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告1-』 筑紫野市文化財調査報告書第77集 2003
2. 唐木田芳文 「北九州花崗岩の地質学的分類」 日本応用地質学会九州支部会報第6号 1985
3. 長岡英一 「鹿児島紡績所跡D地点より出土した下顎総義歯に関する報告書」『鹿児島紡績所跡D地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(29) 鹿児島市教育委員会 2000

第2節 調査の組織

本書の作成・刊行に伴う調査組織は、下記の通りである。

調査(平成14年度～平成15年度)

総括	筑紫野市教育委員会	教育長	高嶋正武
庶務	筑紫野市教育委員会	教育部長	岡部隆充(平成14年度)
			伊藤清隆(平成15年4/1～6/18)
			香野国治(～平成15年度)
		文化財課長	山内幸雄
		文化財課長補佐	古賀幸信(平成14年度)
			木村政弘(平成15年度)
		文化財課主査	野美山勝

調 査	筑紫野市教育委員会	文化財課技師	森 山 栄 一
	筑紫野市下見	明福寺 住職	鷲 山 智 英
	西南学院大学名誉教授		唐木田 芳 文
	下関市立大学経済学部教授		櫻 木 晋 一
	福岡市埋蔵文化財センター文化財主事		比 佐 陽一郎
	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授		長 岡 英 一
	〃	〃	伴 清 治
	〃	〃	馬 嶋 秀 行
報告書作成 (平成16年度)			
総 括	筑紫野市教育委員会	教 育 長	高 嶋 正 武
庶 務	筑紫野市教育委員会	教育部長	香 野 国 治
		文化財課長	米 元 和 夫
		文化財課長補佐	満 生 裕 亮 (文化財担当係長)
		文化財課主任主査	野美山 勝
調 査	筑紫野市教育委員会	文化財課技師	森 山 栄 一
原田駅前文化財調査指導委員会		前委員 歴史学	近 藤 典 二
(平成16年3月31日付で解散)		前委員 考古学	小 田 富士雄
		前委員 民俗学	佐々木 哲 哉
		前委員 人類学	永 井 昌 文 (故人)
		前委員 美術史学	西 村 強 三
		前委員 建築学	宮 本 雅 明
調査協力者	筑紫野市原田	伯東寺 前住職	小 山 憲 栄
	筑紫野市教育委員会	歴史博物館主査	山 村 淳 彦
		〃 学芸員補	日永田 能 成
	福岡市埋蔵文化センター保存処理指導員		片 多 雅 樹
	福岡市教育委員会	福岡市埋蔵文化財センター	

調査関係者

室内作業員 (平成16年度報告書作成関係)

岩 下 裕利子 栞 原 貴久子 新 宅 さやか 津 城 彩 松 尾 敦 子
山 内 妙 子 芳 野 和 代

第Ⅱ章 調査の報告

第Ⅰ章第1節「調査に至る経過」で述べたように、特殊資料の報告は当初遺物の事実報告と併せて『下巻』の中の付論として掲載する予定であった。しかし、遺物の事実報告ができない現段階では、特殊資料の調査報告を本書に掲載する。

第1節 原田第1・2・40・41号墓地の墓石に刻まれた法名・戒名についての一考察

1. はじめに

筑紫野市教育委員会が発掘調査した原田第1・2・40・41号墓地からは墓碑銘が刻まれた墓石が104基出土し^(註1)、既に報告されている^(文1)。このうち、100基の墓碑銘に記された死亡年と法・戒・俗名をまとめたのが第1表である。また、第1表には、法・戒名から宗派を、近在の寺の過去帳から菩提寺を分かる範囲で記載している。

本稿では、墓石に刻まれた法・戒名および俗名から旧原田村における家々の姿のほんの一部を探ってみたい。

第1表 原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の法・戒・俗名一覧表

墓地名	墓石番号	年号	法・戒名・俗名	宗派	菩提寺	
原田第1号	第34号	宝暦3年	釈屋宗口	浄土真宗		
	第37号	明和4年	釈浄龍龜	浄土真宗	明福寺	
	第38号	明和5年	釈妙連尼	浄土真宗	明福寺	
	第29号	明和6年	釋妙令信尼	浄土真宗	明福寺	
	第42号	天明2年	釈妙縁信女	浄土真宗		
	第41号	天明4年	釈知順信士	浄土真宗	明福寺	
	第28号	天明8年	法號釋教仙靈	浄土真宗	明福寺	
	第40号	寛政4年	釈妙春信女	浄土真宗	明福寺	
	第39号	文化11年	釋西善信士	浄土真宗	明福寺	
	第5号	天保10年	釈妙善信女	浄土真宗		
	第4号	天保10年	釈香讓灵	浄土真宗		
	第6号	天保10年	帆足半右エ門墓			
	第43号	天保15年	永川ルイ墓	浄土真宗	明福寺	
	第3号	嘉永3年	大心海釈浄信士	浄土真宗		
	第9号	嘉永3年	照普真眞善女	浄土宗	西方寺	
	第2号	嘉永5年	誓誓真眞信女	浄土宗	西方寺	
	第8号	安政4年	松口和藏墓			
	第33号	元治2年	永川ツヤ墓	浄土真宗	明福寺	
	第1号	慶應2年	戒室貞法山内登良	浄土宗	西方寺	
	第7号	慶應3年	實誓妙悟信女	浄土宗	西方寺	
	第46号	明治10年	永川竹次郎之墓			
	第44号	明治20年	永川きんの墓	浄土真宗	明福寺	
	第22号	明治20年	永川弥吉之墓	浄土真宗	明福寺	
	第45号	明治22年	永川ツヤ之墓	浄土真宗	明福寺	
	第36号	明治29年	永川興平墓	浄土真宗	明福寺	
	第19号	明治30年	永川ツナ之墓			
	第21号	明治32年	永川登里之墓	浄土真宗	明福寺	
	第18号	明治33年	永川岩之墓	浄土真宗	明福寺	
	第23号	明治35年	釈華頂童子	浄土真宗		
		明治38年	飯真釈現信士	浄土真宗		
		大正6年	釈妙珠信女	浄土真宗	明福寺	
		大正7年	釈妙諦信女	浄土真宗		
	原第2号	第1号	寛口11年	心普浄安信士	浄土宗	
		第2号	昭和6年	久月壽求信女	浄土宗	
	原田第40号	第33号	享保2年	法名釋妙祐位	浄土真宗	
		第17号	延享1年	山内吉次郎		
第16号		寛延1年	見庭靈	浄土宗	西方寺	
第26号		宝暦12年	釈妙光	浄土真宗		
第15号		明和3年	梅 應妙真信女	浄土宗	西方寺	
第27号		安永8年	法号 釋浄口信士	浄土真宗		
第13号		天明2年	故猛誓勇道信士焔	浄土宗	西方寺	
第55号		天明5年	釈大順信士	浄土真宗		
第47号		天明6年	釈妙真信女	浄土真宗		
第49号		天明7年	釈尼妙順	浄土真宗		
第12号		天明7年	玄標了覺童男	浄土宗		
第48号		天明7年	釈教順信士	浄土真宗		
第46号		天明9年	釈道教信士	浄土真宗		
第10号		寛政6年	圓即是相信女	浄土宗		
第50号		寛政7年	釈 祐円信	浄土真宗		
第7号		寛政11年	智顔惠柳信女靈	浄土宗	西方寺	
第6号		享和2年	胎屋延長信女	浄土宗	西方寺	
第5号		文化3年	顯光了円信女	浄土宗	西方寺	
第8号	安政4年	隨善行法信士	浄土宗	西方寺		

※浄土真宗の法名で菩提寺が空欄のところは原田伯東寺である可能性が高い

墓地名	墓石番号	年号	法・戒名・俗名	宗派	菩提寺
原田第40号	第2号	安政7年	真光如雲信女	浄土宗	
	第4号	安政7年	唱在念信士	浄土宗	西方寺
	第14号	明治7年	同妻ぬい之墓	(浄土宗)	(西方寺)
		明治40年	山内弥作之墓		
	第9号		口園童女		
	第17号	天正12歳	山内半右衛門尉 辻根元 同名単人		
	第31号	文化3年	釋妙願信女	浄土真宗	
	第38号	文化13年	法名釋尼妙障信女	浄土真宗	
	第19号	文政8年	釋源乘	浄土真宗	
	不明19	文政9年	釈正音信士	浄土真宗	
不明1	文政9年	釈幻如童子	浄土真宗		
第30号	文政12年	釋妙誓	浄土真宗		
第7号	天保3年	釋妙諦信女	浄土真宗		
不明18	天保4年	釋了順信士	浄土真宗		
不明11	天保4年	釋口夢童女	浄土真宗		
不明16	天保6年	釋妙喜信女	浄土真宗		
不明17	天保7年	釋僧忍信士	浄土真宗		
第28号	天保7年	釈妙順 山内弥平妻	浄土真宗		
不明6	弘化3年	釈妙善灵	浄土真宗		
不明8	安政2年	釈妙空灵	浄土真宗		
第3号	安政2年	釋誓城灵	浄土真宗		
不明7	安政3年	山内たみ墓			
不明12	安政口年	釈善吉墓	浄土真宗		
不明5	萬延1年	釋妙円	浄土真宗		
第65号	文久3年	釈妙順 幸治郎後妻	浄土真宗		
第61号	慶應4年	法名釋妙念信女	浄土真宗		
第64号	明治3年	平山善市墓			
第24号	明治4年	法名釈善浄	浄土真宗		
第21号	明治6年	法名釈妙善	浄土真宗		
第62号	明治7年	山内きん墓			
第9号	明治10年	釋誓城信士	浄土真宗		
第20号	明治11年	釈米翁壽山信士	浄土真宗		
第27号	明治11年	法名釈妙音信女	浄土真宗		
第23号	明治14年	法名釈妙戒信女	浄土真宗		
第33号	明治14年	法名釈妙光信女	浄土真宗		
不明13	明治15年	山内幸次郎墓			
第63号	明治18年	山内又七墓			
不明2	明治19年	山内又三郎之墓			
不明3	明治28年	山内岩吉墓			
第40号	明治29年	平山才吉墓			
第5号	明治29年	草野作八墓			
第8号	明治32年	平山兵吉墓			
第47号	明治32年	山内半次郎墓			
不明10	明治33年	平山ひき女墓			
不明15	明治36年	山内弥吉墓			
不明9	大正2年	山内信男之墓			
第43号	大正6年	山内イセ之墓			
第45号	大正7年	山内信子之墓			
不明4	大正8年	山内正幸之墓			
不明14		山内コマ之墓			
第41号		法号圓道口			

2. 法名・戒名の宗派別概要

(1) 浄土宗系 (第1図)

浄土宗においては戒名という。戒名は4文字であり(第1図1)、その下に位号がつけられている(第1図3・4)。また「誓」という文字が含まれている戒名は浄土宗特有のもので、「誓号」と呼ばれている。「誓」の上に1文字を置き、2文字で誓号が構成される。誓号は本来五重相伝という、浄土宗の奥義を伝法する儀式を受けた者に与えられるものである。誓号がつけられると、誓号を含めて4文字の戒名、その下に位号という順で構成されている(第1図5・6)。

本調査における墓石にも誓号がついた墓石が見られるが、この当時(江戸時代、明治時代)に五重相伝を受けているのかどうかは定かではない。



第1図 浄土宗系戒名墓石実測図 (S = 1/10) (文1より改変転載)

(2) 浄土真宗系 (第2図)

浄土真宗においては法名という。「釈(釋)」という文字が含まれている法名は浄土真宗系のものである。「釈」は釈迦の弟子という意味である。釈の下には2文字の法名がつけられる(第2図1・2)。位号は本来用いない。今回の墓石調査では浄土真宗の法名と思われるものが、43基認められるが、そのうち31基に位号がつけられ(第2図3～7)、12基には位号がない。

また釈の下に4文字の法名がつけられているものが1例(第41号墓地第20号墓「釈米翁壽山信士」)存在する。4文字法名については、この近隣の真宗寺院の過去帳においてその存在が確認されているので、これも真宗の法名であるとしてよいだろう。

(3) 神道系

神道においては戒名・法名はない。俗名が刻まれた墓石は神道において葬儀が営まれたものであると思われる。

筑紫神社は『延喜式』(967年施行)にも記載されている式内社である。諸々の記録によれば、古代・中世を通じて社僧がいた神仏混淆の神社であったことが窺える。天正年間に兵火により衰微し、近世においては山内氏が代々神職を勤めている。幕末から明治初期にかけての神職は山内(明治になり城山きのやまに改姓)正興であった。彼の墓石が現在五郎山の中腹の共同墓地に存在する。明治14年7月23日に61歳で死去している。正面には「城山正興之墓」と刻まれている。

このように神道では墓石に俗名を刻むようであるが、では俗名を刻んでいけばすべて神道であるかということそうではないようである。詳しくは後述する。

3. 菩提寺について (第3図)

本墓地調査の対象となった墓地の管理者がどこの寺院に所属するのか。前述したように法名・戒名から菩提寺の宗派が推測できるので、近隣の寺院の過去帳と照合していけば判明するであろう。

浄土宗系の戒名と思われる20件について浄土宗の西方寺(筑紫野市天山)の過去帳と照合すると、そのうち13件が見出された。

『筑紫野市史』によれば、西方寺の歴史は古代にまでさかのぼるようである^{文2)}。最初は法相宗の寺院であったという。その後天正年間には兵火にかかり廃絶し、永禄年間(1558-1569)に行明上人が浄土宗の寺院として再興したという。

また近世における筑紫神社の神職山内家の菩提寺でもあり、過去帳には神職の戒名もみられる。幕末になると神職の戒名はみあたらなくなるが、その家族の戒名はみられる。天正時代から江戸時代初期にかけては西方寺がこの近隣においての有力寺院であったと考えられ、原田や上原田の比較的古い家筋が西方寺の檀家であるようだ。

次に浄土真宗系の法名の大部分は、地元である筑紫野市原田の伯東寺が菩提寺であると思われるが、残念ながら大正9年に火災により過去帳も焼失しているので確認できない。

伯東寺は正保4年(1647)に筑後国竹野郡筒井村(現在の浮羽郡田主丸町)から原田に移転してきている^{文3)}。したがってその後寺檀関係が結ばれていくことになる。

同じく浄土真宗系の法名の一部は、筑紫野市下見の明福寺の過去帳に見出される。

明福寺は第四世が寛永18年（1641）に本願寺から寺号を許されている^{文3)}ので、伯東寺が移転してくる以前からの寺檀関係があったものと思われる。

4. 置き字、位号について（第1表、第1・2図）

置き字とは戒名・法名の上に2文字あるいは3文字を冠するものである。これは原田第1号墓地の墓石において真宗系の法名に2例見られる。第3号墓石の「大心海」（大心海釈浄信士・嘉永3年）（第2図8）と第2・3号墓石の「皈真」（皈真釈現信士・明治38年）（第2図9）というものである。

また、位号とは戒名（法名）の下につけられているもので、信士、信女、居士、大姉、童子、童女などをいう。この位号は生前の修行の段階を示すものだといわれている。

今回の調査における墓石にも位号がつけられているものがある（第1・2図）。

浄土宗での戒名には位号がすべてついている。信士、信女が多いが、善女というものが1例見られる（照誉貞真善女・嘉永3年）（第1図5）。

西方寺の過去帳にも墓石と同じように位号がつけられた戒名が記載されている。

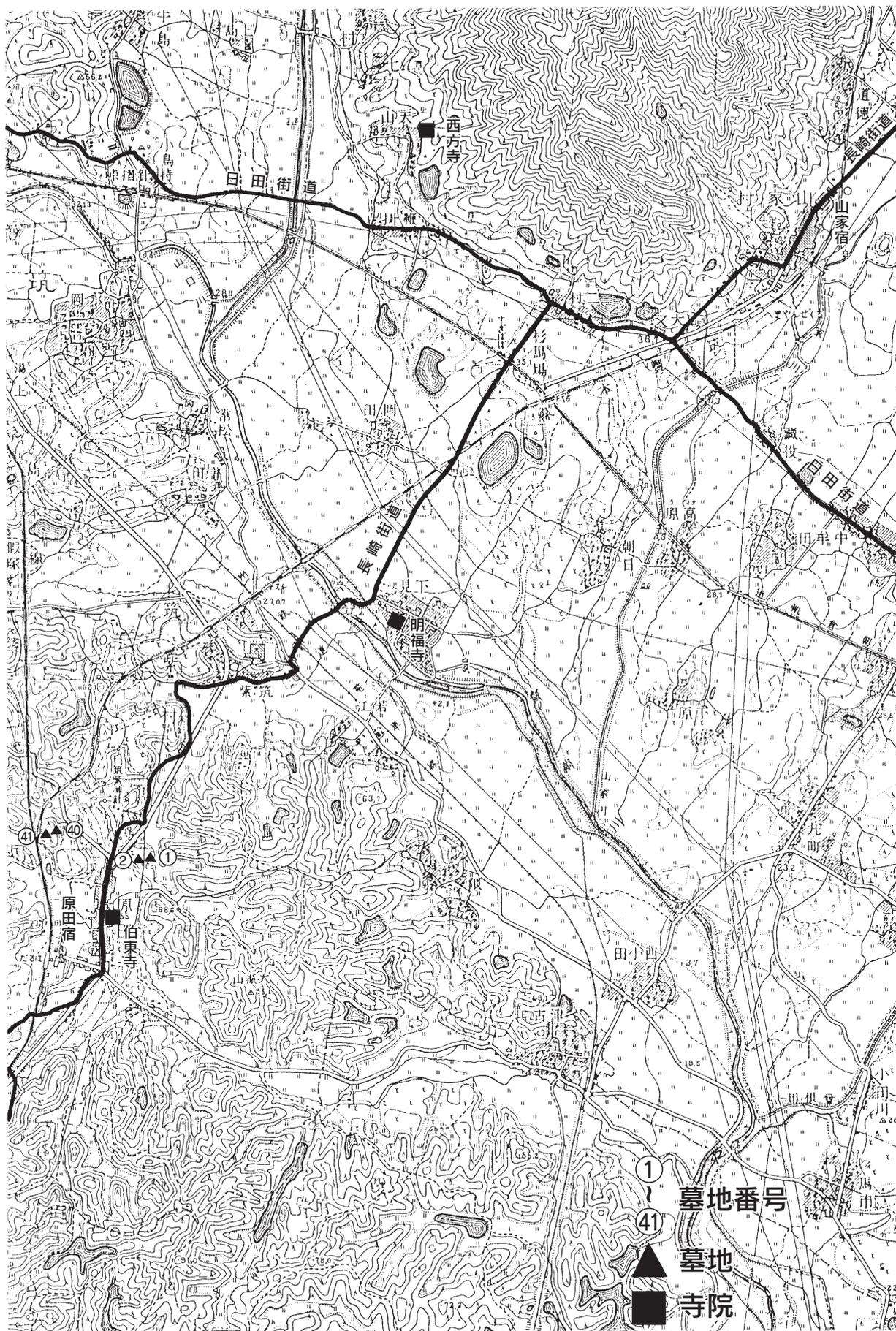
真宗における法名は釈の下に2文字の法名という3文字で構成されるのが基本的なものであり、置き字や位号は本来つけない。しかし墓石には位号がつけられているものがほとんどである。位号は浄土宗と同じように信士（第2図3）、信女（第2図4）が多いが、「尼」（釈妙蓮尼・明和5年）、「信尼」（釋妙令信尼・明和6年）というものが見られる。ともに明和年間のものであり、信女という位号と同じ意味だと思われるが、可能性としては篤信の女性に対して、信女と区別してつけられたものであるとも考えられる。

真宗法名の位号は浄土宗などの宗派において位号がつけられているので、それにならったものだと思う。その理由は戒名の文字数が多いほど格が高い戒名であるという世間的な意識がはたらき、遺族が法名に位号を望んだものだと考えられる。したがって置き字および位号がともにつけられているものはその典型例だといえよう。

一方、明福寺の過去帳には墓石にあるような置き字、位号は記載されていない。法名本来の釈○○という3文字しか書かれていない。古い過去帳が新しい過去帳に整理された時に位号などが省かれたことも考えられるが、置き字や位号のついた法名は寺院が遺族の要望に応じて世間向けにつけたものだと考えられる。

また、位号に似たものに「靈」という文字がある。浄土宗系の戒名に3例（第1図2・7）、浄土真宗系の法名に6例（第2図10・11）見られる。その多くは靈の異体字である「𩇛」「𩇜」の文字が使用されている。

西方寺および明福寺の過去帳と照合してみると、ともに過去帳には「靈」という文字はない。例えば墓石に「智顔恵柳信女靈」とあるものは、西方寺の過去帳では靈の文字はない。つまり寺では法名・戒名としてつけていない文字が墓石には加えられているということである。関連して、墓石に「見庭靈」とある例を見てみると、西方寺の過去帳では「唯誉見庭信士」とある。浄土宗では前述のように「誉」は限られた人に付けられる文字であるが、それを刻んでいない。さらに墓石の戒名の上には阿弥陀如来をあらわすキリーク（梵字）と「靈」という文字が彫られている。



第3図 旧原田村菩提寺位置図 (S = 1/25,000)

第2表 原田第1・40・41号墓地出土墓石の俗名一覧表

天正12. 7. 23	山内半右衛門尉・同名隼人	41号墓地	明治28. 3. 20	山内岩吉墓	41号墓地
延享1. 10. 14	山内吉次郎	40号墓地	明治29. 6. 29	山内才吉	41号墓地
天保10. 11. 30	帆足半右エ門墓	1号墓地	明治29. 10. 26	永川与平墓	1号墓地
天保15. 6. 5	永川ルイ墓	1号墓地	明治29. 10. 27	草野作八墓	41号墓地
安政3. 4. 29	山内たみ墓	41号墓地	明治30. 1. 12	永川ツナ墓	1号墓地
安政4. 12. 8	松口和蔵墓	1号墓地	明治32. 3. 5	永川□里墓	1号墓地
元治2. 4. 19	永川ツヤ墓	1号墓地	明治32. 10. 11	平山兵吉墓	41号墓地
明治7. 3. 3	山内ぬい之墓	40号墓地	明治32. 11. 8	山内半次郎墓	41号墓地
明治7. 7. 12	山内きん墓	41号墓地	明治33. 2. 24	平山ヒサ女墓	41号墓地
明治10. 4. 7	永川竹次郎墓	1号墓地	明治33. 2. 16	永川岩之墓	1号墓地
明治15. 10. 4	山内幸次郎墓	41号墓地	明治36. 7. 16	山内弥吉墓	41号墓地
明治18. 8. 11	山内又七墓	41号墓地	明治40. 1. 4	山内弥作之墓	40号墓地
明治19. 11. 3	山内又三郎之墓	41号墓地	明治44. 5. 23	山内コマ之墓	41号墓地
明治20. 1. 7	永川きん墓	1号墓地	大正2. 4. 26	山内信男之墓	41号墓地
明治20. 3. 9	永川弥吉之墓	1号墓地	大正6. 3. 8	山内イセ之墓	41号墓地
明治22. 10. 6	永川ツヤ墓	1号墓地	大正7. 1. 6	山内信子之墓	41号墓地
			大正8. 2. 18	山内正幸之墓	41号墓地

5. 俗名の墓石（第2・3表、第4・5図）

戒名・法名がなく、俗名が刻まれた墓石は一部江戸期のものにも見られる。第2表で示しているようにほとんどは明治時代以降に見られる。

全部で32基（1基は夫婦墓）が認められる。そのうち7基が江戸期のものであり、26基が明治以降のものである。

江戸期の墓石に俗名が記されている例は珍しいものではない。近隣の墓地でもよく見られるものである。俗名の墓石について考えてみたい。

江戸時代は寺檀制度のもとで庶民はどこかの寺院にかならず所属しなければならず、したがって葬儀は仏式で営まれた。当然戒名・法名がつけられていたはずである。

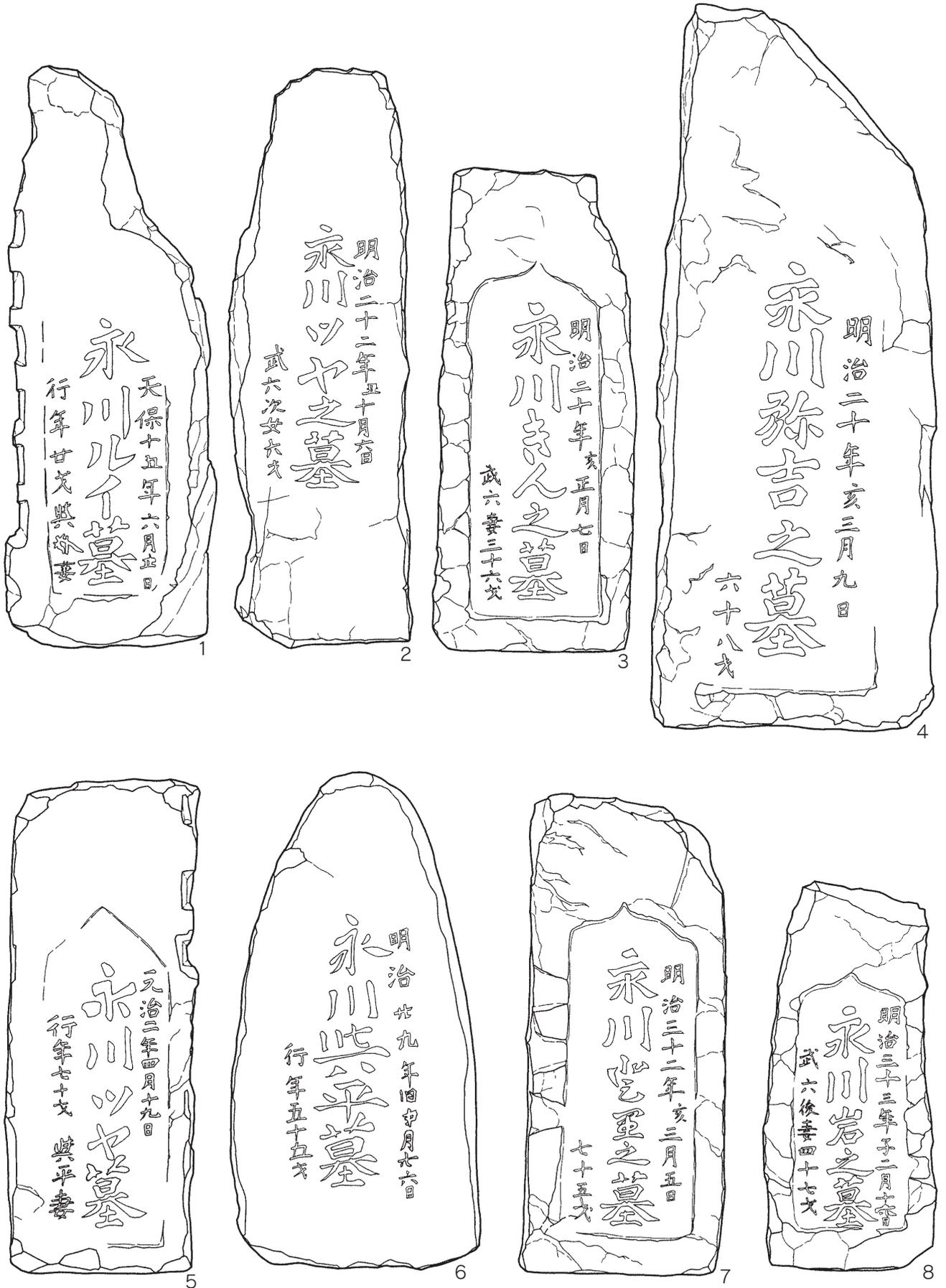
江戸時代において、すなわち寺檀制度のなかで唯一仏式の葬式が免除されていたのは、吉田神道の神職およびその長男であった。これは国学の発達に伴い神職が神道式の葬儀を望んだからであった。しかし神職の家族の葬儀の場合は仏式でなければならなかった。

明治維新になり神仏分離政策にともない、葬儀は神道式でもできるようになっていく。神道式の葬儀には法名・戒名がないので、明治時代以降の墓石に俗名が記されていても不思議はない。

たとえば、原田40号墓地第14号墓石の山内弥作・妻ぬいの夫婦墓を例にしてみる。この場合は妻ぬいが明治7年に没しており、その後夫である弥作が明治40年に没している。当然この墓石は夫弥作が没した後に建てられたものであろう。二人の名前は俗名で墓石に刻まれているが、妻ぬいは西方寺の過去帳に戒名（真空雄念信女）の記載がある。おそらく明治7年にぬいが没した時期までは西方寺の檀家であり、仏式で葬儀が営まれ、その後墓石が建てられたであろう。その墓石には戒名が刻まれていたかもしれない。

一方、夫の弥作は西方寺の過去帳に記載がないので、この時点（明治40年）までに山内弥作は神道に宗旨替えをしていたことが推測される。そこで遺族が、戒名が刻まれたぬいの墓石を処分し、夫婦墓として二人の俗名を刻んだ墓石を建てたのではないかと考えられる。

このように明治時代にはいり神道に宗旨替えをした家もあり、俗名の墓石があっても不思議ではない。しかし俗名が刻まれている墓石がすべてこのような神道式の葬儀であったかということになるとそう単純ではないようである。



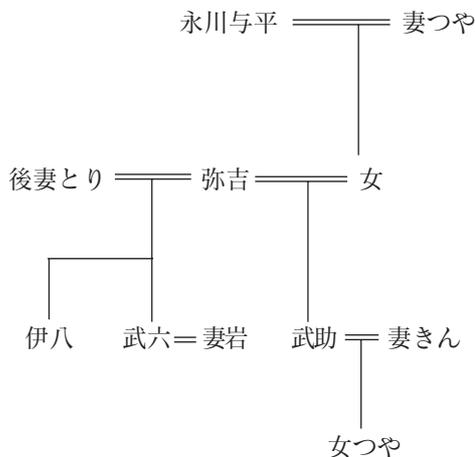
第4図 永川家俗名墓石実測図 (S = 1/10) (本文1より改変転載)

第3表 明福寺過去帳一覧表(一部)

①	釈妙喜	天保15年 6月 5日	原田	与助妻
②	釈妙等	元治2年 4月19日	原田	永川与平妻 弥吉養母
③	釈善齋	明治20年 1月 9日	原田	永川武助妻きん
④	釈心海	明治20年 1月 9日	原田	永川弥吉 武助の父
⑤	釈妙道	明治20年10月22日	原田	永川武助女つや
⑥	釈天祐	明治29年11月20日	原田	永川与平
⑦	釈理玄	明治32年 3月 5日	原田	永川武六母 弥吉后妻とり 七十五
⑧	釈道光	明治33年 2月16日	原田	永川武六妻いわ
⑨	釈現通	明治38年10月24日	原田	永川武六弟伊八 五十二
⑩	釈法海	明治39年 5月 3日	原田	永川武六 五十九

たとえば、明福寺の過去帳で検証を試みてみよう。

第3表の①は「永川ルイ」、②は「永川つや」である。①から⑨までは『上巻』^{文1)}において俗名が彫られている墓石であるが(第4図)、明福寺の過去帳には法名がつけられている。



第5図 永川家続柄復元図

①から⑩までは一族である可能性が大きいと思われる。これらの続き柄を復元してみると第5図のようになる。この一族には法名がつけられているのに、なぜ墓石には法名ではなく俗名が刻まれているのか、理由がよくわからない。はっきりしていることは、永川家は1760年代から明福寺の過去帳に記載されており、代々法名がつけられていることと、1810年代の墓石までは法名が刻まれているのに、1840年代以後の墓石には俗名が刻まれているということである。

6. 法・戒名からみた家(第6図)

第6図は第1表の死亡年と法・戒名をもとに各死者の祭主者の性別で色分けして、配列した図である。なお、ここでは祭主者の「姓」を「家」と置きかえて「○○家」として説明する。

第1号墓地は大半が法名であるが、1840年前後から俗名が刻まれるようになって以後続いている。特に永川家祭主の墓は1760年代から続いてきた法名が1840年代に俗名にかわっている。これは前述したように宗旨替えしたということではなく、法名がありながらも俗名を刻むようになったのであるが、その理由は不明である。

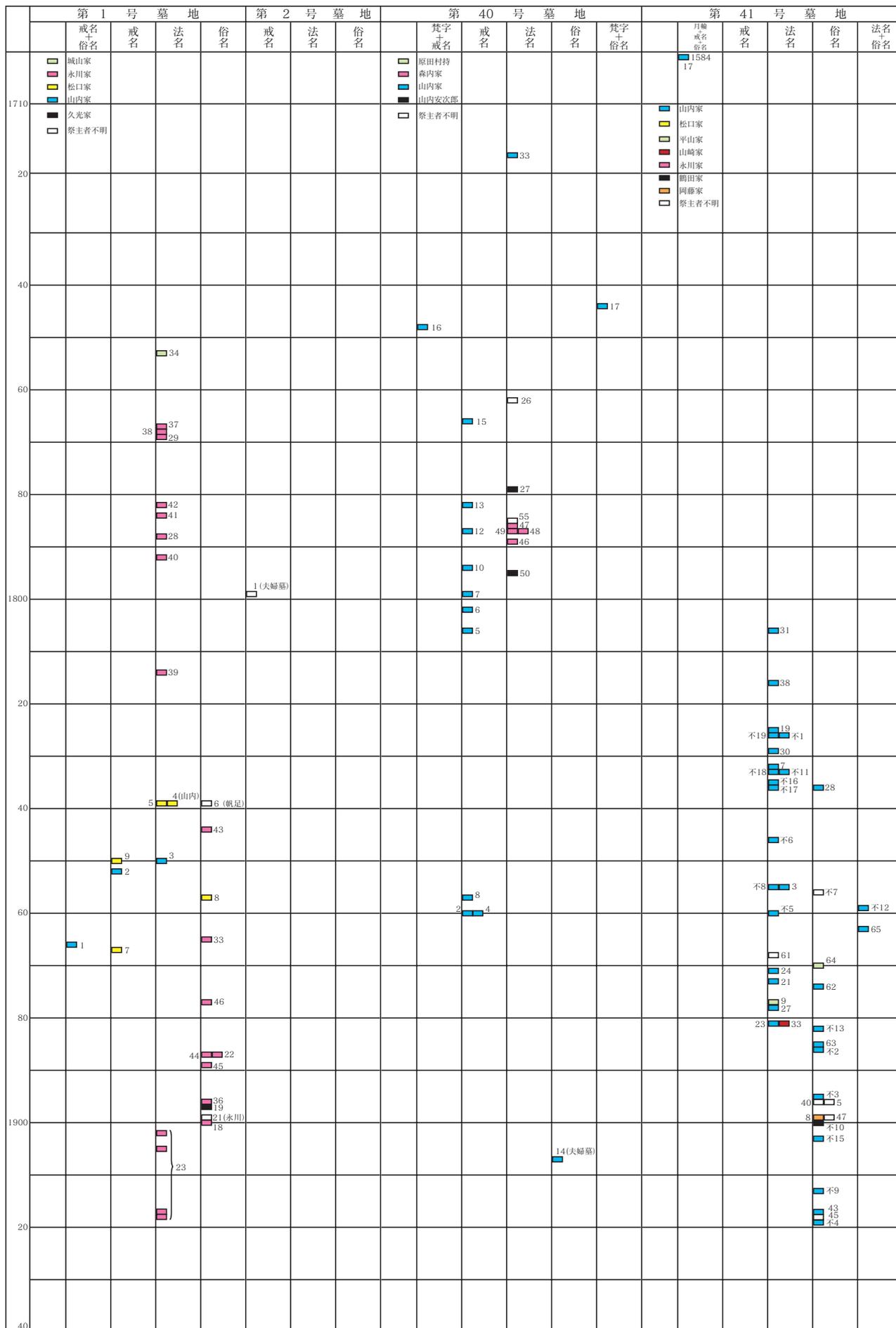
また、山内家・松口家は戒名であるが、山内家には法名も存在している。山内家の場合には所属寺が浄土真宗から浄土宗にかわったことも考えられる。

第40号墓地の祭主の主体は森内家と山内家であり、そのうち森内家祭主の墓石は法名に限られる。次に山内家祭主の墓石は大半は戒名であるが、山内安次郎祭主の墓石2基だけは法名であり、同姓の家でも宗派の違いが窺える。

ところで、第40号墓地と第41号墓地はどちらも同一丘陵に営まれた村共有墓地で、祭主者の主体も山内家であるが、この二つの墓地には大きな違いが認められる。それは、丘陵中腹の第40号墓地は1710年代から山内家の戒名を刻んだ墓石が1860年代まで続いていたが、1800年代から1860年代までは空白の期間がある。

一方、同一丘陵の頂上部に位置する第41号墓地は1800年代から法名を刻んだ山内家の墓石が明治初期まで続いている。戒名を刻んだ山内家の墓石は見当たらない。

第40号墓地と第41号墓地との関係については当初、中腹の第40号墓地が手狭になったために同一丘陵の頂上に新たに第41号墓地が開設されたものと解していた。しかし、山内家に関して



第6図 法・戒・俗名の墓地別年代分布図（祭主者性別に色分け、数字は墓石番号）

見ると戒名から法名へと変化しており、浄土宗系の山内家が何らかの理由で衰退し、浄土真宗系の山内家が新たに第41号墓地を開設していったものではないかと考えられる。

この場合本家の衰退と入れ替わりに分家が新興してきたという見方もできるが、本家と分家の宗派が違うということの説明もしなければならない。例えば宮座においても本家などが本座を、分家が新座を構成することは一般的に見られることである。そこには本座の閉鎖性と新座の独立性があると思われる。それと同じように分家は本家と同じ寺院ではなく違う寺院に所属することによって独自性を出していくこともあったのではないだろうか。

7. おわりに

今回の墓石調査で発掘された100基の墓碑銘の法名・戒名について上記のように考察を試みてみたが、考察の過程でいろんなことを感じたのでそれを述べておわりとしたい。

まず、他地域での墓石に関する先行研究の報告書^{文4～8)}と当調査での違いについて言えば、法名・戒名の類型化の指標の一つにされている院号が付されているものが当調査では見られないということである。これは当調査でのサンプル数が少ないこともあると思われるが、地域的に都市部ではなく純農村地帯であることや、所属する寺院の宗派が浄土宗・浄土真宗という平等の救済を説く教えであることなどが要因となっていると思われる。

次に、江戸時代に建てられた墓石にも俗名には姓が記されているものがほとんどであることから窺えるように、墓石というものは公的なものではなく、私的なものであったということである。したがって、限られた中にも個性を表現できる場であったかもしれない。寺院がつけた法名や戒名を刻んだ場合もあれば、俗名を刻んだ場合もある。また寺院がつけた法名・戒名に字を付け加えたり、省いたり、梵字を彫ったりしているものもある。そこにはあるいは墓相などをみる宗教者などの関与があったかもしれない。

死者のために建てられた墓石ではあるが、墓石を通して当時の人々の生活様相の一部が窺えるということも興味深いことである。もちろんわからないことがたくさんあるが、今後の筑紫野市全域の墓石の調査などの実現によって判明することも期待できるのではないだろうか。

註記 1. 文1の232頁の第9表では有銘墓石の合計は103となっているが、第8表では第41号墓地の有銘墓石は48基で第9表より1基多い。よって4箇所の墓地総数は104基となる。

- 文献 1. 筑紫野市教育委員会 『原田第1・2・40・41号墓地 上巻 -原田駅前土地整理区画事業地内埋蔵文化財発掘調査報告1-』筑紫野市文化財調査報告書第77集 2003
2. 筑紫野市編纂委員会 『筑紫野市史 民俗編』519頁 筑紫野市 1999
3. 筑紫野市編纂委員会 『筑紫野市史 民俗編』524頁 筑紫野市 1999
4. 谷川章雄 「近世墓標の変遷と家意識」 『史観』第121冊 早稲田大学史学会 1989
5. 関口慶久 「戒名・法名考」 国立歴史民俗博物館研究報告第111集 2004
6. 村木二郎 「石塔の多様化と消長」 国立歴史民俗博物館研究報告第112集 2004
7. 朽木 量 「墓標からみた近世の寺院墓地」 国立歴史民俗博物館研究報告第112集 2004
8. 関口慶久 「近世東北の「家」と墓」 国立歴史民俗博物館研究報告第112集 2004

第2節 原田第1・2・40・41号墓地における 墓石の岩石調査

1. まえがき

原田地区の墓地における墓石の岩石調査を筑紫野市教育委員会からかねて依頼されていたが、本格的な調査は2003年度から実施された。その目的は、墓石の岩石種を明らかにし、その産地を推定することと、岩石種の時代的变化を検討することであった。そのためにまず、肉眼と偏光顕微鏡観察によって墓石から採られた岩石チップの岩石種を鑑定（判定）し、次に墓石の岩石とその岩石種に関する従来の研究結果とを比較・検討した。そしてまた、墓碑銘にある没年を建立時期とみなし、石材の時代変化を調べた。その結果、石材の大部分は細粒花崗岩類の佐賀花崗岩と深江花崗岩であり、その産地は脊振山地南縁部にあると推定した。また、古い墓地に佐賀花崗岩が多く、新しい墓地には深江花崗岩が多い傾向が認められ、産地の時代変化が示唆される。なお、細粒花崗岩類が墓石に多用された理由についても考察した。

2. 墓石石材の岩型区分

筑紫野市教育委員会から提供された墓石のチップを、肉眼と偏光顕微鏡で観察し、石材を6種類の岩型A・B・E・F・G・Hに識別することができた。花崗岩類（A・B・E）が大部分で、火山岩（F）・変成岩（G）・堆積岩（H）はわずかである。

観察に用いた偏光顕微鏡（以下、顕微鏡あるいは鏡下と略記する）は、ふつうの光を用いる生物顕微鏡とは異なり、下方ニコル（あるいは偏光板）でつくられた偏光をとおして岩石薄片を観察する装置である。観察は、下方ニコルのみによる単ニコルの状態、またはさらに上方ニコルをかさねた直交ニコルの状態でおこなわれる。岩石種の鑑定は、それぞれの鉱物に特有な光学的性質から識別した鉱物の種類と、それらがつくる岩石の組織にもとづいておこなう。岩石薄片は、専用の研磨機を使って約0.03mmの厚さに研磨した岩石片を、スライドガラスにはりつけ、その上にカバーガラスをかけてつくられる。

広義の花崗岩（類）という岩石名は、無色鉱物の石英・カリ長石・斜長石と有色鉱物の黒雲母・角閃石からなる完晶質岩の総称である。その中にはさらに、カリ長石／斜長石比の大きいものから花崗岩、花崗閃緑岩、トータル岩に細分される。それに応じて有色鉱物も変化し、一般に、花崗岩には黒雲母、花崗閃緑岩とトータル岩には黒雲母・角閃石、まれに輝石がふくまれる。これらの鉱物は、一般的な岩石分類の指標になるので主成分鉱物とよばれる。これに対して、少量だが普遍的にふくまれる鉱物を副成分鉱物という。たとえば、ジルコン・燐灰石・褐れん石などである。

墓石の花崗岩類のうち、岩型A・Bは佐賀花崗岩に、岩型Eは深江花崗岩に当てはめて分類された。しかし実際の判定にあたっては、いずれに属させてよいか迷うこともある。というのは、両花崗岩体の中ではそれぞれ岩相（岩石の相、見かけ）の変化があり、佐賀花崗岩体のやや粗粒で黒雲母の多い部分と深江花崗岩体の黒雲母が少なく細粒な部分とはほとんど見分けがつかないほど酷似しているためである。

第1表 原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の岩型と年代

	墓石番号**	サンプル	岩型	没年(西暦)	備考*
原田第1号墓地	1	1	E	1866	
	2	2	B	1852	
	3	3	F	1850	□
	4	4	A	1839	○
	5	5	A	1839	
	6	6	H	1839	○□
	7	7	B	1867	□
	8	8	E	1857	○
	9	9	B	1850	
	18	10	B	1900	
	19	11	B	1897	○
	21	12	B	1899	
	22	13	B	1887	○
	23	14	F	1918 [‡]	○◎□
	28	15	欠	1788	
	29	16	B	1769	
	33	17	B	1865	◎
	34	18	B	1753	
	36	19	E	1896	○◎
	37	20	B	1767	
	38	21	A	1768	
	39	22	B	1814	□
	40	23	A	1792	
	41	24	E	1784	
	42	25	E	1782	◎
	43	26	B	1844	
44	27	B	1887		
45	28	E	1889	○	
46	29	B	1877		
墓第2号	1	30	E	1672	
	2	31	F	1931	◎
	3	34	B	不明	石仏
原田第40号墓地	2	19	B	1860	
	3	29	B	不明	
	4	20	E	1860	
	5	17	A	1806	□
	6	16	E	1802	
	7	15	A	1799	
	8	18	A	1857	○◎
	9	26	E	不明	
	10	13	A	1794	
	12	10	E	1787	
	13	6	A	1782	
	14	22	F	1907 [‡]	○◎□
	15	5	B	1766	
	16	3	B	1748	
	17	2	E	1744	○
	22	25	E	不明	
	24	30	B	不明	
	26	4	B	1762	
	27	21	B	不明	
	33	1	A	1717	○
	36	23	B	不明	
	46	12	B	1789	
	47	8	B	1786	
	48	9	B	1787	
	49	11	E	1788 [‡]	
	50	14	B	1795	
	55	7	B	1785	
	不明墓石-1	27	E	不明	◎
	不明墓石-2	28	E	不明	
	不明墓石-3	24	E	不明	

	墓石番号**	サンプル	岩型	没年(西暦)	備考*
原田第41号墓地	3	11	E	1855	
	6	37	E	不明	台石
	7	6	B	1832	
	7	35	A	1832	台石
	8	30	B	1899	
	9	21	E	1877	
	11	38	E	不明	
	13	39	H	不明	○◎台石
	14	40	E	不明	台石
	16	41	B	不明	台石
	19	3	B	1825	
	20	22	B	1878	
	20	42	E	1878	台石
	21	19	B	1873	
	22	43	E	不明	
	23	24	E	1881	
	23	44	E	1881	台石
	24	18	E	1871	
	24	45	E	1871	台石
	25	46	E	不明	
	26	47	E	不明	
	26	48	E	不明	台石
	27	23	E	1878	
	28	9	B	1836	
	29	36	E	不明	石仏
	29	49	E	不明	○台石
	30	5	E	1829	
	31	1	E	1806	
	32	50	E	不明	
	33	25	E	1881	
	33	51	E	1881	台石
	34	52	B	不明	□台石
	37	53	B	不明	
	38	2	A	1816	
	40	54	B	不明	
	43	33	G	1917	○◎
	43	57	G	1917	
	45	34	G	1918	
	45	55	A	1918	台石
	47	29	B	1899	
	57	56	E	不明	台石
	61	16	B	1868	
	62	20	E	1874	
	63	26	E	1885	
	64	17	B	1870	
	65	15	E	1863	
	不明墓石-1	4	B	1826	
	不明墓石-2	27	H	1886	□
	不明墓石-3	28	B	1895	□
	不明墓石-5	14	E	1860	
	不明墓石-6	10	E	1846	
	不明墓石-7	12	E	1856	
	不明墓石-9	32	E	1913	□
	不明墓石-10	31	B	1900	◎
	不明墓石-11	7	E	1833	
	不明墓石-12	13	E	1859	
不明墓石-16	8	E	1835		

*) ○：標本写真、◎：顕微鏡写真、□：切り石
 **) 不明墓石：墓地内での位置が不明な墓石
 ‡) 合葬墓における最新の没年

調査した墓石の岩型を、関連事項とともに第1表に示す。「サンプル」は墓石から採った岩石チップの番号、「没年」は墓碑銘の没年である。したがって、墓石の建立年代はそれと同じかあるいはそれより多少遅れていることになる^(註1)。合葬墓（#印を付けた1-23、40-14、40-49）にはもっとも新しい没年を記入した。ここで1-23などの数字は、墓地番号—墓石番号を示す（以下同じ）。

岩型A・B（図版1・2）

佐賀花崗岩に相当する。細粒で、白っぽく（優白質）、白雲母をふくむ両雲母花崗岩。弱い片状を示すものを岩型A、塊状のものを岩型Bとした。最大の特徴は白雲母をふくむことである。白雲母は肉眼では銀白色の板状結晶で、顕微鏡下では鮮やかな干渉色（直交ニコル下で現れる色）を示す（図版2-①、-②）。しかし、白雲母は細粒で量も少なく肉眼では認めにくいので、深江花崗岩の細粒で優白質の部分と見分けにくいことがある。片状構造は、肉眼的には黒雲母の弱い平行配列で示され（図版1-②）、鏡下では長石・石英結晶ののびと雲母片との平行配列に現れている（図版2-①）。ただし、片状構造はみる方向によって認めにくいことがある。

岩型E（図版1・3）

深江花崗岩に相当する。中～細粒、片状の黒雲母花崗岩～花崗閃緑岩。全体として、A・Bより粗粒、優黒質で、黒雲母に加えて普通角閃岩をふくむこともある（図版1-⑦）。弱い片状構造も一般的である。佐賀花崗岩と異なる特徴は、白雲母をふくまず、より多くの黒雲母と、ときに普通角閃石（図版3-①）、そして普遍的に褐れん石（図版3-②）をふくむことである。褐れん石は量は少ないが、この花崗岩の特徴鉱物の一つである。

岩型F（図版3・4）

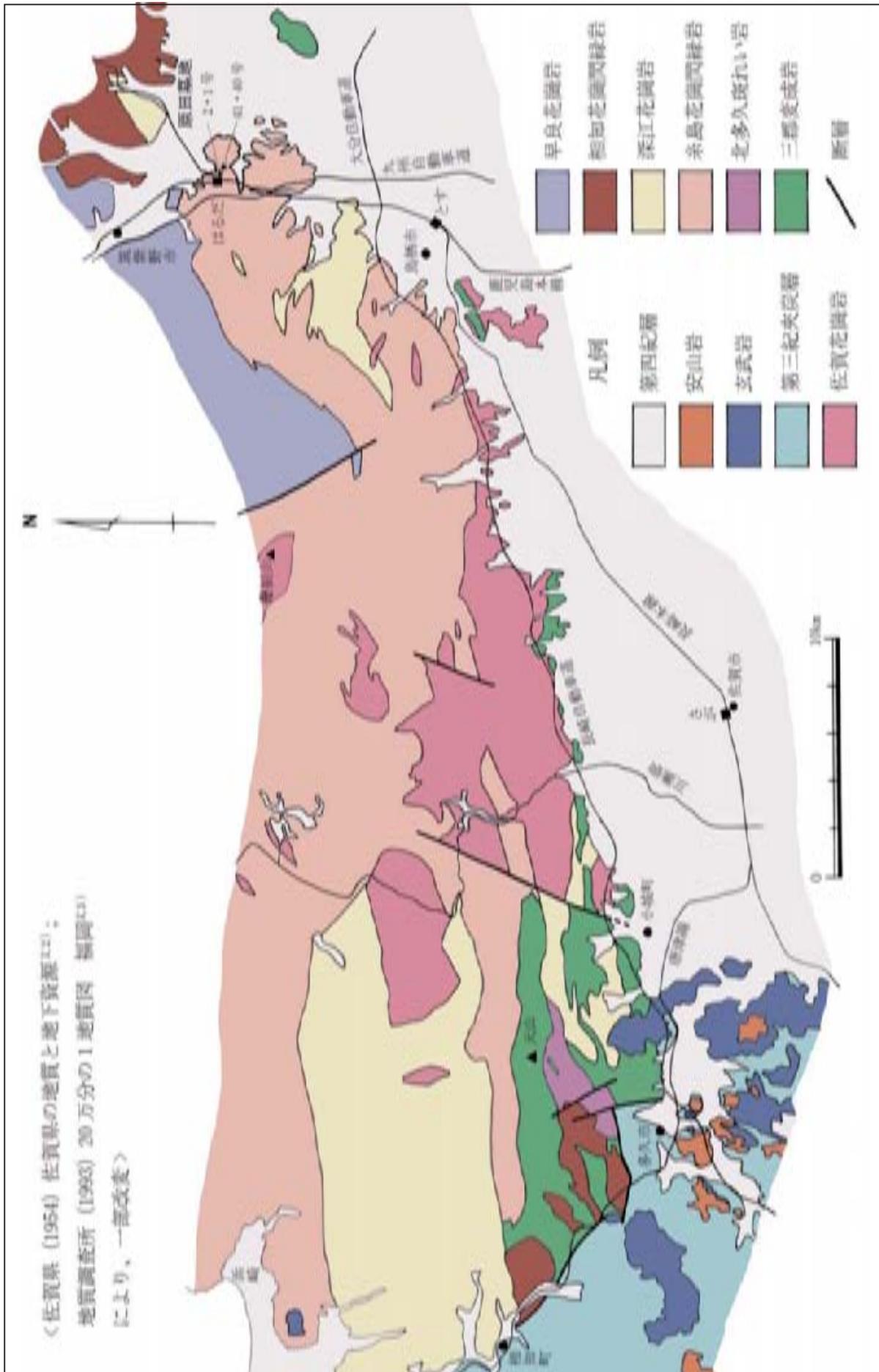
火山岩類に相当し、玄武岩（2-2）・輝石安山岩（1-23）・安山岩質凝灰岩（1-3；40-14）がみられる。火山岩は一般に、粗粒な斑晶が石基（微細な鉱物からなる部分）に埋まった斑状組織（図版3-③、図版4-①・②）をもっている。肉眼でわかりにくい石基の性質も、顕微鏡で詳しく知ることができる。玄武岩の主成分鉱物はかんらん石・輝石とCaに富む斜長石で、安山岩のそれは輝石・角閃石とCaのより少ない斜長石である。2-2は、かんらん石・輝石・斜長石を斑晶として斑状組織をつくっているため玄武岩と判定できる（図版3-③）。1-23もその組織と鉱物組成から輝石安山岩である（図版4-②）。凝灰岩は斑晶状の大きい普通角閃石・斜長石結晶の間をガラスの破片が埋めている（図版4-①）。

岩型G（図版1・4）

この変成岩（41-43、41-45）は三郡変成岩の構成メンバーである縞状角閃岩に相当する。暗緑色と白色の薄い層が交互して縞状構造をつくっている（図版1-⑮）。鏡下では、暗緑色縞はおもに、平行配列した普通角閃石からなり、白色縞はおもに斜長石からなっていることがわかる（図版4-③）。

岩型H（図版1・4）

堆積岩に属する細粒砂岩（1-6；41-13；41-不明墓石-2）は、石英・長石を多くふくみ、白っぽく、アーコーズ質である。（図版1-13；図版4-4など）。その固結度などからみて、古第三紀夾炭層のメンバーとみるのが妥当である。



第1図 背振山地南縁部の地質図

3. 脊振山地南縁部の地質と岩石

墓石の大部分を占める花崗岩類やそのほかの火山岩、砂岩および角閃岩の原産地としては、あとの考察の項で述べるように、脊振山地南縁部の多久—小城—神埼地域がもっとも可能性が高い。そこで、新たにその地域の地質図（第1図）を編集し、そこに分布する岩石類の性質や地質関係などをあらかじめ説明しておく。

(1) 花崗岩類（岩型A・B・E）

北部九州に分布する後期白亜紀に貫入した花崗岩類は、おもにトータル岩～花崗閃緑岩と花崗岩からなり、閃緑岩や斑れい岩などは少量である。花崗岩類は、鉱物の種類や岩石組織の異なる、つまり特徴的な岩相をもった岩体（岩石の集まり）に区別される。北部九州では15の岩体が単位になって、後期白亜紀の500万年足らずの間に次つぎに貫入している。

それらは地域的なまとまりと化学的特徴から2つに大別され、小倉と田川を結ぶ線より東側のものは北部九州東部花崗岩類（5岩体）、その西側に分布するものは北部九州主部花崗岩類（10岩体）とよばれている。前者は中国地方に広く分布する花崗岩類の西方延長部に相当するのに対し、北部九州主部花崗岩類は北部九州独自の性格をもった花崗岩体群（複合バソリス）と考えられている。

マグマが固結して花崗岩ができた年代は、放射性元素を利用した放射年代測定法によって求めることができる。北部九州の花崗岩類では50を越す測定がなされており、その値は7800万～1億2500万年前の範囲にはいるが、9000万～9500万年前に集中している。この年代は地質時代でいうと中生代の後期白亜紀に相当する。

ここで問題の脊振山地南縁部に分布する花崗岩類は、北部九州主部花崗岩類に属する糸島花崗閃緑岩・深江花崗岩・相知（朝倉）花崗閃緑岩・早良花崗岩・佐賀花崗岩と斑れい岩である（第1図）。

それらのうち、天山北方の東松浦郡と小城町・鳥栖市などに分かれて分布する深江花崗岩は、糸島花崗閃緑岩と密接にともなった産状を示し、糸島花崗閃緑岩をつくった残りのマグマから形成されたと考えられている。細粒～中粒で、よわい流理構造を示す花崗岩～花崗閃緑岩で、部分によりペグマタイト・アプライトをともなう。優黒質な部分には暗色包有岩をふくむ。

佐賀花崗岩は脊振山地南縁部の小城町から鳥栖市にかけて分布し、北部九州主部花崗岩類の中では最後に貫入した岩体である。細粒のざくろ石両雲母花崗岩が主体で、白雲母をふくむのが特徴である。副成分鉱物のモナズ石も多量にふくまれている。一般に深江花崗岩より有色鉱物が少なく、細粒で、灰色～灰白色である。また、大部分は塊状であるが、弱い流理構造を示す部分もみられる。ペグマタイト・アプライトをよくともなう。

(2) 火山岩類（岩型F）

新第三紀の火山岩類には玄武岩・安山岩・流紋岩などがみられる^{文4)}。小城町より西側に分布し、地質図（第1図）の南西部、多久市南部において、古第三紀層の上に成長した小高い丘をつくっている。なお、第1図外の多良岳を中心にした地域には、多久地域のものより若い更新世に噴出した多良安山岩類が分布している。

新第三紀の火成活動は肥前粗粒玄武岩類の貫入で始まる。この岩石は岩床や餅盤状の岩体をつく

り、活動時期は前期中新世～中期中新世とみられている。

玄武岩類には2種類あり、一つは後期中新世のサヌカイト（讃岐岩）より古い古期玄武岩類、他は後期中新世～鮮新世の新期玄武岩類である。前者はサヌカイトにともなって小規模に点在する。後者は松浦玄武岩類とよばれ、北松浦半島の国見山山地一帯と東松浦半島で溶岩台地をつくっている。噴出が何度も繰り返され、東松浦半島では5回の活動が識別されている。

安山岩類もやはり新第三紀の中期中新世～鮮新世に活動し、種類が多い。活動時期が肥前粗粒玄武岩に次いで古いサヌカイトをはじめ、角閃石安山岩・輝石安山岩などの溶岩流や火山砕屑岩などがみられる。サヌカイトは多久市南端の鬼ノ鼻山山地に溶岩流として分布し、噴出時期は後期中新世とみなされている。細粒の輝石安山岩の一種で、石器としても重用されている。

流紋岩類には、後期中新世の武雄流紋岩と鮮新世末期の有田流紋岩がある。後者には黒曜石が随伴し、とくに伊万里市腰岳の黒曜石は石器の材料として有名である。なお、鳥栖市養父町に分布する中期中新世の流紋岩は、珪線石をふくむ珍しい種類で、世界ではじめて発見されたものである。

（3）三郡変成岩の縞状角閃岩（岩型G）

脊振山地はおもに花崗岩類から構成されているが、その中に、3条の帯状の変成岩帯がほぼ東西にのびて分布する。糸島半島を横切る北部帯、福岡－佐賀県境付近の飯場－雷山地域の中中部帯および脊振山地南縁部の巖木－天山－小城地域の南部帯に区分されている。

これらは、後期古生代の広域変成作用によってつくられた三郡変成岩が、後期白亜紀の花崗岩類の貫入による接触変成作用を受けてできた変成岩である。つまり、泥質片岩・緑色片岩・砂質片岩・石灰岩や蛇紋岩などで構成されていた、もとの三郡変成岩が、のちの花崗岩貫入による高温な条件下で再び変成されてできたものが現在の三郡変成岩である。墓石に使われている縞状角閃岩は、緑色片岩から接触変成された岩石である。

（4）第三紀夾炭層の砂岩（岩型H）

小城町より西部に分布し、佐賀県の唐津炭田、長崎県の佐世保炭田を構成している。唐津炭田の地層は古第三紀の相知層群と杵島層群に層序区分され、佐世保炭田の地層は新第三紀の佐世保層群である。これらは炭層のほかに、礫岩・砂岩・泥岩などのふつうの堆積岩層の集積からなっている。墓石に使われている砂岩は、この夾炭層を構成しているものと類似している。

4. 考察

（1）墓石の石材産地（第1図）

原田第1・2・40・41号墓地の墓石の石材としては、佐賀花崗岩や深江花崗岩に相当する細粒の花崗岩類が圧倒的に多い。その原産地という観点から北部九州の地質を一瞥すると、上述のようにそれらの花崗岩類は脊振山地南縁部の多久－小城－神埼地域に集中的に分布している。また、墓石としてときどきみられる火山岩類や砂岩もともにこの地域に分布している。一方、福岡－二日市線より東側に分布する花崗岩類には、墓石の石材に似た岩相の花崗岩は見あたらない。したがって、墓石の石材産地は脊振山地南縁部の多久－小城－神埼地域（第1図）と推定される。

(2) 墓石の岩型と建立年代との関係 (第2図)

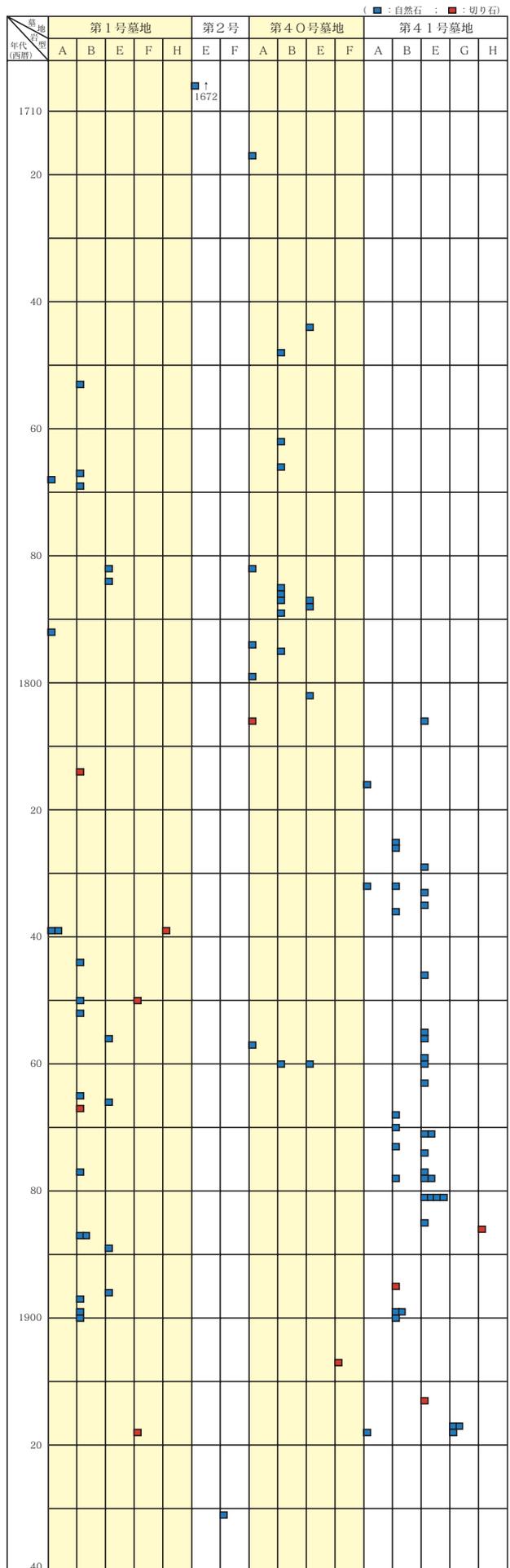
建立年代をかりに没年とみなして、年代と岩型との関係を図示した (第2図)。これまでの調査によると、第1号墓地の開始が17世紀三四半期ごろ、第40号墓地が18世紀第1四半期ごろであるのに対して、第41号墓地はそれらより遅れて19世紀に入ってから本格的に使用されている^{文1)}。このことは第2図にも表れている。

いずれの墓石も佐賀花崗岩と深江花崗岩が主体であるが、詳細にみると、両花崗岩の使用比率に差のあることに気づく。第1表から計算すると、佐賀花崗岩(A+B)の使用率は第1号墓地が76%、第40号墓地が66%であるのに対して、第41号墓地は37%である。つまり、古い墓地では佐賀花崗岩が多く使われているのに、新しい墓地では深江花崗岩(E)の使用頻度が上がっている。このことは時代とともに産地も移動したことを示唆している。

(3) 深江・佐賀花崗岩類の自然石が墓石に利用された理由

花崗岩の墓石はほとんどすべて自然石である。それに対して、切り石にされたものは、量がわずかで、しかも19世紀に入ってから新しい時代に限られている (第2図)。切り石技術が発達する以前の古い時代には、あまり人の手を加えなくても自然の岩塊そのものがすでに墓石に適した形態や大きさであることが要求されていたであろう。その要求に応えうる性質を備えていたことが、佐賀・深江花崗岩類が墓石としてふつうに使用されているゆえんであろう。

では、そうした墓石に適した形態の岩塊はどうしてつくられたのか。それは花崗岩特有の風化過程の産物である。花崗岩地域では、径1m内外あるいはもっと大きい球状あるいは楕円体状の岩塊をよく見かける。風化してできた花崗岩の砂 (真砂・まさ) の中に新鮮な岩塊が埋もれていたり、



第2図 原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の岩型と年代との関係図

転がり出していくつも積み重なっていたりする。またまれには、これらが集まって岩海とよばれる特殊な地形をつくることもある。

花崗岩にはふつう四角形に割れる三方向の節理面（規則的な割れ目）が発達している。風化作用はこの割れ目に沿って内側に向かってすすみ、やがて、ちょうど玉ねぎの皮をむくように外側から真砂化して崩れ、中心部に風化から免れた新鮮な球状岩塊（コアストーン・風化核などともいう）が残るようになる。球状岩塊には、風化作用のすすみ具合によって、長方形・四角形のもの・角張ったものから球状のものまで大小さまざまのものがある。節理面から内部にすすむ風化作用は、側面より角のほうをより急速に破壊するので、風化作用がすすむほど角がとれて丸くなり、また岩塊の大きさも小さくなっていく。

花崗岩を真砂化する化学的風化作用は、岩石の割れ目にそって地表から浸透した、おもに空気や水が構成鉱物を変質・分解あるいは溶解する作用で、それに対する抵抗力は鉱物の種類によって異なる。Caを多く含む斜長石や有色鉱物は風化されやすいが、石英は抵抗力がもっとも強い。したがって、花崗岩に比べてCaに富む斜長石や有色鉱物をより多く含む花崗閃緑岩は、花崗岩より真砂化されやすく、球状岩塊が残りにくい。

このような風化作用の性質から、脊振山地南縁部に分布する糸島花崗閃緑岩・相知花崗閃緑岩や斑れい岩は、真砂化がすすみすぎて球状岩塊をあまり残さないのに対して、より酸性で石英を多く含む佐賀花崗岩・深江花崗岩では、球状岩塊が豊富につくられ、墓石に適した岩塊が容易に採取できたのであろう。佐賀花崗岩地域には現在、球状岩塊が多数集積した場所で岩石を鑑賞する「岩石公園」と称する施設もできている。こうした事情が、原田墓地の墓石として佐賀および深江花崗岩類が広く使用された理由と考えられる。

（4）切り石墓石

自然石に対して切り石の墓石は少ないが、19世紀に入ると使用されるようになる（第2図）。岩型との関係を見ると、花崗岩もあるが、火山岩と砂岩はすべて切り石として使用されている（第2図）。火山岩と砂岩が切り石として好んで使用されたのは、花崗岩より耐久性は劣るが、質が軟らかくて細工しやすいことによるのであろう。

註釈

1. 木標から墓石に建て替えられた時期については、本書第Ⅱ章第6節で森山栄一氏が詳しく考察している。

文献

1. 筑紫野市教育委員会 『原田第1・2・40・41号墓地 上巻 一原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告1ー』筑紫野市文化財調査報告書 第77集 235頁 2003
2. 佐賀県知事室開発課 『佐賀県の地質と地下資源』141頁 佐賀県 1954
3. 地質調査所 『20万分の1地質図 福岡』 1993
4. 佐賀県教育委員会 『佐賀県の地質鉱物』佐賀県文化財調査報告書 第34集 144頁 1997

図版1 原田第1・40・41号墓地の墓石標本写真

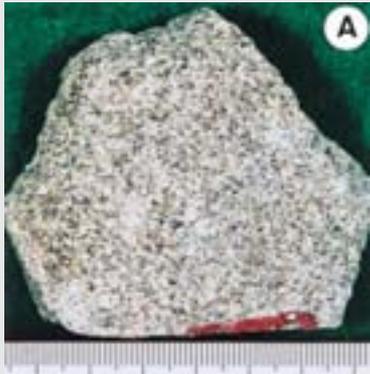
- 注) i 写真右上の記号 (A~G) は岩型
 ii 写真下の数字 (40-8など) は墓地番号-墓石番号
 iii スケールの最小目盛りは1mm



① 40-8



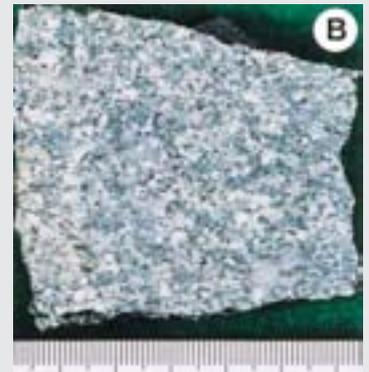
② 1-4



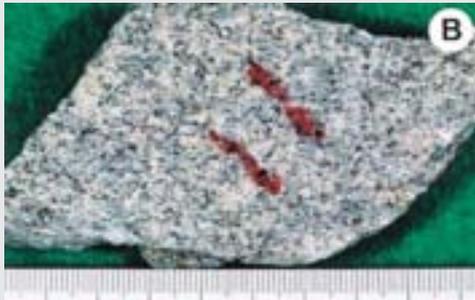
③ 40-33



④ 40-17



⑤ 1-22



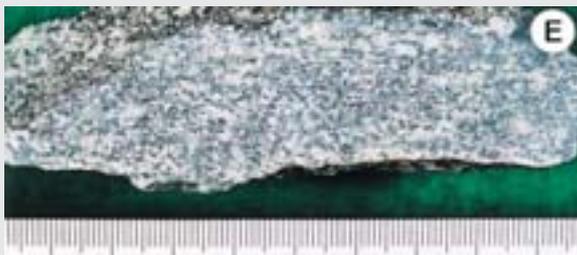
⑥ 1-19



⑦ 41-29



⑧ 1-45



⑨ 1-8



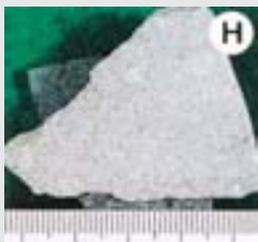
⑩ 1-36



⑪ 40-14



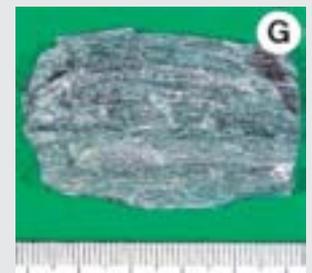
⑫ 1-23



⑬ 41-13



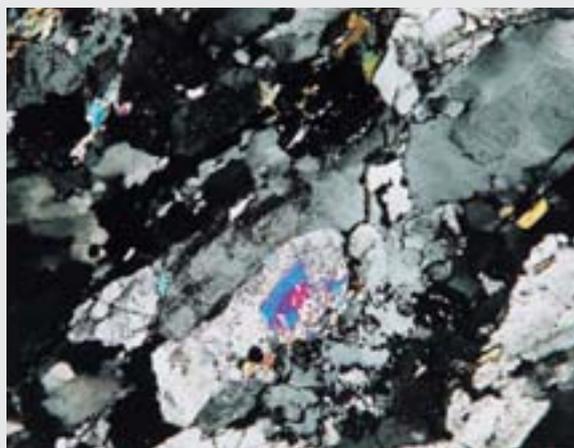
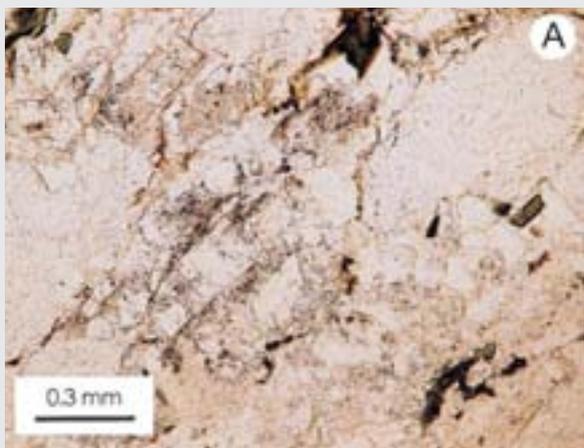
⑭ 1-6



⑮ 41-43

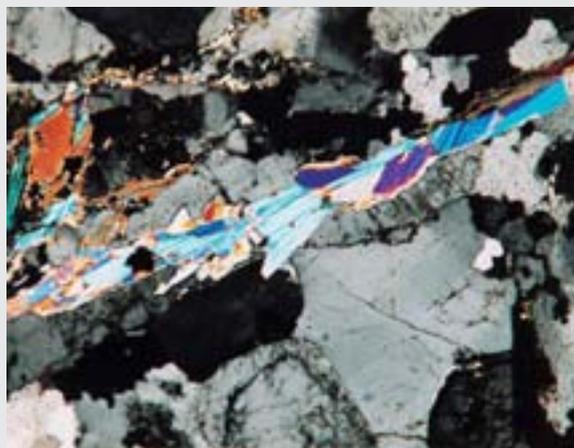
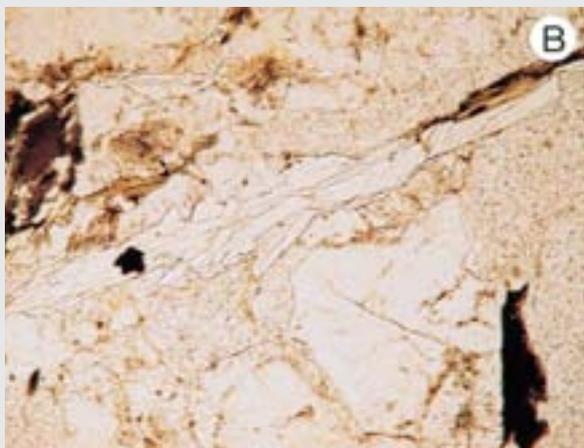
図版2 原田墓地墓石の岩型A・B・Eの顕微鏡写真

注) i 写真右上の記号(A~E)は岩型 ii 2枚組の写真は、左が単ニコル、右が直交ニコル
 iii 写真の数字(40-8など)は墓地番号-墓石番号 iv 写真1枚目のスケールは全写真に共通



① 40-8 岩型A (佐賀花崗岩、弱片状)

左写真で暗褐色の結晶は黒雲母、右写真で黒~灰色の部分は長石と石英で、結晶が平行にのびている。雲母片もそれに平行に並び、岩型Aの特徴である片状構造を示す。右写真で鮮やかな干渉色を示す白雲母は、斜長石を置換して成長している。



② 41-不明墓石-10 岩型B (佐賀花崗岩、塊状)

右写真では鮮やかな干渉色を示す白雲母が、長石と石英の間に脈状に成長している。白雲母は単ニコル(左写真)では無色にみえる。白雲母は佐賀花崗岩の特徴的な鉱物である。



③ 1-33 岩型B (佐賀花崗岩、塊状) (直交ニコル)

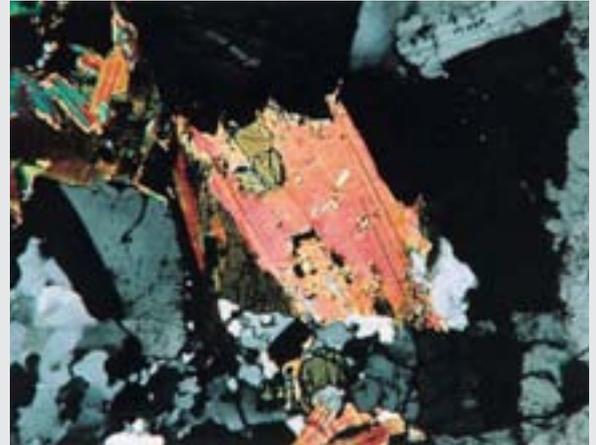
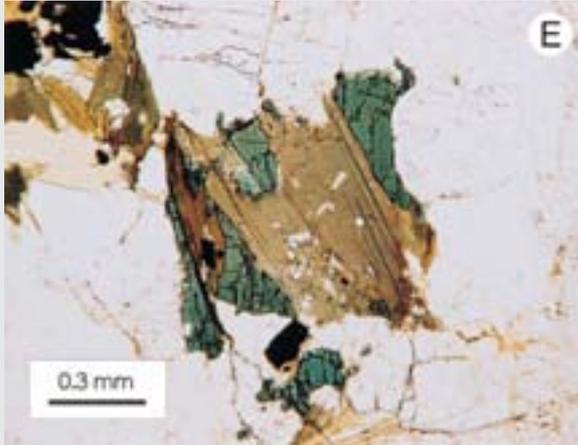
写真中央の大きい斜長石結晶では、中心部から周縁部へ干渉色に変化している。これは累帯構造とよばれ、斜長石の化学組成が結晶の成長にともなって不連続的に変化したことに対応する。また、直線的な白黒の縞模様は、結晶が規則的に結合した集片双晶の現れである。

④ 1-42 岩型E (深江花崗岩) (直交ニコル)

写真右上と左下にみえる、白黒の格子模様は微斜長石構造とよばれる。カリ長石に特有な双晶で、結晶全体または一部に発達する。

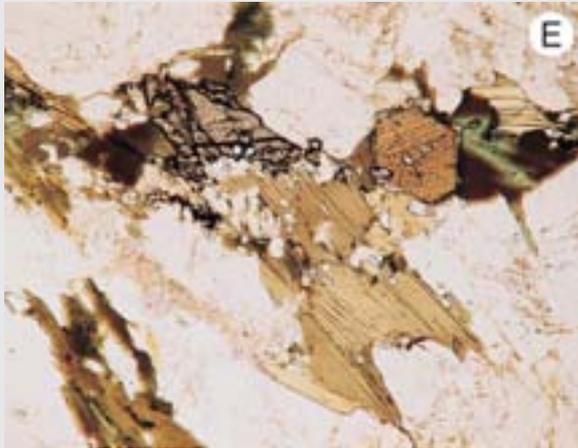
図版3 原田墓地墓石の岩型E・Fの顕微鏡写真

注) i 写真右上の記号(E~F)は岩型 ii 2枚組の写真は、左が単ニコル、右が直交ニコル
iii 写真の数字(1-36など)は墓地番号-墓石番号 iv 写真1枚目のスケールは全写真に共通



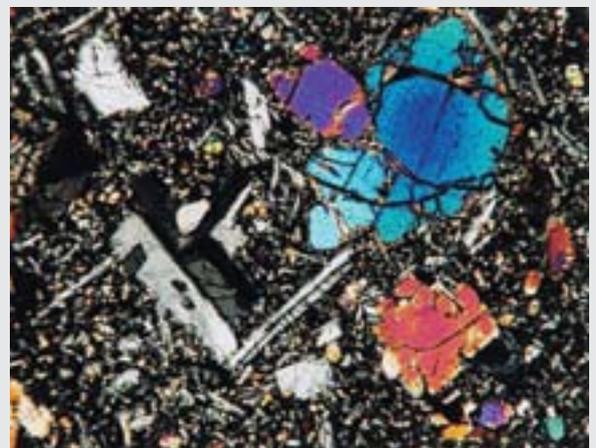
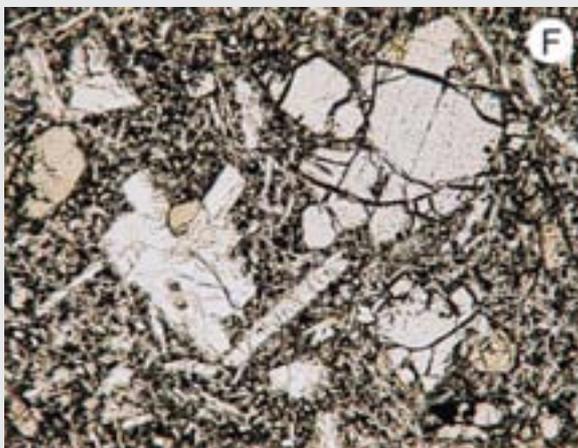
① 40-不明墓石-1 岩型E (深江花崗岩)

左写真中央に、緑褐色の黒雲母と暗緑色の普通角閃石とがともなっている。両者は共生することが多い。



② 1-36 岩型E (深江花崗岩)

左写真上部の左右2つの褐色結晶は褐れん石である。まわりの黒雲母よりは屈折率が高いので浮き上がって見える。褐れん石は深江花崗岩に少量ながら普遍的にふくまれている。佐賀花崗岩にはあまりみられない。右写真上部中央の暗色の縞模様は斜長石の集片双晶。

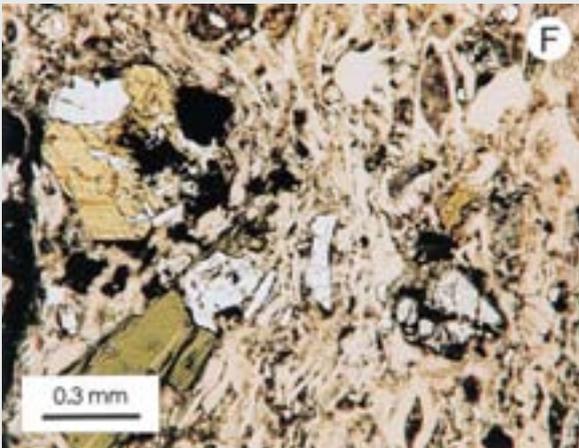


③ 2-2 岩型F (玄武岩)

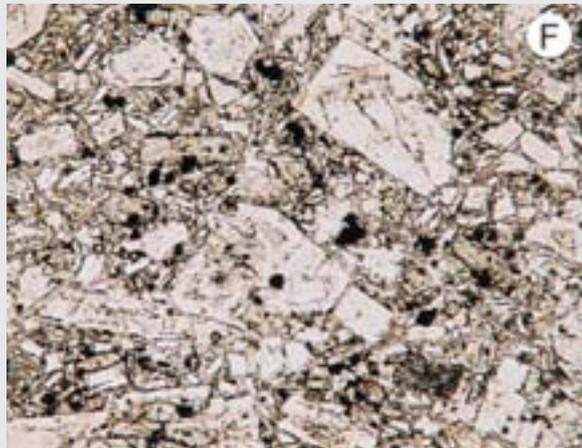
右写真右上の鮮やかな干渉色を示す斑晶はかんらん石、右下の赤褐色斑晶は輝石である。左中央には双晶を示す斜長石斑晶がみえる。

図版4 原田墓地墓石の岩型F・G・Hの顕微鏡写真

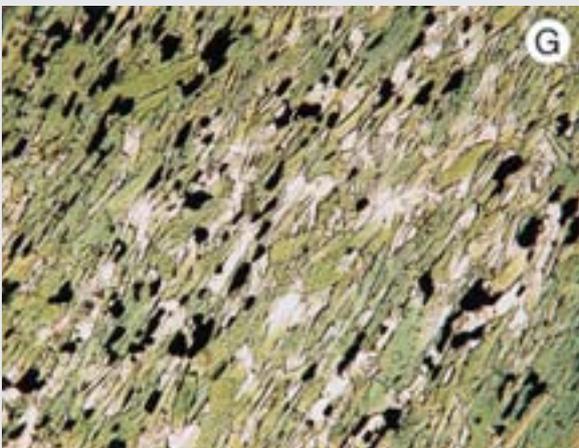
注) i 写真右上の記号 (F~H) は岩型 ii 2枚組の写真は、左が単ニコル、右が直交ニコル
 iii 写真の数字 (40-14など) は墓地番号-墓石番号 iv 写真1枚目のスケールは全写真に共通



① 40-14 岩型F (凝灰岩) (単ニコル)
 緑褐色の普通角閃石や無色の斜長石・黒色の鉄鉱類が斑晶状に散らばっている。その間を、灰色で不規則な帯状のガラスが埋めている。



② 1-23 岩型F (輝石安山岩) (単ニコル)
 角張った大きい白色結晶は斜長石斑晶で、上中央部と右中央部にみえる灰色の柱状結晶は単斜輝石斑晶。黒色斑点は磁鉄鉱の微斑晶である。



③ 41-43 岩型G (縞状角閃岩)
 左写真の褐緑色結晶は普通角閃石、白色結晶は斜長石、黒色結晶は磁鉄鉱である。柱状の普通角閃石は平行配列して片状構造をつくっている。



④ 41-13 岩型H (細粒砂岩)
 右写真でみられるように、不規則な形の石英と長石ならびに白雲母とが集合し、その間をわずかの粘土質物質が埋めている。アーコーズ (花崗岩質) 砂岩である。



第3節 原田第1・2・40・41号墓地出土の六道銭

1. はじめに

近世墓の調査では必ずといってよいほど、銭貨が出土する。墓に副葬された六道銭がその主体である。六道銭は俗に「三途の川の渡し賃」と言われているが、その起源や習俗の詳細については明らかでない部分も多い。そこでまず、六道銭とは何かについて概観することにする。

六道銭研究の端緒は、斎藤隆氏の印田近世墓の調査報告^{文1・註1)}である。この報告書では、北海道から九州にいたる全国91遺跡から出土した六道銭を集成し、六道銭参考一覧として紹介している。この研究を受けて、江戸増上寺子院群の近世墓調査に携わった鈴木公雄氏は、単に六道銭の出土例を報告するだけではなく、6枚セットの六道銭の組み合わせに注目し、考古学手法のセリエーション分析を用いて経済史研究への活用を試みた^{文2)}。すなわち、この分析結果から渡来銭と幕府公鑄貨である寛永通寶への不連続性が読みとれ、このことは徳川幕府が迅速な通貨切り替え政策を実施したということに他ならないとの結論を導き出したのである。六道銭研究から始まり備蓄銭・皇朝銭へと対象を広げていった鈴木氏の一連の出土銭貨研究は、考古資料が経済史研究に多大なインパクトを与えたという点で特筆すべき業績であると言える^{文3)}。筆者も、この手法に則って九州各地から出土した六道銭について研究を行ってきた^{文4)}。貨幣の経済的機能に着目するこれらの研究に対し、貨幣の呪術的な側面、すなわち経済外的機能を軽視してはならないという問題提起がなされた。また、これまでの研究では埋められている個々の銭貨の意味について十分な注意が払われておらず、六道銭そのものの規定も明確でないとの指摘もあり、従来の研究に対する補強が行われた^{文5)}。貨幣は元来さまざまな機能を有しており、研究者の問題意識が貨幣のどこに置かれているかで、その利用や研究方法が変わってくるのは当然のことであろう。従って両者の見解は相互補完関係になっており、建設的な議論となって今日に至っている。

墓から出土する銭貨には、遺骸・遺骨に付す銭貨である六道銭以外に、墓の鎮めのための銭貨などが存在するのも事実である。近年までこれらを区別せず漫然と六道銭とよんできたが、今後は遺骸・遺骨に付す銭貨である六道銭と、埋葬の場に関わる銭貨とは明確に区別して取り扱っていかねばならない。しかし現実問題として、これらを峻別するためには考古資料を提供する側が、銭貨の出土状況について詳細な情報を提供しなければならないという前提が生じる。つまり、発掘する考古学者側の調査と報告内容が問題となる。どの位置から出土したのか、どのような出土状況であったかが明らかにされない限り、この峻別はできないのである。従って、今後の調査では、研究深化のためにも精密な調査の実施と報告が望まれる。

仏教が日本化・庶民化していくなかで、さまざまな仏教思想が体系化づけられてきた。このような流れの中で庶民に布教されてきた教えの一つに、六道思想が存在する。中世において銭貨流通が再開し、この六道思想と関連付けられながら銭貨が遺骸とともに副葬されるようになり、六道銭習俗という形で結実してくると考えられる。従って、この六道思想との関連がない古代墓に副葬されている銭貨は、魔除け的な銭貨あるいは金属がもつ呪術的な機能が期待され、副葬されたものであると考えられ、六道銭とはよべない。中世のどの時点で六道銭副葬習俗が出現するのかを明らかにすることは、重要な課題である。これを実証するためには、中世墓の調査事例から検証するしか方

法はない。中世墓で時期を特定でき、中世から近世へと連続する遺跡が少ないなか、良好な遺跡として流山市三輪野山道六神遺跡B地点^{文6)}が存在する。この遺跡の調査成果から、遅くとも14世紀から15世紀初頭には六道銭が副葬されていることを確認できる。従って、14世紀代には六道銭副葬の習俗は始まっており、近世になるにしたがいその枚数が6枚セットに収斂していき、副葬習俗自体もいつそう一般化すると考えられる。

六道銭は考古学のみならず、経済史や民俗学などさまざまな学問と関連した注目すべき重要な資料である。本稿では、長崎街道原田宿に営まれた近世墓から出土した六道銭について、銭貨に対する古銭学的分類や化学組成を加味した報告をする。

2. 寛永通寶について

近世墓から出土する六道銭の大半は寛永通寶であり、まずは江戸時代を代表するこの貨幣を概観し、寛永通寶に関する問題の所在を確認する。

寛永通寶の公鑄は、寛永13年(1636)に江戸と近江の坂本で開始され、次いで大坂と京都建仁寺にも鑄造所が増設され、さらに翌年には水戸・仙台・三河の吉田・松本・越後の高田・長門・岡山・豊後の竹田、地方8ヵ所でも鑄造された。これらに寛永16年(1639)駿河の井之竈、明暦2年(1656)から駿河の沓谷・江戸の浅草鳥越で鑄造されたものを含め、収集界では古寛永と総称している。「寶」字の特徴からス宝銭とよばれることもある。寛永通寶は直営管理生産を行っていた金・銀貨とは異なり、大名や商人などに手本銭を渡して、一定額(最初は10%)の運上金を幕府に納める請負生産方式で鑄造された。これらの公鑄貨が大量に発行されたことで、市場において銭貨の供給過剰で銭安となり、しばらく寛永通寶の鑄造は控えられることとなる。

その後再び銭高になったので、寛文8年(1668)に江戸の亀戸で背面「文」字を有するいわゆる文銭が鑄造された。これは16年間で197万貫発行されたと言われている^{文7)}。

さらに再度銭不足となった元禄10年(1697)以降、全国各地で大規模に寛永通寶の鑄造がなされるようになる。これらを新寛永と総称し、「寶」字の特徴からハ宝銭とよぶこともある。新寛永には、背面に鑄造地を表す「佐」字や「長」字などの一文字を鑄出したものもあり、鑄造地を特定できるものも相当数存在する。

本遺跡から出土したもののうち、背面に文字を有し、例外的に鑄造地が明らかな新寛永を以下に挙げる。背「佐」は佐渡で正徳4年(1714)、背「元」は摂津の高津で寛保元年(1741)、背「長」は長崎で明和4年(1767)、背「小」は江戸の小梅村で元文2年(1737)、背「足」は下野の足尾村で足尾銅山の経営救済のために寛保元年(1741)から鑄造されたものである。

元文4年(1739)以降は原材料である銅不足のため、代わって鉄を素材とした寛永通寶が鑄造されるようになる。

明和5年(1768)以降は、一文銭だけでなく真鍮の寛永通寶四文銭を発行している。

万延元年(1860)になると、鉄製寛永通寶四文銭も出現する。幕末近くの市中では、寛永通寶鉄銭が相当量流通していたと考えられている。以上が寛永通寶の略史である。

大量に鑄造され、流通していた寛永通寶ではあるが、その鑄造地や鑄造量などに関して不明な点も多い。収集界ではこれらを文字の書風などで分類し、便宜的に鑄造地名を呼称として用いている

ものも多い。しかし、その鑄造地の比定にも時期によって変化があり、確定しているとは言えないのが実情である。均質の寛永通寶を各地で鑄造するために、幕府から与えられた手本銭とよばれる見本を使って鑄造しているが、鑄造地ごとに手本銭が違っていたという事実は確認できない。つまり、一ヶ所で一つのタイプを鑄造していたという根拠がなく、一ヶ所でいくつかのタイプの銭貨を同時に鑄造していた可能性もある。

教育委員会によって鑄造地の発掘調査がなされた岡山の銭座跡から出土した寛永通寶、毛利家に手本銭が伝承されていた寛永通寶、好事家による発掘がなされた水戸の寛永通寶、枝銭の伝承が確認された松本銭が、例外的に古寛永の中でも鑄造地をほぼ確定できる。

このような理由で、岡山と水戸には呼称の鑄造地名の前に「推」字をつけている。その他は根拠が無いに等しいので「称」字をつけてよんでいる。収集界の呼称は鑄造地名を付しているため、あたかも当該地で鑄造されたという誤解が生じやすいが、確定的ではないということを認識しておかねばならない。

山口県美東町で行われていた毛利家の鑄銭地遺跡については、建物遺構や鑄造関連遺物などの発掘報告がなされており^{※8)}、平成15年にも拡張区域の調査がなされ、今後の研究成果が期待される。

鑄造地特定問題は重要であり、今日まで積み上げられてきた伝統的古銭学の成果を軽視するわけにはいかないが、今後は出土する寛永通寶の研究からも、この問題を解決していく糸口を見出していきたい。通貨の流通圏が存在することを仮定して、出土する寛永通寶のデータを集成することにより、出土量の多寡によって鑄造地の特定が可能ではないかと考えている。この点で、近世の六道銭は格好の研究対象だと思われる。

第1表 墓別六道銭内訳一覧表

墓地	遺構	総枚数	渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永鉄銭	その他	不明
第1号墓地	4号墓	10		1		9			
	7号墓	6		2	2	2			
	18号墓	6		1	1	2	2		
	22号墓	6		1	1	4			
	23号墓	6				5	1		
	27号墓	7		1		3	3		
	33号墓	1				1			
	34号墓	4		1		1	2		
	39号墓	5				5			
第2号墓地	1号墓	6		2		2			2
	2号墓	6		2	1	3			
	3号墓	6		1		5			
	4号墓	6		1		5			
	5号墓	6		3		3			
	6号墓	5		2		3			
第40号墓地	2号墓	4			1	3			
	22号墓	6		2	2	2			
	23号墓	6		1	1	2	1		1
	25号墓	6				3	1		2
	27号墓	6		1		5			
	28号墓	6			1	5			
	29号墓	6		1		4			1
	35号墓	6				2	1		3
	36号墓	6				2	4		
	37号墓	4				3			1
	38号墓	6		1	2	3			
	39号墓	1		1					
	40号墓	6					6		
	42号墓	1							1
	43号墓	6		1	1	3	1		
	46号墓	11		3	5	3			
55号墓	1			1					
61号墓	6				4	2			
64号墓	6			2	2	1		1	

墓地	遺構	総枚数	渡来銭	古寛永	文銭	新寛永	寛永鉄銭	その他	不明	
第40号墓地	71号墓	6				5	1			
	72号墓	6				1	5			
	73号墓	6			1	3	1		1	
	74号墓	6	1	1	2	2				
	75号墓	6		4	1				1	
	76号墓	1				1				
	77号墓	3		1					2	
	78号墓	3				3				
	79号墓	1				1				
	81号墓	6				6				
	82号墓	6		2		4				
	83号墓	6				2	4			
	84号墓	6				6				
	第41号墓地	2号墓	6					6		
		7号墓	6		1	1	4			
		9号墓	6		1	1	3	1		
20号墓		6				5			1	
26号墓		6					6			
27号墓		6					3		3	
36号墓		5				3	2			
37号墓		6				5	1			
40号墓		6		1	1	4				
44号墓		6		3		3				
49号墓		6			1	5				
51号墓		6							6	
53号墓		5				1			4	
54号墓		6						6		
55号墓	6	1		2	3					
58号墓	2							2		
59号墓	6			1	1	4				
68号墓	6			2		4				
69号墓	6	1				5				
78号墓	8			1	1	3	3			
合計		364	3	47	35	187	60	11	21	

3. 出土六道銭の概要（第1～5表、第1～15図、図版1・2）

原田第1・2・40・41号墓地から、第1表のとおり合計364枚の六道銭が出土している。

これらの銭貨は棺内、あるいは棺がない場合は墓壙内出土なので（図版1・2）、すべて遺骸に添える六道銭であると考えてよい。墓壙内に副葬されていた六道銭以外では、大正時代の近代銭2枚（5銭小型白銅貨と桐1銭青銅貨、第11図）が表採されている。

六道銭が出土した遺構数は、第1号墓地で9基、第2号墓地で6基、第40号墓地で32基、第41号墓地で20基、合計67基の墓である。全墓数に対する六道銭の副葬率は、墓壙数が221基なので、30.3%となる。後述するように6枚セットの比率が高い（第5表）ことから、六道銭副葬習俗は定着していたと考えられるので、副葬率がやや低い理由については定かでない。紙銭などの代用品を副葬する習俗が存在していた場合、考古学的には検出不能であると言ってよい。

六道銭に使用されている銭種の大半は寛永通寶であるが、渡来銭、文久永寶、天保通寶などもわずかに含まれている（第2表）。大量に存在する寛永通寶一文銭は、古寛永（1636年初鑄）、文銭（1668年初鑄）、新寛永（1697年初鑄）と、素材が鉄である寛永鉄銭（1739年初鑄）とに大きく区分することができる。この区分に従って出土した364枚の銭貨を大別すると、第2表のように、渡来銭3枚、古寛永47枚、文銭35枚、新寛永187枚、寛永鉄銭60枚、文久永寶7枚、仙台通寶1枚、天保通寶1枚、近代銭2枚、判読不能銭21枚となる。

近年は出土銭貨研究の深化に伴い、銭貨そのものについても厳密な識別が求められるようになってきているので、本稿では寛永通寶について可能な限り古銭学上の分類も行い、その名称を表中に記載している^{註2)}。

47枚の古寛永（第3表）については、称岡山銭3枚、称沓谷銭8枚、称建仁寺銭6枚、称芝銭7枚、称高田銭3枚、称鳥越銭1枚、称水戸銭8枚、推岡山銭2枚、推水戸銭1枚、不知銭3枚、不明5枚である。

187枚の新寛永（第4表）については、秋田銭5枚、足尾銭3枚、加島銭1枚、亀戸四年銭1枚、紀伊中の島銭1枚、旧猿江銭6枚、京都荻原銭3枚、元文亀戸銭1枚、元文推定不知銭2枚、元文十万坪銭14枚、小梅銭4枚、佐渡銭2枚、仙台石巻銭14枚、摂津高津銭16枚、長崎銭2枚、難波銭2枚、平野新田銭3枚、不旧手旧十万坪銭22枚、不旧手七条銭13枚、不旧手藤沢銭3枚、不旧手横大路銭3枚、不旧手銭2枚^{註3)}、藤沢・吉田島銭4枚、文

第2表 銭種内訳表

銭種	枚数
渡来銭	3
古寛永	47
文銭	35
新寛永	187
寛永鉄銭	60
文久永寶	7
仙台通寶	1
天保通寶	1
近代銭	2
判読不能	21
合計	364

第3表 古寛永内訳表

称岡山銭	3
称沓谷銭	8
称建仁寺銭	6
称芝銭	7
称高田銭	3
称鳥越銭	1
称水戸銭	8
推岡山銭	2
推水戸銭	1
不知銭	3
判定不能	5
合計	47

第4表 新寛永内訳表

秋田銭	5
足尾銭	3
加島銭	1
亀戸四年銭	1
紀伊中の島銭	1
旧猿江銭	6
京都荻原銭	3
元文亀戸銭	1
元文推定不知銭	2
元文十万坪銭	14
小梅銭	4
佐渡銭	2
仙台石巻銭	14
摂津高津銭	16
長崎銭	2
難波銭	2
平野新田銭	3
不旧手旧十万坪銭	22
不旧手七条銭	13
不旧手藤沢銭	3
不旧手横大路銭	3
不旧手銭	2
藤沢・吉田島銭	4
文無背銭	7
四ツ宝銭	34
判定不能銭	19
合計	187

無背銭7枚、四ッ宝銭34枚、不明19枚である。

細分化したグループごとの出土枚数に多寡が存在しているが、これはそれぞれの銭貨製造量や、当地と製造地の結びつきの強さを反映していると考えられる。新寛永では不旧手旧十万坪銭や摂津高津銭などが多いことから、それらの製造量の多さがうかがわれ、これらが関西で製造されたものと推定できることから、当地は関西経済圏と強く結びついていたとも考えることができる。

4. 六道銭の枚数と組み合わせ

一遺構ごとの六道銭出土枚数については、第5表の通り1枚から11枚までのものが存在し、6枚セットになっているものの割合が70.2%（48例）と最も高い^{註4)}。このことから通説通り、六道銭には6という枚数が意識され、副葬されていたことがうかがわれる。第41号墓地第58号墓の近代銭は菊5銭白銅貨と稲1銭青銅貨が各1枚で、合計6銭になっていることは、6を意識した結果であるとみることでもできる。他の六道銭出土遺跡と比べると6枚セットの割合は高く^{註5)}、これは、江戸後期の当地では習俗として6枚セットの六道銭を副葬する習俗がかなり徹底していたことと、発掘の精度が高いためサンプリングエラーがほとんど生じなかったためであると考えられる。

なお、第1号墓地第4号墓の10枚と第40号墓地第46号墓の11枚は、すべて棺内からまとめて出土しており、6枚以上を一括した六道銭と考えてよいものである。また、枚数が1枚などと少ないものも、すべてが棺内や墓壙内出土なので、6枚セット以外の六道銭も存在していたことは確実である。出土位置は実測図や写真から判るように、第40号墓地第46号墓や第41号墓地第40号墓など数例が壁際であることを除いて、人骨に近接した中心部近くのものが多い。このことから六道銭を遺骸に持たせたり、添えたりした様子を読みとれる。

銭貨の組み合わせを見る限り、渡来銭のみや古寛永のみの組み合わせなど、古い時期の六道銭と推定できるものは存在しない。新寛永と寛永鉄銭を合わせると70%以上の割合になるので、江戸後期の墓群であると推定でき、これは墓碑や他の遺物などの調査結果と一致する。関東や関西の発掘事例では寛永鉄銭の出土例が少ないことから、鉄銭副葬を嫌っていることも推測できる事例も存在するが、本遺跡では寛永鉄銭が全部で70枚出土しており、銭種を恣意的に選別して副葬したと考える必要はないと考えられる。また、近世後期の墓であるのに古寛永の割合が高いということもないので、六道銭は古銭を選んで入れているのではないかという疑念に対しても、本遺跡では考慮しなくてよいと考えられる。新寛永通寶のみ6枚が2例、寛永鉄銭のみ6枚の例が3例存在するが、その他の資料はさまざまな寛永通寶が混じって出土していることから、実際の流通銭貨がこのような状態であり、それを反映した姿がこの六道銭であると推測できる。

第5表 六道銭の枚数と比率

枚数	墓数	割合(%)
1枚	6	9
2枚	1	1.5
3枚	2	3
4枚	3	4.5
5枚	4	6
6枚	47	70.2
7枚	1	1.5
8枚	1	1.5
10枚	1	1.5
11枚	1	1.5
合計	67	100.2

第6表 皇宋通寶の金属組成（Ⅰ～Ⅳは佐野論文、1～7は華論文）

資料	Cu	Pb	Sn	Fe	分析方法
Ⅰ	66.2	23	8.3	0.02	I. C. P
Ⅱ	65.7	28.9	5	0.01	I. C. P
Ⅲ	65	23.8	9.8	0.12	I. C. P
Ⅳ	74.4	19.5	2.7	0.11	I. C. P
1	70.47	22.9	7.33	<0.01	定量
2	64.11	24.6	8.58	<0.01	定量
3	65.51	25	8.62	<0.01	定量
4	66.09	22.7	8.99	<0.01	定量
5	59.19	28.4	9.06	<0.01	定量
6	68.2	21.11	6.98	<0.01	定量
7	63.26	22.85	10.9	<0.01	定量

5. 個々の銭貨についての考察

個々の銭貨に着目して、気づいた特徴点を述べる。

- ① 渡来銭は3枚のみ出土している。永樂通寶、元豊通寶、皇宋通寶が各1枚ずつである。寛文10年（1670）に渡来銭通用禁止令が出されているが、寛永通寶に混じって僅かながらも渡来銭が市場に残っていた結果であろう。

この中で、皇宋通寶は背面に凹凸がなく、平滑になっているという特徴があり注目される。その理由は、堺環濠都市遺跡群で出土した中世模鑄銭と同じ特徴を有しているからである。堺環濠都市遺跡SKT78地点では、16世紀の遺構から大量の銭貨鑄型が出土しており、中世における銭貨の国内鑄造が確認されている。鑄造した銭貨を文字のある模鑄銭と文字の全くない無文銭に大別すると、おおよそ15：85の比率で造られており、模鑄銭の特徴は背面が平滑になっているということである^{文9)}。

この皇宋通寶は形態的には堺型と考えられるので、金属組成分析によって確認作業を試みた。第6表のように、定量分析で得られた皇宋通寶制銭^{註6)}の主要三元素は、銅65%前後、鉛20%台、錫9%前後であると考えられることができる。本資料を蛍光X線で分析をしたところ、銅100に対し鉛3.72～6.78、錫0.41～0.47となっている。分析方法が違うために、数値の単純比較はできないが、本資料は制銭より銅の比率がかなり高く、錫をほとんど含んでいない。無文銭を代表とする中世末の日本製銭貨は、銅の比率が高くなり、錫がほとんど含まれていないことが明らかとなっており^{文10)}、この特徴と一致しているようにみえる。従って、この皇宋通寶は形態・組成の両観点からみて、中国制銭ではなく日本製模鑄銭と考えられる。ちなみに中世の代表的渡来銭は北宋銭であるが、北宋銭の主要三元素含有量は平均値で、銅66%、鉛26%、錫8%である^{文11)}。中華人民共和国における定量分析データは少ないが、この数値は青銅銭合金配合比率の目安となる。

- ② 第40号墓地第37号墓の仙台通寶については、銹化がひどくその銭銘を確認することはできないが、鉄銭でかつ形態が隅丸方形であることから、仙台通寶であることは確実である。仙台の藩内専用の銭貨ということで、天明4年（1784）幕府の許可を得て発行したが、形状の珍しさからか、土産等で藩外に持ち出されているケースが多かったとみえて、九州内の出土品からも仙台通寶は稀に確認できる。六道銭出土遺跡では、北九州市京町遺跡^{文12)}と宗玄寺跡31号甕棺^{文13)}から1枚ずつ出土している。
- ③ 第41号墓地第53号墓から、百文銭の天保通寶が1枚出土している。これは、天保6年（1835）以降に金座で鑄造された百文銭である。出土しているこの1枚は、収集界で称広島あるいは大阪と言われているものである。天保通寶は六道銭として使用されることがほとんどなく、

珍しい事例である。

- ④ 文久永寶は文久3年（1863）以降、金座と銀座に鑄造を命じた青銅製の四文銭であり、背面に11の波模様が刻まれている。文久永寶は文字の特徴から、真文・草文・略宝の3つのタイプに大別できる。真文は銀座で鑄造され、草文と略宝は金座で鑄造されたものである。文久永寶は7枚出土しているが、その内訳は、第40号墓地第40号墓から草文が1枚、第77号墓から真文と草文が1枚ずつ、第41号墓地第20号墓から略宝1枚、第53号墓から真文2枚と略宝1枚である。文久永寶よりも鑄造量が多かったと考えられる寛永通寶四文銭が、1枚も出土していないのは不思議である。寛永通寶四文銭は主に関東で流通し、西国ではほとんど流通していなかったと言われており、本資料はこれを支持しているのであろうか。

6. 銭貨の金属組成について

文字の特徴による古銭学的分類は、収集家たちによって江戸期以来おこなわれている伝統的な分類法だが、その素材に注目した金属組成による分類は今日的課題である。近世にあつては、形態的に模造ができて金属配合比率までも真似ることは不可能であり、銭貨の真贋問題や鑄造地の特定が、金属組成の面から把握できる可能性をもつと考えられる。この点から、分析化学との学際研究は重要である。銭貨の化学分析にはさまざまな方法があり、それぞれに長所と短所がある。銭貨研究に関しては、高周波誘導プラズマ発光分光法（ICP-AES法）など定量分析データの蓄積が重要であるとの指摘がある¹⁴⁾。しかし、本遺跡の出土品には諸般の事情から蛍光X線分析による定性分析のみを実施した。蛍光X線分析によるデータと詳細な考察は、本報告書中の比佐陽一郎氏の原稿に譲る¹⁵⁾。資料の選抜基準については、古銭学的分類をした後、複数出土している種類は3～4点の資料を遺存状態の良いものから選び、それぞれの銭貨について3～5地点の組成を測定することとした。特に、古寛永の分析に主眼を置いて資料の選別をおこなった。分析結果から、個々の銭貨の測定地点で金属組成の偏差が存在するのか、古銭学的には同一分類であるものは金属組成も同じなのかといったことを明らかにし、鑄造地特定の可能性を模索した。

古銭の化学分析に関する先行研究の中には、僅かではあるがICP-AES法で行われた定量分析値が存在する¹⁶⁾。佐野氏らの分析は寛永通寶を3グループに分け、論文中に分析資料の拓本や古銭学的分類を表示していないが、各4点ずつ分析してある。3つのグループそれぞれに1636年、1668年、1769年と年号が記載されていることから、前二者は古寛永、文銭に対応していると推定できる。後の一つは真鑰銭とあり、年号からも寛永通寶四文銭（11波）と考えられる。また、筆者と共同研究を行っている岩手県立博物館赤沼英男氏の分析データも公表されているものがある^{17・18)}。

便宜上データを第7表としてひとつにまとめたが、同じ条件による測定値ではないので、単純に比較できないことは銘記しておかねばならない。

古寛永については、佐野分析の一点を除いて、銅（Cu）が60～70%台、鉛（Pb）が10～20%台、錫（Sn）が9%未満という数値内に収まる。砒素（As）の数値が1%超と高いものが、古寛永に3点存在する。文銭は銅が70%弱、鉛が22～24%、錫が7～8%とかなり均質である。

第7表 寛永通寶の金属組成 (①～⑧は佐野論文、⑨～⑭は文17、⑮⑯は文18)

No.	分類	Cu	Pb	Sn	As	Sb	Fe
①	古寛永	67.200	25.800	6.300	0.110	0.060	0.110
②	古寛永	75.300	19.900	4.200	0.020	0.010	0.030
③	古寛永	79.000	17.200	3.100	0.220	<0.010	0.060
④	古寛永	89.500	6.500	3.400	0.040	0.010	0.170
⑤	文銭	69.400	22.900	7.100	0.180	0.050	0.030
⑥	文銭	67.100	24.100	8.100	0.120	0.070	0.140
⑦	文銭	66.600	24.000	8.200	0.470	0.050	0.260
⑧	文銭	68.300	23.300	7.900	0.030	0.060	0.070
⑨	古寛永	71.400	18.800	3.940	0.730	0.040	1.090
⑩	古寛永	61.700	19.500	8.150	0.020	0.050	0.125
⑪	古寛永	70.600	12.700	8.910	0.450	0.160	0.112
⑫	古寛永	66.300	19.000	3.710	4.410	0.210	2.060
⑬	古寛永	70.700	18.900	2.740	0.840	0.080	0.884
⑭	古寛永	62.800	24.900	4.430	2.970	0.240	1.710
⑮	古寛永	61.900	21.000	7.360	0.280	0.130	0.163
⑯	古寛永	72.500	20.100	3.010	1.550	0.100	0.978

中国青銅銭に比べ江戸期の日本青銅銭に総じて言える事は、銅の比率が高く、錫の比率が低くなっているということであろう。錫をほとんど含まないと言ってもよい。日本が江戸期に銅を輸出していたことは周知の事実であり、このような鉱産資源に恵まれていたことが、銅の含有量の多い銭貨を製造していた一因であろうか。本遺跡から出土した古寛永の総合的な印象は、同一分類と同定できるものでも成分比データのバラツキが多いし、測定ポイントごとでも測定値が異なっているケースが見られるということである。このことについては、専門家の判断を仰ぎたい。古寛永の資料のうち第1号墓地第45号墓の銭②と第7号墓の銭②は僅かながら銀を含んでいる^{註7)}。これらは銀を僅かながら含む銅を原材料としたのであろうか。推岡山の2枚については数値が似通っており、均質であると言える。

文銭は江戸の亀戸1ヶ所で鑄造されていたのだが、第7表を見る限り均質である。しかし、蛍光X線分析ではデータにバラツキがある。古寛永に比して、やや鉛と錫の比率が高いという印象を受ける。文銭はアンチモンを全く含んでいないという特徴がある。第1号墓地第18号墓の銭④だけがやや亜鉛の割合が高い^{註8)}。

新寛永については、寛文から延宝への改元によって背「文」を削ったといわれている文無背銭が、亜鉛・アンチモンを全く含まないものと若干含むものに分かれる。関西で鑄造されたと考えられる不旧手は銅の割合が高く、長崎銭は鉛を多く含むという特徴を有する。不旧手の旧十万坪・横大路・七条の三種はマ頭通で、山背国で鑄造された可能性が高いものだが、銅の比率が圧倒的に高く、鉛はかなり少ないという共通性を有する。しかし、錫を全く含まないもの、微量元素では砒素を全く含まないもの、アンチモンをまったく含まないものなどに分かれる。佐渡銭は、享保期のものより正徳期の方が鉛を多く含むという特徴が見てとれる。さらに足尾銭と小梅銭の組成に関する規格性は強いようにみえる。小梅銭と足尾銭の2枚ずつはかなり銅の割合が高く、鉛はあまり含まず、錫に至ってはほとんど含んでいない共通性を読みとれる。長崎銭は錫を全く含まず、砒素を含む銭貨であるという結果がでてくる。この砒素は、鉱石由来の可能性はある。

文久永寶は、錫が1%未満でほとんど含んでいないという特徴を読みとれる。字体の違いは鑄造地の違いであり、略宝の2枚は全く含んでいないという特徴を有する。天保通寶も同時期の日本銭と比して、錫が幾分多く含まれ、亜鉛が若干含まれているものの、やはり銅を主成分とする銭貨であると言える。

7. おわりに

本遺跡の近世墓は銭貨だけでなく墓壙、棺材、他の副葬品についても精密な調査がなされているので、近世墓研究の基本的指標を提供してくれる貴重な遺跡である。本稿では新しい試みとして、古銭学的分類と化学分析を踏まえながら出土六道銭について述べてきた。蛍光X線分析結果から、寛永通寶をはじめとする近世の銭貨は、銅を多く含むという中世末以来の日本銭の特徴を引き継いだものと言える。銅・鉛・錫だけでなく、砒素・アンチモンなど微量元素についても精密なデータ分析が必要であると思われる。また、総じてデータにバラツキが大きいという印象を受けるが、これはデータ測定の方法の問題もさることながら、そもそも铸造時に今日ほど徹底した品質管理が行われていたのかどうかという疑問も生じてくる。

研究が深化してきているとはいえ、六道銭については不明な点も多く残されており、まだまだ資料の蓄積が必要な分野である。長崎街道の宿場町に営まれた墓地から出土している本資料は、福岡・久留米などの城下町で出土する六道銭との比較研究も可能である。今後は、地域比較、階層比較、宗派比較、時期比較などを行っていくべきであり、また可能な限り銭貨の化学分析等を実施することによって、さらに精度の高い金属組成の研究をしなければならないと考えている。

註釈

1. これには古代銭貨の出土例も若干含まれているので、厳密には六道銭とよべないものも含まれている。
2. 元東洋鑄造貨幣研究所研究員古田修久氏に拓本による鑑定をお願いした。寛永通寶の分類については東洋鑄造貨幣研究所が発行した『新寛永通寶図会』(1998)や、季刊『方泉處』第4号(1993)・第8号(1994)・第19号(1997)が良書である。
3. 不旧手と呼ばれている一群の銭貨は「通」字の上部がマとなっており、詳細な分類が不可能なものを不旧手銭とした。また、マ頭通ともよばれている。
4. 本報告の上巻では、本報告より出土した銭貨の枚数が少なく記載されているものも若干存在するが、これは出土銭貨が錆着していたため、塊で枚数を数えた結果である。従って、本報告が正確な枚数である。
5. 鈴木公雄『出土銭貨の研究』(111頁)によると、6枚からなる六道銭の全国平均は約43%である。
6. 本銭とも言い、政府が発行した公鑄貨を指す。
7. 文献15の第1表 分析No.13の分析結果参照
8. 文献15の第1表 分析No.2と6の分析結果参照

文献

1. 齊藤 隆 『印田近世墓』 魚津市埋蔵文化財調査報告第8集 魚津市教育委員会 1981
2. 鈴木公雄 『出土六道銭の分析』『増上寺子院群』 港区教育委員会 1988
3. 鈴木公雄 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会 1999
4. 櫻木晋一 『九州の六道銭研究の現状と課題』『九州帝京短期大学紀要』第2号 1990
- 櫻木晋一 『鋤先遺跡及び福岡県下の出土六道銭について』『鋤先遺跡』 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財報告書第5集 1995 など
5. 小林義孝 「『六道銭』再考」『HOMINIDS』Vol. 2 1999 など
6. 北澤 滋 「六道銭からみた中近世土壙墓の変遷について」『多知波奈考古』第4号 1998
7. 新井白石 『折りたく柴の記』(中公文庫版) 1974
8. 山口県教育委員会 『銭屋』 山口県埋蔵文化財調査報告書第103集 1987
9. 嶋谷和彦 「堺出土の銭鑄型と中世後期の模鑄銭生産」『中世の出土銭』 兵庫埋蔵銭調査会 1994
10. 富沢 威 ほか 「中世銭貨の化学組成」『堺市文化財調査概要報告第61冊』 堺市教育委員会 1997
11. 華 覚明 『中国古代金属技術』(中華人民共和国) 大象出版社 1999
12. 北九州市教育文化事業団 『京町遺跡5』 北九州市埋蔵文化財調査報告書第149集 1994
13. 北九州市教育文化事業団 『宗玄寺跡』 北九州市埋蔵文化財調査報告書第172集 1995
14. 咲山まどか・赤沼英男・佐々木稔
『出土銭貨の極少量試料抽出による化学成分分析とその修復法』『出土銭貨』第7号 1997
15. 比佐陽一郎 「原田第1・2・40・41号墓地出土銅銭の材質調査について」『原田第1・2・40・41号墓地 中巻』 2004
16. 佐野有司・野津憲治・富永 健 「多変量解析法を用いる古銭の化学組成の研究」『古文化財之科学』第28号 1983
17. 青森県教育委員会 『畑内遺跡Ⅷ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第326集 2002
18. 山口県埋蔵文化財センター 『銭屋遺跡Ⅰ』 2004

第8表 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭分類一覧表①

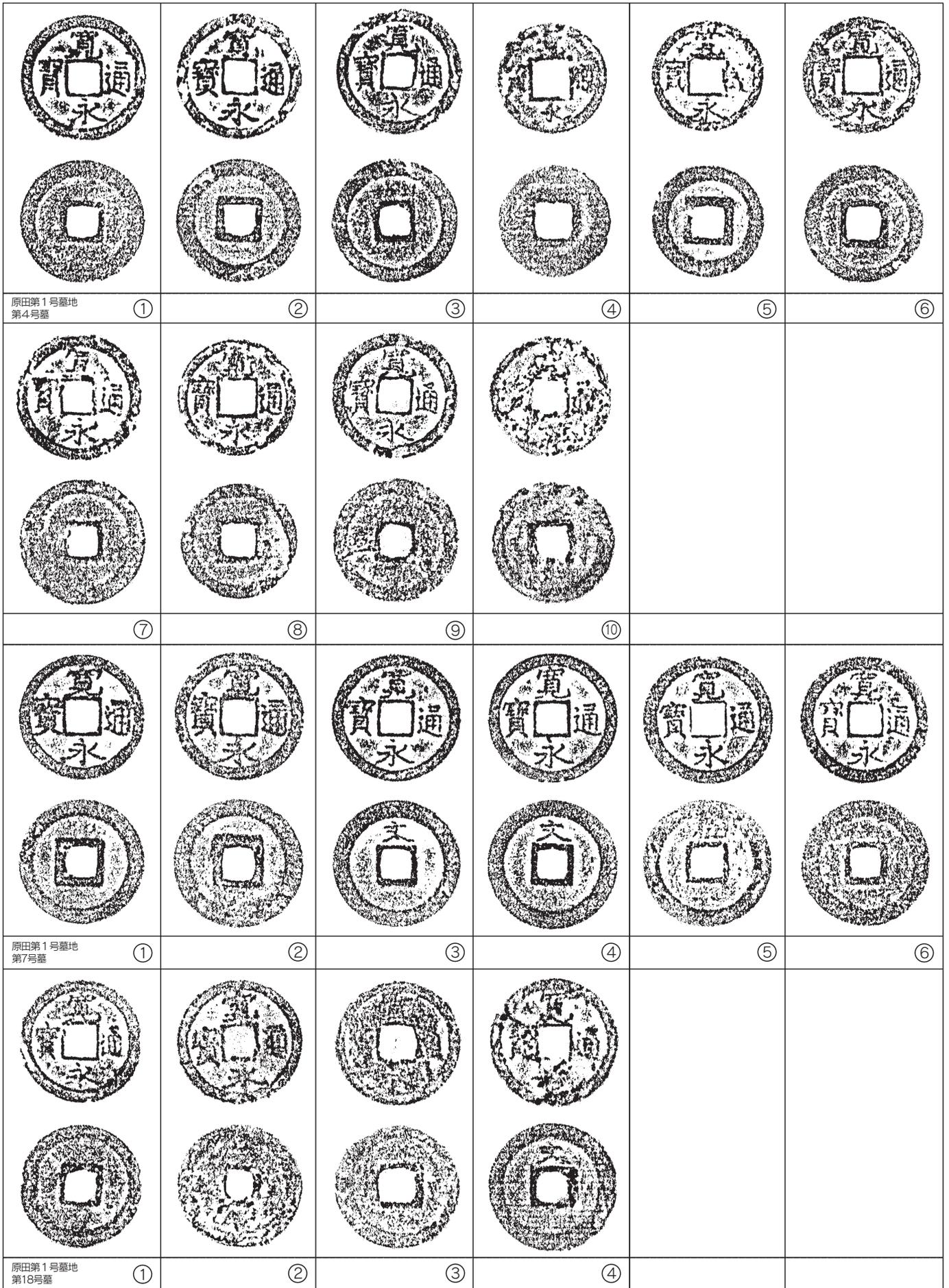
墓地	遺構	銭	銭種	古銭学分類	背 面	備 考	図番号		
原田第1号墓地	4号墓	①	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書長通		分析S-1	第1図		
		②	古寛永	称岡山銭		分析S-2	"		
		③	新寛永	不旧手旧十万坪銭			"		
		④	新寛永	藤沢・吉田島銭			"		
		⑤	新寛永	亀戸四年銭			"		
		⑥	新寛永	四ツ宝銭 勁永			"		
		⑦	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書進冠		分析S-3	"		
		⑧	新寛永	四ツ宝銭 勁永			"		
		⑨	新寛永	不旧手旧十万坪銭		分析S-4	"		
		⑩	新寛永	不旧手			"		
	7号墓	①	古寛永	称島越銭			分析S-5	"	
		②	古寛永	称建仁寺銭			分析S-6	"	
		③	文銭		背「文」		分析S-7	"	
		④	文銭		背「文」		分析S-8	"	
		⑤	新寛永	佐渡銭 享保背佐	背「佐」		分析S-9	"	
		⑥	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書斜注				"	
	18号墓	①	新寛永	不旧手旧十万坪銭			分析S-10	"	
		②	古寛永	称高田銭			分析S-11	"	
		③	新寛永	不旧手横大路銭			分析S-12	"	
		④	文銭		背「文」		分析S-13	"	
		⑤	鉄銭					—	
		⑥	鉄銭					—	
	22号墓	①	古寛永	推水戸銭			分析S-14	第2図	
		②	新寛永	高津背元銭	背「元」			"	
		③	新寛永	秋田銭				"	
		④	新寛永	四ツ宝銭 広永				"	
		⑤	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書進冠			分析S-15	"	
		⑥	文銭		背「文」		分析S-62	"	
	23号墓	①	新寛永	四ツ宝銭 勁永広寛				"	
		②	新寛永					"	
		③	新寛永	四ツ宝銭 勁永				"	
		④	新寛永					"	
		⑤	新寛永	四ツ宝銭 跳永				"	
		⑥	鉄銭				布付着	—	
	27号墓	①	古寛永	称水戸銭			分析S-16	第2図	
		②	新寛永	不旧手七条銭			分析S-17	"	
		③	新寛永	旧猿江銭				"	
		④	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書長通				"	
		⑤	鉄銭					—	
		⑥	鉄銭					—	
⑦		鉄銭					—		
33号墓	①	新寛永	文無背銭			分析S-18	第2図		
	②	新寛永	難波銭				"		
	③	古寛永					"		
	④	鉄銭					—		
34号墓	①	新寛永	文無背銭				—		
	②	古寛永					—		
	③	鉄銭					—		
	④	鉄銭					—		
39号墓	①	新寛永	元文十万坪銭				第3図		
	②	新寛永	四ツ宝銭 広永				"		
	③	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書大字			分析S-19	"		
	④	新寛永	足尾背足銭	背「足」		分析S-20	"		
	⑤	新寛永				4片に割れ	—		
原田第2号墓地	1号墓	①	古寛永				第3図		
		②	新寛永				"		
		③	新寛永	四ツ宝銭 俯頭疋				"	
		④	判読不能					—	
		⑤	古寛永					—	
		⑥	判読不能					—	
	2号墓	①	古寛永	称杵谷銭			分析S-21	第3図	
		②	古寛永	称芝銭			分析S-22	"	
		③	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"	
		④	文銭		背「文」		分析S-23	"	
⑤	新寛永	四ツ宝銭 俯頭疋				"			
⑥	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"			
原田第40号墓地	3号墓	①	古寛永	称杵谷銭			分析S-24	第3図	
		②	新寛永	四ツ宝銭 勁永				"	
		③	新寛永	四ツ宝銭 広永				"	
		④	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"	
		⑤	新寛永					—	
		⑥	新寛永				破片	—	
		4号墓	①	古寛永	称芝銭			分析S-25	第4図
			②	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"
			③	新寛永	旧猿江銭				"
			④	新寛永	四ツ宝銭 勁永				"
	⑤		新寛永	京都萩原銭				"	
	⑥		新寛永	旧猿江銭				"	
	5号墓	①	古寛永	称岡山銭			分析S-26	"	
		②	古寛永	称芝銭			分析S-27	"	
		③	古寛永	不知銭 太細				"	
		④	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"	
		⑤	新寛永	不旧手藤沢銭				"	
		⑥	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"	
	6号墓	①	古寛永	称芝銭				"	
		②	古寛永	称水戸銭			分析S-28	"	
		③	新寛永	不旧手七条銭				"	
		④	新寛永	不旧手七条銭			分析S-29	"	
		⑤	新寛永	不旧手				割れ	
		⑥	判読不能					—	
	2号墓	①	新寛永	不旧手七条銭				布付着 第4図	
		②	文銭		背「文」			布付着	
		③	新寛永	四ツ宝銭 跳永				布付着	
		④	新寛永	四ツ宝銭 座寛				"	
		⑤	判読不能					—	
		⑥	判読不能					—	
	22号墓	①	古寛永	称水戸銭			分析S-30	第5図	
		②	古寛永	称高田銭			分析S-31	"	
		③	新寛永	不旧手七条銭				"	
		④	文銭		背「文」			"	
		⑤	文銭		背「文」			"	
		⑥	新寛永	京都萩原銭				"	
	23号墓	①	古寛永	称建仁寺銭			分析S-32	"	
		②	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"	
		③	新寛永	四ツ宝銭 勁永				"	
		④	文銭		背「文」			"	
⑤		鉄銭					—		
⑥		判読不能					—		
25号墓	①	新寛永	四ツ宝銭 座寛				第5図		
	②	新寛永	京都萩原銭				"		
	③	新寛永	元文十万坪銭				"		
	④	鉄銭					—		
	⑤	判読不能					—		
	⑥	判読不能					—		
27号墓	①	古寛永	称杵谷銭			布付着 分析S-33	第5図		
	②	新寛永	不旧手旧十万坪銭			布付着	"		
	③	新寛永	元文十万坪銭			布付着	"		
	④	新寛永	文無背銭			布付着	"		
	⑤	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書長通			布付着 分析S-34	"		
	⑥	新寛永	高津背元銭	背「元」		布付着	"		
28号墓	①	新寛永	高津背元銭	背「元」			第6図		
	②	新寛永	高津背元銭	背「元」		漆付着	"		
	③	新寛永	不旧手旧十万坪銭			漆付着	"		
	④	文銭		背「文」		漆付着	"		
	⑤	新寛永	四ツ宝銭 広永			漆付着	"		
	⑥	新寛永	仙台石巻銭(元文)異書大字			漆付着 分析S-35	"		
29号墓	①	古寛永	称水戸銭			分析S-36	"		
	②	新寛永	不旧手旧十万坪銭				"		
	③	新寛永	不旧手七条銭				"		
	④	新寛永	秋田銭				"		
	⑤	新寛永	四ツ宝銭 勁永				"		
	⑥	判読不能					"		

第9表 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭分類一覧表②

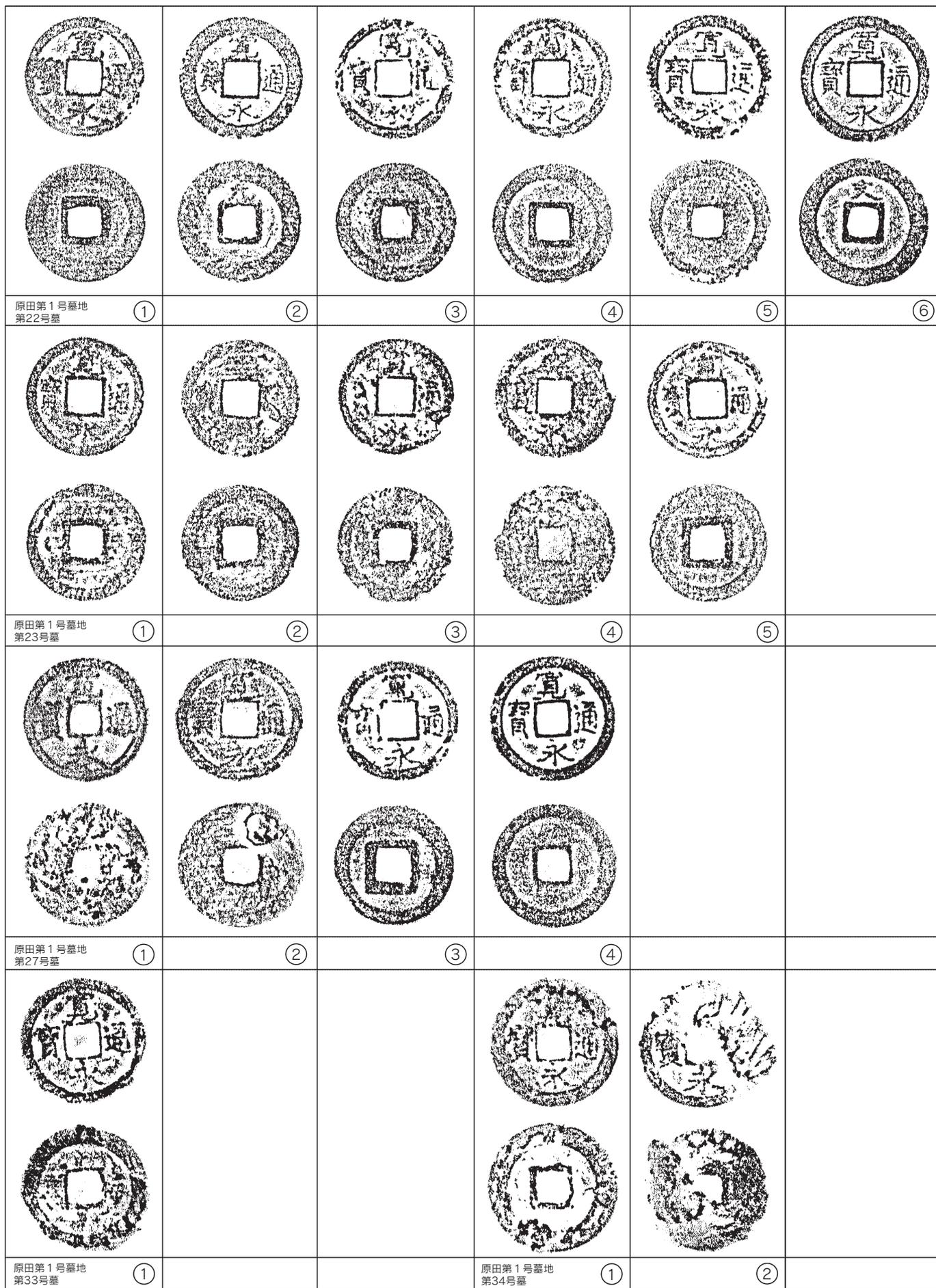
墓地	遺構	銭	銭種	古銭学分類	背 面	備 考	図番号	
原田	35号墓	①	新寛永	小梅銭	背「小」	分析S-37	第6図	
		②	新寛永	仙台石巻銭(元文) 重棒通無背				〃
		③	鉄銭					—
		④	判読不能					—
		⑤	判読不能					—
		⑥	判読不能					—
	36号墓	①	文銭			背「文」		第6図
		②	新寛永	不旧手藤沢銭				〃
		③	新寛永	文無背銭			分析S-38	〃
		④	文銭			背「文」		〃
		⑤	新寛永	不旧手旧十万坪銭				〃
		⑥	新寛永	長崎背長銭		背「長」	分析S-39	〃
	37号墓	①	新寛永	元文十万坪銭				第7図
		②	新寛永	元文十万坪銭				〃
		③	新寛永	高津背元銭		背「元」		〃
		④	仙台通寶				割れ	—
	38号墓	①	古寛永	推岡山銭			分析S-40	第7図
		②	文銭			背「文」		〃
		③	文銭			背「文」		〃
		④	新寛永	高津背元銭		背「元」		〃
		⑤	新寛永	旧猿江銭				〃
		⑥	新寛永	元文十万坪銭				〃
	39号墓	①	古寛永	称芝銭			分析S-41	〃
		②	鉄銭					—
③		鉄銭					—	
④		鉄銭					—	
⑤		鉄銭					—	
⑥		鉄銭					—	
40号墓	①	文久永寶	草文				第7図	
	②	古寛永	称建仁寺銭			分析S-42	〃	
	③	新寛永	平野新田銭				〃	
	④	新寛永	不旧手七条銭				〃	
	⑤	新寛永				布付着	〃	
	⑥	鉄銭				布付着	—	
40号墓	42号墓	①	古寛永	称芝銭			第8図	
		②	古寛永	不知銭 太細			分析S-43	〃
	43号墓	③	文銭			背「文」		〃
		④	文銭			背「文」		〃
		⑤	新寛永	高津背元銭		背「元」		〃
		⑥	古寛永	称芝銭				〃
		⑦	文銭			背「文」		〃
		⑧	文銭			背「文」		〃
		⑨	文銭			背「文」		〃
		⑩	新寛永	文無背銭			分析S-44	〃
40号墓	44号墓	①	新寛永	難波銭			〃	
		②	文銭			背「文」	〃	
	45号墓	①	新寛永	高津背元銭		背「元」		〃
		②	新寛永	文無背銭			分析S-45	〃
		③	新寛永	藤沢・吉田島銭				〃
		④	新寛永	藤沢・吉田島銭				〃
		⑤	鉄銭					—
		⑥	鉄銭					—
		⑦	鉄銭					—
		⑧	鉄銭					—
		⑨	鉄銭					—
40号墓	46号墓	①	文銭		背「文」		第8図	
		②	文銭		背「文」		〃	
	47号墓	③	新寛永				〃	
		④	新寛永	小梅銭		背「小」	分析S-46	〃
		⑤	鉄銭					—
		⑥	判読不能					—
原田	71号墓	①	新寛永	四ツ宝銭 勁永広寛			第9図	
		②	新寛永	高津背元銭		背「元」		〃
		③	新寛永	不旧手旧十万坪銭				〃
		④	新寛永	平野新田銭				〃
		⑤	新寛永					—
		⑥	鉄銭					—
	72号墓	①	新寛永					割れ
		②	鉄銭					—
		③	鉄銭					—
		④	鉄銭					—
		⑤	鉄銭					—
		⑥	鉄銭					—
	73号墓	①	文銭			背「文」		第9図
		②	新寛永	不旧手七条銭				〃
		③	新寛永					〃
		④	鉄銭					—
		⑤	新寛永					割れ
		⑥	判読不能					割れ
	74号墓	①	新寛永	佐渡銭 正徳背佐		背「佐」欠落	分析S-47	第9図
		②	新寛永	四ツ宝銭 広永				〃
		③	文銭			背「文」		〃
		④	文銭			背「文」		〃
		⑤	永泰通寶					〃
		⑥	古寛永	称建仁寺銭			分析S-48	〃
75号墓	①	古寛永	称沓谷銭				〃	
	②	古寛永					〃	
	③	文銭			背「文」		〃	
	④	古寛永	称建仁寺銭				〃	
	⑤	古寛永					割れ	
	⑥	判読不能					—	
40号墓	76号墓	①	新寛永	高津背元銭		背「元」	第9図	
		②	古寛永	称沓谷銭			第10図	
	77号墓	③	文久永寶	草文			〃	
		④	文久永寶	草文			〃	
	78号墓	①	新寛永	文無背銭			〃	
		②	新寛永	四ツ宝銭 俯頭走			〃	
	79号墓	③	新寛永	不旧手旧十万坪銭			〃	
		④	新寛永	四ツ宝銭 勁永			〃	
		⑤	新寛永	不旧手七条銭			〃	
	80号墓	⑥	新寛永	不旧手旧十万坪銭			〃	
⑦		新寛永	元文十万坪銭			〃		
⑧		新寛永	仙台石巻(元文) 異書長通			〃		
⑨		新寛永	不旧手七条銭			〃		
⑩		新寛永	元文十万坪銭			〃		
81号墓		①	古寛永	称岡山銭			布付着	分析S-49
	②	古寛永	称沓谷銭				分析S-50	
	③	新寛永	不旧手藤沢銭				〃	
	④	新寛永	不旧手七条銭				〃	
	⑤	新寛永	四ツ宝銭 俯頭走				〃	
	⑥	新寛永	元文十万坪銭				〃	
82号墓	83号墓	①	新寛永	不旧手横大路銭			第11図	
		②	新寛永				—	
	84号墓	③	鉄銭					—
		④	鉄銭					—
		⑤	鉄銭					—
		⑥	鉄銭					—
85号墓	①	新寛永	不旧手七条銭			布付着	第11図	
	②	新寛永	四ツ宝銭 勁永広寛			布付着	〃	
	③	新寛永	秋田銭			布付着	〃	
	④	新寛永	仙台石巻(元文) 異書低寛			布付着	〃	
	⑤	新寛永	仙台石巻(元文) 異書斜寶			布付着	〃	
	⑥	新寛永	元文推定不知銭 短通			布付着	〃	
表採	①	近代銭	五銭白銅貨(大正9年)				〃	
	②	近代銭	一銭青銅貨(大正12年)				〃	

第10表 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭分類一覧表③

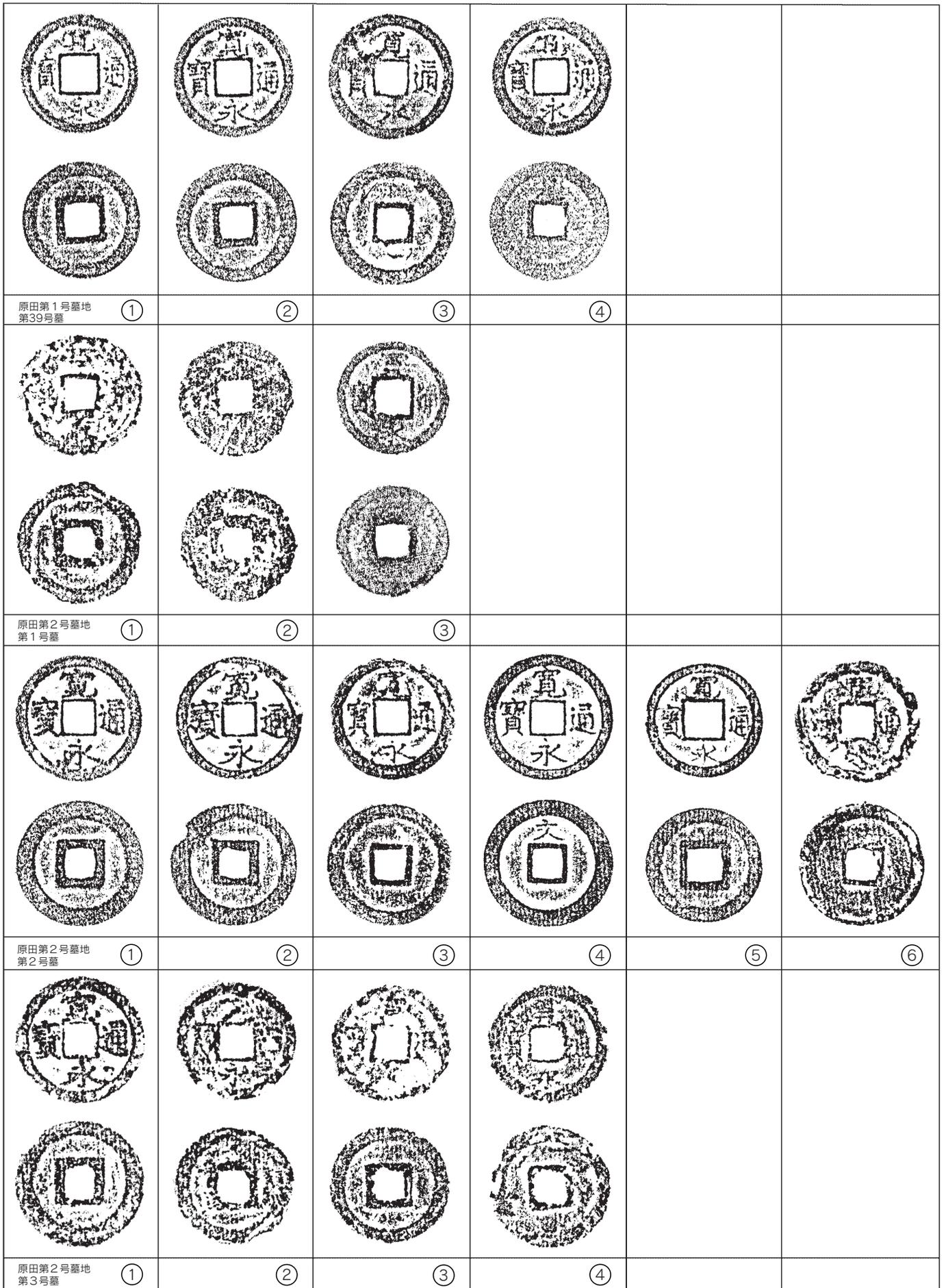
墓地	遺構	銭	銭種	古銭学分類	背面	備考	図番号	
原田	2号墓	①	鉄銭			} 錆着	—	
		②	鉄銭				—	
		③	鉄銭				—	
		④	鉄銭				—	
		⑤	鉄銭				—	
		⑥	鉄銭				—	
	7号墓	①	古寛永	推岡山銭			分析S-51	第11図
		②	文銭		背「文」			〃
		③	新寛永	元文亀戸銭				〃
		④	新寛永	不旧手旧十万坪銭				〃
		⑤	新寛永	元文十万坪銭				〃
		⑥	新寛永	四ツ宝銭 跳永				〃
	9号墓	①	古寛永	称谷谷銭				第12図
		②	文銭		背「文」			〃
		③	新寛永	不旧手旧十万坪銭				〃
		④	新寛永	秋田銭				〃
		⑤	新寛永				} 錆着	—
		⑥	鉄銭			—		
	20号墓	①	文久永宝	草文略宝			分析S-52	第12図
		②	新寛永	四ツ宝銭 跳永				〃
		③	新寛永					〃
		④	新寛永	旧猿江銭				〃
		⑤	新寛永	平野新田銭				〃
		⑥	新寛永	元文十万坪銭				〃
41号	26号墓	①	鉄銭			} 錆着	—	
		②	鉄銭				—	
		③	鉄銭				—	
		④	鉄銭				—	
		⑤	鉄銭				—	
		⑥	鉄銭				—	
27号墓	①	判読不能				} 錆着	—	
	②	判読不能					—	
	③	判読不能					—	
	④	鉄銭					—	
	⑤	鉄銭					—	
	⑥	鉄銭					—	
36号墓	①	新寛永					第12図	
	②	新寛永					〃	
	③	新寛永			割れ		—	
	④	鉄銭			} 錆着		—	
	⑤	鉄銭				—		
37号墓	①	新寛永	不旧手横大路銭			分析S-53	第12図	
	②	新寛永	小梅銭				〃	
	③	新寛永	四ツ宝銭 俯頭疋				〃	
	④	新寛永	旧猿江銭				〃	
	⑤	新寛永	足尾背足銭	背「足」		分析S-54	〃	
	⑥	鉄銭					—	
40号墓	①	古寛永	称水戸銭				第13図	
	②	新寛永	不旧手旧十万坪銭				〃	
	③	新寛永	不旧手七条銭				〃	
	④	新寛永	四ツ宝銭 跳永				〃	
	⑤	新寛永	高津背元銭	背「元」			〃	
	⑥	文銭		背「文」			〃	
原田	44号墓	①	古寛永	称谷谷銭			第13図	
		②	古寛永	称水戸銭			〃	
		③	古寛永	称高田銭			分析S-55	〃
		④	新寛永	仙台石巻銭 (元文) 異書進冠				〃
		⑤	新寛永	小梅銭				〃
		⑥	新寛永	高津背元銭	背「元」			〃
	49号墓	①	文銭		背「文」			〃
		②	新寛永	紀伊中の島銭				〃
		③	新寛永	仙台石巻銭 (元文) 異書糾實				〃
		④	新寛永	元文十万坪銭				〃
		⑤	新寛永	四ツ宝銭 勁永広寛				〃
		⑥	新寛永	四ツ宝銭 勁永広寛				〃
	51号墓	①	判読不能				} 錆着	—
		②	判読不能					—
		③	判読不能					—
		④	判読不能					—
		⑤	判読不能					—
		⑥	判読不能					—
	53号墓	①	天保通寶	称広島あるいは大阪			分析S-56	第13図
		②	文久永宝	草文			分析S-57	〃
		③	文久永宝	草文略宝			分析S-58	〃
		④	文久永宝	草文			分析S-59	〃
		⑤	新寛永	加島銭				〃
	54号墓	①	鉄銭				} 孔に紐	—
②		鉄銭			} 錆着	—		
③		鉄銭				—		
④		鉄銭				—		
⑤		鉄銭				—		
⑥		鉄銭				—		
55号墓	①	元豐通寶						第14図
	②	新寛永	元文十万坪銭				〃	
	③	新寛永	四ツ宝銭 勁永広寛				〃	
	④	新寛永	秋田銭				〃	
	⑤	文銭		背「文」			〃	
	⑥	文銭		背「文」			〃	
58号墓	①	近代銭	一銭青銅貨 (大正?)				〃	
	②	近代銭	五銭白銅貨 (明治23年)				〃	
59号墓	①	古寛永	称水戸銭			分析S-63	〃	
	②	文銭		背「文」			〃	
	③	新寛永	不旧手旧十万坪銭				〃	
	④	新寛永	四ツ宝銭 俯頭疋				〃	
	⑤	新寛永	文無背銭				〃	
	⑥	新寛永	四ツ宝銭 勁永				〃	
68号墓	①	古寛永	称水戸銭				〃	
	②	古寛永	称建仁寺銭				〃	
	③	新寛永	元文十万坪銭				〃	
	④	新寛永	足尾背足銭	背「足」			〃	
	⑤	新寛永	高津背元銭	背「元」			〃	
	⑥	新寛永	高津背元銭	背「元」			〃	
69号墓	①	皇宋通寶				分析S-64	第15図	
	②	新寛永	長崎背長銭	背「長」		分析S-60	〃	
	③	新寛永					〃	
	④	新寛永	不旧手旧十万坪銭				〃	
	⑤	新寛永	高津背元銭	背「元」			〃	
	⑥	新寛永	四ツ宝銭 勁永				〃	
78号墓	①	古寛永	不知銭 太細			分析S-61	〃	
	②	新寛永	高津背元銭	背「元」			〃	
	③	文銭		背「文」			〃	
	④	新寛永	藤沢・吉田島銭				〃	
	⑤	新寛永	元文期推定不知銭			} 錆着	〃	
	⑥	鉄銭			—			
	⑦	鉄銭				—		
	⑧	鉄銭				—		



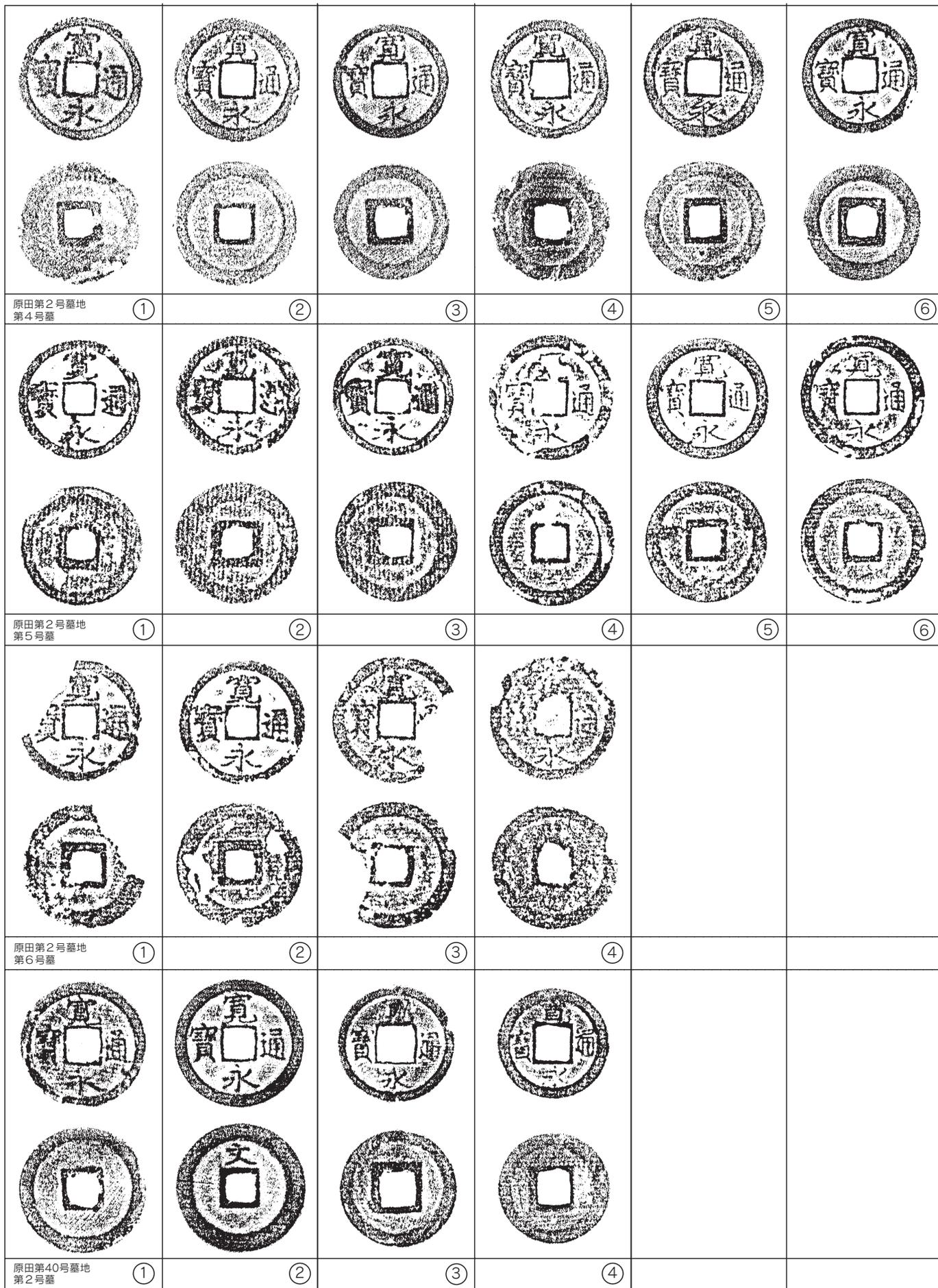
第1図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)①



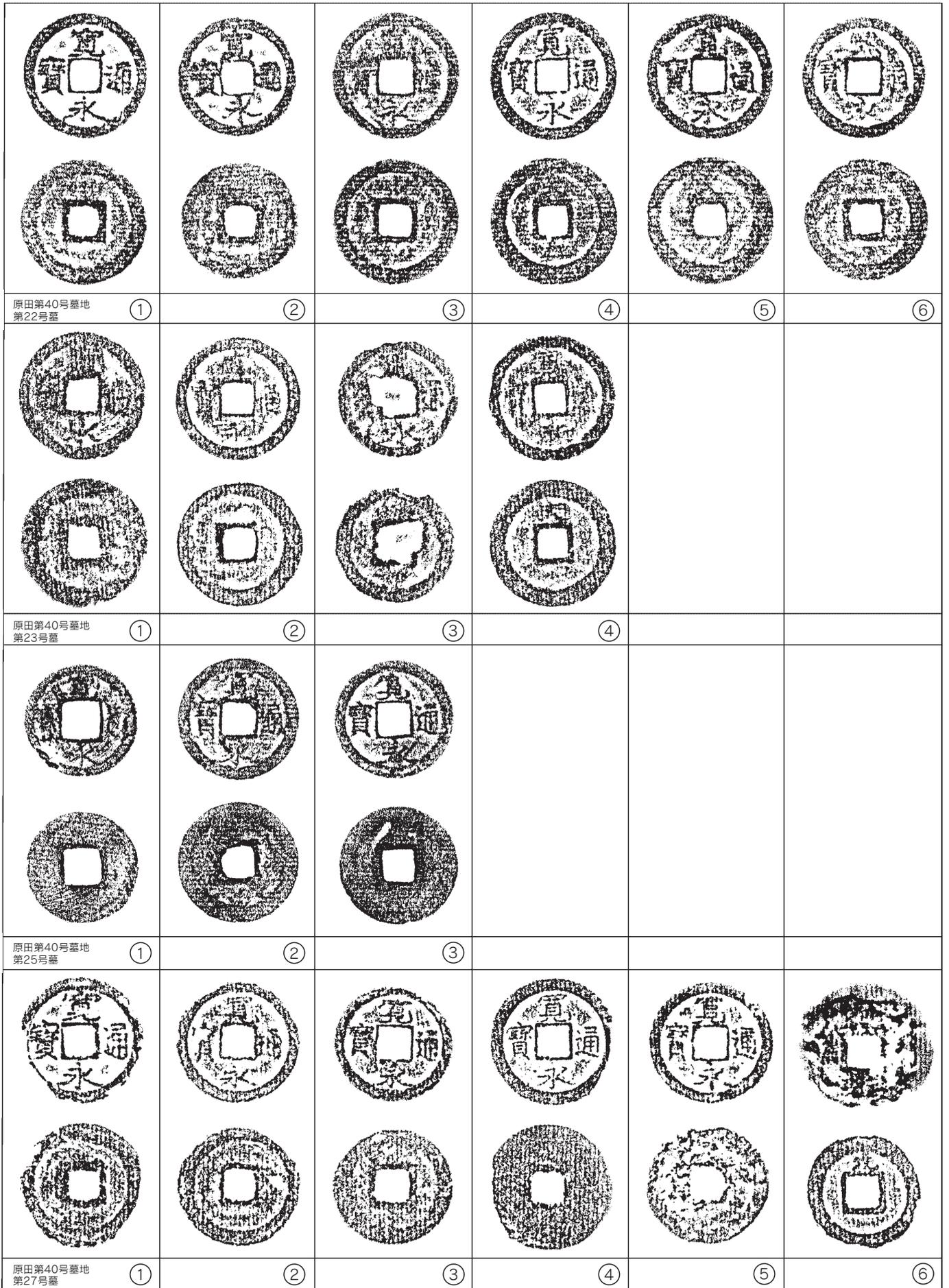
第2図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸)②



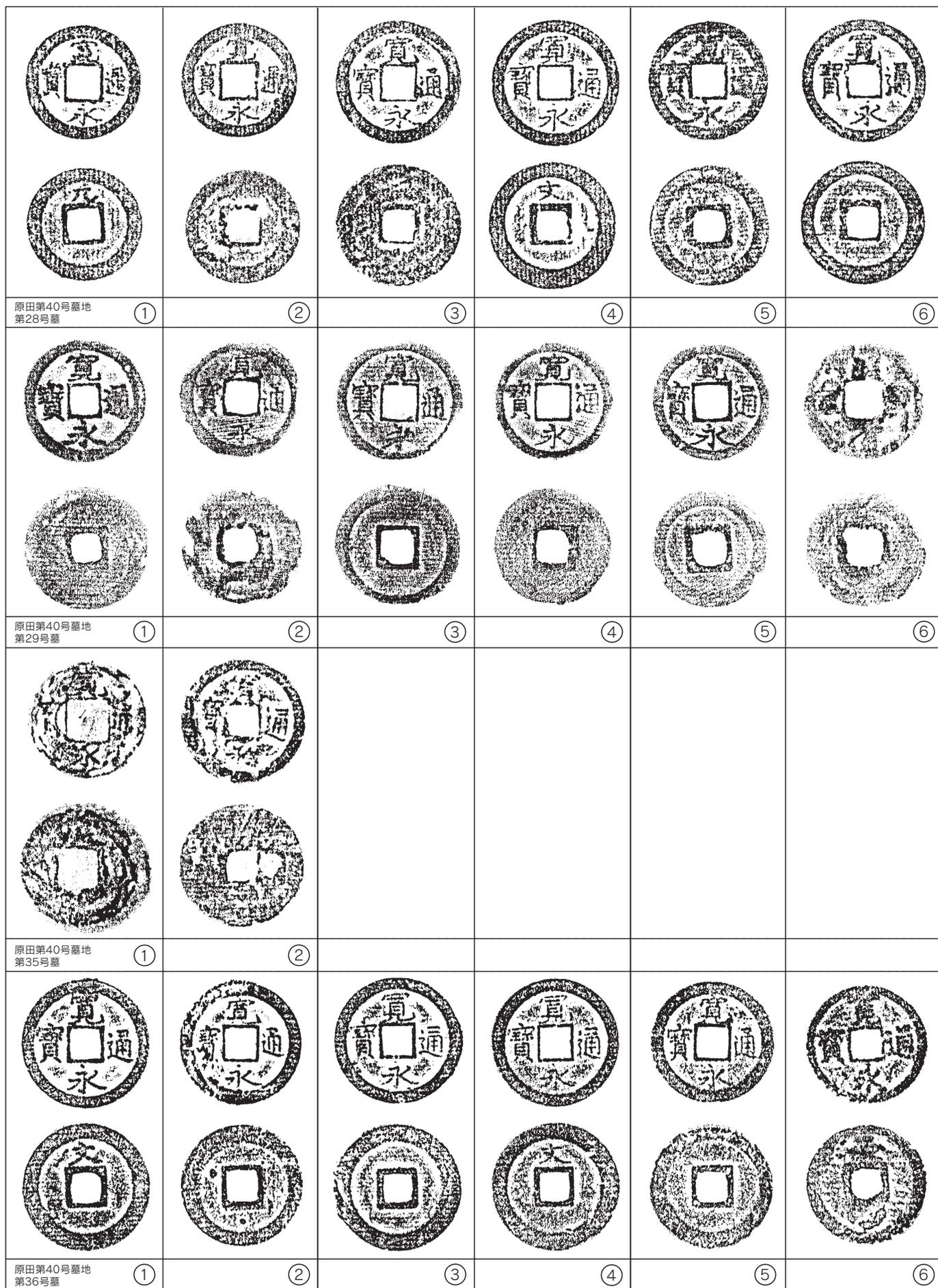
第3図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）③



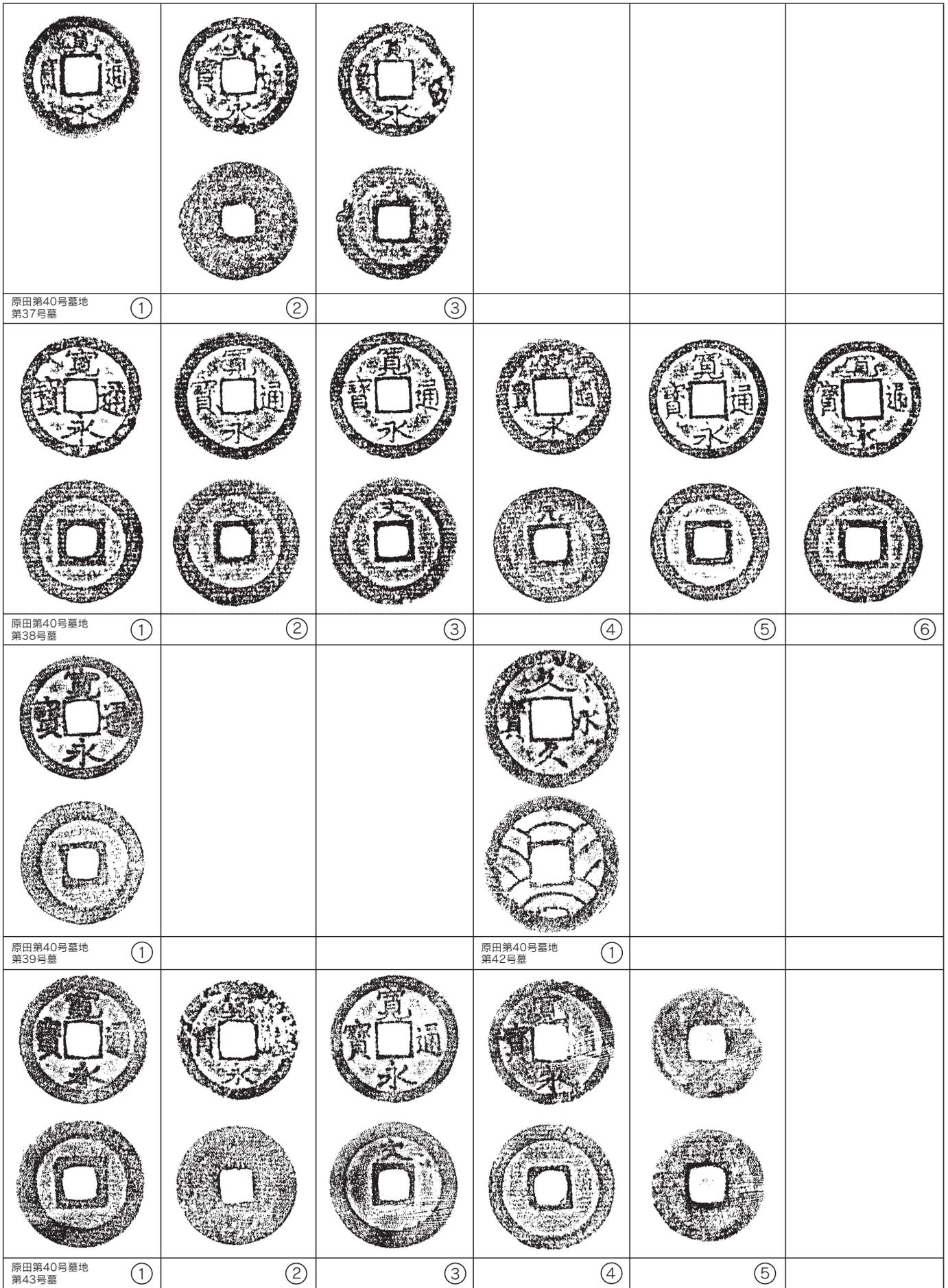
第4図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）④



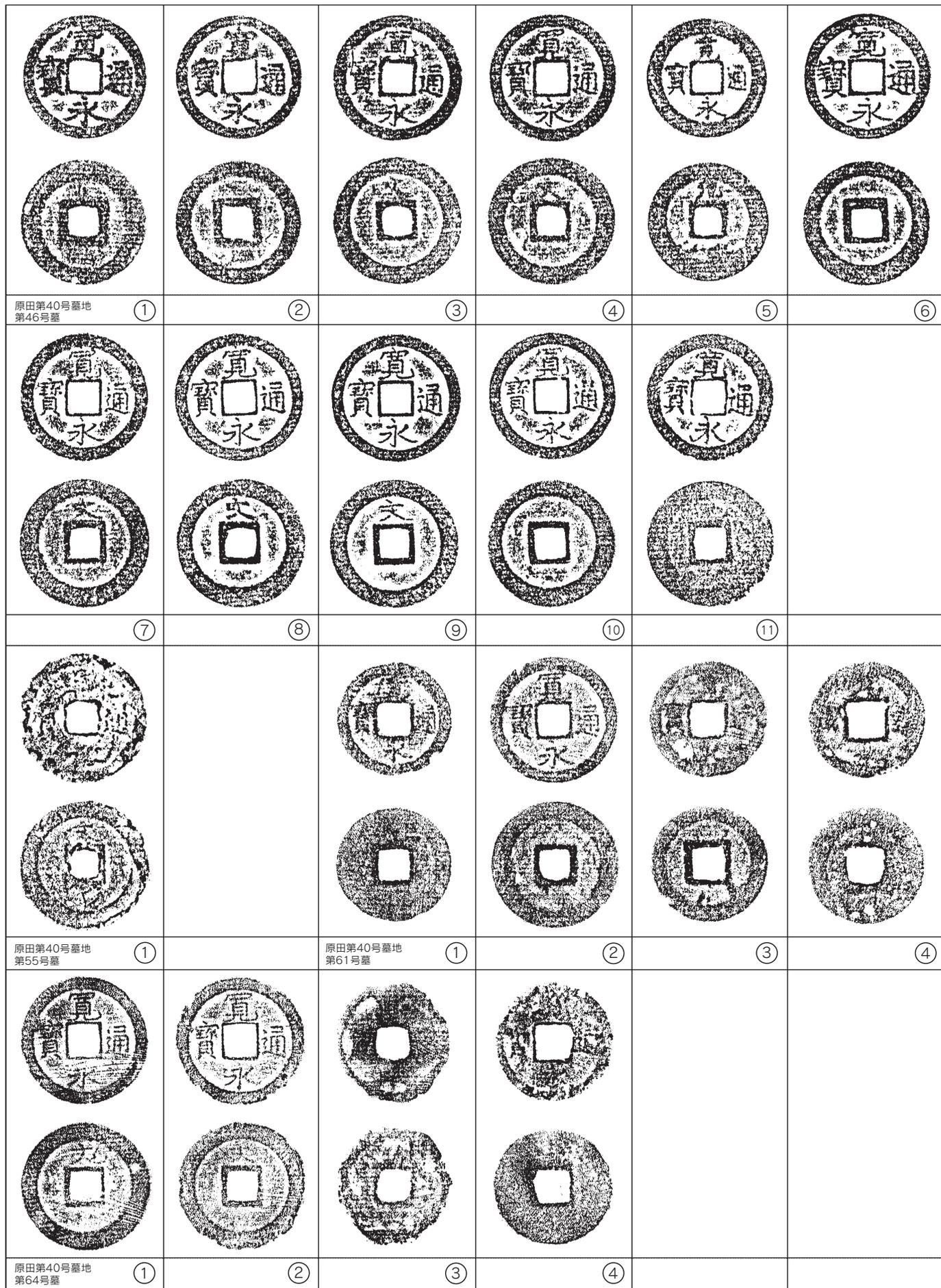
第5図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑤



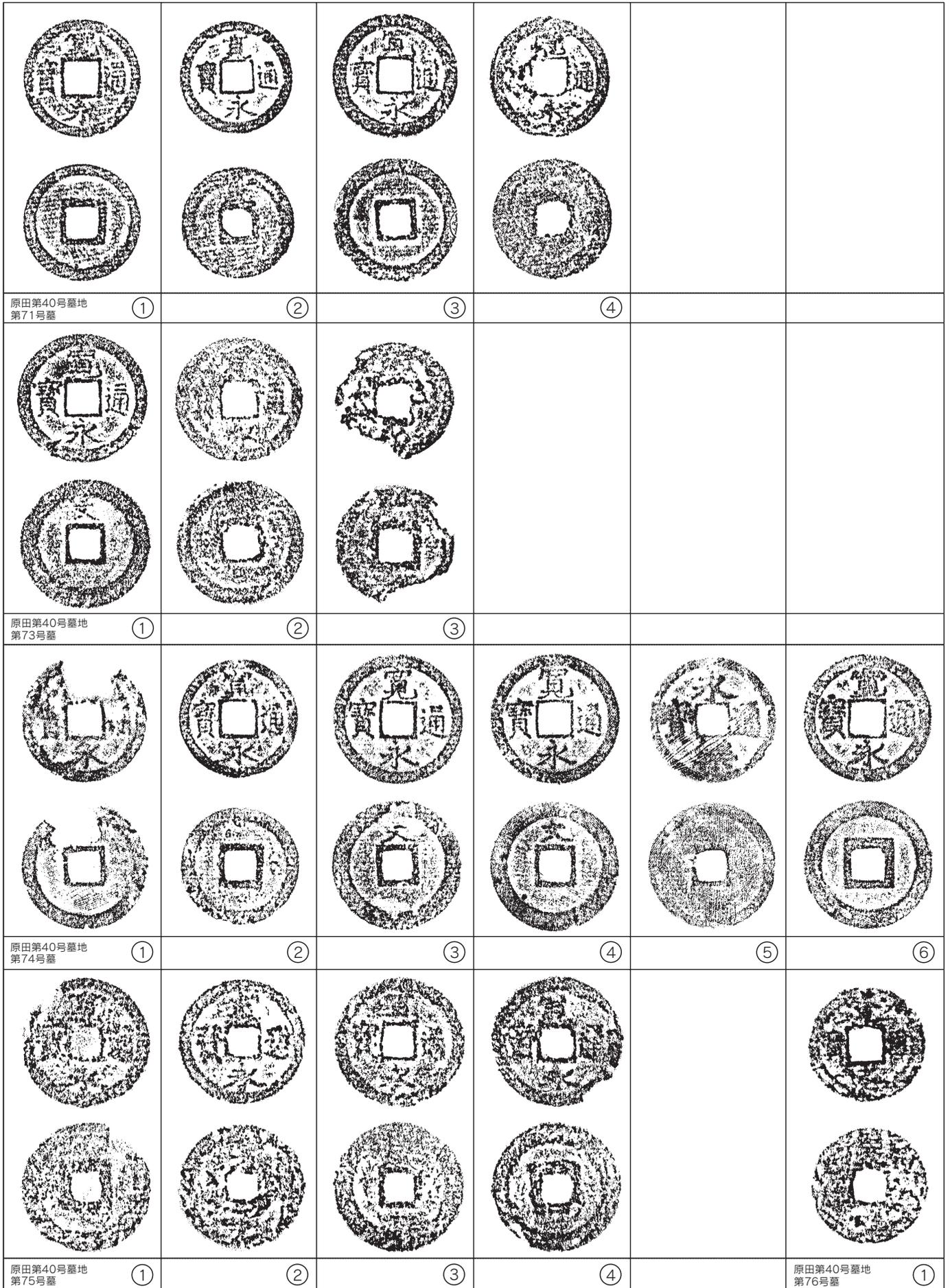
第6図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸) ⑥



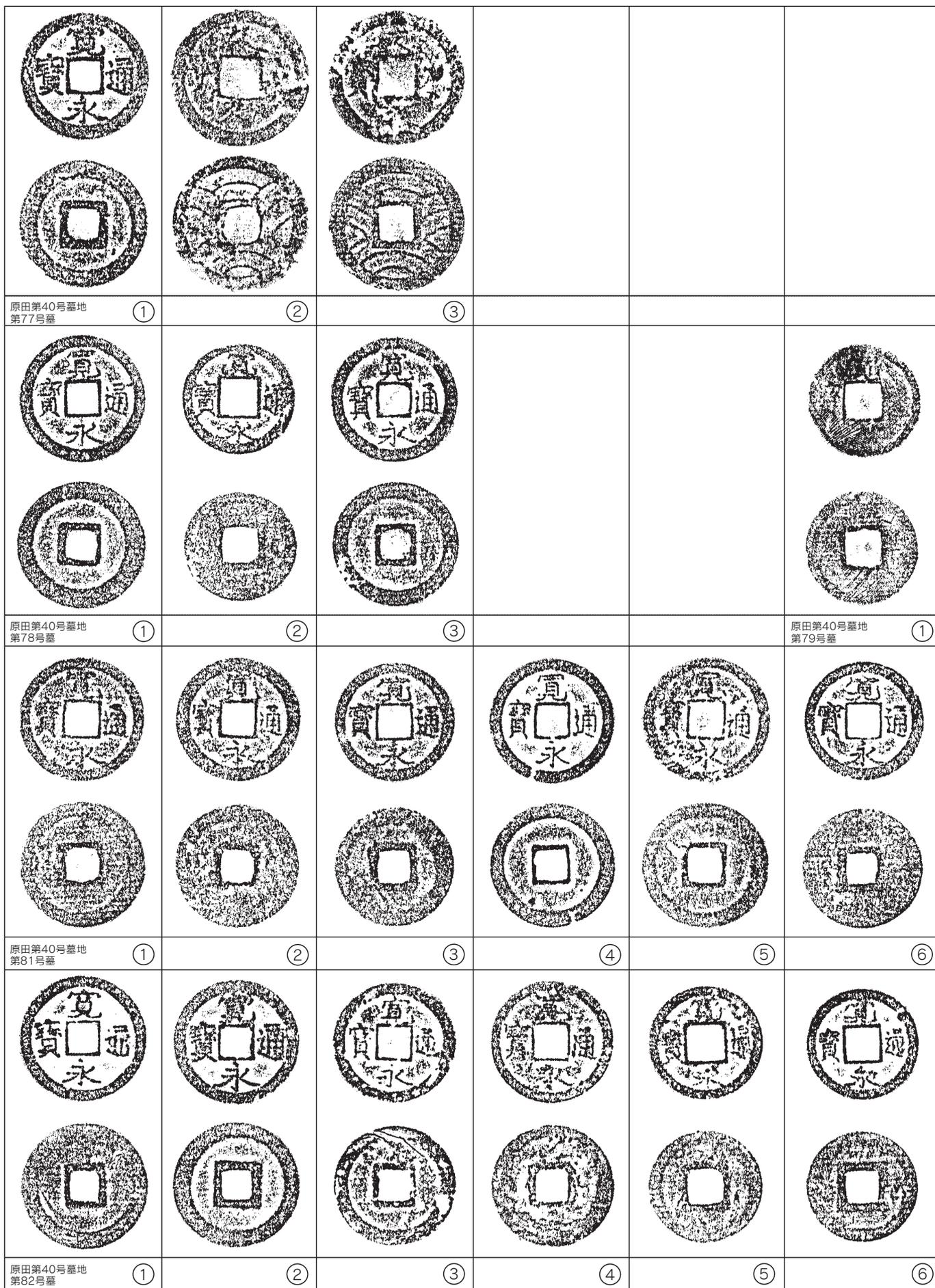
第7図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑦



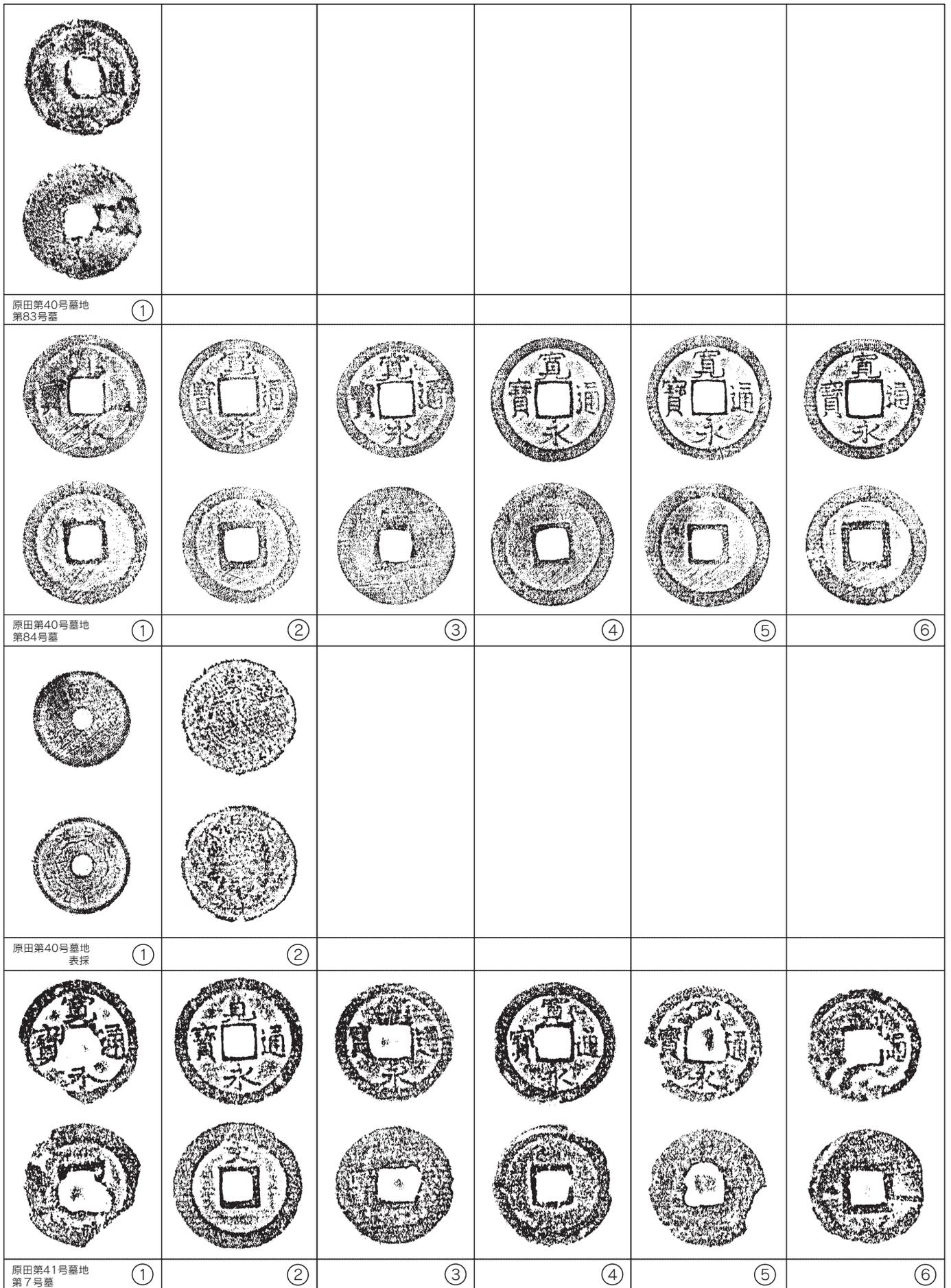
第8図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図(原寸) ⑧



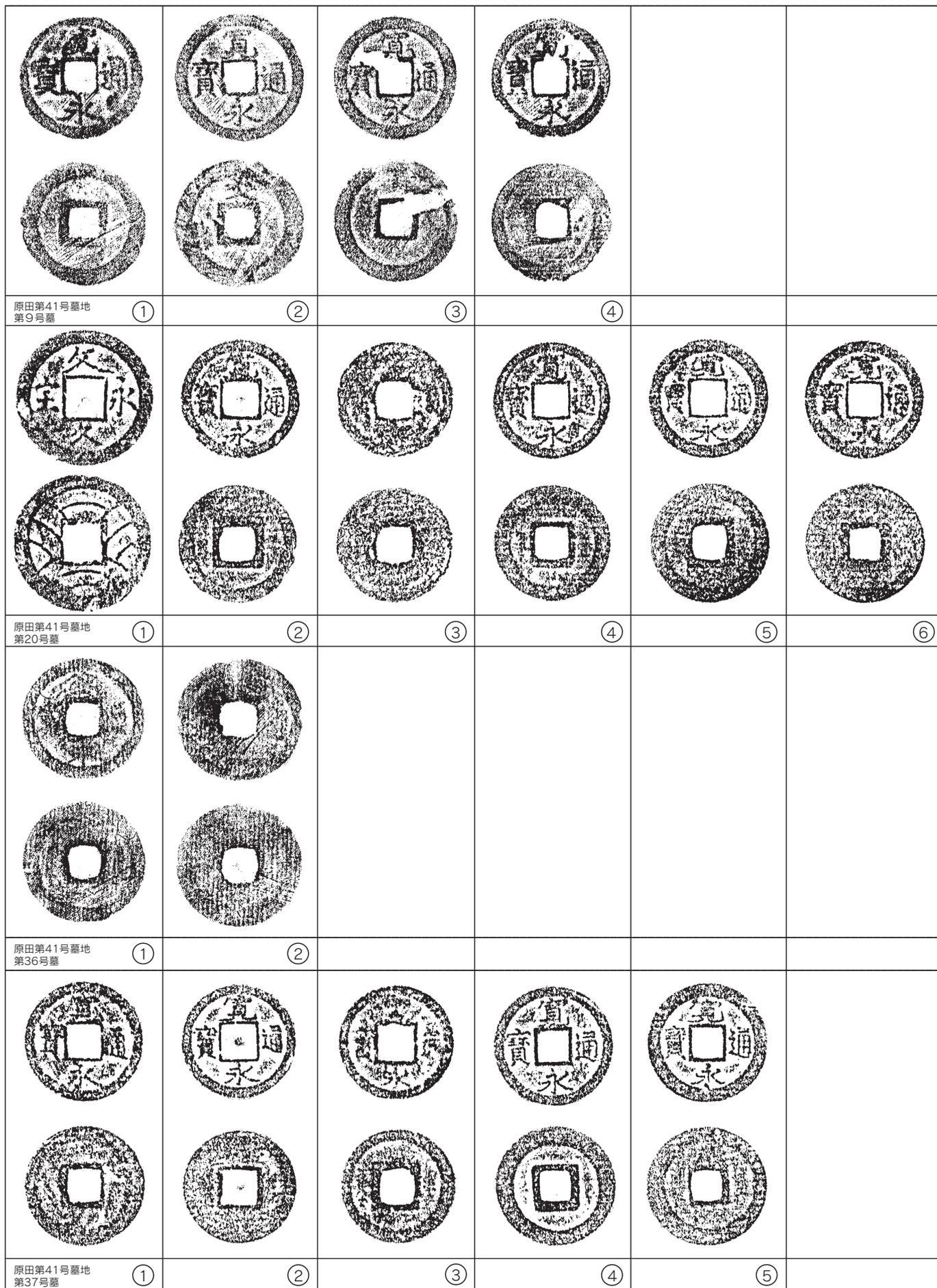
第9図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑨



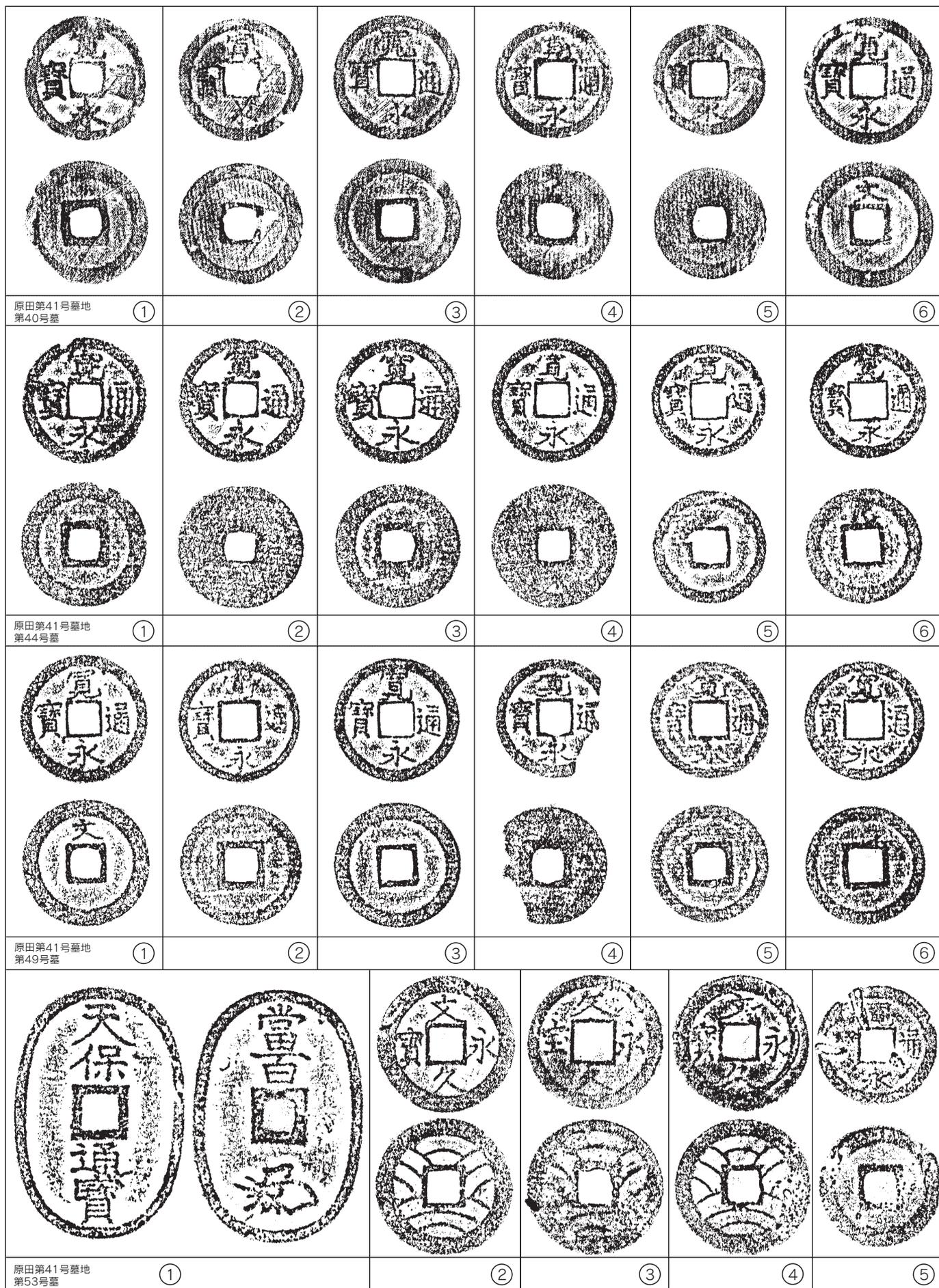
第10図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑩



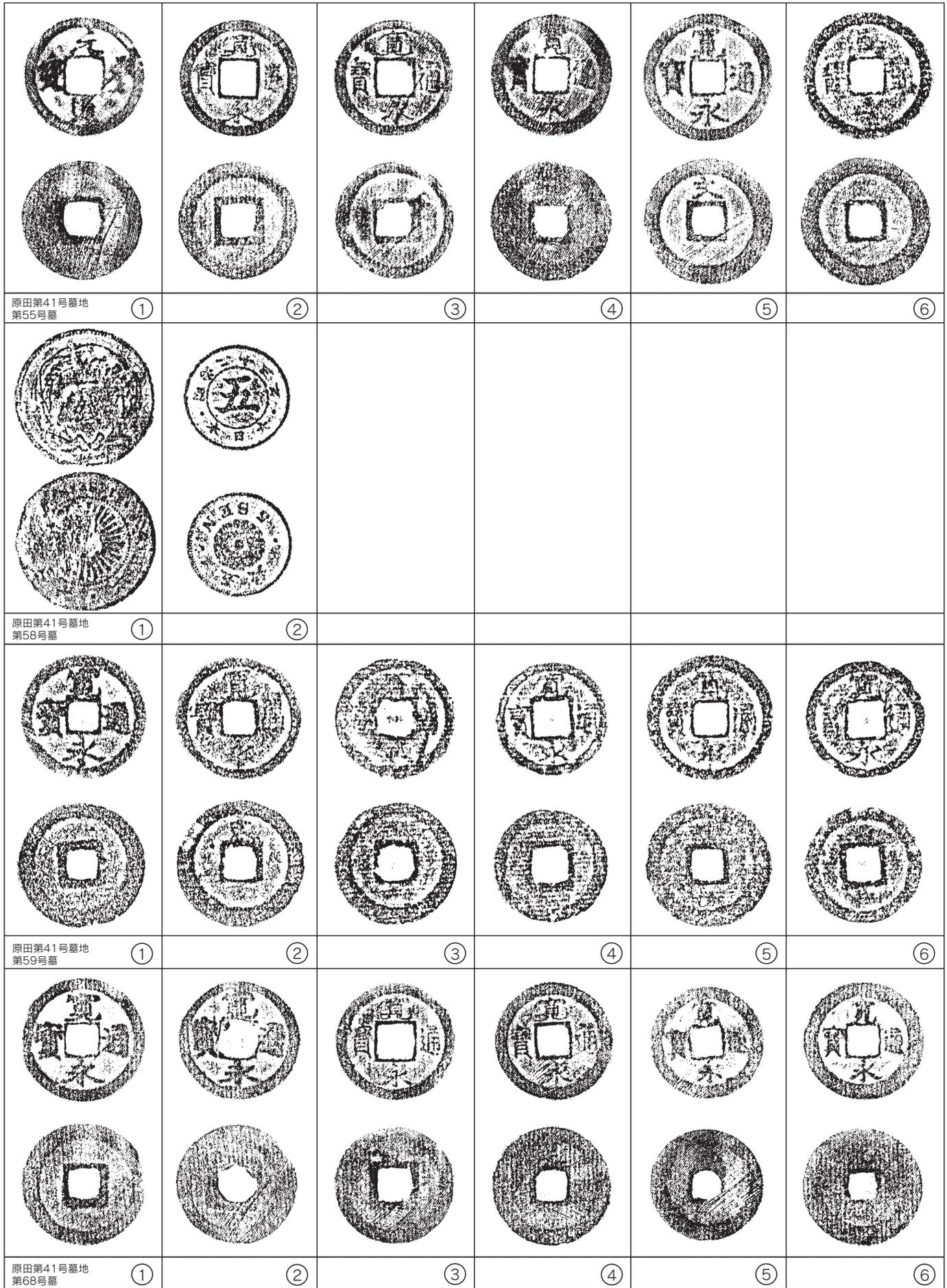
第11図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑪



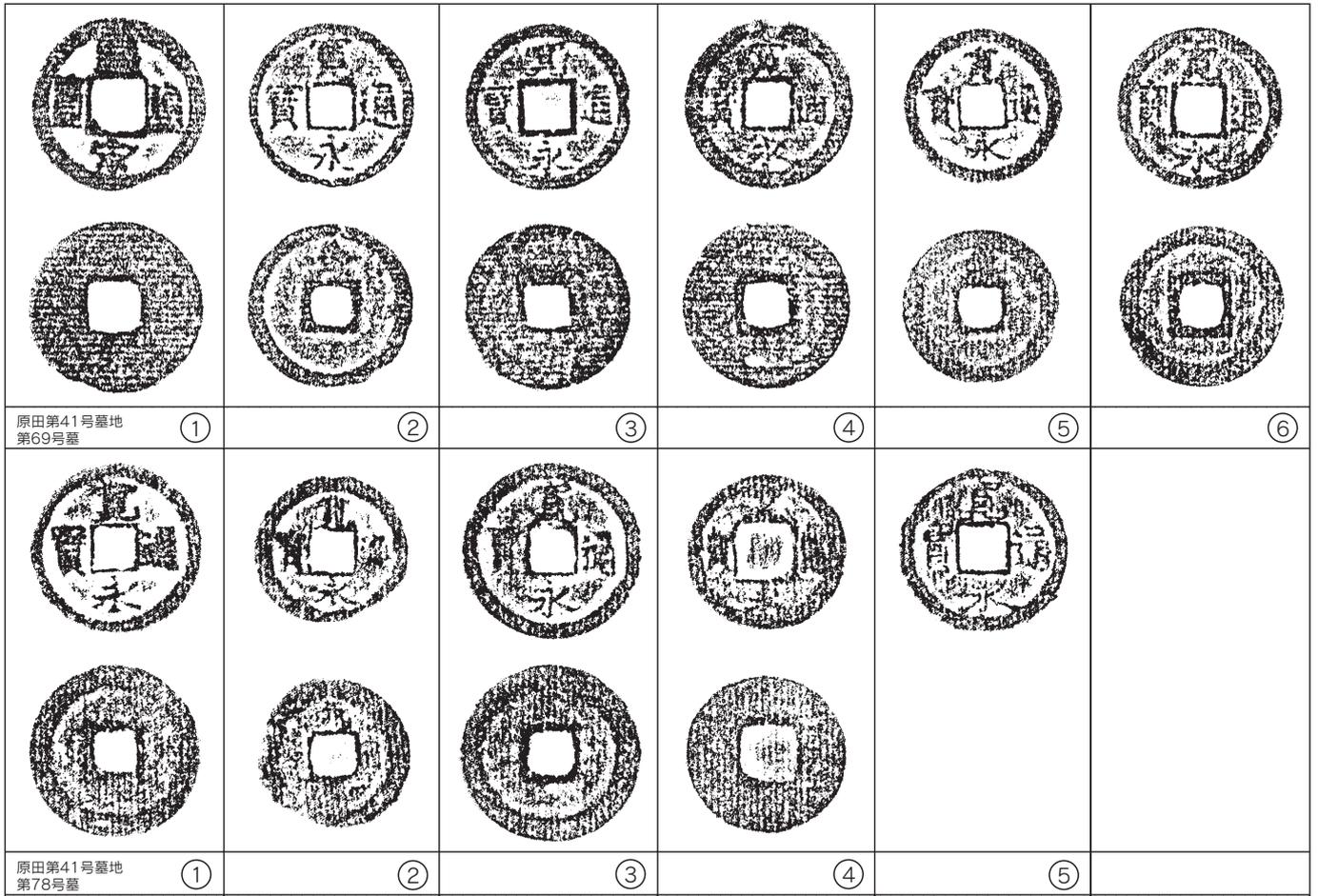
第12図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑫



第13図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑬



第14図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑭



第15図 原田第1・2・40・41号墓地出土六道銭拓影図（原寸）⑮

図版1 原田第1・2・40・41号墓地六道銭出土状況写真①



原田第1号墓地 第4号墓 (西から)



原田第1号墓地 第7号墓 (南東から)



原田第1号墓地 第41号墓 (東から)



原田第2号墓地 第2号墓 (南から)



原田第2号墓地 第3号墓 (南西から)



原田第2号墓地 第4号墓 (南から)

図版2 原田第1・2・40・41号墓地六道銭出土状況写真②



原田第2号墓地 第5号墓 (南から)



原田第40号墓地 第27号墓 (北東から)



原田第40号墓地 第74号墓 (南西から)



原田第41号墓地 第49号墓 (南から)



原田第41号墓地 第53号墓 (北西から)



原田第41号墓地 第69号墓 (東から)

第4節 原田第1・2・40・41号墓地出土銅銭の 材質調査について

1. はじめに

古銭は銅を基調とする合金の鑄造品が一般的であるが、その他にも鉄や金、銀などで作られたものも存在する。これらは肉眼観察によってある程度の材質推定が可能なものもあるが、特に銅合金における配合成分の違いや、含まれる微量成分の種類などの判別を目視のみで行うことは困難であり、そのような場合には理化学的手法を用いた分析などが有効となる。近年、文化財の分野において各種の分析機器が普及し、多くの成果を挙げている。弥生時代を中心とする青銅器では平尾良光氏らによる材質調査や、鉛の同位対比分析による産地推定などが行われ^{×1)}、また古代の銅銭では村上隆氏による国産最古の銭貨「富本銭」の材質調査により、アンチモンが用いられていることが明らかにされている^{×2)}。中世以降、輸入品も含め大量に流通する銭貨については山口誠治氏が科学分析の方法や過去の分析事例について概観している他^{×3)}、斉藤努氏による材質及び鉛同位対比からの検討^{×4)}や佐々木稔氏のグループによる分析成果^{×5・6)}、小泉好延氏による近世銭の分析^{×7)}などが知られている。このような理化学分析の結果は、含まれる元素の種類や量の違いにより、製作地や流通、或いは歴史的変遷を探る手がかりとして期待されるが、その出土数に比べると分析事例は決して多いとは言えない状況のようである。

今回は近世墓に副葬された銭貨64枚を対象とした、蛍光X線分析法による材質調査を試みた。比較的まとまった点数のデータが得られている反面、調査の方法や結果の解釈については注意が必要な部分も含まれており、基礎データの蓄積という役割というよりは試行錯誤的な意味合いが強い内容となっている。従って小文では、方法論とその注意事項を中心に記すこととする。

2. 蛍光X線分析方法と資料（第1～4図）

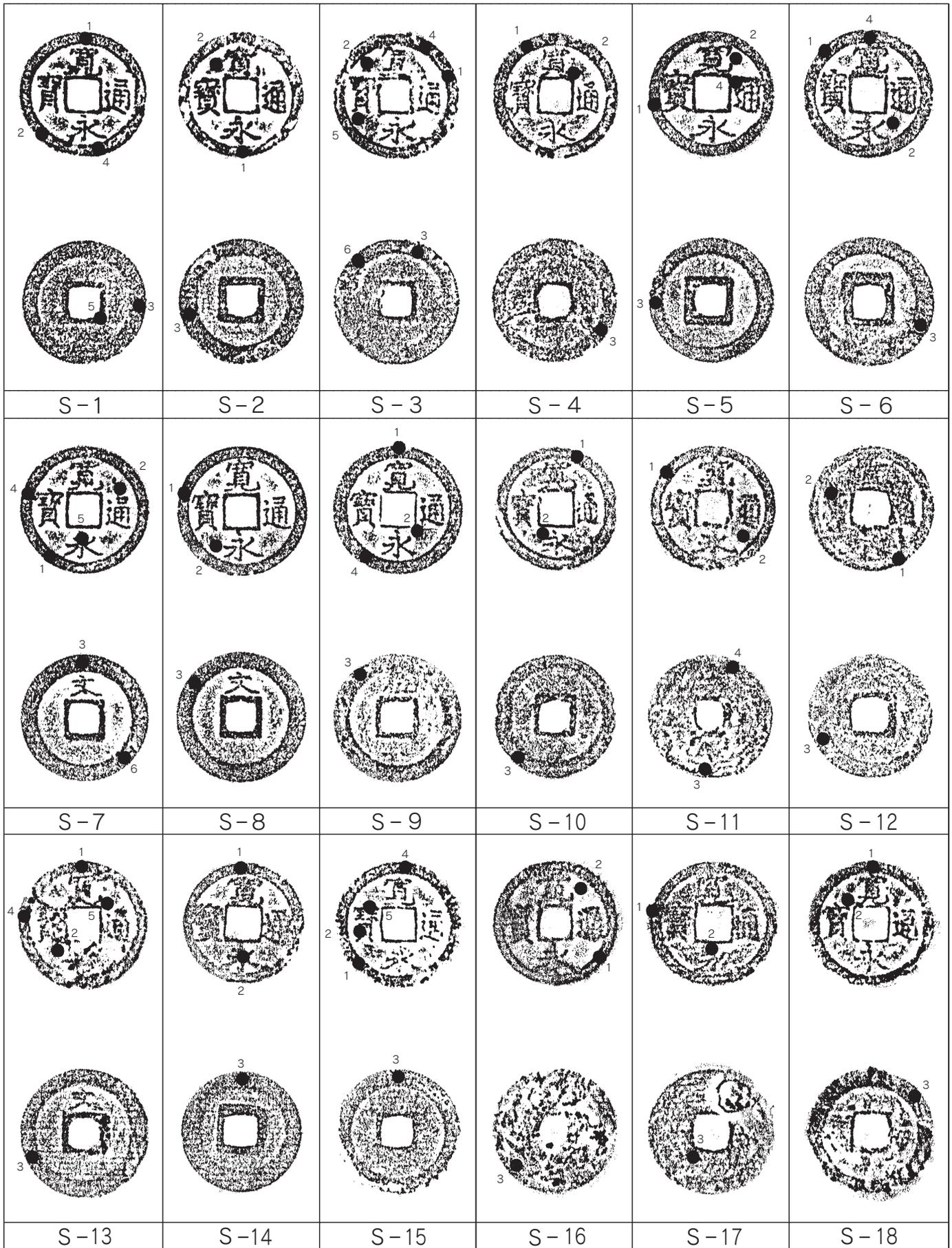
蛍光X線分析法は、試料の表面にX線などを照射した際に、試料に含まれる元素から生じる、その元素特有のエネルギーを持つ二次X線（蛍光X線）を検出器でとらえ、エネルギーと強度をピークとして表すものである。これにより資料に含まれる元素の種類や量を測定する。特別な試料調製を施さなくてもデータは得られることから、非破壊による調査が求められる文化財分野において有効な調査法として普及している分析手法である。しかし本来、蛍光X線分析法により試料の正しい組成を得るには対象試料が均質かつ平滑であることが前提で、更に分析結果が標準試料によって校正されていることが必要である。従って非破壊分析でも結果は得られるものの、当然、それは様々な制約を受けた上で得られたデータであり、蛍光X線分析法本来の手法で得られた結果と同じ土俵で比較できるものではない。また蛍光X線分析ではX線が照射された範囲の、深さ数百ミクロン程度の元素情報が表されることになるが、測定したい対象物の表面に何らかの付着物が存在する場合には、その付着物のデータも一緒に検出される。文化財は現代の工業製品や実験室レベルで作られたサンプルのように画一的、或いは均質なものではないため、測定対象物そのものが不均質な可能性がある上に、表面への顔料の塗布、或いは金工製品における鍍金等の表面処理など様々な状況が

想定される。更に文化財の中でも埋蔵文化財の場合、状況は複雑化する。埋蔵文化財では長年土中に埋蔵されているため、金属製品、特に合金の場合では腐食による組成の変化が起きることが確認されている。また墳墓などにおける顔料の塗布行為による影響や、埋土や他金属との接触による元素の遷移など埋蔵環境における周辺雰囲気による汚染も無視することはできない要因となる。このように文化財を対象とした蛍光X線分析においては、資料の様相を十分に把握した上でデータの解釈を行う必要がある。これらの注意点については村上隆氏が既に詳しく述べられているとおりである^{文8)}。

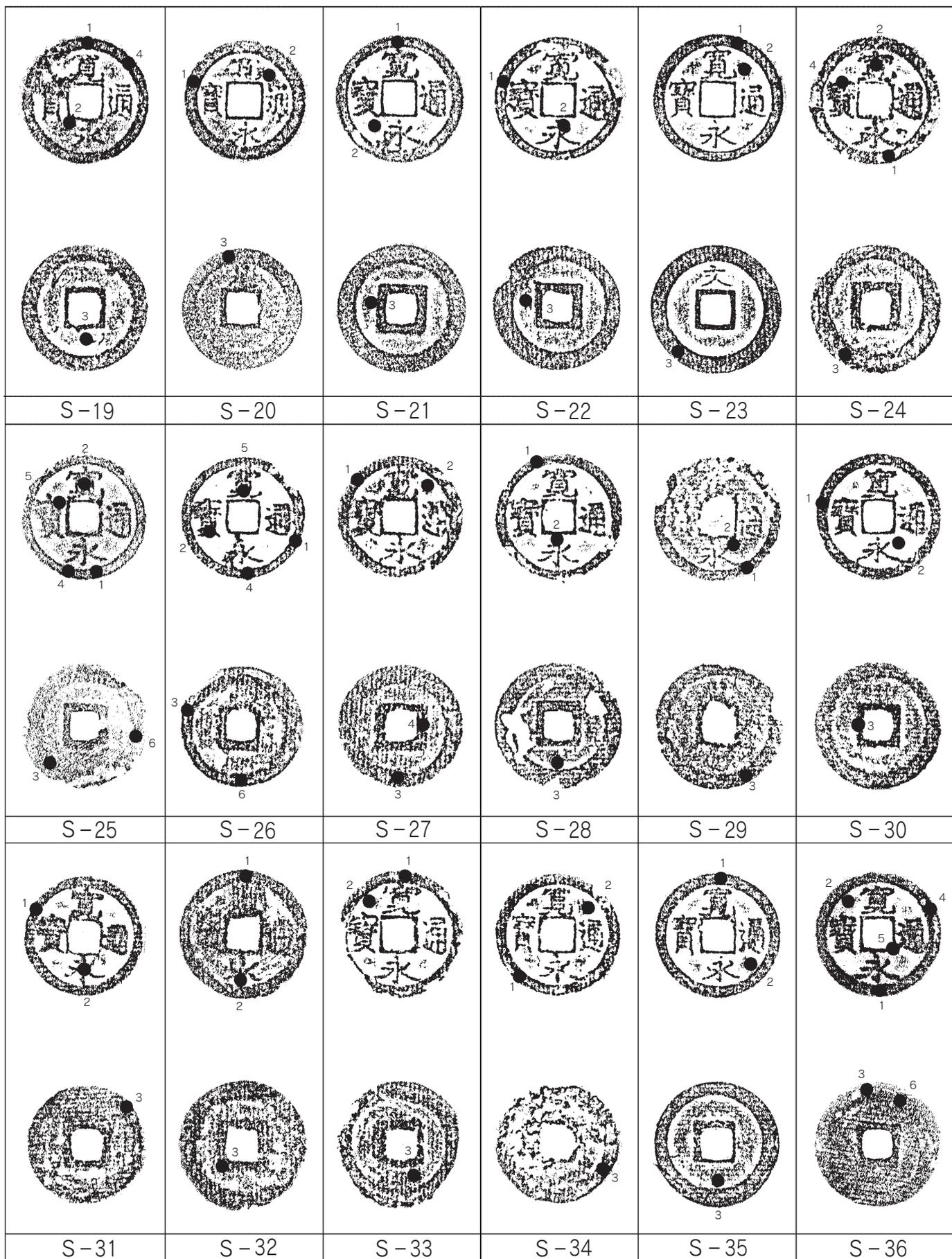
そこで今回対象となる資料の状況と分析方法について見ておきたい。測定対象となる銅銭64枚は全て近世の墓地に副葬されていた出土文化財で、その埋蔵環境は地下水の影響を受ける粘質土や比較的乾燥状態にあるバイラン土など様々なようである^{文9)}。しかし、いずれの資料も出土後の保存処理により、表面は超音波洗浄機やワイヤーブラシなどによってシビアにクリーニングされており、埋土の残留は肉眼では確認できない。また同時に腐蝕層も除去されているようで、現時点では残存状況が良好な部分が露出している。この点では腐食が著しく付着埋土の除去も不完全な資料に比べれば、より本来の組成に近いデータが得られる条件は備えているといえるのかもしれない。が、腐蝕や付着物の状況は目視のみで測ることはできない上に、それ以前に銭としての基本的属性である文字や縁の凹凸、手工業による鑄造製品としての微妙な凹凸は存在し、合金素材の均一性も保証されるものではない。また保存処理により表層にアクリル樹脂が比較的厚めに塗布されている。樹脂そのものは有機物であり、蛍光X線分析により検出可能な元素の対象外であったり、今回検討の対象とする金属元素を含むものではないと思われるが、樹脂塗膜の存在が二次X線の励起にどのような影響を及ぼすかといった問題については検証しておらず、今後の課題である^{註1)}。

次に装置と作業方法であるが、分析を行った福岡市埋蔵文化財センターには二台の蛍光X線分析装置がある。一台は波長分散型の装置でX線の照射面積が20mmφ、もう一台はエネルギー分散型でX線照射面積は0.3mmφである。前者は二次X線の検出に際して分光結晶を用いており、エネルギーの近接するピークの分離が可能である反面、強いX線を必要とし測定にも若干の手間と時間がかかる。後者は短時間で効率よく元素同定が可能である反面、ピークの分解能は波長分散型に比べて落ちる。またX線照射面積の違いも大きく、前者が広い範囲の情報を均質に捉えるのに適しているのに対して、後者は微小領域用としてシャープペンシルの先程度のデータを捉えるため、微細な部分での組成の差を見るのには適しているが、逆に測定場所によって大きく異なるデータが得られる危険性も併せ持つ。今回はいずれも資料の大きさが30mmφ程度と波長分散型の装置に適当なものであるが、点数が多く作業効率や装置の操作性なども考慮して、エネルギー分散型の装置を用いることとした。このため測定に際しては、事前に実体顕微鏡を用いて表面観察を行い、できるだけ腐食や付着物の影響が少ないと思われる場所を選び、更に資料1点につき数カ所を測定することでイレギュラーを軽減するよう努めた。各資料の分析場所を第1～4図に示す。装置とその動作条件は次の通りである。

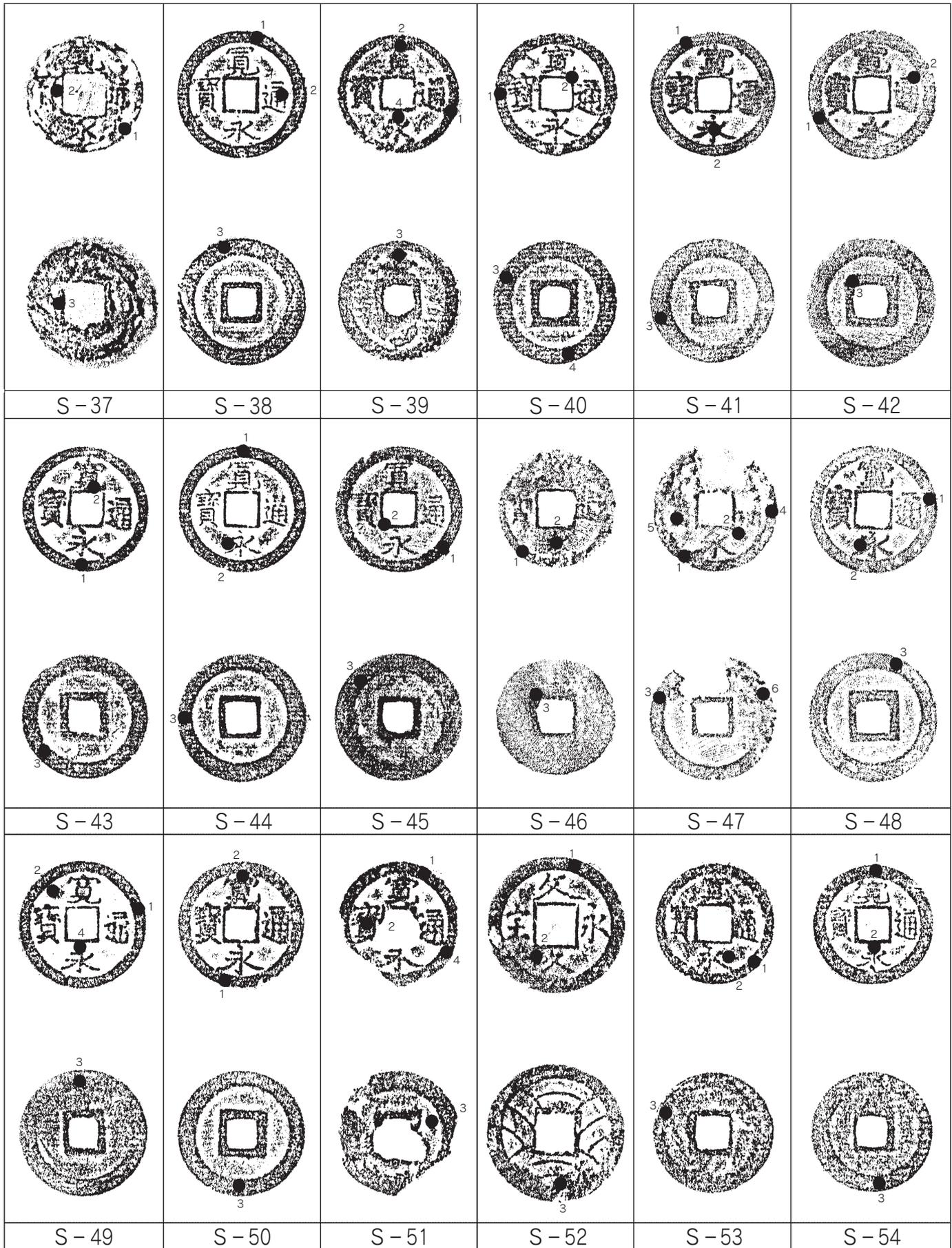
微小領域用蛍光X線分析装置 (エダックス社製・Eagle μ probe) / 対陰極: モリブデン (Mo) / 検出器: 半導体検出器 / 印加電圧・電流: 36~40kV・60~80 μ A / 測定雰囲気: 真空 / 測定範囲: 0.3mmφ / 測定時間300秒



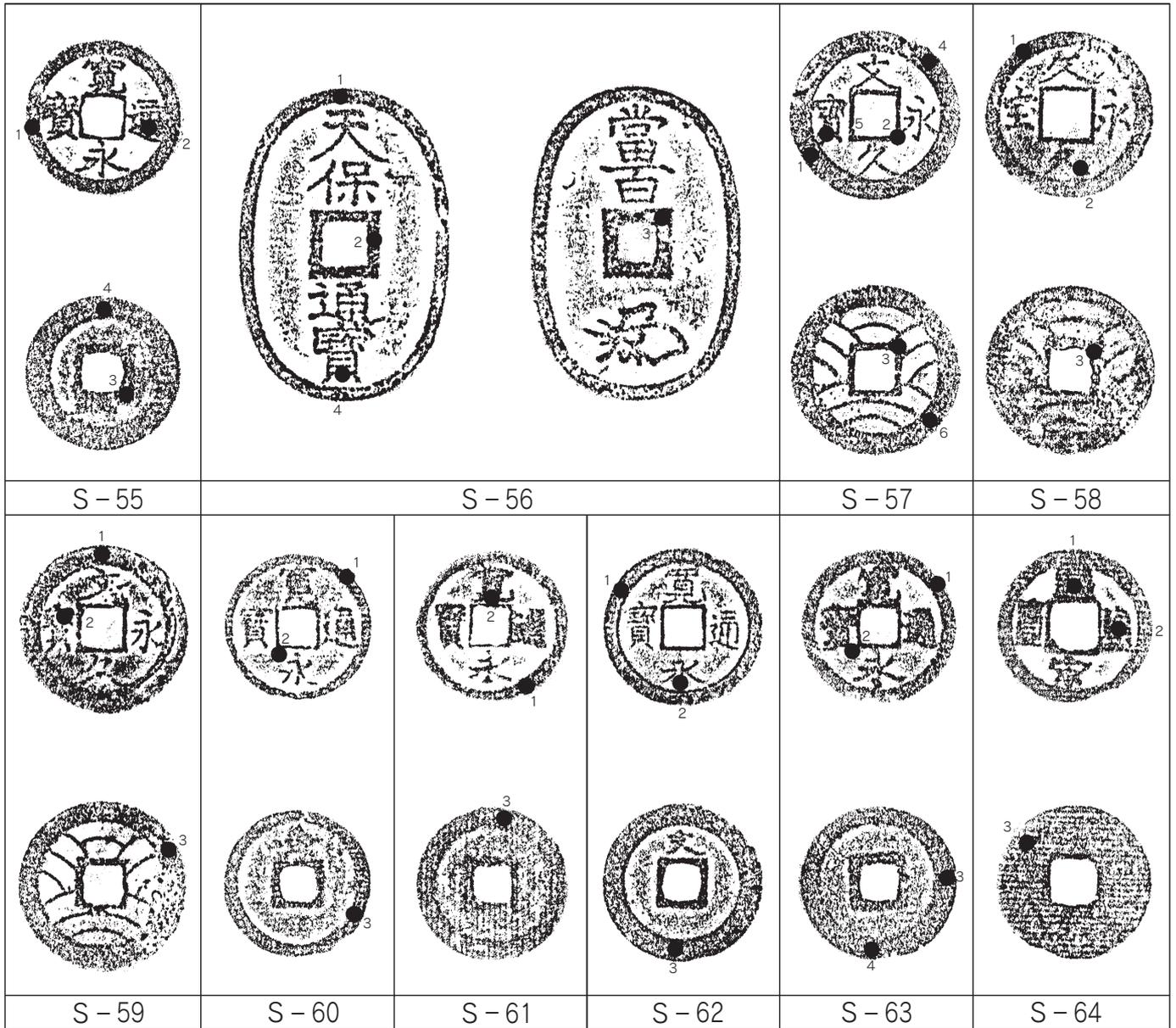
第1図 蛍光X線照射位置図(原寸)①



第2図 蛍光X線照射位置図(原寸)②



第3図 蛍光X線照射位置図(原寸)③



第4図 蛍光X線照射位置図(原寸)④

3. 分析データの検討

最後に、得られたデータの検討方法であるが、一般的には検出された元素の合計を100とした各元素の比率(%)で表される。しかし、ここでも幾つかの問題がある。一つは最前から述べているように、出土文化財を対象としている以上、得られた組成データが本来のものである保証がないこと、もう一つは、今回の作業においては標準資料を用いていないことがある。装置には得られた各元素のX線強度値を元に付属のコンピュータが定量値として計算する機能を有しており、標準資料が無くても組成比を算出することは可能である。しかしこの数値は装置や計算プログラムに依存した数値であり、それが異なれば当然得られる数値も異なることになる。因みに当センターが保有する二台の蛍光X線分析装置で同一の資料を測定し主要な3元素について定量値を算出した結果、波長分散型の装置では銅70.1%、鉛17.3%、錫12.6%となったのに対し、エネルギー分散型では銅

84.5%、鉛13.7%、錫1.8%と大きく異なる数値となっている。エネルギー分散型では3カ所測定しているが、本資料においてはいずれもさほど大きなバラツキはなく、またデータの平均値を取っていることから、この違いは分析箇所や面積ではなく、装置の特性に依存するものと考えられる。

もう一つの問題は、検出ピークが重複する元素の扱いである。今回の資料では砒素と鉛がそれに該当する。蛍光X線分析法は各元素の原子にX線が照射された際に原子核の周囲を回る電子がはじき飛ばされ、そこに、それを埋めるためにより外殻から補充された電子の余剰エネルギーが二次X線として放出される。そのため、どの軌道の電子が補充されるかにより同一元素でも複数種の蛍光X線が生じることになり、これらは電子軌道の種類、K、L、Mなどに α 、 β 、 γ などの文字を組み合わせる表示する。砒素と鉛の場合、砒素の $K\alpha$ 線と鉛の $L\alpha$ 線がほぼ同じエネルギー値を示すため、チャート状では同じピークとして表示される。これらが同時に存在する物質の測定結果においてそれぞれの存在を確認するには、エネルギー値の異なる $K\beta$ 線、 $L\beta$ 線を見ることになる。定性分析のみであれば問題はないが、定量値を算出しようとする、今回の装置ではそれぞれの $K\alpha$ 線と $L\alpha$ 線部分でしか計算されないため、それぞれを個別に計算することができない。両者が含まれる資料を分析し、通常の動作で定量値を算出すると鉛が優先され数値が得られ、砒素は「0」という結果になる。そして逆に鉛の数値は砒素のデータも含んだものということになるのである。

このように様々な問題を内包した結果を通常の数値として示すのは無責任であり、仮に強行して様々な言い訳や注意事項を羅列しながら数値を示しても、不正確な数値のみが一人歩きする危険性は否めない。それでも、結果を定量値として表示できなければ今回の分析そのものが無意味になるかといえ、決してそうではない。後ほど詳細は述べるが、含有する元素の種類という観点から見ると興味深い結果が得られており、定量値ではなく定性的に見れば何らかの議論が可能であると思われる。ただし、各データを比較するに当たり、各元素の定量的数値が何も無い状態では説得力に欠ける部分もあろう。そこで主要元素を100とした場合の、各検出元素のX線強度比で表す方法を採用したい。しかし、ここでも砒素と鉛の重複による問題はクリアできないため、鉛と砒素については、それぞれ $L\beta$ 、 $K\beta$ 線のX線強度を使用することとする。

なお、データは数値化することにより、一見、主観が排除されたデータのように見えるが、検出強度の微弱な元素については、これに含まれるものと見なすかバックグラウンドの一部と見るか判断が困難なものも少なくなく、そこには主観が大きく関与していることも付記せねばならない^{註2)}。

4. 分析結果 (第1～6表)

分析結果は第1～4表に示すとおりである。同一資料における分析箇所の違いについては、定性的にはそれほどではないが、検出される元素の強度についてはバラツキの大きいものも見られ、出土文化財における非破壊分析の難しさを窺わせる結果となっている。

全ての資料から検出される元素としては、鉄(Fe)、銅(Cu)、鉛(Pb)が有る。この内、鉄は埋土にも含まれる金属元素であるため、銅銭に本来含まれる鉄分との区別は困難である。今回の場合、埋土の残留は肉眼的に殆ど無いため資料本体に含まれるものである可能性は高いが、土中鉄分や鉄製品と接触していたことによる鉄分の遷移も考えられることから注意が必要である。その他には亜鉛(Zn)、砒素(As)、錫(Sn)、アンチモン(Sb)といった元素が認められるが、これらは資料によって出

第1表 分析結果一覧表①

分析No.	分析point	分析条件		銅のX線強度を100とした場合の各元素のX線強度比								銅のX線強度(cps)	銭種	古銭学分類	背面	備考	図版番号
		kv	uA	FeK	CuK	ZnK	AsK	PbL	AgK	SnK	SbK						
1	1	40	30	12.32	100.00	1.85	0.42	5.28	—	0.22	0.06	832.22	新寛永	仙台石巻銭 (元文) 異書長通		原田第1号墓地 第4号墓 銭①	第1図
	2	40	20	1.49	100.00	1.73	0.13	2.93	—	0.15	0.05	968.80					
	3	40	40	0.90	100.00	2.84	0.63	12.57	—	0.35	0.09	729.25					
	4	40	50	2.06	100.00	3.08	1.08	29.58	—	0.52	0.16	643.05					
	5	40	30	1.74	100.00	2.18	0.30	7.44	—	0.20	0.05	1071.25					
2	1	40	40	1.02	100.00	0.72	0.30	8.27	0.02	0.76	—	792.58	古寛永	称岡山銭		原田第1号墓地 第4号墓 銭②	第1図
	2	40	40	2.46	100.00	1.41	0.33	8.57	0.04	0.60	—	908.19					
	3	40	30	0.77	100.00	—	0.17	8.60	0.03	0.50	—	923.19					
3	1	38	20	26.67	100.00	1.12	0.09	2.00	—	0.14	—	913.84	新寛永	仙台石巻銭 (元文) 異書進冠		原田第1号墓地 第4号墓 銭⑦	第1図
	2	37	20	3.12	100.00	2.05	0.07	1.09	—	0.09	—	1135.79					
	3	40	30	4.53	100.00	1.10	0.12	5.95	—	0.20	—	1087.64					
	4	38	20	2.13	100.00	1.37	0.10	2.83	—	0.10	—	1233.30					
	5	39	20	2.82	100.00	3.21	0.01	4.18	—	0.09	—	1205.05					
	6	36	20	4.46	100.00	1.15	0.07	0.67	—	0.08	—	1275.52					
4	1	40	20	0.61	100.00	0.99	—	0.72	—	0.13	0.08	1350.08	新寛永	不旧手 旧十万坪銭		原田第1号墓地 第4号墓 銭⑨	第1図
	2	40	20	0.59	100.00	1.04	—	0.74	—	0.08	0.05	1405.38					
	3	40	20	0.63	100.00	0.97	—	0.53	—	0.10	0.07	1385.98					
5	1	40	20	0.50	100.00	0.69	—	1.61	—	0.21	—	1390.19	古寛永	称烏越銭		原田第1号墓地 第7号墓 銭①	第1図
	2	40	30	0.75	100.00	1.40	—	6.40	—	0.26	—	1041.35					
	4	40	30	0.50	100.00	1.12	—	7.03	—	0.27	—	1100.27					
6	1	40	20	2.88	100.00	0.73	0.22	1.19	0.01	0.10	—	1351.09	古寛永	称建仁寺銭		原田第1号墓地 第7号墓 銭②	第1図
	2	40	25	12.21	100.00	1.80	0.23	8.31	0.03	0.15	—	890.35					
	3	40	30	3.26	100.00	1.42	0.44	7.73	0.02	0.17	—	1012.56					
	4	38	20	1.88	100.00	1.01	0.17	2.53	0.02	0.08	—	1257.82					
7	1	40	50	0.61	100.00	0.89	0.03	2.92	—	0.29	—	1758.88	文銭		文	原田第1号墓地 第7号墓 銭③	第1図
	2	40	40	0.64	100.00	1.42	—	12.83	—	0.70	—	832.21					
	3	40	30	0.82	100.00	1.19	0.05	5.97	—	0.56	—	940.46					
	4	36	20	0.55	100.00	0.97	0.01	0.99	—	0.11	—	1396.21					
	5	40	30	0.52	100.00	1.04	0.06	5.54	—	0.43	—	1188.48					
	6	38	20	0.45	100.00	0.98	—	4.65	—	0.25	—	1223.51					
8	1	40	40	0.73	100.00	1.01	—	10.17	—	0.73	—	943.33	文銭		文	原田第1号墓地 第7号墓 銭④	第1図
	2	40	40	1.91	100.00	1.10	—	12.73	—	0.73	—	849.48					
	3	40	30	0.52	100.00	0.80	—	8.86	—	0.54	—	872.87					
9	1	40	20	0.68	100.00	1.02	0.04	2.39	—	0.37	0.09	1125.65	新寛永	佐渡銭 享保背佐	佐	原田第1号墓地 第7号墓 銭⑤	第1図
	2	40	40	0.68	100.00	1.02	0.04	7.29	—	0.43	0.11	1098.92					
	3	40	50	1.39	100.00	1.85	0.10	15.57	—	0.95	0.22	826.76					
	4	40	20	0.73	100.00	0.79	0.04	2.83	—	0.34	0.09	1255.47					
10	1	36	20	1.18	100.00	0.99	0.09	0.75	—	—	0.03	1290.08	新寛永	不旧手 旧十万坪銭		原田第1号墓地 第18号墓 銭①	第1図
	2	35	20	1.14	100.00	0.76	0.08	0.47	—	—	0.01	1300.01					
	3	36	20	1.03	100.00	0.63	0.08	0.43	—	—	0.02	1351.26					
11	1	40	20	1.46	100.00	1.40	0.26	1.41	—	0.48	—	1119.94	古寛永	称高田銭		原田第1号墓地 第18号墓 銭②	第1図
	2	38	40	0.86	100.00	0.77	0.43	2.62	—	0.31	—	1118.02					
	3	38	20	319.56	100.00	3.46	0.96	8.57	—	1.03	—	287.28					
	4	38	60	1.92	100.00	2.86	0.84	13.41	—	0.77	—	820.43					
12	1	38	20	0.54	100.00	0.68	—	1.81	—	0.04	0.05	1199.16	新寛永	不旧手 横大路銭		原田第1号墓地 第18号墓 銭③	第1図
	2	37	20	0.59	100.00	0.60	—	1.23	—	0.04	0.04	1213.83					
	3	39	20	1.06	100.00	0.85	—	2.50	—	0.09	0.10	1157.31					
13	1	40	30	419.13	100.00	7.81	—	54.34	—	3.16	—	179.98	文銭		文	原田第1号墓地 第18号墓 銭④	第1図
	2	40	50	123.03	100.00	5.54	—	28.99	—	1.48	—	431.66					
	3	39	60	7.82	100.00	4.29	—	28.55	—	1.13	—	605.30					
	4	40	40	12.82	100.00	2.04	—	6.94	—	0.83	—	1002.77					
	5	40	30	8.01	100.00	1.81	—	7.00	—	0.56	—	1061.38					
14	1	40	20	1.63	100.00	0.76	—	4.28	—	0.30	—	1113.19	古寛永	推水戸銭		原田第1号墓地 第22号墓 銭①	第1図
	2	40	20	1.11	100.00	0.73	—	2.99	—	0.30	—	1190.17					
	3	40	20	0.65	100.00	0.61	—	3.90	—	0.28	—	1161.94					
15	1	40	60	1.84	100.00	3.52	—	54.99	—	0.60	0.25	475.76	新寛永	仙台石巻銭 (元文) 異書進冠		原田第1号墓地 第22号墓 銭⑤	第1図
	2	40	50	0.76	100.00	0.97	—	22.64	—	0.26	0.26	782.47					
	3	39	20	2.78	100.00	0.58	0.05	3.68	—	0.09	0.04	1153.84					
	4	39	20	0.96	100.00	0.79	0.06	3.80	—	0.10	0.05	1205.07					
	5	39	40	0.67	100.00	1.12	0.07	9.77	—	0.15	0.08	1067.57					
16	1	38	40	77.25	100.00	2.62	0.06	7.88	—	1.03	—	621.40	古寛永	称水戸銭		原田第1号墓地 第27号墓 銭①	第1図
	2	38	20	94.94	100.00	2.82	0.05	1.83	—	0.62	—	682.41					
	3	40	20	198.95	100.00	1.25	0.06	3.50	—	1.70	—	400.68					
17	1	36	20	1.32	100.00	0.66	0.03	0.83	—	0.06	0.01	1227.09	新寛永	不旧手七条銭		原田第1号墓地 第27号墓 銭②	第1図
	2	36	20	0.65	100.00	0.72	0.03	0.67	—	0.05	0.01	1285.05					
	3	36	20	3.80	100.00	0.75	0.03	0.89	—	0.04	0.01	1207.55					
18	1	40	30	0.61	100.00	0.94	0.09	5.62	—	0.43	0.06	1026.26	新寛永	文無背銭		原田第1号墓地 第33号墓 銭①	第1図
	2	40	40	0.71	100.00	1.18	0.11	14.24	—	0.57	0.09	863.14					
	3	40	40	0.54	100.00	1.23	0.11	8.32	—	0.41	0.07	1099.25					

第2表 分析結果一覧表②

分析 No.	分析 point	分析条件		銅のX線強度を100とした場合の各元素のX線強度比								銅のX線強度 (cps)	銭種	古銭学分類	背面	備考	図版番号
		kv	uA	FeK	CuK	ZnK	AsK	PbL	AgK	SnK	SbK						
19	1	40	60	1.84	100.00	3.44	0.20	63.96	-	0.66	-	446.87	新寛永 仙台石巻銭 (元文) 異書大字		原田第1号墓地 第39号墓 銭③	第2図	
	2	40	20	1.39	100.00	1.32	0.09	4.95	-	0.18	-	1123.29					
	3	38	20	0.85	100.00	0.76	0.06	2.85	-	0.11	-	1204.72					
	4	40	40	1.08	100.00	1.86	0.19	15.14	-	0.28	-	932.63					
20	1	38	20	0.98	100.00	0.71	0.24	1.68	-	0.10	0.08	1185.36	新寛永	足尾背足銭	足	原田第1号墓地 第39号墓 銭④	第2図
	2	40	20	1.06	100.00	1.28	0.28	2.16	-	0.13	0.13	1199.12					
	3	37	20	0.60	100.00	0.57	0.24	1.23	-	0.07	0.06	1216.58					
21	1	40	40	0.40	100.00	-	-	10.44	-	0.61	-	961.48	古寛永	称香谷銭		原田第2号墓地 第2号墓 銭①	第2図
	2	40	30	0.49	100.00	-	-	5.42	-	0.37	-	1144.65					
	3	40	30	0.54	100.00	-	-	5.38	-	0.38	-	1131.84					
22	1	40	50	1.28	100.00	1.90	-	13.35	-	1.54	-	825.35	古寛永	称芝銭		原田第2号墓地 第2号墓 銭②	第2図
	2	40	40	0.88	100.00	1.33	-	8.63	-	0.90	-	959.14					
	3	40	30	0.56	100.00	0.80	-	3.92	-	0.65	-	1032.17					
23	1	40	50	0.76	100.00	1.06	-	18.67	-	0.91	-	775.65	文銭		文	原田第2号墓地 第2号墓 銭④	第2図
	2	40	30	0.72	100.00	1.36	-	7.27	-	0.56	-	995.78					
	3	40	40	0.90	100.00	0.64	-	10.56	-	0.71	-	947.67					
24	1	40	40	1.36	100.00	0.66	-	2.63	-	0.62	0.04	1185.60	古寛永	称香谷銭		原田第2号墓地 第3号墓 銭①	第2図
	2	40	40	0.88	100.00	0.95	-	11.67	-	0.65	0.01	902.99					
	3	40	30	1.36	100.00	1.18	-	4.15	-	0.36	0.01	1144.21					
	4	40	20	0.51	100.00	0.56	-	4.80	-	0.24	-	914.33					
25	1	40	20	1.81	100.00	1.13	0.35	5.55	-	0.10	0.01	1103.75	古寛永	称芝銭		原田第2号墓地 第4号墓 銭①	第2図
	2	40	40	4.00	100.00	1.65	0.66	24.70	-	0.19	0.01	708.32					
	3	40	60	11.71	100.00	1.52	2.23	73.34	-	0.49	0.09	370.10					
	4	39	40	2.30	100.00	1.40	0.45	15.39	-	0.13	0.02	692.88					
	5	40	40	3.85	100.00	1.69	0.77	17.89	-	0.18	0.03	689.93					
	6	40	40	7.00	100.00	1.33	1.26	21.59	-	0.19	0.04	674.44					
26	1	40	50	0.86	100.00	2.11	-	17.82	-	1.11	-	798.95	古寛永	称岡山銭		原田第2号墓地 第5号墓 銭①	第2図
	2	40	60	1.56	100.00	2.86	-	42.87	-	2.70	-	499.03					
	3	40	30	0.73	100.00	0.76	-	8.28	-	0.78	0.03	963.20					
	4	40	60	1.01	100.00	1.56	-	39.50	-	1.47	-	501.83					
	5	40	60	0.81	100.00	2.03	-	22.38	-	1.81	-	655.85					
	6	40	40	1.34	100.00	1.30	-	6.84	-	0.95	0.05	905.92					
27	1	40	30	0.72	100.00	-	0.09	3.85	-	0.61	-	1131.09	古寛永	称芝銭		原田第2号墓地 第5号墓 銭②	第2図
	2	40	40	1.10	100.00	-	0.19	6.51	-	0.89	-	976.60					
	3	40	50	1.32	100.00	-	0.27	25.31	-	1.11	-	667.17					
	4	38	60	1.53	100.00	-	0.20	25.29	-	0.95	-	555.65					
28	1	39	70	1.74	100.00	1.66	0.39	15.75	-	3.17	-	720.85	古寛永	称水戸銭		原田第2号墓地 第6号墓 銭②	第2図
	2	40	60	1.78	100.00	2.90	0.26	16.08	-	2.10	-	762.06					
	3	40	50	2.11	100.00	2.25	0.24	11.30	-	1.30	-	873.28					
29	1	38	20	0.65	100.00	0.95	0.04	1.74	-	0.11	0.03	1223.94	新寛永	不旧手七条銭		原田第2号墓地 第6号墓 銭④	第2図
	2	37	20	0.63	100.00	0.93	0.05	1.46	-	0.09	0.02	1206.44					
	3	38	20	1.23	100.00	0.61	0.03	1.98	-	0.09	0.03	1240.24					
30	1	40	40	0.78	100.00	-	0.07	9.16	-	0.82	-	998.91	古寛永	称水戸銭		原田第40号墓地 第22号墓 銭①	第2図
	2	40	20	0.49	100.00	-	0.05	4.56	-	0.56	-	1040.98					
	3	38	30	0.69	100.00	-	0.07	4.24	-	0.43	-	1031.07					
31	1	39	30	0.42	100.00	-	0.01	5.38	-	0.41	-	1082.67	古寛永	称高田銭		原田第40号墓地 第22号墓 銭②	第2図
	2	40	30	0.59	100.00	-	0.08	2.94	-	0.67	-	1135.73					
	3	39	20	0.45	100.00	-	0.04	2.47	-	0.37	-	1132.53					
32	1	36	20	4.18	100.00	-	0.13	1.85	-	0.04	-	1133.05	古寛永	称建仁寺銭		原田第40号墓地 第23号墓 銭①	第2図
	2	37	20	3.75	100.00	-	0.16	1.91	-	0.05	-	1190.07					
	3	36	20	4.64	100.00	-	0.13	1.96	-	0.04	-	1109.11					
33	1	38	40	1.65	100.00	1.13	-	5.36	-	0.46	-	1033.55	古寛永	称香谷銭		原田第40号墓地 第27号墓 銭①	第2図
	2	38	40	0.69	100.00	0.91	-	8.21	-	0.32	-	892.68					
	3	40	30	0.99	100.00	1.13	-	5.40	-	0.40	-	1064.09					
34	1	39	20	0.86	100.00	0.66	0.04	2.11	-	0.22	-	1181.01	新寛永	仙台石巻銭 (元文) 異書長通		原田第40号墓地 第27号墓 銭⑤	第2図
	2	39	20	0.74	100.00	0.86	0.02	3.53	-	0.18	-	1126.18					
	3	38	40	2.13	100.00	0.94	0.13	7.75	-	0.31	-	963.09					
35	1	39	20	0.99	100.00	-	-	3.22	-	0.20	0.05	1159.22	新寛永	仙台石巻銭 (元文) 異書大字		原田第40号墓地 第28号墓 銭⑥	第2図
	2	39	20	0.98	100.00	-	-	2.35	-	0.19	0.04	1221.52					
	3	38	20	0.81	100.00	-	-	1.15	-	0.17	0.04	1169.94					
36	1	40	40	1.65	100.00	1.24	0.34	11.63	-	0.70	0.03	885.05	古寛永	称水戸銭		原田第40号墓地 第29号墓 銭①	第2図
	2	39	20	1.41	100.00	0.75	0.07	3.98	-	0.32	0.01	1098.90					
	3	38	30	0.65	100.00	0.99	0.17	0.64	-	0.42	-	1084.04					
	4	40	30	2.05	100.00	1.29	0.16	2.31	-	0.59	0.04	1039.02					
	5	40	50	4.87	100.00	2.95	0.66	16.84	-	1.17	0.06	671.30					
	6	39	30	1.58	100.00	1.42	0.19	3.20	-	0.49	0.01	1037.31					
37	1	35	20	6.21	100.00	1.16	0.20	0.84	-	0.03	-	1176.02	新寛永	小梅銭	小	原田第40号墓地 第35号墓 銭①	第3図
	2	35	20	5.59	100.00	1.00	0.18	0.40	-	0.02	-	1221.45					
	3	40	20	7.09	100.00	0.89	0.33	1.54	-	0.08	-	1061.57					

第3表 分析結果一覧表③

分析No.	分析point	分析条件		銅のX線強度を100とした場合の各元素のX線強度比								銅のX線強度(cps)	銭種	古銭学分類	背面	備考	図版番号
		kv	uA	FeK	CuK	ZnK	AsK	PbL	AgK	SnK	SbK						
38	1	40	20	0.78	100.00	0.85	0.08	4.09	-	0.28	0.03	1093.49	新寛永	文無背銭		原田第40号墓地 第36号墓 銭③	第3図
	2	38	20	1.27	100.00	0.74	0.07	2.87	-	0.22	0.02	1139.38					
	3	38	30	0.95	100.00	-	0.15	4.55	-	0.35	0.03	1008.23					
39	1	39	20	6.86	100.00	-	1.27	6.54	-	-	0.06	988.54	新寛永	長崎背長銭	長	原田第40号墓地 第36号墓 銭⑥	第3図
	2	40	30	25.12	100.00	1.35	2.51	18.58	-	-	0.12	654.86					
	3	38	30	4.98	100.00	1.03	0.84	6.76	-	-	0.04	1027.99					
	4	39	30	10.99	100.00	0.92	1.60	10.21	-	-	0.08	797.80					
40	1	40	30	2.68	100.00	-	0.37	9.99	-	0.20	-	978.12	古寛永	推岡山銭		原田第40号墓地 第38号墓 銭①	第3図
	2	38	20	2.93	100.00	-	0.20	4.08	-	0.13	-	1106.19					
	3	40	20	4.21	100.00	-	0.77	24.39	-	0.33	-	539.54					
	4	39	20	2.46	100.00	-	0.26	4.37	-	0.17	-	1033.71					
41	1	40	30	0.77	100.00	0.97	0.08	1.69	-	0.65	0.01	1199.60	古寛永	称芝銭		原田第40号墓地 第39号墓 銭①	第3図
	2	40	20	0.70	100.00	1.14	0.05	1.05	-	0.61	-	1225.45					
	3	39	30	0.64	100.00	0.76	0.06	2.37	-	0.62	0.01	1156.94					
42	1	40	20	1.24	100.00	1.11	0.07	5.63	-	0.15	-	1106.52	古寛永	称建仁寺銭		原田第40号墓地 第43号墓 銭①	第3図
	2	38	20	0.51	100.00	0.68	0.07	3.35	-	0.10	-	1153.27					
	3	38	20	0.78	100.00	0.65	0.11	3.17	-	0.10	-	1174.46					
43	1	39	20	0.75	100.00	-	-	3.72	-	0.27	-	1201.30	古寛永	不知銭 太細		原田第40号墓地 第46号墓 銭②	第3図
	2	39	20	0.74	100.00	-	-	4.00	-	0.31	-	1142.48					
	3	40	20	0.74	100.00	-	-	4.23	-	0.30	-	1185.87					
44	1	39	20	0.52	100.00	-	0.09	3.33	-	0.24	-	1160.70	新寛永	文無背銭		原田第40号墓地 第46号墓 銭⑩	第3図
	2	38	20	0.30	100.00	-	0.06	2.47	-	0.20	-	1252.77					
	3	39	20	0.47	100.00	-	0.11	3.32	-	0.24	-	1198.49					
45	1	40	20	0.46	100.00	-	0.07	4.55	-	0.23	-	1182.73	新寛永	文無背銭		原田第40号墓地 第61号墓 銭②	第3図
	2	39	20	0.51	100.00	-	0.04	3.83	-	0.22	-	1167.39					
	3	38	20	0.49	100.00	-	0.05	2.78	-	0.17	-	1238.30					
46	1	36	20	6.01	100.00	0.77	0.19	1.13	-	0.02	-	1256.16	新寛永	小梅銭	小	原田第40号墓地 第64号墓 銭④	第3図
	2	36	20	5.74	100.00	0.77	0.20	1.45	-	0.02	-	1192.67					
	3	36	20	5.13	100.00	0.75	0.27	1.78	-	0.02	-	1173.87					
47	1	39	30	1.32	100.00	0.71	0.14	4.96	0.05	0.23	0.01	1112.27	新寛永	佐渡銭 正徳背佐	佐 (欠落)	原田第40号墓地 第74号墓 銭①	第3図
	2	39	40	2.09	100.00	0.88	0.39	14.77	0.05	0.32	0.04	882.03					
	3	40	50	1.69	100.00	1.61	0.69	39.27	0.08	0.40	0.05	613.98					
	4	39	50	2.33	100.00	1.30	0.26	19.10	0.05	0.35	0.04	772.94					
	5	40	50	2.36	100.00	0.86	0.67	26.56	0.06	0.49	0.06	687.00					
	6	39	50	1.30	100.00	1.47	0.39	23.29	0.05	0.37	0.05	724.60					
48	1	39	20	3.68	100.00	0.73	0.25	4.28	-	0.10	-	1102.95	古寛永	称建仁寺銭		原田第40号墓地 第74号墓 銭⑥	第3図
	2	38	20	0.64	100.00	0.84	0.06	3.06	-	0.07	-	1259.00					
	3	38	20	2.08	100.00	0.68	0.21	2.83	-	0.09	-	1155.89					
49	1	39	40	0.49	100.00	0.81	0.05	5.55	-	0.48	-	1108.57	古寛永	称岡山銭		原田第40号墓地 第82号墓 銭①	第3図
	2	39	40	1.09	100.00	0.67	0.06	9.02	-	0.60	-	985.80					
	3	39	20	0.96	100.00	0.86	0.02	3.24	-	0.38	-	1131.99					
	4	40	50	2.56	100.00	1.90	0.07	23.08	-	1.04	-	691.22					
50	1	40	50	3.60	100.00	1.22	0.07	16.51	-	0.81	-	844.35	古寛永	称沓谷銭		原田第40号墓地 第82号墓 銭②	第3図
	2	38	40	0.65	100.00	0.87	0.04	9.17	-	0.36	-	991.92					
	3	40	40	4.08	100.00	0.93	0.14	12.60	-	0.60	-	888.66					
51	1	39	40	4.86	100.00	-	1.17	15.86	-	0.29	-	556.85	古寛永	推岡山銭		原田第41号墓地 第7号墓 銭①	第3図
	2	40	20	2.59	100.00	-	0.38	6.10	-	0.18	-	802.27					
	3	38	20	1.46	100.00	-	0.41	2.48	-	0.12	-	1147.40					
	4	37	20	2.33	100.00	-	0.30	2.60	-	0.11	-	1084.46					
52	1	37	20	0.40	100.00	-	0.21	0.73	-	0.06	0.01	1080.06	文久永寶	草文略宝		原田第41号墓地 第20号墓 銭①	第3図
	2	36	20	0.43	100.00	-	0.19	0.40	-	0.05	0.01	1129.02					
	3	37	20	0.48	100.00	-	0.21	0.65	-	0.07	0.01	1222.32					
53	1	36	20	3.80	100.00	-	0.48	0.79	-	0.07	0.01	1066.91	新寛永	不旧手 横大路銭		原田第41号墓地 第37号墓 銭①	第3図
	2	36	20	4.32	100.00	0.86	0.48	0.33	-	0.06	0.01	1081.14					
	3	40	30	3.91	100.00	1.03	0.46	1.31	-	0.09	0.02	1161.35					
54	1	39	20	0.92	100.00	-	0.16	3.33	-	0.10	0.11	1085.99	新寛永	足尾背足銭	足	原田第41号墓地 第37号墓 銭⑤	第3図
	2	39	20	4.98	100.00	-	0.12	2.50	-	0.11	0.12	1140.79					
	3	38	20	1.16	100.00	-	0.14	2.24	-	0.07	0.09	1171.04					
55	1	37	20	0.48	100.00	-	0.13	1.35	-	0.13	-	1192.01	古寛永	称高田銭		原田第41号墓地 第44号墓 銭③	第4図
	2	37	20	0.49	100.00	-	0.13	0.86	-	0.14	-	1263.43					
	3	40	30	1.99	100.00	-	0.16	5.40	-	0.40	-	1059.95					
	4	39	30	1.46	100.00	-	0.23	5.03	-	0.29	-	1031.36					
56	1	38	40	0.65	100.00	4.21	0.15	6.90	-	0.44	-	935.74	天保通寶	称広島 あるいは 大阪		原田第41号墓地 第53号墓 銭①	第4図
	2	40	20	0.57	100.00	3.50	0.06	3.62	-	0.38	-	1143.59					
	3	38	40	0.65	100.00	2.76	0.15	5.98	-	0.48	-	997.33					
	4	40	60	0.79	100.00	5.95	0.32	28.82	-	1.67	-	576.45					

第4表 分析結果一覧表④

分析No.	分析point	分析条件		銅のX線強度を100とした場合の各元素のX線強度比								銅のX線強度(cps)	銭種	古銭学分類	背面	備考	図版番号
		kv	uA	FeK	CuK	ZnK	AsK	PbL	AgK	SnK	SbK						
57	1	39	20	0.59	100.00	1.44	0.15	4.17	-	0.08	0.02	1205.66	文久永寶	草文		原田第41号墓地 第53号墓 銭②	第4図
	2	40	20	0.61	100.00	1.00	0.32	6.02	-	0.12	0.03	1095.08					
	3	37	20	0.55	100.00	1.06	0.16	1.81	-	0.05	0.01	1237.91					
	4	39	50	1.00	100.00	1.02	0.46	20.45	-	0.26	0.04	719.59					
	5	39	20	0.60	100.00	0.89	0.33	4.44	-	0.12	0.02	1053.77					
	6	37	20	1.03	100.00	0.84	0.12	2.68	-	0.06	0.01	1097.78					
58	1	39	20	0.97	100.00	0.89	0.31	3.40	-	0.12	0.02	1156.50	文久永寶	草文略宝		原田第41号墓地 第53号墓 銭③	第4図
	2	40	20	0.89	100.00	-	0.40	5.42	-	0.13	0.04	1082.04					
	3	39	30	0.73	100.00	0.91	0.15	8.76	-	0.12	0.02	999.35					
59	1	39	20	1.41	100.00	1.38	0.17	3.25	-	0.11	0.02	1206.15	文久永寶	草文		原田第41号墓地 第53号墓 銭④	第4図
	2	37	20	1.12	100.00	1.54	0.21	4.92	-	0.05	0.01	1151.66					
	3	38	20	0.66	100.00	1.15	0.17	3.00	-	0.08	0.02	1192.34					
60	1	40	20	8.14	100.00	-	1.61	6.54	-	-	-	996.54	新寛永	長崎背長銭	長	原田第41号墓地 第69号墓 銭②	第4図
	2	40	20	9.29	100.00	-	1.52	7.39	-	-	-	985.25					
	3	39	30	7.81	100.00	-	1.79	10.16	-	-	-	916.71					
61	1	40	20	1.15	100.00	-	0.48	4.26	-	0.26	0.02	1147.64	古寛永	不知銭 太細		原田第41号墓地 第78号墓 銭①	第4図
	2	40	20	5.22	100.00	-	0.58	3.69	-	0.39	0.02	1156.68					
	3	37	30	1.12	100.00	-	0.42	3.00	-	0.19	0.01	1209.02					
62	1	39	20	0.66	100.00	-	-	3.28	-	0.30	-	1217.91	文銭		文	原田第1号墓地 第22号墓 銭⑥	第4図
	2	40	20	0.76	100.00	-	-	4.28	-	0.33	-	1232.70					
	3	40	20	0.65	100.00	-	-	4.13	-	0.31	-	1207.59					
63	1	39	20	0.74	100.00	-	0.60	1.93	-	0.40	-	1199.72	古寛永	称水戸銭		原田第41号墓地 第69号墓 銭①	第4図
	2	38	20	0.77	100.00	-	0.47	1.46	-	0.32	-	1246.63					
	3	39	40	1.01	100.00	-	1.01	4.21	-	0.68	-	1115.27					
	4	40	20	0.79	100.00	-	0.76	2.85	-	0.55	-	1001.35					
64	1	40	40	0.41	100.00	-	-	6.27	-	0.47	-	1050.90	皇宋通寶			原田第41号墓地 第69号墓 銭①	第4図
	2	40	20	0.35	100.00	-	-	3.61	-	0.47	-	998.23					
	3	40	30	0.34	100.00	-	-	4.77	-	0.41	-	1066.25					

現の組み合わせが異なっている。

結果の考察に当たっては、当初、各元素のX線強度値という定量的な違いによる検討を試みたが、バラツキの問題という困難な部分もあり、ここでは定性的な特徴を中心に見ていくこととする^{註3)}(第5表)。

まずは単純に銅、鉛、錫のみが検出されるグループが4点有る。しかしこれらは銭種が全て異なっており、共通点は見いだせない。

次に、銅、鉛、錫に砒素が検出されるグループで、10点がこれに属する。この中には古寛永の称高田銭、同水戸銭、同推岡山銭、新寛永の文無背銭が各2枚ずつ含まれる。これにアンチモンが含まれるものは4点有り、同一銭種として文久永寶の草文略宝が有る。

銅、鉛、錫に亜鉛が組み合わさるグループには7枚有り、文銭3枚がこれに含まれる。この内No.13は他の2枚に比べ亜鉛の数値が高い。残り4枚は全て古寛永であるがその分類はいずれも異なっている。これにアンチモンが加わるものには4枚有るが、アンチモンの無いものと併せても同一銭種は古寛永称沓谷銭のみである。

銅、鉛、錫の他、亜鉛、砒素を含むものは全体の中で最多の17枚を数える。この中で天保通寶は亜鉛の数値が高い。その他では古寛永の称建仁寺銭、新寛永の仙台石巻銭がそれぞれ3枚、古寛永称水戸銭、同称岡山銭、新寛永の小梅銭が2枚ずつ有る。

全ての元素が検出されるものは14枚有る。この中での同一銭種としては、細分は異なるが新寛永仙台石巻銭、同佐渡銭の他、新寛永文無背銭、同不旧手七条銭、古寛永称芝銭、文久永寶草文がそれぞれ2枚ずつ認められる。

他に検出元素の組み合わせは異なるものの、特徴的なものとして錫を含まない銭が3枚有る。単純に組成だけを見れば新寛永長崎背長銭の1枚と不旧手旧十万坪銭が一致していることになるが、長崎銭2枚は、いずれも砒素の強度が強いという共通点が見られており、こちらの特徴に着目したい。

次に銭の種類別に検出元素の特徴を見ると、古寛永の称岡山銭では3枚中2枚が共通しており、

第5表 元素の組み合わせによる分類表

	Zn	As	Pb	Sn	Sb	その他	銭種	分類
銅・鉛・錫								
21	×	×	▲	○	×		古寛永; 称沓谷銭	
43	×	×	▲	○	×		古寛永; 不知銭 太細	
62	×	×	▲	○	×		文銭	
64	×	×	▲	○	×		皇宋通寶	
銅・鉛・錫+砒素								
27	×	○	○*	○	×	?	古寛永; 称芝銭	
30	×	△	▲	○	×		古寛永; 称水戸銭	
31	×	△	▲	○	×		古寛永; 称高田銭	
32	×	○	▲	△	×		古寛永; 称建仁寺銭	
40	×	○	▲*	○	×		古寛永; 推岡山銭	
44	×	△	▲	○	×	?	新寛永; 文無背銭	
45	×	△	▲	○	×		新寛永; 文無背銭	
51	×	○	▲*	○	×		古寛永; 推岡山銭	
55	×	○	▲	○	×		古寛永; 称高田銭	
63	×	○	▲	○	×		古寛永; 称水戸銭	
銅・鉛・錫+アンチモン								
35	×	×	▲	○	○		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書大字	
銅・鉛・錫+砒素+アンチモン								
52	×	○	△	△	△		文久永寶; 草文略宝	
54	×	○	▲	△	○		新寛永; 足尾背足銭	
58	×	○	▲	○	○		文久永寶; 草文略宝	
61	×	○	▲	○	△		古寛永; 不知銭 太細	
銅・鉛・錫+亜鉛								
5	△	×	▲	○	×		古寛永; 称鳥越銭	
8	△	×	○	○	×		文銭	
13	◎	×	○*	○	×		文銭	
14	△	×	▲	○	×		古寛永; 推水戸銭	
22	△	×	▲	○	×		古寛永; 称芝銭	
23	△	×	○	○	×		文銭	
33	△	×	▲	○	×		古寛永; 称沓谷銭	
銅・鉛・錫+亜鉛+アンチモン								
4	△	×	△	△	○		新寛永; 不旧手旧十万坪銭	
12	△	×	▲	△	○		新寛永; 不旧手横大路銭	
24	△	×	▲	○	△		古寛永; 称沓谷銭	
26	○	×	◎*	◎	△		古寛永; 称岡山銭	
銅・鉛・錫+亜鉛+砒素								
56	◎	○	○*	○	×		天保通寶; 称広島あるいは大阪	
2	△	○	▲	○	×	Ag有り	古寛永; 称岡山銭	
3	○	△	▲	△	×		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書進冠	
6	△	○	▲*	△	×	Ag有り	古寛永; 称建仁寺銭	
7	△	△	▲*	○	×		文銭	
11	○	○	▲*	○	×		古寛永; 称高田銭	
16	○	△	▲	○	×		古寛永; 称水戸銭	
19	○	△	○*	○	×		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書大字	
28	○	○	○	◎	×	?	古寛永; 称水戸銭	
34	△	△	▲	○	×		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書長通	
37	△	○	△	△	×	?	新寛永; 小梅銭	
42	△	△	▲	○	×		古寛永; 称建仁寺銭	
46	△	○	▲	△	×		新寛永; 小梅銭	
48	△	○	▲	△	×		古寛永; 称建仁寺銭	
49	△	△	▲*	○	×		古寛永; 称岡山銭	
50	△	△	○	○	×		古寛永; 称沓谷銭	
53	△	○	△	△	×		新寛永; 不旧手横大路銭	
銅・鉛・錫+亜鉛+砒素+アンチモン								
1	○	○	○*	○	○		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書長通	
9	△	△	▲*	○	○		新寛永; 佐渡銭 享保背佐	
15	○	△	○*	○	○		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書進冠	
17	△	△	△	△	○		新寛永; 不旧手七条銭	
18	△	△	▲	○	○		新寛永; 文無背銭	
20	△	○	▲	△	○		新寛永; 足尾背足銭	
25	△	○	◎*	○	○		古寛永; 称芝銭	
29	△	△	▲	△	○		新寛永; 不旧手七条銭	
36	○	○	▲*	○	△		古寛永; 称水戸銭	
38	△	△	▲	○	○		新寛永; 文無背銭	
41	△	△	▲	○	○		古寛永; 称芝銭	
47	△	○	◎	○	○		新寛永; 佐渡銭 正徳背佐	
57	○	○	▲*	△	△		文久永寶; 草文	
59	○	○	▲	△	△		文久永寶; 草文	
52	×	○	△	△	△		文久永寶; 草文略宝	
58	×	○	▲	○	○		文久永寶; 草文略宝	
銅+鉛(錫無し)								
60	×	◎	○	×	×		新寛永; 長崎背長銭	
39	○	◎	○	×	○		新寛永; 長崎背長銭	
10	△	△	△	×	○		新寛永; 不旧手旧十万坪銭	

第6表 銭種別検出元素一覧表

	Zn	As	Pb	Sn	Sb	その他	銭種	分類
64	×	×	▲	○	×		皇宋通寶	
2	△	○	▲	○	×	Ag有り	古寛永; 称岡山銭	
49	△	△	▲*	○	×		古寛永; 称岡山銭	
26	○	×	◎*	◎	△		古寛永; 称岡山銭	
40	×	○	▲*	○	×		古寛永; 推岡山銭	
51	×	○	▲*	○	×		古寛永; 推岡山銭	
21	×	×	▲	○	×		古寛永; 称沓谷銭	
23	△	×	▲	○	△		古寛永; 称沓谷銭	
34	△	×	▲	○	×		古寛永; 称沓谷銭	
50	△	△	○	○	×		古寛永; 称沓谷銭	
6	△	○	▲*	△	×	Ag有り	古寛永; 称建仁寺銭	
42	△	△	▲	○	×		古寛永; 称建仁寺銭	
48	△	○	▲	△	×		古寛永; 称建仁寺銭	
32	×	○	▲	△	×		古寛永; 称建仁寺銭	
11	○	○	▲*	○	×		古寛永; 称高田銭	
31	×	△	▲	○	×		古寛永; 称高田銭	
55	×	○	▲	○	×		古寛永; 称高田銭	
22	△	×	▲	○	×		古寛永; 称芝銭	
25	△	○	◎*	○	○		古寛永; 称芝銭	
41	△	△	▲	○	△		古寛永; 称芝銭	
27	×	○	○*	○	×	?	古寛永; 称芝銭	
16	○	△	▲	○	×		古寛永; 称水戸銭	
28	○	○	○	◎	×	?	古寛永; 称水戸銭	
36	○	○	▲*	○	△		古寛永; 称水戸銭	
30	×	△	▲	○	×		古寛永; 称水戸銭	
63	×	○	▲	○	×		古寛永; 称水戸銭	
14	△	×	▲	○	×		古寛永; 推水戸銭	
43	×	×	▲	○	×		古寛永; 不知銭 太細	
61	×	○	▲	○	△		古寛永; 不知銭 太細	
5	△	×	▲	○	×		古寛永; 称鳥越銭	
9	△	△	▲*	○	○		新寛永; 佐渡銭 享保背佐	
47	△	○	◎	○	○		新寛永; 佐渡銭 正徳背佐	
37	△	○	△	△	×	?	新寛永; 小梅銭	
46	△	○	▲	△	×		新寛永; 小梅銭	
3	○	△	▲	△	×		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書進冠	
15	○	△	○*	○	○		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書進冠	
19	○	△	○*	○	×		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書大字	
35	×	×	▲	○	○		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書大字	
1	○	○	○*	○	○		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書長通	
34	△	△	▲	○	×		新寛永; 仙台石巻銭(元文) 異書長通	
20	△	○	▲	△	○		新寛永; 足尾背足銭	
54	×	○	▲	△	○		新寛永; 足尾背足銭	
39	○	◎	○	×	○		新寛永; 長崎背長銭	
60	×	◎	○	×	×		新寛永; 長崎背長銭	
12	△	×	▲	△	○		新寛永; 不旧手横大路銭	
53	△	○	△	△	×		新寛永; 不旧手横大路銭	
4	△	×	△	△	○		新寛永; 不旧手旧十万坪銭	
10	△	△	△	△	○		新寛永; 不旧手旧十万坪銭	
17	△	△	△	×	○		新寛永; 不旧手七条銭	
29	△	△	▲	△	○		新寛永; 不旧手七条銭	
18	△	△	▲	○	○		新寛永; 文無背銭	
38	△	△	▲	○	○		新寛永; 文無背銭	
44	×	×	▲	○	×	?	新寛永; 文無背銭	
45	×	△	▲	○	×		新寛永; 文無背銭	
7	△	△	▲*	○	×		文銭	
8	△	×	○	○	×		文銭	
13	◎	×	◎*	○	×		文銭	
23	△	×	○	×	×		文銭	
62	×	×	▲	○	×		文銭	
56	◎	○	○*	○	×		天保通寶; 称広島あるいは大阪	
57	○	○	▲*	△	△		文久永寶; 草文	
59	○	○	▲	△	△		文久永寶; 草文	
52	×	○	△	△	△		文久永寶; 草文略宝	
58	×	○	▲	○	○		文久永寶; 草文略宝	

× 無し 相対強度比が0
 △ 微弱 Zn, Pbでは1以下, As, Snでは0.1以下, Sbでは検出状況が不安定であつたり0.01前後の弱いもの
 ▲ 弱 Pbのみに適用, 1~10
 ○ 中 Zn: 1~3, As: 0.5前後, Pb: 10~20, Sn: 0.5前後, Sb: 0.05以上
 ◎ 強 Zn: 5以上, As: 1以上, Pb: 20以上, Sn: 1以上
 * パラッキ大
 ? 存在する可能性有り
 表左外の数字は分析銭番号

推岡山の2枚とは組成が異なっている。称沓谷銭では共通性は見られない。称建仁寺銭は4枚中3枚、称高田銭は3枚中2枚、称芝銭では4枚中2枚、称・推水戸銭では6枚の中に2枚ずつ2組、共通の元素組成を持つものが認められる。

新寛永では2枚ずつある小梅銭、不旧手七条銭が、また細分は異なるものの佐渡銭がそれぞれ共通組成を示している。仙台石巻銭は細分の異なる同士で共通組成を示すものが認められる。また文銭は5枚中3枚に共通組成のものがあり、4枚ある文無背銭は組成で見ると2枚ずつに二分される。また前にもふれており重複するが、長崎銭の2枚は組成は異なるものの錫が検出されず砒素が強いという点で共通している。

銭の種類別に見ると検出元素が異なっているものもあるが、逆に検出元素が同じグループに同一銭種が含まれる場合もあり、銭種と組成の間に何らかの関係が認められるようにも見える。今回はサンプル数が限られているため、今後、同様の調査を重ねることにより、特徴がより顕著になるものもあることが期待される。ただし、以上に記した内容は、今回の64枚の中からのみ得られたものであり、過去の銭貨分析の成果を加味したものではない。銭貨学の立場からどの様に評価されるかについては、同書所収の櫻木氏による論考²¹⁰⁾を参照されたい。

本来であれば様々に掲げた問題について、できる限りクリアした上でデータを提示すべきところであるが、この様な形での結果報告となったこととお許し頂きたい。それでも不十分ながらもある程度の成果や方向性を示すことはできたと考えており、今後も類例調査を進めるとともに、機会があれば問題点を解決し、より有効なデータとなるように改訂していきたい。

最後になりましたが、今回検討を行ったデータの採取は、調査担当者である筑紫野市教育委員会森山栄一氏自身が行ったものであり、その熱意と労力に敬意を表すると共に、そのデータ検討という興味深い作業を行う機会を頂いたことに感謝致します。また当初、迷いながら行っていたこの作業を形にすることができたのは、櫻木晋一氏から頂戴したご指導と前向きな評価によるところが大きい。末筆ながら、ここに記して感謝申し上げます。

註釈

1. 本来であれば表層のクリーニング後、樹脂塗布前に分析を行うべきところであるが、保存処理作業は今回の分析作業とは切り離された形で先行して行われたものである。
2. 仮に元素として含まれていなくても、元素を含めた上で計算すると僅かながらでもX線強度値や定量値が数値となって現れてしまう場合がある。
3. そのため亜鉛などは、その量によっては鉱石に伴う不純物なのか、黄銅（真鍮）としての素材なのかといった違いも出てくるが、今回は明らかな黄銅の分析を行うことなどによる比較検証はしておらず、その判別は難しい。これも今後の課題である。

文献

1. 平尾良光編 『古代青銅器の流通と鑄造』 鶴山堂 1999
2. 村上 隆 「材質から富本銭を考える…（銅-アンチモン系）合金をめぐって…」『考古科学の総合的研究 研究成果報告書』 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2003
3. 山口誠治 「中世古銭の科学的調査について」『中世の出土銭-出土銭の調査と分類-』 兵庫県埋蔵銭調査 1994
4. 齋藤 努 「日本の銭貨の鉛同位対比分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第86集 国立歴史民俗博物館 2001
5. 咲山まどか・赤沼英男・佐々木稔
「出土銭貨の極少量試料抽出による化学成分分析及その修復法」 『備蓄銭とその出土状態-緡銭の復元・備蓄銭の歴史的背景-』 出土銭貨研究会第3回研究大会発表要旨 出土銭貨研究会 1996
6. 佐々木 稔 「中世出土銭貨の最近の研究から」『第1回考古科学シンポジウム』 東京大学原子力研究総合センター・東京大学アイソトープ総合センター・東京大学埋蔵文化財調査室 1999
7. 村上 隆 「蛍光X線分析における諸問題」『保存科学研究集会2000-非破壊的手法による考古資料の分析・観察-』 奈良国立文化財研究所 2000
8. 小泉好延 「近世の銅合金技術」『第2回考古科学シンポジウム』 東京大学原子力研究総合センター・東京大学アイソトープ総合センター・東京大学埋蔵文化財調査室 2000
9. 筑紫野市教育委員会 『原田第1・2・40・41号墓地 上巻』 筑紫野市文化財調査報告書第77集 2003
10. 櫻木晋一 「原田宿近世墓出土の六道銭」『原田第1・2・40・41号墓地 中巻』 筑紫野市文化財調査報告書第79集 2004

第5節 原田第1・41号墓地出土義歯に関する報告

1. はじめに

日本では、黄楊の木を用いた日本固有の木床の彫刻義歯（以下木床義歯）が作られており、記録上古くは中岡テイ（通称仏姫、1538年没）のものが知られている。5代将軍綱吉の剣道指南柳生飛騨守宗冬（1675年没）の墓からも上下総義歯が発見されており、本居宣長、杉田玄白、滝沢馬琴なども使用していた^{文1)}。

1877年に開催された第1回内国勸業博覧会でも12名が木床義歯を出品しており、そのうちの2名はゴム床義歯も出品していた^{文2)}。ゴム床義歯は、1850年代にアメリカで加硫ゴム（蒸和ゴム）が発明されてから義歯にも応用されるようになったものである^{文3)}。1881年の第2回内国勸業博覧会では6名の義歯出品者のうち2名だけが木床義歯を出品し、1890年の第3回内国勸業博覧会では4名が義歯を出品したが木床義歯はなく、陶歯を用いたゴム床義歯が主体となった^{文2・4・5)}。蒸和ゴムには、暗褐色、淡紅色および白色、黒色、金属粉混和などの種類があり、淡紅色は前歯部、褐色は臼歯部に用いられた^{文5～8)}。各種ゴムの比重を計測した報告では、黒色ゴムが1.0757-1.2153、白色ゴムが1.7358、淡紅色ゴムが1.8181-2.2926で、黒色ゴムが最も軽く、褐色をはじめ多種多様な床用ゴムは平均1.5000内外であった^{文9)}。また、褐色ゴムを用いた下顎義歯では義歯の重さと強さを増すために錫の小片やその他の金属線を埋入することが行われた^{文9)}。

原田地区の2ヶ所の墓地から出土した3つの義歯は、義歯床部が褐色であり、第1号墓地第2号墓出土総義歯の前歯部から小白歯部にかけての唇頬側のみが淡紅色をしており、人工歯部はすべてお歯黒を模した黒色である。これらは、筆者が報告した鹿児島県の紡績所跡から出土した黒色人工歯を有するゴム床義歯^{文5)}や鮮やかな朱色と黒色のゴムから出来ていたというゴム製彫刻義歯（1957年発掘、木床義歯とゴム床義歯の移行型を示したものと推察されている^{文10)}）と類似している。しかし、出土義歯の人工歯部は、筆者が報告したゴム床義歯の人工歯が現在使用されているものに近い解剖学的形態をし、黒色部が人工歯部に限定されていたのに比べ、形態が非解剖学的で、黒色部が人工歯部を越えて歯肉部に及んだり、逆に歯頸部まで達していないところがあり、不自然である。

2. 原田第1号墓地の第2号墓出土義歯（図版1～5上）

1) 下顎総義歯（図版1～3）

重さは13.8gであった。前歯部の幅径（近遠心径）は、切歯が $4.4\text{mm} \sim 5.4\text{mm}$ 、犬歯が 6.7mm 、小白歯部は、頬舌径が $6.4\text{mm} \sim 8.6\text{mm}$ 、近遠心径が $6.5\text{mm} \sim 9.3\text{mm}$ 、大臼歯部は、頬舌径が $6.3\text{mm} \sim 7.7\text{mm}$ 、近遠心径が $7.2\text{mm} \sim 7.7\text{mm}$ 、義歯床部は、長径（前後的）が約 45mm 、幅径（左右的）が約 65mm で、ゴム製彫刻義歯^{文10)}ならびに紡績所跡出土ゴム床義歯^{文5)}に比べて全体に大きい。

(1) 肉眼観察

図版1上の咬合面観ならびに図版2下と図版3上の側方面観において、左側第一小白歯咬合面部は欠け、右側の第一・第二小白歯咬合面部は嵌凹し、それらの部分には青緑がかった物体が露出している。青緑色物体の露出部は、義歯床の左舌側の側切歯から犬歯部および第二小白歯から第一大臼歯近心部にかけてと第二大臼歯近心部にも見られ、小白歯部の舌側にある青緑色物体の嵌凹部を実体顕微鏡で観察すると、内部全体が青緑色をしていた。

①人工歯部

図版1上の咬合面観と図版2下の唇頬側面観において、人工歯は15本分あり、形態的に前歯相当が6本、左側臼歯相当が5本、右側臼歯相当が4本である。紡績所跡出土ゴム床義歯^{x5)}に比べると、左右同名歯の形態が対照的でなく、大きさも不揃いであり、義歯床との境界部ならびに歯間乳頭部も不自然で、黒色部が歯頸部より短かったり、逆に、歯頸部を越えていたり、歯間乳頭部にまで及んでいる。犬歯はその特徴的な尖頭がなく、平坦な面が形成されており、その一部に光沢が認められる。左側の犬歯に隣接する人工歯の咬合面は犬歯と小白歯の中間型をして遠心に傾斜し、同部と頬側外斜面部の遠心は光沢のある大きな平坦面を形成し、頬側の近心にも小さいが光沢のある面が認められる。右側第二大臼歯は犬歯様の形態で舌側に光沢のある平坦な斜面を形成している。青緑色物体が露出していない臼歯咬合面は、前述のゴム製彫刻義歯^{x10)}同様に平坦で咬頭と溝の区別のない非解剖学的なもので、紡績所跡出土ゴム床義歯^{x5)}の人工歯が解剖学的形態をして機能的であるのに比べて非機能的である。しかし、犬歯と臼歯には光沢のある平坦な面が形成されており、このような面はゴム製彫刻義歯^{x10)}と紡績所跡出土ゴム床義歯^{x5)}の報告において義歯が実際に使用されたことを示していると考察されており、本義歯も実際に使用されていたものと考えられる。

なお、本義歯と同時に出土した上顎右側第一小白歯と推察される歯冠（図版3下a・b）の舌側咬頭を義歯の右側第一小白歯の嵌凹部（図版3下c）に適合させると、ぴったりと嵌合する（図版3下d・e）。

②義歯床部

図版1下の義歯床粘膜面観において、左側前歯部に突起が認められるが、これは抜歯窩が完全に治癒する前に作製されたことを推測させる。前歯部から小白歯部にかけての唇頬側の淡紅色の部分と他の褐色部分との境界部を実体顕微鏡で観察すると、分離した部分が見られたが、これは色の異なるゴムを用いたことによると考えられる。図版3上の舌側面観において、前歯部と左側臼歯部に認められる歯垢様の汚れは、前述の人工歯咬合面の咬耗面と推察された光沢のある平坦面とともに、この義歯が実際に使用されていたことを示していると考えられる。

③義歯床と人工歯との境界部

人工歯の黒色部が周辺の義歯床部にまで及んでいる部分を実体顕微鏡で観察すると、前述の淡紅色の部分と褐色の部分との境界のように明らかに分離した部分が見あたらず、人工歯部を黒く着色したように見えた。しかし、その境界部にある小さな嵌凹部をよく観察すると、黒色部分は表層だけでなく深部におよび、同部の黒色部と褐色部は分離しているようにも見えたことから、ゴム製彫刻義歯^{x10)}と同様に黒色ゴムを使用したことが考えられる。

(2) 義歯の素材についての検査

① ヌープ硬さの測定

計測部位は黒色の左側中切歯唇側中央部、右側第二大臼歯部咬合面部、義歯床唇側正中部、義歯床左側後端上面とし、10gfの荷重を20秒間保持して、5回ずつ計測した。その結果、中切歯部が 11.8 ± 1.6 、第二大臼歯部が 11.1 ± 2.8 、義歯床唇側正中部が 12.0 ± 2.0 、義歯床後端部が 11.1 ± 2.0 を示した。これらの値は紡績所跡出土ゴム床義歯^{※5)}と類似した大きさで、現在の歯科用材料では、常温重合型義歯床用レジンの硬さ $16^{※12)}$ より若干低いが近い値である。

② X線撮影

図版2上のX線所見において、X線透過性の低い長短2本の帯状の物体を認め、長いものは前歯部では唇舌的なほぼ中央、臼歯部では中央より舌側寄りに存在し、短いものは前歯部の唇舌的中央よりも唇側寄りに存在している。このX線透過性の低い帯状物体は図版2下と図版3上のX線所見では上下的なほぼ中央部に位置し、前歯部では重なって見える。なお、図版3上のX線写真は、同図の義歯の舌側面観と対応させるために、図版2下のX線写真の左右を反転させたものである。

図版2下と図版3上のX線所見では、肉眼所見の青緑色物体露出部に相当する咬合面付近において水平に三本の透過性の低い線状の物体を認め、それぞれの両端に垂直に2本ずつの透過性の低い円錐状の物体を認め、同部を拡大して観察すると円錐状の外形にはネジ山のような形状が見られる。さらに、図版2下と図版3上のX線所見において、左側後方部にも水平に透過性の低い2本の線状の物体が写っている。この部分は、図版3上の義歯の舌側面観における左側第二小臼歯から第一大臼歯近心部にかけてと第二大臼歯近心部に存在する青緑色物体の露出部に相当する。

図版2上・下のX線写真のそれぞれの中央部と上部は人工歯相当部であるが、この部のX線透過性は非常に高く、紡績所跡出土ゴム床義歯の人工歯部に見られたようなX線透過性の低い部分^{※5)}は観察されない。紡績所跡出土ゴム床義歯の同部が、現在の陶歯の維持孔（人工歯を機械的に結合するための孔）のような孔に入り込んだゴム塊と推察された^{※5)}ことから、今回出土義歯に使用された人工歯は、義歯床との機械的結合の必要がなく、化学結合する素材であることを示していると考えられる。

③ EDXによる元素分析

左側の前歯部舌側（図版3上aの中央左付近）の青緑色物体露出部とその上部の黒色部、褐色部、黒色と褐色との移行部の4カ所の元素分析を行った。その結果（括弧内の数字は重量%）は、青緑色物体露出部（C:23.11, O:39.26, Al:0.30, Si:0.93, P:3.30, S:1.76, Ca:1.54, Fe:0.68, Cu:26.78, Zn:1.14, Mo:1.2）、黒色部（C:38.56, O:43.03, Na:0.64, Al:0.51, Si:0.29, P:2.18, S:7.63, K:0.28, Ca:3.87, Fe:0.30, Hg:2.70）、褐色部（C:31.16, O:45.80, Na:0.42, Al:0.78, Si:0.14, P:6.52, S:1.84, K:0.10, Ca:9.30, Fe:0.55, Cu:0.83, Hg:2.56）、黒色と褐色との移行部（C:30.41, O:41.57, Na:0.52, Al:0.60, P:3.79, S:6.05, K:0.13, Ca:6.76, Fe:0.41, Hg:9.76）であった。

すべての計測部位でCとSが検出されたことから、この義歯は義歯床と人工歯ともに蒸和ゴムで作製されたものと考えられる。また、青緑色物体露出部からはCuが検出され、同部はX線所見の透過性の低い部分でもあることから、X線透過性の低い物体は銅合金であり、青緑色をしているの

は緑青のためと考えられる。

④ X線回折による結晶層解析

右側の黒色咬合面の最遠心端部と同部位相当の粘膜面の表面を軽く切削して得た粉末を用いてX線回折図形を測定した。黒色部試料では炭酸カルシウム、褐色部試料では硫化水銀の標準物質の図形回折パターンとの一致が見られた。この硫化水銀は着色剤として添加されたものと考えられる。EDXにより検出されたNa, Al, Si, P, K, Feなどの微量検出元素については、EDXが比較的表面部分を分析していること、X線回折では結晶構造が検出できなかったことから、義歯表面に付着した歯垢あるいは土中成分の可能性が高い。

上記の肉眼観察、実体顕微鏡観察および素材に関する検査結果と、第3回内国勸業博覧会の出品予定品目に護謨歯ゴム床義歯の品名が記されている^{文4)}ことを考え合わせると、人工歯部には黒色ゴムが用いられた可能性が高い。ただし、第3回内国勸業博覧会の出品予定品目の護謨歯ゴム床義歯については、実際には出品されなかったということである^{文4)}。なお、昭和14年頃まで黒色陶歯を用いたゴム床義歯を作製していたという歯科医によると、陶歯は、品質が良くなく、欠けたり、割れたりしやすかったという^{文11)}。

2) 上顎部分床義歯 (図版4・5上)

左右中切歯2本の部分床義歯で、重さは2.38gであった。左右中切歯はほぼ対照的であり、幅径約8mm、長径約16mmであった。図版4上～図版5上に示すように、人工歯の幅が上部よりも下部の方が広く、隣接面側切歯のアンダーカット部に入る形態になっており、人工歯部のX線透過性は非常に高い。また、前述の下顎総義歯同様、黒色部が歯頸部を越えて周辺歯肉部にまで及び、逆に左側中切歯の歯頸部中央付近は褐色部が楔状に黒色人工歯部に入り込んでいる。人工歯の左側隣接面にはクラスプと思われる板状の構造物があり、前述の下顎総義歯の補強線と同様に青緑色の部分を認め、右側隣接面には破折したクラスプの痕跡と思われる箇所が認められる。板状の構造物は、青緑色の部分を認めることと、X線所見では透過性が低いことから銅合金と考えられる。義歯床は、左右の側切歯、犬歯および第一小臼歯と接触させた形態をしているが、義歯の維持、安定を得るための工夫と考えられる。このような黒色人工歯と金属クラスプを用いた部分床義歯については、骨製の部分床義歯の報告があり^{文13)}、その報告では、拡大像から義歯が骨(牛骨)であると思われることと、X線蛍光分析装置による金属の分析結果では主成分であるFeとCu以外にZn, Ni, Coを含有していることが記されている^{文9)}。

左側中切歯唇側中央部ならびに義歯床唇側正中部のヌープ硬さを総義歯と同じ方法で測定した。その結果、中切歯部が 11.2 ± 1.4 、義歯床唇側正中部が 11.4 ± 1.1 を示した。下顎総義歯同様、人工歯に黒色ゴムを用いたゴム床義歯と考えられる。

3. 原田第41号墓地の第6号墓出土義歯 (図版5下～7)

重さは9.3gで、第1号墓地第2号墓出土の総義歯よりも軽かった。前歯部の幅径は、切歯が5.3mm～5.7mm、犬歯が6.5～6.6mm、小臼歯部は、頬舌径が5.7mm～6.6mm、近遠心径が5.7mm～6.5mm、大臼歯部は、頬舌径が6.1mm～6.2mm、近遠心径が7.9mmであった。義歯床部は、長径が約39mm、幅径が約61mmで、幅径に比べ長径が小さかった。

本総義歯には、第1号墓地第2号墓出土総義歯に見られたような青緑色物体の露出部は見られず、X線所見においても金属のような透過性の低い物体は見られない。また、図版6下と図版7上のX線写真において、それぞれの中央部と上部は人工歯相当部であるが、この部のX線透過性は非常に高く、紡績所跡出土ゴム床義歯の人工歯に見られたゴム塊のような構造^{※5)}が観察されない。したがって、本出土義歯に使用された人工歯は、第1号墓地第2号墓出土の総義歯同様に、義歯床との機械的結合の必要がなく、化学結合する素材であることを示していると考えられる。

(1) 人工歯部の肉眼観察

図版5下の咬合面観と図版7上の唇側側面観において、人工歯は12本分あり、形態的に前歯相当が6本、臼歯相当が左右3本ずつ合計6本である。犬歯に特徴的な尖頭が弱い形成されており、一部に光沢が認められる。臼歯部は、舌側面が直線的に形成され、咬合面には頬側に咬頭らしき高まりを認め、右側では光沢のある平坦な面が形成されているのに対し、左側ではそのような面の形成はなく、全体に丸みを帯びた形をしている。一部にわずかながら溝と小窩らしき形が見られる。光沢のある平坦な面は義歯が実際に使用されたことによる咬耗面であると考えられる。

(2) 義歯床部の肉眼観察

図版6上の義歯床粘膜面観において、右側小白歯部と前歯部には突起が認められ、左側第二大臼歯相当部には前後的に約10.3mm、頬舌的に約1.7mmの黒色部が見られる。突起は抜歯窩が完全に治癒する前に作製されたことを示し、黒色部はX線写真で最も透過性が高いことから人工歯部に用いた黒色ゴムが蒸和時に粘膜面まで到達したものと推測される。また、図版7下の舌側面観において、前歯部には歯垢様の汚れが認められ、この義歯が実際に使用されていたことを示していると考えられる。

(3) 義歯の素材についての検査（ヌープ硬さの測定）

計測部位は黒色の左側中切歯唇側中央部、右側第一大臼歯部咬合面部、義歯床唇側正中中部、義歯床左側後端上面とし、前述の2つの義歯と同じ方法で計測した。その結果、中切歯部が 11.0 ± 1.7 、第一大臼歯部が 11.3 ± 1.7 、義歯床唇側正中中部が 11.3 ± 1.8 、義歯床後端部が 11.8 ± 2.1 を示した。

4. まとめ

原田第1号墓地第2号墓ならびに原田第41号墓地第6号墓から出土した黒色人工歯の下顎総義歯と上顎部分床義歯について、肉眼観察、大きさの計測、X線写真撮影、ヌープ(Knoop)硬さ測定を行い、第1号墓地第2号墓出土の下顎総義歯はEDXによる元素分析、X線回折による結晶層の解析も行い、文献考察を行った。その結果、3つの義歯は明治時代以降にお歯黒を好んだ既婚女性が実際に使用したゴム床義歯であり、第1号墓地第2号墓から出土した下顎総義歯の補強線と上顎部分床義歯のクラスプは銅合金と推察された。また、第1号墓地第2号墓出土の総義歯については、補強線が使用されていたことと、前歯部から小白歯部にかけての唇側面に淡紅色の素材が使用されていたことから、第41号墓地第6号墓出土の総義歯に比べ、丁寧に作成されたことが考えられた。

最後に、本報告書作成にあたって、義歯のスープ硬さの測定、EDXによる元素分析およびX線回折による結晶層解析は伴 清治（歯科生体材料学分野）、義歯のX線写真撮影は馬嶋秀行（顎顔面放射線学分野）、報告書作成は長岡英一（口腔顎顔面補綴学分野）が担当した。

文献

1. 笠原 浩 入れ歯の文化史 最古の「人工臓器」 86~111 文藝春秋 東京 2000
2. 大橋正敬ほか 第2回内国勲業博覧会の歯科出品物 第1報 歯科器材について 歯医史 6 (1) 1~7 1978
3. J.Woodforde著、森 隆訳 エピソードでつづる義歯の歴史 口腔保健協会 東京 1988
4. 大橋正敬ほか 第3回内国勲業博覧会の歯科出品物 第1報 歯科器材について 歯医史 6 (3) 1~7 1979
5. 長岡英一 「鹿児島紡績所跡D地点より出土した下顎総義歯に関する報告書」 『鹿児島紡績所跡D地点』 鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(29) 45~52頁 鹿児島市教育委員会 2000
6. 関根弘ほか編集 歯科医学大辞典（縮刷版） 医歯薬出版 東京 1989
7. 水埜文平 松風歯科用ゴム製造の概要 松風陶歯 京都 1934
8. 桜井貞雄 歯科材料・器械 医歯薬出版 東京 1956
9. 沖野節三 総義歯学—理論編 165 医歯薬出版 東京 1981
10. 中沢 勇、平田幹男 ゴム製の彫刻義歯 補綴誌 5 1 1961
11. 原 三正 お歯黒の研究 人間の科学社 東京 1982
12. 高橋重雄ほか 歯科修復物に望まれる物理的・機械的性質の適正值について 歯材器 16(6) 555~562 1997
13. 本山佐太郎 クラスプを応用した骨製義歯ならびに、むすび・繋ぎから鍼鉄・鉤応用への推移について 歯医史 6(1)14~20 1978

図版1 原田第1号墓地第2号墓出土義歯

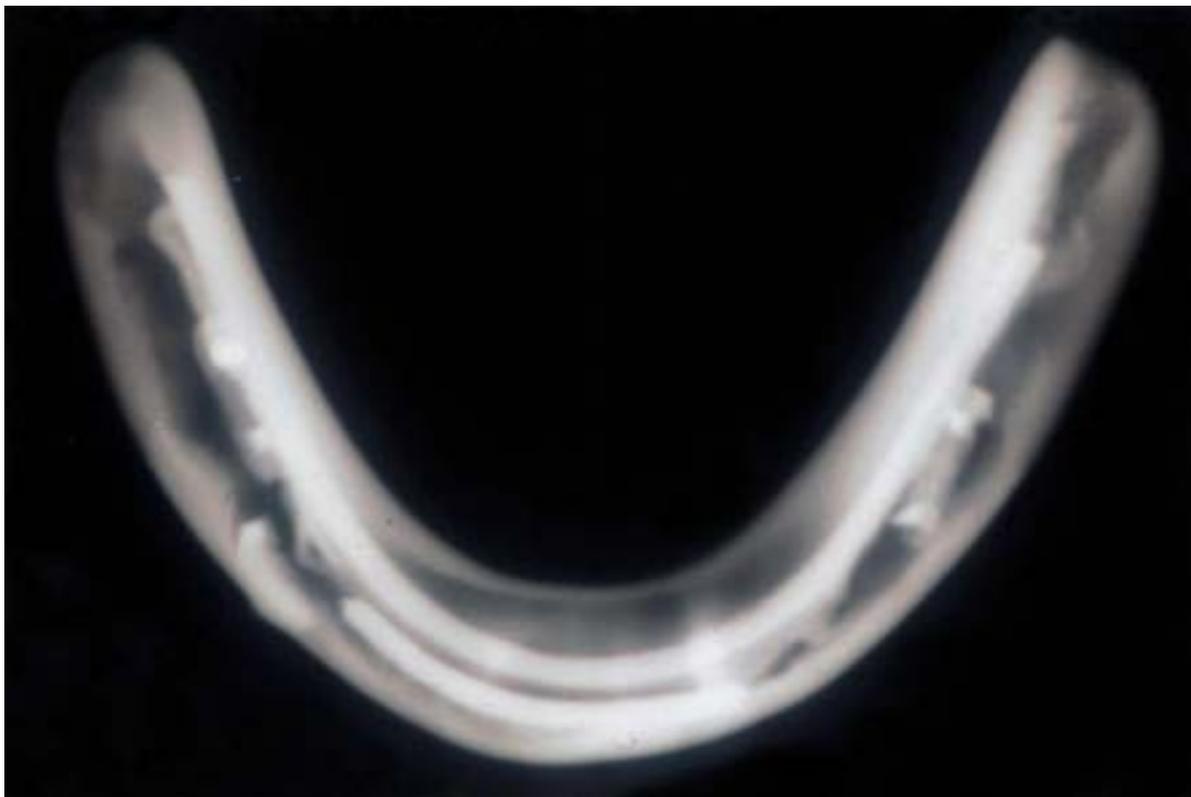


原田第1号墓地第2号墓出土下顎総義歯
咬合面観



同 上
粘膜面観

図版2 原田第1号墓地第2号墓出土義歯

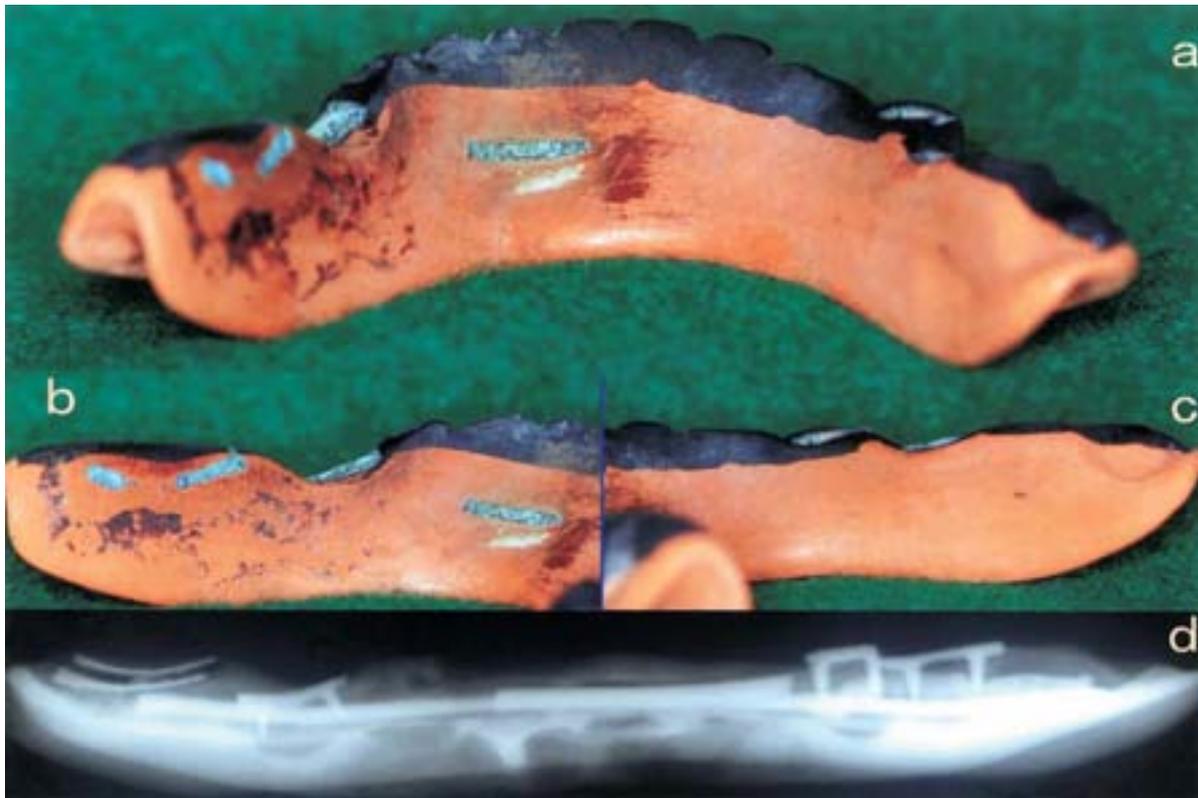


原田第1号墓地第2号墓出土下顎総義歯
X線写真



同 上
a. 唇頬側面観全体 b. 右頬側面観
c. 左頬側面観 d. X線写真

図版3 原田第1号墓地第2号墓出土義歯



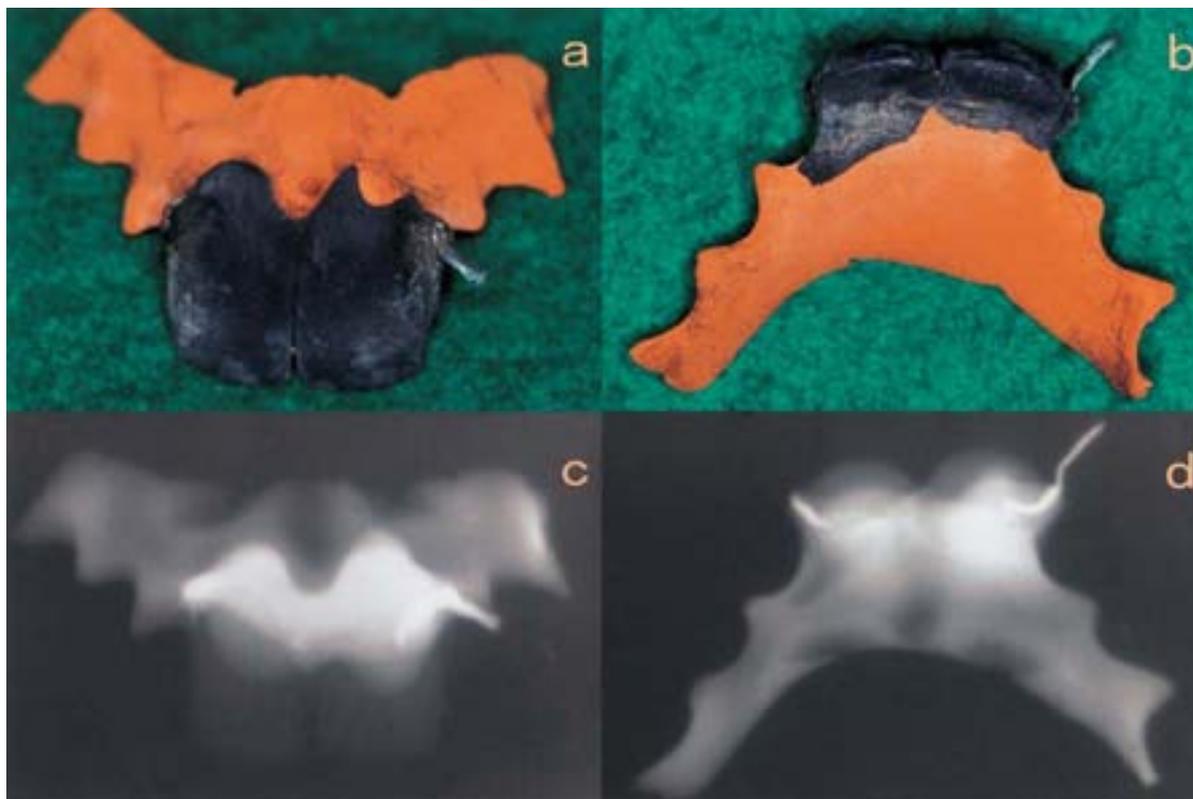
原田第1号墓地第2号墓出土下顎総義歯

- a. 舌側面観全体 b. 左舌側面観
c. 右舌側面観 d. X線写真



- 同 上
a. 右側上顎第一小臼歯歯冠咬合面観 b. 右側上顎第一小臼歯歯冠近心面観
c. 下顎総義歯右側第一小臼歯咬合面観 d. 天然歯と人工歯咬頭嵌合近心面観
e. 天然歯と人工歯咬頭嵌合近心舌側面観

図版4 原田第1号墓地第2号墓出土義歯



原田第1号墓地第2号墓出土上顎部分床義歯

a. 前方面観 b. 口蓋側面観
c、d. X線写真



同 上
a. 右側方面観 b. クラスプ痕跡部拡大

図版5 原田第1号墓地第2号墓・第41号墓地第6号墓出土義歯



原田第1号墓地第2号墓出土上顎部分床義歯
a. 左側方面観 b. クラСП内側面
c. クラСП外側面

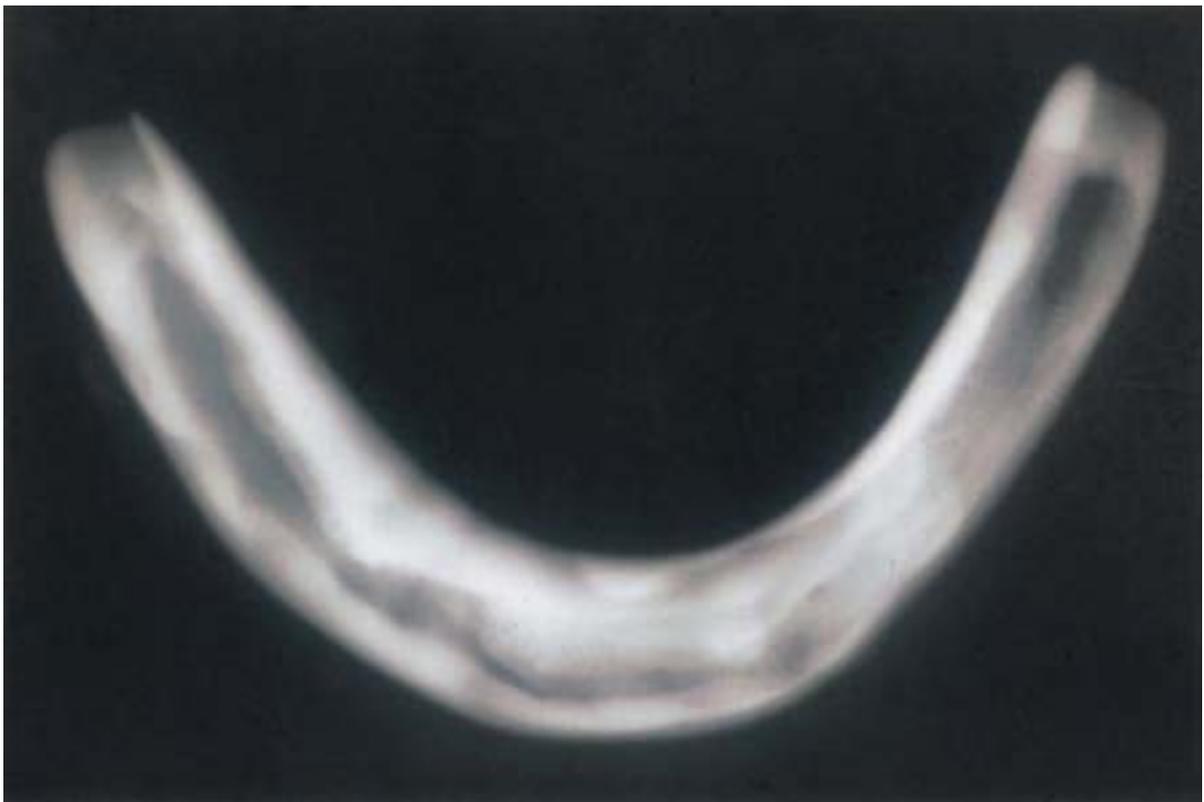


原田第41号墓地第6号墓出土下顎総義歯
咬合面観

図版6 原田第41号墓地第6号墓出土義歯



原田第41号墓地第6号墓出土下顎総義歯
粘膜面観



同上
X線写真

第6節 旧筑前国御笠郡原田村の『墓籍』について

1. はじめに

原田駅前土地区画整理事業に伴い、筑紫野市教育委員会は昭和63年度から平成3年度にかけて事業地内の墓地4ヶ所を発掘調査した。また、墓地関係資料として扱った『墓籍地図』および『墓籍』もその4ヶ所に限って調査・報告した^{※1)}。

しかしながら、明治22年4月付けで編集された『墓籍地図』・『墓籍』（以下「本資料」と言う）は旧原田村の墓地44ヶ所の記録である。このため、44ヶ所全ての記録内容を分析することで旧原田村全体の状況が窺えるものと考え、本稿では主に『墓籍』の内容分析を行うこととする。

2. 『墓籍地図』・『墓籍』の構成

前述の通り、本資料は旧原田村に所在していた44ヶ所の墓地の記録であり、明治22年4月に完成しているが、その後も昭和9年まで追記・使用されている。本資料は、現在原田所在の伯東寺^{註1)}が所有している。

44ヶ所の墓地には第1～44号の通し番号が付され、各号墓地ごとに『墓籍地図』と『墓籍』が作成されている。なお、44ヶ所のうち3ヶ所は枝番および又番号を付しており、『墓籍地図』と『墓籍』もそれぞれに作成されている。

なお、行政区としての「原田」は、本資料の表紙では「御笠郡筑紫村大字原田」となっているが、墓地ごとの図面と台帳の標記では又ノ第34号墓地以外は全て「筑前国御笠郡原田村」となっている^{註2)}。これは、明治22年4月1日付けで施行された市町村制に伴い、旧原田村も10村合併で筑紫村大字原田に変更されたためである。このことは、墓標の配置図および台帳の作成といった墓籍の調査は合併前の原田村時代に実施され、合併後の筑紫村時代に本資料の編集が完了したことを物語っている。

(1) 『墓籍地図』（第1図）

『墓籍地図』は墓地ごとの墓標配置図であり、図面の寸法は68×50cmである。表紙・裏表紙各1枚と、枝番 又番号を含んだ各墓地の墓標配置図56枚の合計58枚を綴じたものである。

表紙（第1図）には、

明治廿二年四月

墓 籍 地 図

御笠郡筑紫村

大 字 原 田

と墨で縦書きされている。



第1図 『墓籍地図』表紙

旧筑前国御笠郡原田村の『墓籍』について

第1表 『墓籍』における墓地別標記一覧表

墓地番号	所在地	字	地目	面積	所有者	備考
第1号	筑前国御笠郡原田村 40番地	合ノ原	墓地	2畝12歩	持主 城山正郎	
第2号	筑前国御笠郡原田村 42番地	合ノ原	墓地	16歩	持主 松尾伸太郎	
第3号	筑前国御笠郡原田村 57番地	合ノ原	墓地	20歩	持主 山内五市	
第4号	筑前国御笠郡原田村 70番地	合ノ原	墓地	2畝12歩	持主 山内篤三郎	
第5号	筑前国御笠郡原田村 214番地	五郎山	墓地	1畝26歩	持主 山内吉作	
第6号	筑前国御笠郡原田村 250番地	五郎山	墓地	4畝8歩	同村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第7号	筑前国御笠郡 285番地	猿 衆	墓地	8畝9歩	村持共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	所在地は282番地の誤り
第8号	筑前国御笠郡原田村 654番ノ2	不別当	墓地	12歩	持主 山内孫吉	
第9号	同村 686番地	真 竹	墓地	1畝18歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第10号	筑前国御笠郡原田村 687番地	真 竹	墓地	9歩	持主 山崎申太郎	
第11号	筑前国御笠郡原田村 703番ノ内	真 竹	墓地	1畝10歩	持主 山崎申太郎	
第12号	筑前国御笠郡原田村 705番ノ1	真 竹	墓地	9畝27歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第13号	筑前国御笠郡原田村 705番ノ2	真 竹	墓地	4畝歩	持主 山崎半三郎	
第14号	筑前国御笠郡原田村 705番ノ3	真 竹	墓地	3歩	持主 山崎申太郎	
第15号	筑前国御笠郡原田村 884番	口 脇	墓地	2畝19歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第16号	筑前国御笠郡原田村 906番地	池ノ浦	墓地	7歩	持主 柴田興吉	
第17号	筑前国御笠郡原田村 926番ノ1	池ノ浦	墓地	20歩	持主 大石吉平	
第18号	筑前国御笠郡原田村 1067番地ノ1	前小原	墓地	27歩	持主 山内孫九郎	
第19号	筑前国御笠郡原田村 1067番ノ2	前小原	墓地	2歩	持主 山内貞次郎	
第20号	同村 1115番	通り谷	墓地	20歩	同村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第21号	同村 1207番	通り谷	墓地	20歩	村持 佐藤時次郎	
第22号	同村 1220番	通り谷	墓地	3畝11歩	原田村共有	
第23号	同村 1226番	通り谷	墓地	25歩	原田村共有	
第24号	同村 1323番地	大 牟 田	墓地	2歩	村持共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第25号	同村 1430番地	大 阪	墓地	5歩	持主 山内又六	
第26号	同村 1466番地	井手ノ下	墓地	18歩	持主 中村甚七	
第27号	同村 1469番	井手ノ下	墓地	3畝14歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第28号	同村 1509番地	井手ノ下	墓地	8歩	持主 佐藤利七郎	
第29号	同村 1515番地	井手ノ下	墓地	1畝3歩	持主 佐藤利三郎	
第30号ノ1	筑前国御笠郡原田村 1563番	井手ノ下	墓地	1反5畝26歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第30号ノ2	同 1563番	井手ノ下	墓地	1反5畝26歩	原田村共有	
第30号ノ3	同村 1563番	井手ノ下	墓地	1反5畝26歩	原田村共有	
第30号ノ4	同村 1563番	井手ノ下	墓地	1反5畝26歩	原田村共有	
第30号ノ5	同村 1563番	井手ノ下	墓地	1反5畝26歩	原田村共有	
第30号ノ6	同村 1563番地	井手ノ下	墓地	1反5畝26歩	原田村共有	
第31号	筑前国御笠郡原田村 1568番地	井手ノ下	墓地	2畝1歩	持主 藤島清八	
第32号	同村 1595番地	渡 瀬 川	墓地	3歩	持主 山内弥四郎	
第33号	筑前国御笠郡原田村 2169番ノ内	古 野	墓地	10歩	持主 山崎半三郎	
第34号	筑前国御笠郡原田村 2171番地	古 野	墓地	1畝23歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
又ノ第34号	筑前国筑紫郡筑紫村大字原田 2164番地	古 野	墓地	3畝18歩	大字原田共有 総代 山崎喜三	
第35号	筑前国御笠郡原田村 2266番地	松 本	墓地	3畝23歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第36号	筑前国御笠郡原田村 2283番地	松 本	墓地	2畝11歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第37号	筑前国御笠郡原田村 2304番地	傘 松	墓地	2畝12歩	持主 山崎玄喜	所在地は2340番地の誤り
第38号	2313番	松 本	墓地	25歩	持主 山崎三吉	
第39号	2317番ノ2	松 本	墓地	1畝3歩	持主 山内伊七郎	
第40号	筑前国御笠郡原田村 2615番地	辻	墓地	4畝15歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山内喜三	山内喜三は山崎の誤り
第41号	筑前国御笠郡原田村 2628番地	岩ノ狩倉	墓地	2畝9歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第42号	2704番	龍ヶ口	墓地	1畝1歩	持主 山崎三吉	
第43号ノ1	筑前国御笠郡原田村 2606番地	龍ヶ口	墓地	6反8畝27歩	同村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	所在地は2706番地の誤り
第43号ノ2	原田村 2606番地	龍ヶ口	墓地	6反8畝27歩	同村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	所在地は2706番地の誤り
第43号ノ3	原田村 2606番地	龍ヶ口	墓地	6反8畝27歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	所在地は2706番地の誤り
第43号ノ4	原田村 2606番地	龍ヶ口	墓地	6反8畝27歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	所在地は2706番地の誤り
第43号ノ5	御笠郡原田村 2706番地	龍ヶ口	墓地	6反8畝27歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	
第43号ノ6	御笠郡原田村 2606番地	龍ヶ口	墓地	6反8畝27歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	所在地は2706番地の誤り
第43号ノ7	御笠郡原田村 2606番地	龍ヶ口	墓地	6反8畝27歩	原田村共有 総代 山内伊七郎・山内孫九郎・山崎喜三	所在地は2706番地の誤り
第44号	2790番	一ノ谷	墓地	12歩	持主 山内吉作	

第2表 『墓籍』記載数および項目別分析対象数一覧表

墓地番号	墓標番号	記載数			記載項目分析対象数					備考
		実数	編集	追記	墓標	坪数	死者姓名	死亡年月日	祭主	
1	1~83	83	71	12	83	83	83	83	14	
2	1~3	3	3	0	3	3	4	4	2	1番の死者姓名欄には2名(夫婦)記載
3	1~19	19	16	3	19	19	19	19	3	
4	1~87	91	69	22	91	91	91	91	12	50番は枝番1~5
5	1~33	33	23	10	33	33	33	33	7	24・25番の祭主は村持
6	1~126	126	96	30	126	126	126	126	31	87~91番の祭主は村持
7	1~200	205	160	45	203	203	203	203	41	90番は枝番1・2、109番は枝番1~3 185・190番は2つずつ、内1つずつ抹消のため除く 25~29・103・142~157番の祭主は村持
8	1~5	5	1	4	5	5	5	5	3	
9	1~40	40	40	0	40	40	40	40	1	祭主は全て村持
10	1~6	6	6	0	6	6	6	6	1	
11	1~12	12	11	1	12	12	12	12	2	
12	1~226	227	170	57	226	226	226	226	43	又ノ171番は第15号墓地6番と同一死者のため除く 175番は書き換えのため、古記載は除く
13	1~26	26	18	8	26	26	26	26	5	
14	1~2	2	2	0	2	2	2	2	1	
15	1~11	11	5	6	11	11	11	11	6	1~5番の祭主は村持
16	1~16	17	7	10	16	16	16	16	3	16番は2つあるが、1つは誤記のため除く
17	1~18	18	5	13	18	18	18	18	7	
18	1~40	4	4	0	4	4	4	4	1	
19	1~2	2	2	0	2	2	2	2	1	
20	1~4	4	2	2	4	4	4	4	2	
21	1~32	32	19	13	30	30	30	30	7	28・29番は第27号墓地より改葬のため除く
22	1~145	145	114	31	144	144	144	144	23	145番は142番の改葬記録のため除く
23	1~18	18	17	1	17	17	17	17	5	18番は死者姓名・死亡年月日・祭主抹消のため除く
24	1	1	1	0	1	1	1	1	1	
25	1	1	1	0	1	1	1	1	1	
26	1~18	18	16	2	18	18	18	18	3	
27	1~55	55	32	23	55	55	55	55	16	1~32番の祭主は村持
28	1~3	3	3	0	3	3	3	3	1	
29										「死亡者なし」と記載
30-1	1~140	141	115	26	138	138	138	138	21	20番は枝番1・2 134・138・139番は誤記のため除く
30-2	1~84	112	109	3	110	110	110	110	8	3番は枝番1~7、48番は枝番1~6 52番は枝番1~6、60番は枝番1~11 82番は書き換えのため古記載は除く 83・84番は削除の可能性有るため除く
30-3	1~92	92	75	17	92	92	92	92	16	
30-4	1~78	78	65	13	78	78	78	78	14	
30-5	1~93	116	96	20	116	116	116	116	20	16番は枝番1~3、19番は枝番1~10、20番は枝番1~4、 23番は枝番1~7、27番は枝番1・2、65番は枝番1~3、 65~73・77番の祭主は村持
30-6	1~48	54	47	7	54	54	54	54	7	30番は枝番1~4、33番は枝番1・2、34番は枝番1~3
31	1~17	17	11	6	17	17	17	17	7	
32	1~2	2	2	0	2	2	2	2	1	
33	1	1	1	0	1	1	1	1	1	
34	1~23	23	23	0	23	23	23	23	3	21~23番の祭主は村持
又ノ34	1~9	9	0	9	6	6	6	6	2	明治29年より記載 2~4番は第13号墓地より改葬のため除く
35	1~108	108	88	20	108	108	108	108	19	
36	1~79	79	59	20	79	79	79	79	10	
37	1~29	33	33	0	33	33	33	33	1	4番は枝番1・2、13番は枝番1~3、16番は枝番1・2
38	1~9	9	9	0	9	9	9	9	1	
39	1~7	7	2	5	7	7	7	7	4	
40	1~84	85	81	4	84	84	84	84	6	4番は枝番1・2 84番の死者姓名が抹消のため除く 55~70番の祭主は村持
41	1~84	84	66	18	83	83	83	83	16	66番欠番 69番と70番の間に旧70番があるが、抹消のため除く
42	1~5	5	5	0	5	5	5	5	1	
43-1	1~177	189	134	55	188	188	190	190	44	77番は枝番1~7、103番は枝番1~5 117番は枝番1~3、146番は2つ 127番は欠番 15番の死者姓名・死亡年月日には3名分記載 131番は死亡年月日・祭主に抹消線あるため除く 77番1~7の祭主は村持 161・163・164番の祭主は記載なし
43-2	1~73	73	48	25	73	73	84	84	13	1番は記載行3行を使用し、6名分を記載 6番は記載行4行を使用し、最初の1行に不詳7名分を一括で記載し、他の3行は同じ墓標番号だけで、他の項目の記載なし
43-3	1~90	91	61	30	91	91	91	91	28	56番は枝番1・2
43-4	1~53	53	39	14	53	53	53	53	11	23~31番の祭主は村持
43-5	1~255	258	172	86	256	256	256	256	57	又74有り、205・243番は2つ 旧205・旧243番は誤記のため除く
43-6	1~35	40	15	25	36	36	36	36	15	26~29・35番は2つ 旧26~29番は誤記のため除く 5~15番の祭主は村持
43-7	1~176	177	166	11	177	177	177	177	19	100番は枝番1・2、166番は2つ 133番は欠番
44	1~7	7	4	3	7	7	7	7	2	
合計		3150	2440	710	3125	3125	3139	3139	590	祭主の数は墓地を重複する者を含む

第3表 墓地別所有形態・使用世紀一覧表

め「誤記」と明記して抹消したものや、「誤記」の記述無くとも上から抹消線が引かれているもの、抹消線が引かれていなくても消されて薄くなったものなどは、分析対象数から除いたためである。ただし、抹消線が引かれながらも旧原田村以外への改葬のために別途記載のないものは、唯一の埋葬例として分析対象とした。

- ④ 同一墓地において項目によっては分析対象数が異なること。1つの墓標に複数の死者姓名や死亡年月日が記載されているものがあるためである。

の4点である。

『墓籍』の記載内容は第1・2表のとおりである。特に墓標を基に墓数を算定すると、記載された墓は3,150基であるが、分析する墓の数は3,125基である。なお、各項目における分析対象数は第2表の各項目の合計数に示しており、対象から除いたものについてはその理由を備考に記している。

(1) 墓地所有者

(第1・3表)

墓地の所有形態は、個人所有と原田村共有の2種類がある。個人所有の場合は、「持主」という表記に続けて個人名が記載されている。村共有の場合は、「原田村共

墓地	村共有	個人所有	墓地使用世紀					死亡年不明・不詳者数
			~16	17	18	19	20	
1		○						83人のうち6人不明
2		○						4人のうち2人不明
3		○						19人のうち9人不明
4		○						91人のうち9人不明
5		○						33人のうち21人不明
6	○							126人のうち28人不明
7	○							203人のうち48人不明
8		○						5人のうち1人不明
9	○							40人全て不明
10		○						6人全て不明
11		○						12人のうち5人不明
12	○							226人のうち48人不明
13		○						
14		○						
15	○							11人のうち5人不明
16		○						
17		○						18人のうち1人不明
18		○						4人全て不明
19		○						2人全て不明
20	○							4人のうち2人不明
21		○						30人のうち1人不明
22	○							144人のうち35人不明
23	○							17人のうち7人不明
24	○							1人全て不詳
25		○						1人全て不詳
26		○						18人のうち13人不明
27	○							55人のうち32人不明
28		○						3人全て不明
29		○						死亡者なし
30-1								138人のうち28人不明
30-2								110人のうち57人不明
30-3								92人のうち22人不明
30-4	○							78人のうち4人不明
30-5								116人のうち46人不明
30-6								54人のうち22人不明
31		○						17人のうち4人不明
32		○						2人全て不明
33		○						1人全て不詳
34	○							23人のうち13人不明
又ノ34	○							
35	○							108人のうち25人不明
36	○							79人のうち22人不明
37		○						33人のうち4人不明
38		○						9人全て不明
39		○						7人のうち2人不明
40	○							84人のうち42人不明
41	○							83人のうち15人不明
42		○						5人全て不明
43-1								190人のうち28人不明
43-2								84人のうち10人不明
43-3								91人のうち33人不明
43-4	○							53人のうち25人不明
43-5								256人のうち22人不明
43-6								36人のうち15人不明
43-7								177人のうち102人不明
44		○						
計	18	27	5	11	18	31	26	

有」・「村持」または「村持共有」といった表記に続けて、総代3名の名前が連記してある。ただし、又ノ第34号墓地の総代は1名しか記載されていない（第1表）。総代は、明治期の寺総代と考える。

第3表は、各墓地の所有形態と各墓地の使用期間（世紀）を表したものである。枝番を持つ第30・43号墓地は同一地番で同一面積であるため同一墓地の同一所有者であるが、又ノ第34号墓地は第34号墓地とは地番も面積も異なっており別墓地の別所有と捉えることができる（第1表）。

又ノ第34号墓地を単独墓地とすると、45ヶ所の墓地のうち村共有18ヶ所（40%）・個人所有27ヶ所（60%）で、個人所有の墓地が多い。

この明治22年段階での墓地所有形態の違いが各墓地造営当初からなのか、あるいは何らかの理由で途中変更されたのかは定かではない。また、途中で変更されたとしても、その時期は不明である。

これに関しては、死亡年を基に作成した第3表の各墓地の使用期間をみると、旧原田村における墓地の使用は18世紀より著しく増加し、19・20世紀に集中している。また、村共有墓地18ヶ所のうち10ヶ所はそれ以前から使用されている古い墓地（第7・12・23・30・34・35・36・40・41・43号墓地）か、あるいは、『墓籍』作成時に墓碑銘が判読できずに多くが「不明（詳）」と記載された墓地（6・9・22・24・27号墓地）に多い。このことから、村共有墓地は当初個人所有であったものが長い使用期間の中で被葬者や祭主関係が不明になった古い墓地を村共有に変更したものと考えることができる。

しかし、第30・43号墓地のような大規模な墓地の維持管理が個人でできるか疑問であり、また、明治29年に使用され始めた又ノ34号墓地も「大字原田共有」であり、近世における旧原田村の共同墓地の存在を全く否定することはできない。

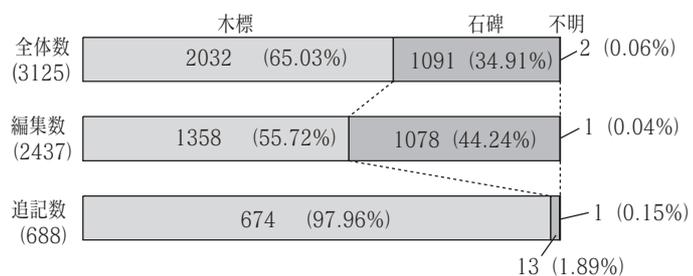
（2）墓 標（第2・4～6表、第3・4図）

墓標には、木標と石碑の2種類がある。ただし、明治22年以降『墓籍』に追記された墓標の大半は、『墓籍地図』には表記されていない。

第4表は、墓地ごとの木標と石碑の数を表したものであり、さらに明治22年を目安として本資料の編集時点の数（以下「編集数」という）とそれ以降の追記の数（以下「追記数」という）を区別した表であり、それをグラフにしたのが第3図である。

墓標の分析対象数は3,125基であり、不明墓標2基を含んでいる。その内訳は、木標2,032基（65.02%）・石碑1,091基（34.91%）で、木標の比率が高い。

また、編集数2,437基の内訳は木標1,358基（55.72%）・石碑1,078基（44.23%）で半々に近いが、追記数688基の内訳は木標674基（97.97%）・石碑13基（1.89%）と圧倒的に木標が多い（第3図）。これは、亡くなってからさほど時間が経っていない時点で記載された追記の墓標の大半が木標であるということから、埋葬当初の墓標は木標が通常であったことを示している。



第3図 墓標内訳比グラフ

第4表 墓地別墓標内訳一覧表

墓地番号	墓標数 3125基 (%)				編集数 2437基 (78%)				追記数 688基 (22%)			
	合計	木標	石碑	不明	合計	木標	石碑	不明	合計	木標	石碑	不明
1	83	48	35	0	71	36	35	0	12	12	0	0
2	3	1	2	0	3	1	2	0	0	0	0	0
3	19	14	5	0	16	11	5	0	3	3	0	0
4	91	44	47	0	69	22	47	0	22	22	0	0
5	33	30	3	0	23	20	3	0	10	10	0	0
6	126	87	39	0	96	58	38	0	30	29	1	0
7	203	131	72	0	160	90	70	0	43	41	2	0
8	5	5	0	0	1	1	0	0	4	4	0	0
9	40	36	4	0	40	36	4	0	0	0	0	0
10	6	6	0	0	6	6	0	0	0	0	0	0
11	12	7	5	0	11	6	5	0	1	1	0	0
12	226	141	85	0	170	86	84	0	56	55	1	0
13	26	9	17	0	18	1	17	0	8	8	0	0
14	2	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0
15	11	11	0	0	5	5	0	0	6	6	0	0
16	16	16	0	0	7	7	0	0	9	9	0	0
17	18	14	4	0	5	1	4	0	13	13	0	0
18	4	4	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0
19	2	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0
20	4	4	0	0	2	2	0	0	2	2	0	0
21	30	25	5	0	18	16	2	0	12	9	3	0
22	144	95	49	0	114	65	49	0	30	30	0	0
23	17	10	7	0	17	10	7	0	0	0	0	0
24	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
25	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
26	18	15	3	0	16	13	3	0	2	2	0	0
27	55	54	1	0	32	31	1	0	23	23	0	0
28	3	1	2	0	3	1	2	0	0	0	0	0
29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
30-1	138	98	40	0	115	75	40	0	23	23	0	0
30-2	110	76	34	0	107	73	34	0	3	3	0	0
30-3	92	40	52	0	75	23	52	0	17	17	0	0
30-4	78	36	41	1	65	23	41	1	13	13	0	0
30-5	116	86	30	0	96	66	30	0	20	20	0	0
30-6	54	54	0	0	47	47	0	0	7	7	0	0
31	17	17	0	0	11	11	0	0	6	6	0	0
32	2	2	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0
33	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
34	23	8	15	0	23	8	15	0	0	0	0	0
又34	6	5	1	0	0	0	0	0	6	5	1	0
35	108	55	53	0	88	35	53	0	20	20	0	0
36	79	32	47	0	59	12	47	0	20	20	0	0
37	33	14	19	0	33	14	19	0	0	0	0	0
38	9	0	9	0	9	0	9	0	0	0	0	0
39	7	7	0	0	2	2	0	0	5	5	0	0
40	84	61	23	0	81	58	23	0	3	3	0	0
41	83	54	29	0	66	37	29	0	17	17	0	0
42	5	5	0	0	5	5	0	0	0	0	0	0
43-1	188	120	67	1	134	67	67	0	54	53	0	1
43-2	73	65	8	0	48	40	8	0	25	25	0	0
43-3	91	62	29	0	61	32	29	0	30	30	0	0
43-4	53	44	9	0	39	30	9	0	14	14	0	0
43-5	256	118	138	0	172	35	137	0	84	83	1	0
43-6	36	32	4	0	15	15	0	0	21	17	4	0
43-7	177	125	52	0	166	114	52	0	11	11	0	0
44	7	3	4	0	4	0	4	0	3	3	0	0
合計	3125	2032	1091	2	2437	1358	1078	1	688	674	13	1

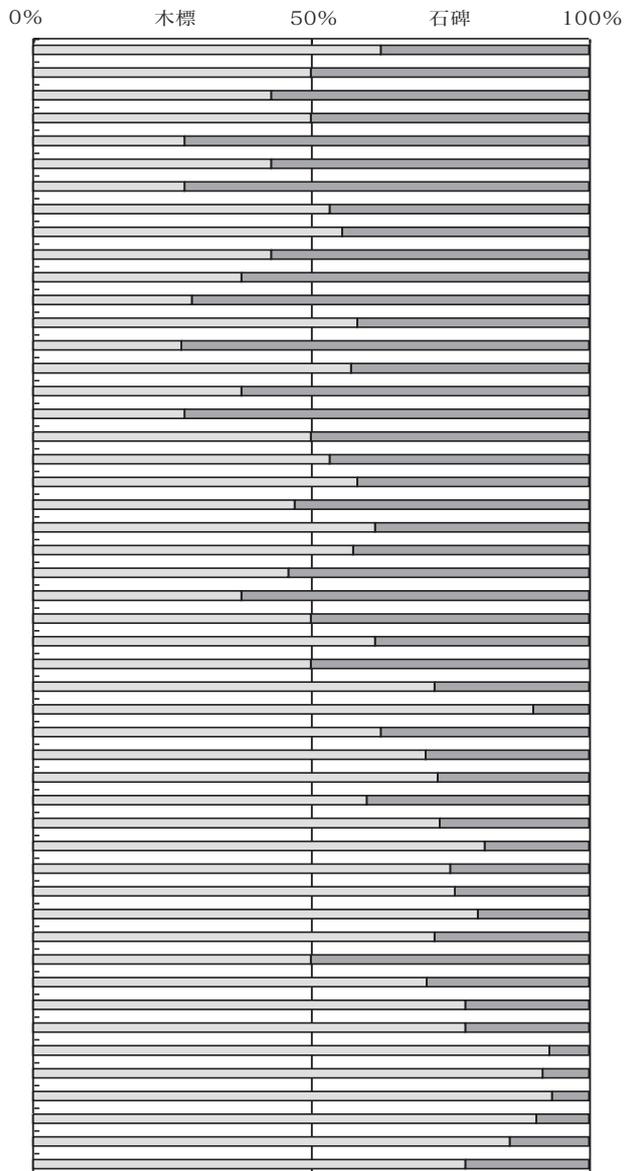
それでは、木標を石碑に建て替える時期はいつであろうか。

第5表は、本資料が編集された明治22年（西暦1889年）から過去50年間の木標と石碑の数と、これに年忌数^{註4)}を逆算して表したものである。同表の横には、各年の墓標数を100%として木標と石碑の比率を示したグラフ第4図を付けている。この表とグラフは、本資料が編集された明治22年から逆算して1年ごとの木標と石碑の比率の変化を辿ることで、木標から石碑への建て替え時期を探ろうとするものである。

21年前（1868年）までは木標が半数以上を占めているが、6年前（1883年）から石碑が少しずつ増加し、9年前（1880年）では木標と石碑は同率であり石碑のピークが認められる。16年前（1873年）にも小さいながら石碑のピークが感じられる。次に、22年前（1867年）から32年前（1857年）までは木標と石碑の比率が拮抗しながらも、25年前（1864年）に初めて石碑が木標を上回り小さいピークが認められる。そして、33年前（1856年）にも石碑の比率が高くなり、以降は比率の変動が大きく、36年前（1853年）・38年前（1851年）・43年前（1846年）に石碑のピークが続き、45年前（1844年）を最後に石碑の比率は減っている。

第5表 年別（1840～1889年）墓標内訳一覧表

西暦年	木標	石碑	計	逆年忌
1840	5	3	8	50回忌
1841	3	3	6	
1842	9	12	21	
1843	8	8	16	
1844	3	8	11	
1845	3	4	7	
1846	3	8	11	
1847	8	7	15	
1848	5	4	9	
1849	3	4	7	
1850	6	10	16	
1851	2	5	7	
1852	7	5	12	
1853	4	11	15	
1854	8	6	14	
1855	3	5	8	
1856	3	8	11	
1857	8	8	16	33回忌
1858	8	7	15	
1859	7	5	12	
1860	8	9	17	
1861	8	5	13	
1862	19	14	33	
1863	17	20	37	
1864	3	5	8	
1865	7	7	14	25回忌
1866	8	5	13	
1867	5	5	10	
1868	13	5	18	
1869	9	1	10	
1870	10	6	16	
1871	12	5	17	
1872	8	3	11	
1873	9	6	15	17回忌
1874	30	11	41	
1875	13	3	16	
1876	12	4	16	
1877	22	7	29	13回忌
1878	8	2	10	
1879	13	5	18	
1880	5	5	10	
1881	17	7	24	
1882	14	4	18	
1883	7	2	9	7回忌
1884	13	1	14	
1885	11	1	12	5回忌
1886	14	1	15	
1887	19	2	21	3回忌
1888	12	2	14	1周忌
1889	7	2	9	『墓籍』編集年
合計	459	286	745	



第4図 年別（1840～1889年）墓標内訳比グラフ

第6表 原田地区内改葬事例一覧表

旧墓地	旧 墓	死 者	死亡年月日	旧墓標	旧坪数	
			↓改葬までの年数			
新墓地	新 墓		改葬予想年	新墓標	新坪数	備 考
第13号	1番	大人男性	明治14年 9月 8日	石碑	3尺	
			↓15~23年後			
又ノ34号	3番		明治29~37年	石碑	3尺	明治29年と37年との間に追記
第13号	2番	大人女性	明治15年11月11日	石碑	2尺	
			↓14~22年後			
又ノ34号	4番		明治29~37年	石碑	2尺	明治29年と37年との間に追記
第13号	19番	大人女性	明治26年10月13日	木標	4尺	
			↓3~11年後			
又ノ34号	2番		明治29~37年	石碑	3尺	明治29年と37年との間に追記
第22号	142番	大人男性	大正 9年 1月19日	木標	3尺	
			↓8~14年後			
第22号	145番		昭和 3~ 9年	石碑	4尺	昭和3年の次に追記 『墓籍』の最新追記年は昭和9年
第27号	33番	大人女性	明治31年11月28日	木標	3尺	
			↓7~12年後			
第21号	28番		明治38~43年	木標	3尺	明治38年と43年との間に追記
第27号	41番	大人男性	明治38年10月29日	木標	3尺	
			↓1~5年後			
第21号	29番		明治39~43年	木標	3尺	明治38年と43年との間に追記

以上、墓標の分析からは下記のことが傾向としてうかがえる。

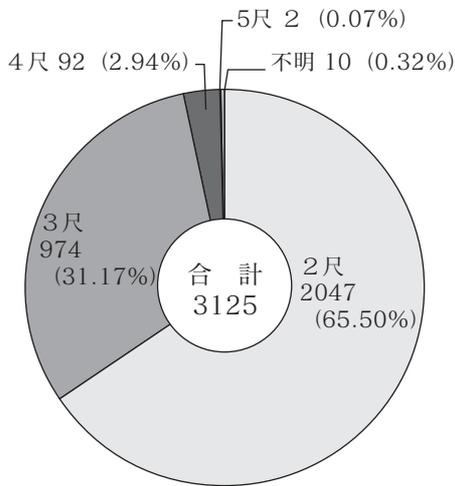
- ① 埋葬当初の墓標は通常木標であり、後世石碑に建て替えられている。
- ② 木標から石碑に建て替わるのは、率的には低いが7回忌頃から増え始め、10回忌頃に最初のピークが、そして17回忌にもピークが考えられる。
- ③ 23回忌を迎える頃は石碑が大半を占めるようになり、25・33・37回忌を機に建て替えが頻繁にされたと考えるが、疑問も残る。

また、『墓籍』には他の墓地への改葬の記載があり、そのうち原田44（45）ヶ所内での改葬の事例6例を第6表に整理し、改葬前後の墓地の比較を行った。6例のうち4例は改葬前の墓標は木標であるが、2例は石碑である。この木標4例のうち2例は、改葬を機に石碑に建て替えられており、その死亡年と改葬を追記された台帳上の前後の他者の死亡年からおおよその改葬時期が予想できる。第6表から、明治26年死亡の大人女性は3~11年後に、また、大正9年死亡の大人男性は8~14年後に、それぞれ改葬を機に木標から石碑に建て替えられている。2例の共通する予想改葬時期は8~11年であり、先に年忌を想定して墓標の内訳を検討した第5表・第4図での最初の石碑のピークとした10回忌（9年後）と近い年数である。しかし、あまりにも検討事例が少なく、また、改葬時期を年忌法要あるいは石碑への建て替え時期と直接結びつけることに躊躇する。

(3) 坪 数 (第2・6~8表、第5図)

『墓籍』には墓の面積を「坪数」という項目で記録されており、その大きさは2尺・3尺・4尺・5尺四方の4種類である。

第7表は、墓地ごとに坪数別の墓数を表したものである。分析対象数は3,125基で、不明10基を含む。第5図は総数の内訳を円グラフにしたものであり、2尺四方は2,047基（65.50%）で最も



第5図 坪数内訳比グラフ

多く、次に3尺四方が974基（31.17%）と多い。4尺四方は92基（2.94%）と少なく、5尺四方にいたっては僅か2基（0.06%）だけである。2・3尺四方の墓が全体の96%以上を占めており、この状況は大半の墓地においても認められる（第7表）。

ところで、「四方」という表現から墓の平面形は（正）方形と認識していたと考えるが、実際のところ墓の坪数は何を根拠に、言い換えればどの範囲を指して記載されたのであろうか。

第8表は、原田第1・2・40・41号墓地の墓石現況測量原図（S=1/20）から測定可能な墓石の基礎部分の寸法と、その墓石に対応する墓壇の上面寸法および『墓籍』の坪数を併記したものである^{註5)}。

まず、墓の範囲を最初に認識するのは墓壇を掘削する時であろう。原田第1・2・40・41号墓地における土葬墓の大半を占める正方形墓壇の上面寸法は一辺が90～150cmであり、1尺を30cmとした場合、ほとんどが2尺（60cm）・3尺（90cm）四方より大きいものである。また、古い土葬墓には長方形のものもあることから、『墓籍』に記載された坪数は埋葬当初に意識された墓壇の範囲ではないと考える。

次に、地上において墓を認識できるのは墓標である。特に、石碑＝墓石の基礎部分には墓碑銘石（棹

第7表 墓地別墓坪数内訳一覧表

墓 地	坪 数 (尺四方)					計
	2 尺	3 尺	4 尺	5 尺	不 明	
1	58	15	8	1	1	83
2	1	2	0	0	0	3
3	15	4	0	0	0	19
4	43	42	5	1	0	91
5	25	8	0	0	0	33
6	94	19	13	0	0	126
7	135	65	3	0	0	203
8	2	3	0	0	0	5
9	30	10	0	0	0	40
10	6	0	0	0	0	6
11	3	2	7	0	0	12
12	137	83	6	0	0	226
13	7	9	10	0	0	26
14	2	0	0	0	0	2
15	6	5	0	0	0	11
16	16	0	0	0	0	16
17	18	0	0	0	0	18
18	0	4	0	0	0	4
19	0	2	0	0	0	2
20	2	2	0	0	0	4
21	22	8	0	0	0	30
22	79	60	5	0	0	144
23	17	0	0	0	0	17
24	0	0	1	0	0	1
25	1	0	0	0	0	1
26	8	10	0	0	0	18
27	32	23	0	0	0	55
28	2	1	0	0	0	3
29	0	0	0	0	0	0
30-1	76	57	5	0	0	138
30-2	99	11	0	0	0	110
30-3	45	47	0	0	0	92
30-4	35	40	2	0	1	78
30-5	80	36	0	0	0	116
30-6	48	6	0	0	0	54
31	13	4	0	0	0	17
32	2	0	0	0	0	2
33	1	0	0	0	0	1
34	9	13	1	0	0	23
又34	0	6	0	0	0	6
35	78	29	0	0	1	108
36	62	17	0	0	0	79
37	27	6	0	0	0	33
38	2	7	0	0	0	9
39	2	5	0	0	0	7
40	56	27	1	0	0	84
41	63	19	1	0	0	83
42	0	0	0	0	5	5
43-1	126	61	0	0	1	188
43-2	55	8	10	0	0	73
43-3	64	27	0	0	0	91
43-4	38	15	0	0	0	53
43-5	131	118	7	0	0	256
43-6	25	11	0	0	0	36
43-7	145	24	7	0	1	177
44	4	3	0	0	0	7
合 計	2047	974	92	2	10	3125

石?) を載せる自然石の礎石や切石の基壇があり、また礎石の安定を図るための根石が配されている。このうち、地上に置かれて目視できる礎石と基壇の寸法は一辺60cm前後が多く、それに対応する『墓籍』の坪数も2尺（60cm）が多く、関係深い。なお、根石も方形に配されているが、礎石の下にあってさらに土をかぶり目に見えにくいというえに、実際の寸法も記載された坪数より大き

第8表 原田第1・2・40・41号墓地における墓石基礎寸法・墓壇寸法・『墓籍』坪数対比表(寸法単位cm)

墓地番号	墓石番号	墓石	基礎	基礎寸法	墓壇番号	上面寸法	墓籍番号	墓標	坪数	備考	
第1号墓地	1号	自然石	礎石	55×55	23号	132×131	23番	石碑	2尺		
	2号	自然石	礎石	55×35	41号	124×116	22番	石碑	2尺		
	3号	切石	基壇	60×55	44号	146×124					
	7号	切石	基壇	60×55	40号	101×99	24番	石碑	2尺		
	8号	自然石	礎石	54×45	31号	103×103	31番	石碑	2尺		
	9号	自然石	礎石	37×35	27号	131×121	33番	石碑	2尺		
	17号	?	礎石	65×49	33号	117×116	34番	石碑	2尺		
	20号	?	礎石	51×45	2号	100×94					
	21号	自然石	礎石	69×46	5号	108×101					
	22号	自然石	礎石	85×55	6号	106×105	58番	木標	2尺		
	25号	?	根石	95×90	25号	101×97					
	27号	?	根石	70×60	37号	168×143					
	第2号墓地	?	?	根石	127×127	4号	177×170	2番	石碑	3尺	
		?	?	根石	130×130	5号	155×124	2番	石碑	3尺	
第40号墓地	1号	?	礎石	70×39							
	5号	切石	礎石	42×39	38号	120×118	13番	石碑	2尺		
	6号	自然石	根石	105×101							
	7号	自然石	根石	106×100	37号	130×128	14番	石碑	2尺		
	13号	自然石	礎石	71×55	36号	132×121	19番	石碑	2尺		
	14号	切石	基壇	66×59	71号	125×122	31番	石碑	3尺		
	16号	自然石	礎石	60×50	25号	111×107	30番	木標	2尺	墓壇円形	
	20号	?	根石	132×120	70号	61×49					
	21号	自然石	根石	134×100	23号	158×152	33番	石碑	4尺		
	26号	自然石	根石	130×70~	2号	134×115					
	28号	?	根石	114×111	4号	153×133					
	34号	?	根石	131×108	9号	136×134					
	35号	?	根石	130×118	5号	138×121					
	37号	?	根石	113×110	6号	149×95				墓壇長方形	
	51号	?	根石	92×65	7号	114×82				墓壇長方形	
	55号	?	礎石	48×41	56号	118×111					
	第41号墓地	2号	?	礎石	51×44	55号	131×121				
		3号	自然石	礎石	125×52	20号	102×99				
4号		?	礎石	129×58	3号	121×113	2番	石碑	3尺		
6号		?	礎石	81×49	7号	130×122					
8号		自然石	礎石	59×46	10号	123×115					
10号		?	礎石	46×44	31号	109×106					
11号		?	礎石	64×41	72号	90×83					
12号		?	礎石	66×58	64号	110×109					
13号		切石	基壇	60×54	76号	102×100				礎石は円形鉢状	
14号		?	礎石	66×61	29号	96×95					
15号		?	礎石	94×81	9号	115×110					
16号		?	礎石	74×67	1号	113×108					
18号		切石	基壇	72×69	2号	115×108					
27号		自然石	礎石	90×76	8号	127×117					
34号		切石	基壇	91×89	40号	102×102					
35号		?	基壇	73×71	78号	115×107					
36号		?	基壇	75×69	44号	100×100	47番	石碑	2尺		
39号		?	礎石	46×44	51号	104×101					
46号		?	礎石	64×58	52号	96×92					

いようであり、『墓籍』に記載された坪数とは関係なさそうである。

以上、墓(地)の範囲は本来墓壇掘削当初における占地において決定されているはずであるが、『墓籍』に記載された坪数は各墓の本来の占地を反映していない。おそらく、『墓籍』の編集に伴う調査時に現存していた墓石の基礎寸法を目安にして坪数を記載したものと考えられる。

なお、先の第6表の改葬事例をみると、木標から石碑に建て替わる時の坪数が3尺から4尺に拡大するものと、逆に4尺から3尺に縮小するものがある。いずれも改葬に伴う追記であり、追記の木標と同じく墓の占地に関係深いと思われるが、現地確認ができていないので、追記における坪数の認定については不明である。

第9表 墓地別死者姓名表記法内訳一覧表

墓地 番号	分 析 対象数	内 訳				備 考
		本人俗名	親族関係	出産前後	不 詳	
1	83	61	8	0	14	
2	4	1	1	0	2	
3	19	12	1	0	6	
4	91	71	10	0	10	
5	33	11	0	0	22	
6	126	67	18	1	40	
7	203	117	16	0	70	
8	5	5	0	0	0	
9	40	1	0	0	39	
10	6	0	0	0	6	
11	12	4	0	1	7	
12	226	140	23	1	62	親族関係のうち、1つは「死生子」
13	26	25	1	0	0	
14	2	1	1	0	0	親族関係の表記に本人俗名も併記
15	11	6	0	0	5	
16	16	15	1	0	0	
17	18	17	1	0	0	親族関係は「死生子男子」
18	4	0	0	0	4	
19	2	0	0	0	2	
20	4	2	0	0	2	
21	30	27	1	1	1	
22	144	78	20	0	46	
23	17	10	2	0	5	本人俗名のうち、1つは名字のみ記載
24	1	0	0	0	1	
25	1	1	0	0	0	
26	18	4	1	0	13	
27	55	21	1	1	32	親族関係は「松井男子」
28	3	0	0	0	3	
29						「死者なし」と記載
30-1	138	72	20	2	44	
30-2	110	51	6	0	53	
30-3	92	48	6	1	37	
30-4	78	45	9	0	24	
30-5	116	43	14	0	59	
30-6	54	31	0	1	22	
31	17	12	0	1	4	
32	2	0	0	0	2	
33	1	0	0	0	1	
34	23	4	1	0	18	3番の死者姓名は姓のみのため、不詳扱い
又ノ34	6	6	0	0	0	
35	108	60	11	0	37	
36	79	37	8	1	33	
37	33	20	9	0	4	
38	9	0	0	0	9	
39	7	5	0	0	2	
40	84	28	5	0	51	
41	83	57	12	0	14	
42	5	0	0	0	5	
43-1	190	140	25	0	25	
43-2	84	50	5	0	29	親族関係のうち、1つは「妊娠10ヶ月」
43-3	91	44	10	2	35	出産前後のうち、1つは「同 生後2日」
43-4	53	20	4	0	29	親族関係のうち、1つは「私生女6ヶ月」
43-5	256	171	36	1	48	107番には年月日が記載されているため、不詳扱い 235番には「無名」と表記されているため、不詳扱い
43-6	36	19	0	2	15	
43-7	177	49	15	0	113	
44	7	5	2	0	0	
合計	3139	1714	304	16	1105	

(4) 死者姓名 (第2・9~17表、第6~10図)

死者姓名の分析対象数は3,139名であり、墓標数より14多い(第2表)。これは、第2号・第43号-1・2墓地において1つの墓標に複数の死者が記載されているためである。第9表は、死者姓名の表記法を区別して墓地ごとに表したものである。このうち、墓碑銘の解読ができずに「不詳(明)」と記載されたものも多く、1,105名(35.20%)を数える。

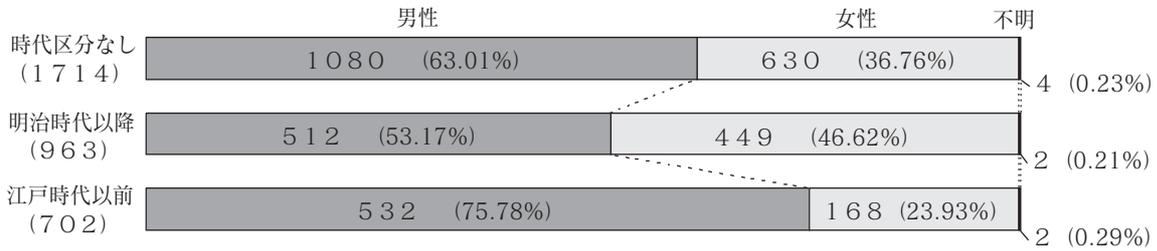
不詳(明)以外の死者姓名の表記法には大きく3種類あり、下記の通りである。

- ①死者本人の俗名
- ②親族の俗名に続けてその親族との関係(続柄)を表記したもの
- ③死者本人の俗名も親族名もなく、主に出産前後の死者の状況を記載したもの

第10表 墓地別本人俗名による死者の性別一覧表

墓地 番号	分 析 対象数	時代区分なし			江戸時代以前				明治時代以降				時代 不明	備 考
		男性	女性	不明	計	男性	女性	不明	計	男性	女性	不明		
1	61	43	18	0	41	32	9	0	19	11	8	0	1	
2	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	
3	12	8	4	0	3	3	0	0	5	3	2	0	4	
4	71	39	31	1	31	19	12	0	39	19	19	1	1	性別不明の名は「加賣」
5	11	5	6	0	1	1	0	0	10	4	6	0	0	
6	67	42	25	0	28	24	4	0	39	18	21	0	0	
7	117	74	43	0	65	43	22	0	52	31	21	0	0	
8	5	2	3	0	0	0	0	0	4	2	2	0	1	
9	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
11	4	2	2	0	4	2	2	0	0	0	0	0	0	
12	140	102	38	0	66	58	8	0	74	44	30	0	0	
13	25	10	15	0	14	5	9	0	11	5	6	0	0	
14	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	
15	6	1	5	0	0	0	0	0	6	1	5	0	0	
16	15	11	4	0	4	3	1	0	11	8	3	0	0	
17	17	10	7	0	2	1	1	0	14	8	6	0	1	
18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
20	2	1	1	0	0	0	0	0	2	1	1	0	0	
21	27	13	14	0	4	2	2	0	22	11	11	0	1	
22	78	52	26	0	35	32	3	0	41	18	23	0	2	
23	10	6	3	1	7	4	2	1	1	1	0	0	2	性別不明は名字のみ記載
24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
25	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
26	4	2	2	0	2	1	1	0	2	1	1	0	0	
27	21	13	8	0	0	0	0	0	21	13	8	0	0	
28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
29														「死亡者なし」と記載
30-1	72	50	22	0	32	29	3	0	37	21	16	0	3	
30-2	51	32	19	0	26	16	10	0	21	12	9	0	4	
30-3	48	28	20	0	18	11	7	0	28	16	12	0	2	
30-4	45	27	18	0	20	15	5	0	25	12	13	0	0	
30-5	43	30	13	0	14	12	2	0	29	18	11	0	0	
30-6	31	16	15	0	21	11	10	0	10	5	5	0	0	
31	12	4	8	0	1	0	1	0	11	4	7	0	0	
32	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
34	4	3	0	1	4	3	0	1	0	0	0	0	0	
又ノ34	6	5	1	0	0	0	0	0	6	5	1	0	0	
35	60	41	19	0	24	17	7	0	28	17	11	0	8	
36	37	21	16	0	14	9	5	0	23	12	11	0	0	
37	20	16	4	0	14	13	1	0	5	3	2	0	1	
38	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
39	5	3	2	0	0	0	0	0	5	3	2	0	0	
40	28	16	12	0	17	14	3	0	10	2	8	0	1	
41	57	35	22	0	21	13	8	0	34	20	14	0	2	
42	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
43-1	140	84	55	1	48	37	11	0	89	44	44	1	3	性別不明の名は「直□」
43-2	50	24	26	0	16	11	5	0	34	13	21	0	0	
43-3	44	22	22	0	8	8	0	0	35	13	22	0	1	
43-4	20	10	10	0	4	3	1	0	16	7	9	0	0	
43-5	171	123	48	0	68	57	11	0	99	62	37	0	4	
43-6	19	10	9	0	0	0	0	0	19	10	9	0	0	
43-7	49	37	12	0	23	21	2	0	21	11	10	0	5	
44	5	4	1	0	1	1	0	0	4	3	1	0	0	
計	1714	1080	630	4	702	532	168	2	963	512	449	2	49	

①の死者本人の俗名が表記法としては最も多く、1,714名（54.60%）である（第9表）。この本人俗名の男女比を表したものが第10表と第6図であり、全体の男女比をみると、男性1,080名（63.01%）・女性630名（36.76%）で、男性が多い。この男女比をさらに2種類の時期区分でみると、江戸時代以前の702名の男女比は男性532名（75.78%）・女性168名（23.93%）で男性が3/4を占めているのに対し、明治時代以降の963名の男女比は男性512名（53.17%）・女性449名（46.63%）とほぼ半々である。この数値は、死者姓名の表記が（大人の）男性は常に本人の俗名であるのに対し、女性は江戸時代までは本人の俗名で表記されることは少なく明治時代になってようやく男性と同じく本人の俗名で表記されるようになったことを示している。



第6図 本人俗名表記における死者の男女比グラフ

では、俗名で表記されることのなかった女性はどのように表記されているのであろうか。それが次の②である。

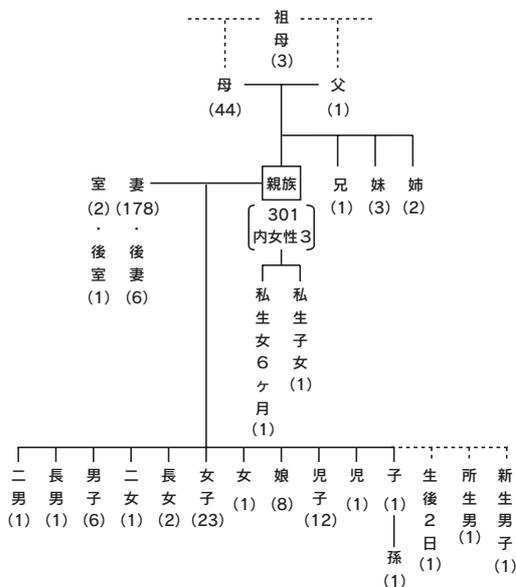
②は、死者の親族の俗名に続けてその親族との関係を表記したもので、その内訳は第11表の通りである。分析対象数304名（うち3名は③と重複）のうち、配偶者187名（61.51%）・母44名（14.47%）と圧倒的に女性が多く、次に子どもが62名（20.39%）と続く。また、第12表の死者の親族の男女比についても、男性296名（97.37%）・女性6名（1.97%）と圧倒的に男性が多い。これは、①で本人の俗名で表記されることのなかった女性および子どもは（大人の）男性との関係（続柄）でしか表記されなかったことを示している。なお、親族を女性とした6名の死者のうち4名は私生子か出産前後に亡くなった児であり（第12表）、特殊な場合に母親としての女性が親族として表記されている。

また、親族関係の表記を基に作成したのが第7図の親族関係図である。旧原田村の完全な親族関係を復元することはできないが、部分的にも多くの家族が抽出できた。

まず、家族構成の中心となる夫婦関係が最も多く、「妻」などの表記から187組、同一親族の「父」「母」の表記から1組の、計188組の夫婦が確認できる。これを1世代の家族とする。なお、

第11表 親族との関係で表記された死者の内訳一覧表

親族関係	表 記	数	備 考
配偶者 187	妻	178	全て男性との関係
	室	2	全て男性との関係
	後妻	6	全て男性との関係
	後室	1	全て男性との関係
一親等 107 (102)	母	44	1例は女性との関係、他は男性との関係
	父	1	男性との関係
	子	1	男性との関係
	児	1	男性との関係
	見子	12	全て男性との関係
	娘	8	全て男性との関係
	女	1	男性との関係
	女子	23	1例は女性との関係で、死者の俗名記載、他は男性との関係
	長女	2	全て男性との関係
	三女	1	男性との関係
	男子	6	1例の俗名は姓だけ、他は男性との関係
	長男	1	男性との関係
三男	1	男性との関係	
(5)	私生子女	1	母親の俗名記載、母親の兄の俗名記載
	私生女6ヶ月	1	母親の俗名記載
	死生子	1	父親の俗名記載
	死産男子	1	両親の俗名記載
	妊娠10ヶ月	1	「同人（女性）の女妊娠10ヶ月」の記載であり、死者は妊婦の可能性もある
二親等 10	姉	2	全て男性との関係
	妹	3	全て男性との関係
	兄	1	男性との関係
	祖母	3	1例の俗名は姓だけ、他は男性との関係
	孫	1	男性との関係
合 計		304	



第7図 親族と死者との関係図
(数字は事例数で、死産3例を除く)

夫婦を姓別にまとめた第13表をみると、25種類の姓のうち、「山内」姓が最も多く、次いで「山崎」「佐藤」と続く。

1世代の家族としては、兄弟・姉妹関係も同一世代の家族であり、「兄」「姉」「妹」の表記で6組、同一親族（主に父親）の複数の子どもたちの関係から6組の、計12組の兄弟・姉妹関係が確認できた。

次に、2世代の家族関係として親子関係がある。親族関係の表記では2種類の親子関係があり、親と親族の45組と、親族と子の62組の、計107組が確認できる。なお、前述した①と関係して、親子関係の親の表記は圧倒的に「母」が多く、また、子供の表記はさまざまである。この2種類の2世代の親子関係を組み合わせることで3世代の家族関係が抽出でき、本資料では8組を確認した。その構成には3種類あり、親族が1代目で「子」「孫」と表記されたもの1組、親族は2代目で「母」「子」と表記されたもの6組、親族は3代目で「祖母」「母」と表記されたもの1組である。

第12表 墓地別死者の親族の性別一覧表

墓地番号	分析対象数	性別内訳			備考
		男性	女性	不明	
1	8	8	0	0	
2	1	1	0	0	
3	1	1	0	0	
4	10	10	0	0	
5	0	0	0	0	
6	18	18	0	0	
7	16	16	0	0	
8	0	0	0	0	
9	0	0	0	0	
10	0	0	0	0	
11	0	0	0	0	
12	23	23	0	0	
13	1	1	0	0	
14	1	0	1	0	女性親族の死者は「女子」で、死者俗名も併記
15	0	0	0	0	
16	1	1	0	0	
17	1	0	1	0	死者は「死生男子」で、女性親族の夫名も記載
18	0	0	0	0	
19	0	0	0	0	
20	0	0	0	0	
21	1	1	0	0	
22	20	20	0	0	
23	2	2	0	0	
24	0	0	0	0	
25	0	0	0	0	
26	1	1	0	0	
27	1	0	0	1	不明は姓のみ記載で、死者は「男子」
28	0	0	0	0	
29					「死亡者なし」と記載
30-1	20	20	0	0	
30-2	6	6	0	0	
30-3	6	6	0	0	
30-4	9	9	0	0	
30-5	14	14	0	0	
30-6	0	0	0	0	
31	0	0	0	0	
32	0	0	0	0	
33	0	0	0	0	
34	1	1	0	0	
又ノ34	0	0	0	0	
35	11	9	1	1	女性親族の死者は「母」 性別不明の名は「祖」で、死者は「母」
36	8	7	1	0	女性親族の死者は「私生女子」
37	9	9	0	0	
38	0	0	0	0	
39	0	0	0	0	
40	5	5	0	0	
41	12	12	0	0	
42	0	0	0	0	
43-1	25	25	0	0	
43-2	5	4	1	0	女性親族の死者は「妊娠10ヶ月」の児
43-3	10	10	0	0	
43-4	4	3	1	0	女性親族の死者は「私生女6ヶ月」の児
43-5	36	36	0	0	
43-6	0	0	0	0	
43-7	15	15	0	0	
44	2	2	0	0	
合計	304	296	6	2	

第13表 姓別夫婦組数一覧表

姓	組数	姓	組数	姓	組数	姓	組数	姓	組数
山内	76	多田	6	久光	3	藤野	2	鹿毛	1
山崎	40	岡部	4	藤島	2	矢田	2	松口	1
佐藤	14	永川	4	大石	2	吉村	2	島	1
横尾	7	山下	3	松尾	2	日下部	1	中島	1
宗貞	7	中村	3	東山	2	原田	1	綾部	1
山崎姓のうち、1つは「死生男子」の親族として両親（夫婦）の俗名記載								合計	188

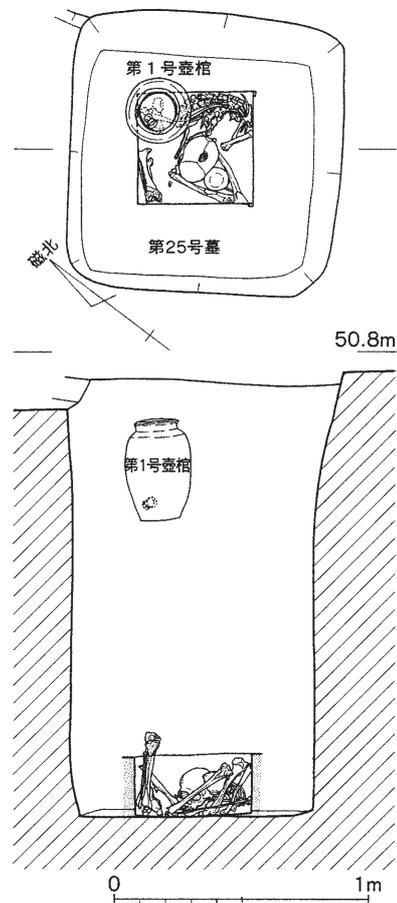
第14表 出産前後の死者一覧表

墓地番号	死者	死亡年	親族姓名の記載	備考
6	新生男子	明治36年	無し	
11	死生子	明治33年	無し	
12	男子死生子	明治33年	無し	
"	死生子	明治43年	有り、男性(父親?)	
17	死生子男子	明治37年	有り、両親	母親翌日死亡
21	死産男子	明治32年	無し	
27	死生子	明治32年	無し	「死生子不名」と記載
30-1	所生男	大正15年	無し	所生は新生の誤り?
"	妊娠10ヶ月	昭和2年	無し	
"	妊娠8ヶ月	昭和5年	無し	
30-3	妊娠9ヶ月	昭和9年	無し	
30-6	妊娠9ヶ月	大正12年	無し	
31	妊娠10ヶ月	昭和2年	無し	
36	死生子	明治34年	無し	
43-2	妊娠10ヶ月	大正3年	有り、母親	母子同日死亡
43-3	生後2日	明治40年	有り、名字のみ	「同生後2日」と記載
"	死産	大正4年	無し	
43-5	妊娠9ヶ月	大正11年	無し	
"	妊娠7ヶ月	昭和3年	無し	
"	妊娠8ヶ月	昭和4年	無し	

③は、死産および出生後早い時期に死亡した子(児)のことである。第14表はその内訳であり、20例のうち妊娠途中死を含めた死産が17例、出生後の死亡3例である。全ての死亡年月日は追記された明治22年以降であるが、それ以前にもあったと考えられる。なお、第17号墓地の「死生子男子」の母親は翌日に死亡しており、また第43号-2墓地の「妊娠10ヶ月」児の母親は同日に死亡している。こうした場合の埋葬法については、原田第40号墓地第25号墓と第1号壺棺の調査事例(第8図)と関連付けることも可能かもしれないが、現段階では確証がない。

以上の死者姓名の表記から墓地ごとに死者の大人・小人別および性別数を表したものが第15表と第9図である。しかし、総死者数3,139名のうち1/3強の1,107名が不明のため、不明を除いた2,032名の死者の内訳をグラフにしたのが第10図の右である。大人と小人との比は1,962名(96.56%) : 70名(3.44%)で、圧倒的に大人が多い。このうち、大人の男女比は男性1,083名(55.20%)・女性877名(44.70%)で、やや男性が多い。次に、小人の男女比は性別不明22名を除けば、女子36名(75%)・男子12名(25%)であり、女子の死亡率が高い。

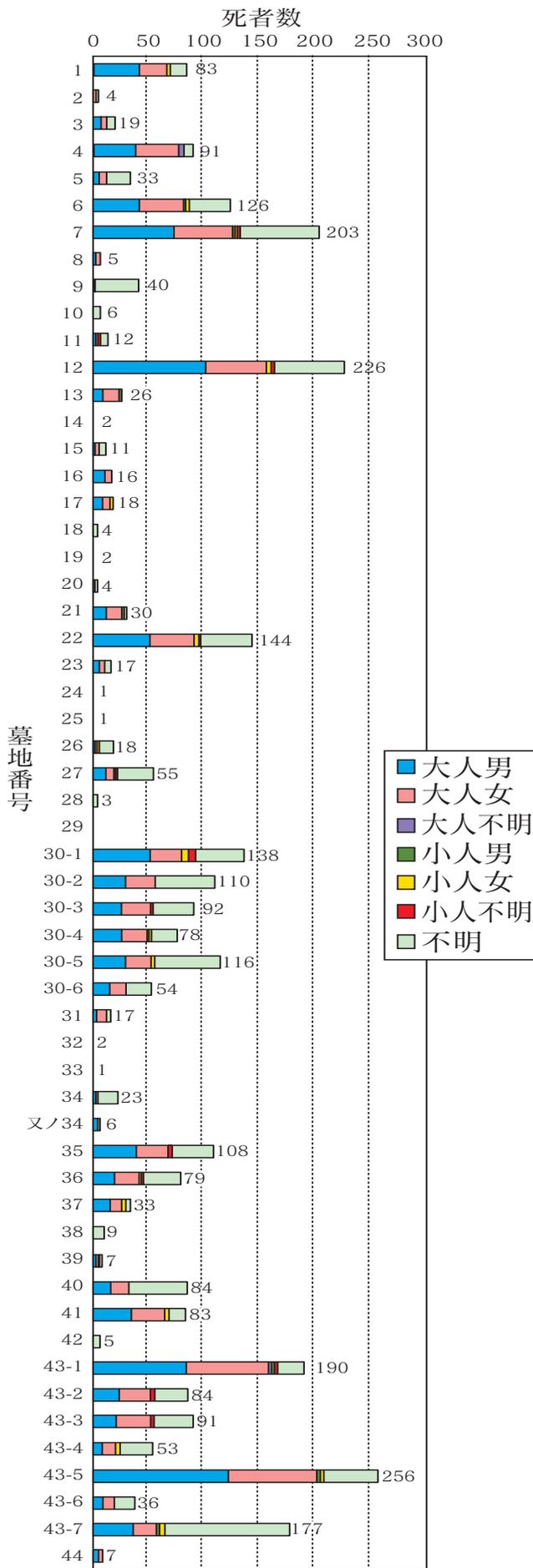
最後に、死者姓名欄に記載された姓(名字)を墓地ごとに整理したのが第16表であり、さらに、姓別に集めたものが第17表である。確認できた姓は全部で113種類あり、「山内」姓が最も多く、次いで「山崎」「佐藤」と続く。これは、前述した夫婦の姓別順位と同じである。このことは、旧原田村における山内・山崎・佐藤各家の存在感がうかがえる。



第8図 原田第40号墓地第25号墓・第1号壺棺実測図(S=1/30)

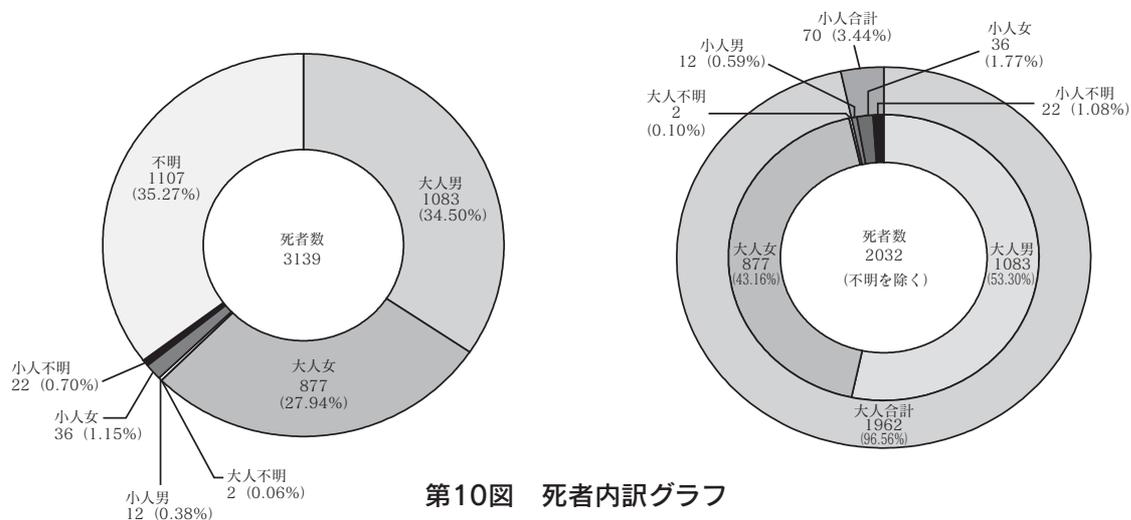
第15表 墓地別死者内訳一覧表

墓地番号	死者数	不明	大人				小人			
			合計	男性	女性	不明	合計	男性	女性	不明
1	83	14	68	43	25	0	1	0	1	0
2	4	2	2	1	1	0	0	0	0	0
3	19	6	13	8	5	0	0	0	0	0
4	91	10	81	39	41	1	0	0	0	0
5	33	22	11	5	6	0	0	0	0	0
6	126	40	83	42	41	0	3	1	2	0
7	203	70	127	74	53	0	6	2	1	3
8	5	0	5	2	3	0	0	0	0	0
9	40	39	1	1	0	0	0	0	0	0
10	6	6	0	0	0	0	0	0	0	0
11	12	7	4	2	2	0	1	0	0	1
12	226	62	159	102	57	0	5	0	3	2
13	26	0	25	10	15	0	1	0	1	0
14	2	0	1	0	1	0	1	0	1	0
15	11	5	6	1	5	0	0	0	0	0
16	16	0	16	11	5	0	0	0	0	0
17	18	0	17	10	7	0	1	1	0	0
18	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0
19	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
20	4	2	2	1	1	0	0	0	0	0
21	30	1	28	13	15	0	1	1	0	0
22	144	46	94	52	42	0	4	0	3	1
23	17	6	11	6	5	0	0	0	0	0
24	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
25	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0
26	18	13	4	2	2	0	1	0	1	0
27	55	32	21	13	8	0	2	1	0	1
28	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0
29	「死亡者なし」と記載									
30-1	138	44	83	51	32	0	11	0	5	6
30-2	110	53	57	32	25	0	0	0	0	0
30-3	92	37	54	28	26	0	1	0	0	1
30-4	78	24	51	27	24	0	3	1	2	0
30-5	116	59	54	32	22	0	3	0	3	0
30-6	54	22	32	16	16	0	0	0	0	0
31	17	4	13	4	9	0	0	0	0	0
32	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
33	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
34	23	19	4	3	1	0	0	0	0	0
又ノ34	6	0	6	5	1	0	0	0	0	0
35	108	37	70	41	29	0	1	0	0	1
36	79	33	44	21	23	0	2	0	1	1
37	33	4	28	16	12	0	1	0	1	0
38	9	9	0	0	0	0	0	0	0	0
39	7	2	5	3	2	0	0	0	0	0
40	84	51	33	16	17	0	0	0	0	0
41	83	14	67	35	32	0	2	0	2	0
42	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0
43-1	190	25	162	84	77	1	3	2	0	1
43-2	84	29	54	24	30	0	1	0	0	1
43-3	91	35	53	22	31	0	3	0	0	3
43-4	53	29	23	10	13	0	1	0	1	0
43-5	256	48	203	123	80	0	5	1	4	0
43-6	36	15	21	10	11	0	0	0	0	0
43-7	177	113	58	37	21	0	6	2	4	0
44	7	0	7	4	3	0	0	0	0	0
合計	3139	1107	1962	1083	877	2	70	12	36	22



第16表 墓地別姓一覧表

墓地番号	所有者	死者数	名字数	名字内訳(数)	不明
1	城山正郎	83	69	山内(29) 永川(24) 松口(11) 城山(3) 久保(1) 久光(1)	14
2	松尾伸太郎	4	2	山内(2)	2
3	山内五市	19	13	山内(12) 初川(1)	6
4	山内篤三郎	91	81	山内(79) 岡部(1) 佐藤(1)	10
5	山内吉作	33	11	山内(4) 緒方(1) 勘解由(1) 高木(1) 多田(1) 前田(1) 味酒(1) 横尾(1)	22
6	原田村共有	126	85	多田(32) 山内(18) 横尾(16) 山崎(9) 吉村(6) 島(3) 金子(1)	41
7	原田村共有	203	133	山内(67) 東山(19) 山崎(9) 松尾(7) 平山(5) 浦山(3) 齊藤(3) 占野(2) 柿原(2) 城本(2) 原(2) 松井(2) 石松(1) 今村(1) 岡部(1) 小山(1) 座親(1) 千々波(1) 時(1) 飛松(1) 永川(1) 永淵(1)	70
8	山内孫吉	5	5	山内(5)	0
9	原田村共有	40	1	内田(1)	39
10	山崎申太郎	6	0		6
11	山崎申太郎	12	4	山崎(4)	8
12	原田村共有	226	163	山内(87) 山下(33) 永川(10) 原田(10) 天本(5) 岸本(3) 山崎(3) 梅木(2) 中島(2) 綾部(1) 大石(1) 大久保(1) 桑野(1) 古賀(1) 村山(1) 八尋(1) 横尾(1)	63
13	山崎半三郎	26	26	山崎(24) 坂田(2)	0
14	山崎申太郎	2	2	梅木(2)	0
15	原田村共有	11	6	山内(2) 府川(1) 田中(1) 長野(1) 林(1)	5
16	柴田興吉	16	16	柴田(16)	0
17	大石吉平	18	18	山崎(9) 大石(8) 山内(1)	0
18	山内孫九郎	4	0		4
19	山内貞次郎	2	0		2
20	原田村共有	4	2	大久保(2)	2
21	佐藤時次郎	30	28	佐藤(27) 福原(1)	2
22	原田村共有	144	98	佐藤(85) 山内(3) 藤島(2) 城戸(2) 中村(2) 末永(1) 吉村(1) 堀江(1) 久保山(1)	46
23	原田村共有	17	12	佐藤(7) 藤島(4) 美和(1)	5
24	原田村共有	1	0		1
25	山内又六	1	1	山内(1)	0
26	中村甚七	18	5	中村(2) 本田(1) 山崎(1) 吉村(1)	13
27	原田村共有	55	22	山内(15) 佐藤(4) 松井(1) 久保山(1) 川口(1)	33
28	佐藤利七郎	3	0		3
29	佐藤利七郎			「死亡者なし」と記載	0
30-1	原田村共有	138	91	山内(56) 城戸(28) 藤島(2) 佐藤(2) 山崎(2) 立花(1)	47
30-2	原田村共有	110	57	山内(47) 中村(10)	53
30-3	原田村共有	92	54	山崎(51) 山内(3)	38
30-4	原田村共有	78	54	山内(50) 藤島(2) 西依(2)	24
30-5	原田村共有	116	57	山内(46) 藤島(7) 高木(2) 熊本(1) 平野(1)	59
30-6	原田村共有	54	31	山内(28) 飛松(2) 平田(1)	23
31	藤島清八	17	12	藤島(11) 古賀(1)	5
32	山内弥四郎	2	0		2
33	山崎半三郎	1	0		1
34	原田村共有	23	5	山内(5)	18
又 34	原田村共有	6	6	山崎(6)	0
35	原田村共有	108	71	山内(23) 浦山(16) 松尾(15) 城本(5) 島(4) 山崎(3) 林(2) 松口(1) 原(1) 伊藤(1)	37
36	原田村共有	79	44	久光(23) 山内(20) 白水(1)	35
37	山崎玄喜	33	29	山崎(29)	4
38	山崎三吉	9	0		9
39	山内伊七郎	7	5	児玉(3) 山内(2)	2
40	原田村共有	84	33	山内(30) 森内(3)	51
41	原田村共有	83	69	山内(50) 松口(9) 平山(5) 岡藤(3) 山崎(1) 永川(1)	14
42	山崎三吉	5	0		5
43-1	原田村共有	190	165	山内(68) 横尾(36) 宗貞(27) 大石(21) 池田(7) 森内(2) 原田(2) 佐伯(1) 八尋(1)	25
43-2	原田村共有	84	55	山内(23) 日下部(15) 鹿毛(10) 末次(3) 末治(1) 酒井(1) 上野(1) 小川(1)	29
43-3	原田村共有	91	55	山崎(21) 山内(11) 藤島(11) 鬼木(9) 岸村(1) 酒井(1) 鶴田(1)	36
43-4	原田村共有	53	24	藤野(13) 石井(5) 山内(3) 山崎(1) 中川(1) 森山(1)	29
43-5	原田村共有	256	207	山崎(122) 山内(22) 矢田(11) 中村(10) 岡部(7) 安恒(5) 高島(4) 河辺(2) 大石(2) 横尾(2) 宗貞(2) 松口(1) 平川(1) 林(1) 吉田(1) 平瀬(1) 福本(1) 吉原(1) 天野(1) 末次(1) 久保山(1) 日下部(1) 鹿毛(1) 児玉(1) 井上(1) 網中(1) 藤野(1) 齊田(1) 大久保(1)	49
43-6	原田村共有	36	19	吉原(7) 瀧本(4) 松本(2) 平山(2) 石井(1) 小川(1) 平島(1) 松石(1)	17
43-7	原田村共有	177	64	山内(38) 山崎(23) 飛松(2) 佐藤(1)	113
44	山内吉作	7	7	山内(6) 寺崎(1)	0
合計		3139	2017		1122



第17表 姓別死者数・死亡年・埋葬墓地一覧表（年は西暦）

姓	死者数	最古年	最新年	墓 地 番 号	備 考
山内	856	1271	1934	1~8、15、17、21、22、25、27、30-①~⑥ 34~36、39~41、43-①~⑤⑦、44	2番目に古い死亡年1584年
山崎	318	1533	1934	6、7、11~13、17、26、30-①③、又ノ34、35、37、41、 43-③~⑤⑦、44	
佐藤	127	1669	1928	4、21~23、27、30-①、43-⑦	
横尾	56	1777	1931	5、6、12、43-①⑤	
藤島	39	1811	1931	22、23、30-①④⑤、31、43-③	
永川	36	1733	1932	1、7、12、41	
多田	33	1756	1934	5、6	
山下	33	1790	1930	12	
大石	32	1820	1934	12、17、43-①⑤	
城戸	30	1758	1920	22、30-①	
宗貞	29	1753	1931	43-①⑤	
中村	24	1772	1921	22、26、30-②、43-⑤	
久光	24	1783	1917	1、36	
松尾	22	1693	1905	7、35	

姓	死者数	最古年	最新年	墓 地 番 号	備 考	姓	死者数	最古年	最新年	墓 地 番 号	備 考
松口	22	1777	1896	1、35、41、43-⑤		本田	1	1764		26	
東山	19	1745	1924	7		美和	1	1771		23	
浦山	19	1781	1927	7、35		勘解由	1	1778		5	
目下部	16	1833	1923	43-②⑤		久保	1	1782		1	
柴田	16	1858	1917	16		平田	1	1834		30-⑥	
藤野	14	1833	1928	43-④⑤		中川	1	1877		43-④	
平山	12	1816	1930	7、41、43-⑥		福原	1	1878		21	
原田	12	1833	1912	12、43-①		前田	1	1890		5	
鹿毛	11	1716	1923	43-②⑤		府川	1	1891		15	
矢田	11	1791	1909	43-⑤		佐伯	1	1891		43-①	
岡部	9	1827	1878	4、7、43-⑤		初川	1	1891		3	
鬼木	9	1850	1914	43-③		熊本	1	1894		30-⑤	
吉村	8	1813	1933	6、22、26		立花	1	1896		30-①	
吉原	8	1913	1932	43-⑤⑥		末治	1	1898		43-②	
池田	7	1844	1913	43-①		桑野	1	1900		12	
城本	7	1902	1931	7、35		田中	1	1900		15	
島	7	1820	1885	6、35		白水	1	1902		36	
石井	6	1898	1920	43-④⑥		座親	1	1903		7	
森内	5	1787	1871	40、43-①		平川	1	1903		43-⑤	
飛松	5	1904	1925	7、30-⑥、43-⑦		千々波	1	1906		7	
天本	5	1905	1931	12		石松	1	1907		7	
安恒	5	1911	1920	43-⑤		伊藤	1	1907		35	
林	4	1911	1929	15、35、43-⑤		末永	1	1908		22	
梅木	4	1876	1930	12、14		堀江	1	1908		22	
大久保	4	1895	1931	12、20、43-⑤		今村	1	1909		7	
児玉	4	1896	1925	39、43-⑤		金子	1	1910		6	
末次	4	1907	1922	43-②⑤		永瀨	1	1910		7	
瀧本	4	1919	1929	43-⑥		長野	1	1910		15	
高島	4	1824	不詳	43-⑤		森山	1	1912		43-④	
高木	3	1823	1900	5、30-⑤		吉田	1	1913		43-⑤	
城山	3	1881	1896	1		時	1	1914		7	
岸本	3	1889	1924	12		平島	1	1915		43-⑥	
岡藤	3	1896	1900	41		緒方	1	1916		5	
原	3	1899	1924	7、35		鶴田	1	1917		43-③	
松井	3	1899	1916	7、27		上野	1	1918		43-②	
久保山	3	1907	1923	22、27、43-⑤		味酒	1	1918		5	
斎藤	3	1904	1911	7		川口	1	1919		27	
中島	2	1691	1695	12		平瀬	1	1919		43-⑤	
八尋	2	1697	1910	12、43-①		平野	1	1919		30-⑤	
坂田	2	1812	1816	13		福本	1	1921		43-⑤	
西依	2	1892	1893	30-④		天野	1	1922		43-⑤	
松本	2	1899	1904	43-⑥		松石	1	1924		43-⑥	
酒井	2	1900	1900	43-②③		網中	1	1926		43-⑤	
占野	2	1906	1908	7		井上	1	1926		43-⑤	
古賀	2	1910	1926	12、31		寺崎	1	1926		44	
小川	2	1913	1920	43-②⑥		斉田	1	1930		43-⑤	
河辺	2	1915	1919	43-⑤		村山	1	1930		12	
柿原	2	1934	1934	7		小山	1	1932		7	
綾部	1	1689		12		内田	1	不詳		9	
岸村	1	1753		43-③		113姓、死者2017名、1205~1934年、32ヶ所					

また、第17表には各姓の死亡年月日の最古年と最新年を併記しているが、これは旧原田村における各姓の存続期間を把握するためであり、次の死亡年月日において検討する。

第18表 墓地別単位期間死者数一覧表

墓地番号	最古年	最新年	対象数	~1600	~1700	~1800	~1900	~2000	不確定	不明	備考
1	1662	1918	83	0	4	22	45	5	1	6	不確定は「天保16年」
2			4	0	0	0	0	0	2	2	不確定は「宝永11年」
3	1853	1923	19	0	0	0	8	1	1	9	不確定は「延保3年」
4	1709	1920	91	0	0	9	60	13	0	9	
5	1778	1922	33	0	0	2	3	7	0	21	
6	1725	1934	126	0	0	15	60	20	3	28	不確定は「延享12年」「延享13年」「文久10年」
7	1582	1934	203	2	3	50	63	34	3	48	不確定は「元(文)久2年」「安政10年」「明和10年」
8	1892	1910	5	0	0	0	2	2	0	1	
9			40	0	0	0	0	0	0	40	全て「不明」
10			6	0	0	0	0	0	0	6	全て「不明」
11	1654	1900	12	0	4	2	1	0	0	5	
12	786	1933	226	1	12	36	84	43	2	48	2番目に古い年号は「慶安5年」(1652) ~1600は「延暦5年」 不確定は「寛享4年」「嘉永8年」
13	1812	1917	26	0	0	0	23	3	0	0	
14	1876	1886	2	0	0	0	2	0	0	0	
15	1891	1912	11	0	0	0	3	3	0	5	
16	1858	1917	16	0	0	0	12	4	0	0	
17	1857	1934	18	0	0	0	6	11	0	1	
18			4	0	0	0	0	0	0	4	全て「不明」
19			2	0	0	0	0	0	0	2	全て「不明」
20	1895	1910	4	0	0	0	1	1	0	2	
21	1798	1927	30	0	0	1	23	4	1	1	不確定は「□□□年」
22	1725	1928	144	0	0	26	59	22	2	35	不確定は「大□□年」「□□3年」
23	1669	1871	17	0	1	1	8	0	0	7	
24			1	0	0	0	0	0	0	1	「不詳」
25			1	0	0	0	0	0	0	1	「不詳」
26	1764	1933	18	0	0	2	1	2	0	13	
27	1898	1921	55	0	0	0	4	19	0	32	
28			3	0	0	0	0	0	0	3	全て「不明」
29											「死亡者なし」のため記載なし
30-1	1747	1930	138	0	0	18	72	19	1	28	不確定は「延享10年」
30-2	1762	1917	110	0	0	4	48	1	0	57	62番は「年号不詳」で月日のみ記載
30-3	1627	1934	92	0	3	21	33	12	1	22	不確定は「明和15年」
30-4	1616	1927	78	0	4	26	35	9	0	4	
30-5	1707	1931	116	0	0	13	43	14	0	46	
30-6	1795	1925	54	0	0	2	24	6	0	22	
31	1867	1927	17	0	0	0	10	3	0	4	
32			2	0	0	0	0	0	0	2	全て「不詳」
33			1	0	0	0	0	0	0	1	「不詳」
34	1652	1850	23	0	1	5	4	0	0	13	15番は「年号不詳」で月日のみ記載
又ノ34	1881	1924	6	0	0	0	1	5	0	0	
35	1682	1931	108	0	4	18	40	19	2	25	不確定は「天明13年」「天明15年」
36	1648	1918	79	0	3	9	29	15	1	22	不確定は「延慶8年」
37	1533	1883	33	4	1	12	12	0	0	4	~1600は「天正1年」「天正19年」「天文2年」「天文7年」
38			9	0	0	0	0	0	0	9	全て「不明」
39	1895	1924	7	0	0	0	2	3	0	2	
40	1271	1907	84	1	0	18	21	2	0	42	2番目に古い年号は「享保2年」(1717) ~1600は「文永8年」
41	1584	1919	83	1	0	2	53	10	2	15	~1600は「天正12年」 不確定は「天保17年」「安政10年」
42			5	0	0	0	0	0	0	5	全て「不詳」
43-1	1753	1920	190	0	0	7	118	39	0	26	21番は「年号不詳」で月日のみ記載
43-2	1705	1920	84	0	0	16	44	13	1	10	不確定は「正徳7年」
43-3	1752	1920	91	0	0	6	29	22	1	33	不確定は「延享11年」
43-4	1661	1920	53	0	3	1	12	12	0	25	
43-5	1718	1934	256	0	0	40	124	68	2	22	不確定は「万延3年」「天保16年」
43-6	1898	1932	36	0	0	0	2	19	0	15	
43-7	1662	1918	177	0	4	25	38	7	1	102	96番は「年号不詳」で月日のみ記載 不確定は「安政10年」
44	1826	1926	7	0	0	0	6	1	0	0	
合計			3139	9	47	409	1268	493	27	886	

(5) 死亡年月日 (第2・8・17~22表、第11~14図)

死亡年月日には、元号年と月日が記載されている。分析対象数は3,139であり、死者姓名と同じく墓標数より14多い(第2表)。

第19表 死者数と墓地数の対比表

西暦年	死者数	使用墓地数	新設墓地数	新設墓地番号	備考
～1600	9	5	5	7・12・37・40・41	
～1700	47	11	8	1・11・23・30 (-2・3)・34・35・36・43 (-4・7)	前代墓地のうち2ヶ所は死者なし
～1800	409	18	6	4・5・6・21・22・26	前代墓地のうち1ヶ所は死者なし
～1900	1268	32	13	3・8・13・14・15・16・17・20・27・31・又/34・39・44	
～2000	493	27	0		前代墓地のうち5ヶ所は死者なし
不明・不確定	913				
合計	3139	32	45ヶ所のうち13ヶ所 (2・9・10・18・19・24・25・28・29・32・33・38・42) は死亡年不詳・不確定・死者なし		

第18表は墓地ごとに死亡年の最古年と最新年を記し、さらに江戸時代を中心として100年の単位期間の死者数を表したものである。また、墓碑の死亡年月日の解読ができずに「不明（詳）」と記載されたものが886ある。記載された元号年のうち、改元の初年を前の年号の通年で記載されたものは正しい年号として扱ったが、改元2年以後も前の年号の通年で記載されたものは「不確定」として扱った。また、歴史学上確認できない年号も「不確定」として扱った。

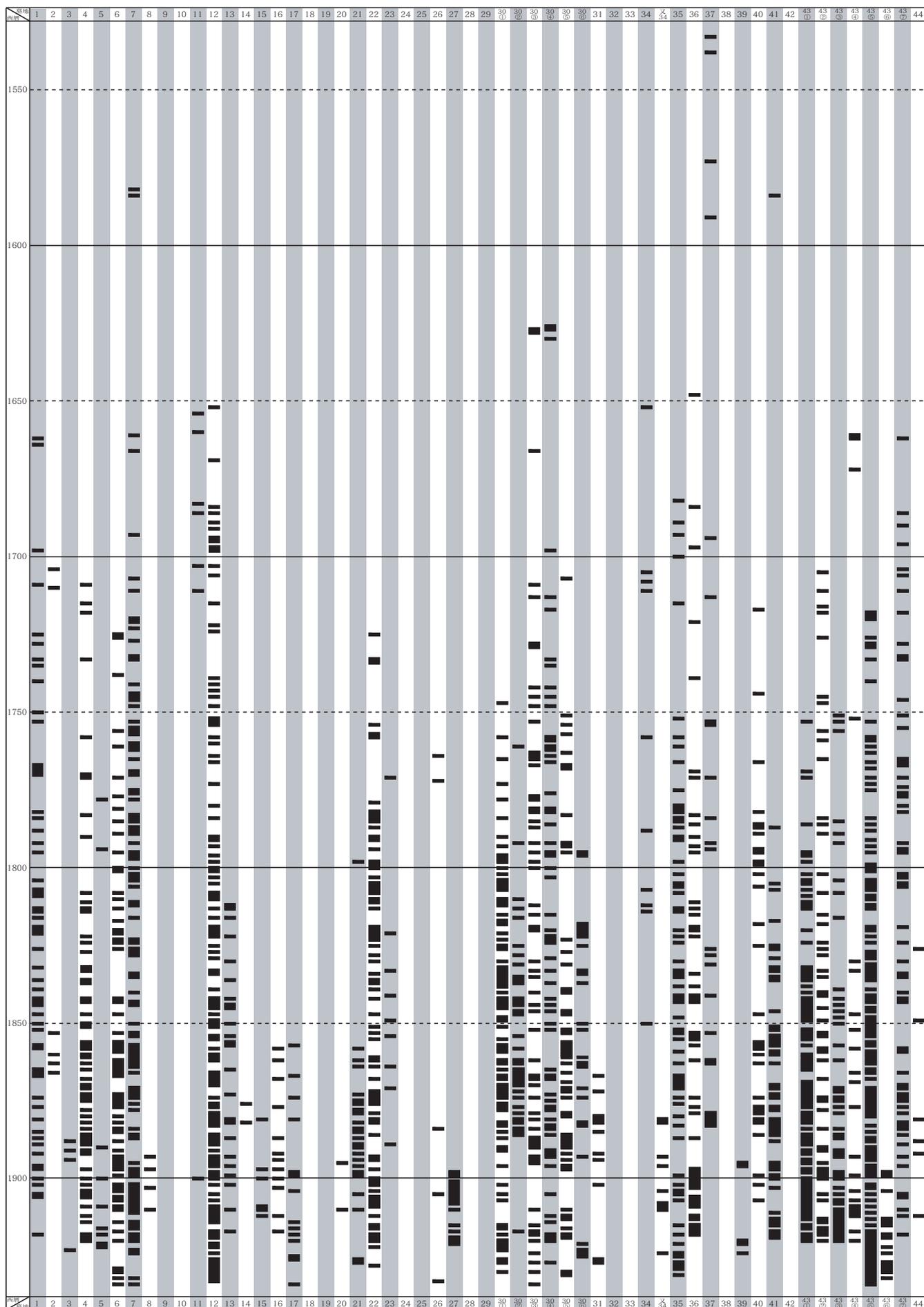
第18表を基にして、死亡者数と墓地数の対比表（第19表）や、墓地ごとの死亡年分布図（第11図）および世紀ごとの墓地の位置図（第12図）を作成し、これらの図表から以下のことが確認できる。

- ① 全体的にみると、16世紀以前（～1600年）9名→17世紀（1601～1700年）47名→18世紀（1701～1800年）409名→19世紀（1801～1900年）1,268名と、死者が著しく増加している（第18・19表）。ただし、20世紀（1901～2000年）では減少しているが、これは本資料の追記が昭和9（1934）年までの34年間だけの数であり参考にはならない。
- ② 墓地の死亡年の最古年と最新年の間をその墓地の使用期間と見ることができる。特に、最古年を墓地の使用開始（開設）年としてみると、死者の増加に対応して新たな墓地が開設されていることがわかる（第19表）。
- ③ 旧原田村の墓地の位置図である第12図をみると、伯東寺を含めて宿場内には墓地はなく、すべて周辺の丘陵上あるいは斜面に位置している。
- ④ 開設時期を世紀ごとに概観すると、古くは宿場近くに営まれているが、新しくなるに従い周辺に拡大している。特に、死者が著しく増加した19世紀には宿場より遠く南側に離れた山中にも開設されている（第12図）。

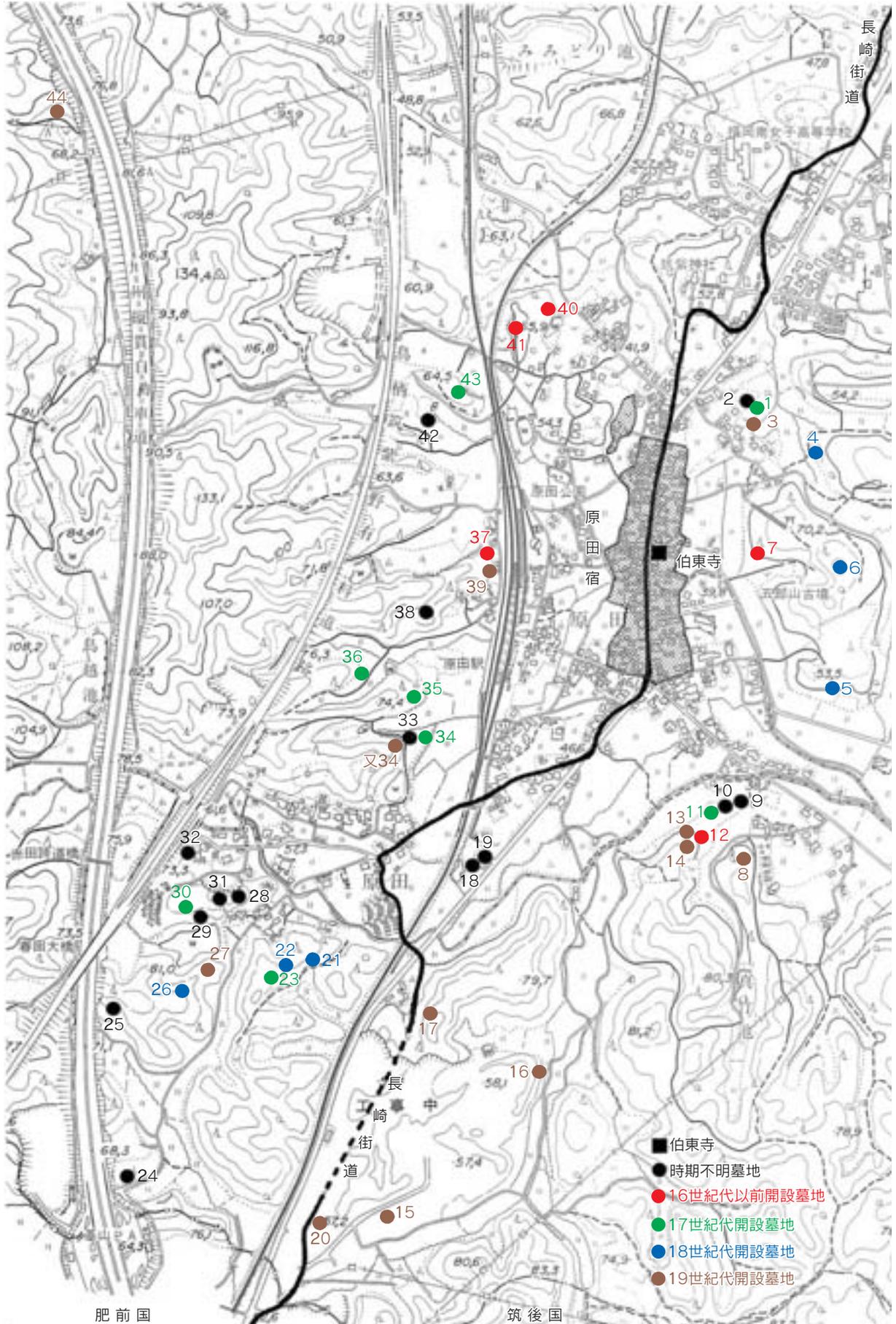
次に、性別の死亡年の最古年と最新年（第17表）から姓（＝家？）別の存続期間を想定して作成したのが第13図であり、以下のことが確認できる。

- ⑤ 最も古い死者の姓は「山崎」であり、次に「山内」「佐藤」が古く、いずれも昭和まで存続している。これは、性別夫婦組数（第13表）および性別死者数（第17表）で述べた、旧原田村における「山崎」「山内」「佐藤」の存在感が長い歴史に裏打ちされていることを示している。
- ⑥ 逆に、江戸前期の「綾部」1名・「中島」2名や、中期の「岸村」1名・「本田」1名・「美和」1名・「勘解由」1名・「久保」1名などは、単発的な存在であり世代の継続が確認できない。

これは宿場における役人の移動と関係しているのであろうか。



第11図 墓地別死亡年分布図



第12図 開設時期別墓地分布図 (S = 1/10,000) (文1より改変)

第20表 時代別姓出現率一覧表

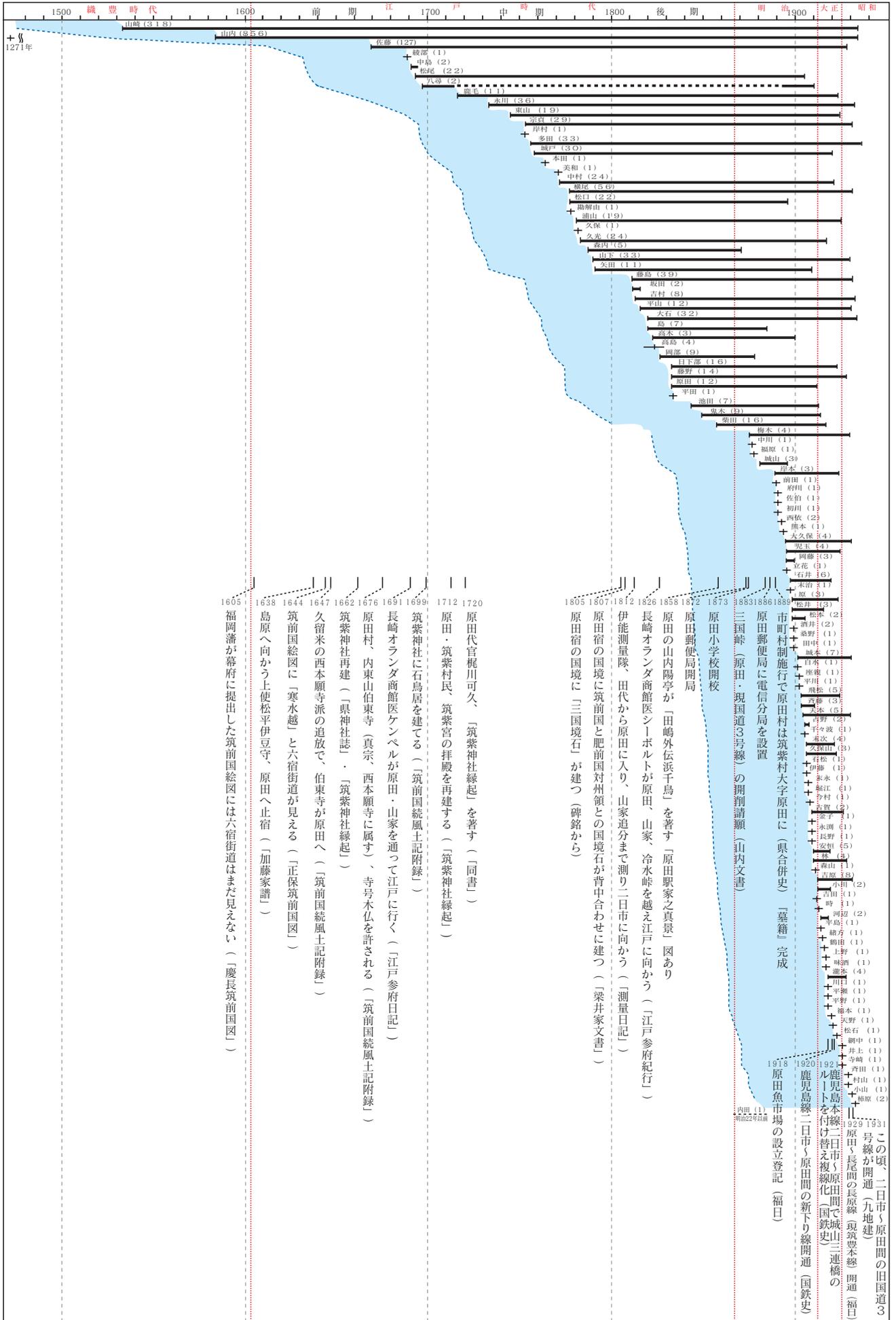
時代	西暦年	期間	姓数	出現率(期間/姓数)	備考
江戸期以前	1533~1600年	68年間	2	34年	最古年は第37号墓地の「山崎」姓を採用
江戸前期	1601~1700年	100年間	5	20年	
江戸中期	1701~1800年	100年間	19	5.26年	
江戸後期	1801~1867年	67年間	16	4.19年	
明治期	1868~1911年	44年間	45	0.98年	
大正期	1912~1925年	14年間	18	0.78年	
昭和期	1926~1934年	9年間	7	1.29年	最新年は追記の最終年昭和9年
合計・平均	1533~1934年	402年間	112	3.59年	

⑦ 特に、旧原田村における人の出自と消長は、近世と近代では対照的である。第13図をみると、江戸期には非常に緩やかに姓(=家?)が増えて、その大半が世代継続している。これに対して、明治期からの近代においては短期間に多くの新たな姓が出現しているが、その大半は単発的で世代継続していない。具体的には第20表の時代別出現率をみると、江戸前期以前は20~34年に1姓であったのが、江戸中後期には5年前後に1姓とやや出現率が高くなっており、さらに、明治・大正期には1年足らずで1姓が出現している。

第21表は原田第1・2・40・41号墓地の調査において出土した墓石のうち、墓碑銘に死亡時の年齢(行年)が記されたもの44例をまとめたものであり、右横には各区分での平均年齢を表示している。この平均年齢のうち、近世大人の58歳と近代大人54歳を第13図上の死亡最古年から遡らせて青線を結んでみた。^{註6)}この青線から死亡最古年までの間(アミ部分)が各姓の最古死亡者の平均的な生存期間となり、この期間内に各姓の初代が旧原田村に住み着いたと仮定すれば、以下のことが想定できる。

- ⑧ 第13図の17世紀(江戸前期)での死亡者は前代から継続していた「山崎」「山内」の2姓に加えて、17世紀後半には「佐藤」「綾部」「中島」「松尾」「八尋」の5姓が出現している。これに生存期間58年を含めてみると、17世紀第2四半期頃からの人の流入が確認できる。この時期は、『二日市宿庄屋覚書』と『黒田家譜』の内容から原田宿の起源とされている寛永年間(1624~1643年)の終わり頃に近い。^{文5・6)}これは、寛永14・15(1367・1368)年の島原の乱以後の原田宿の整備に伴う人(役人?)の動きであろうか。
- ⑨ 死亡最古年では、西暦1800年を境に江戸中期と後期の間若干(20年間)の断絶がみられるが、中・後期とも一定の姓(家?)の増加傾向を示している。これに生存期間58年を含めると、江戸前期後半から後期前半までの旧原田村は比較的穏やかで安定した状況だったと思われる。
- ⑩ これに対し、明治以降の近代の死亡最古年に生存期間54年を含めると、著しい人の流入は江戸後期後半あるいは幕末からということになる。しかし、その姓の著しい出現率と単発性からすると、近代における死亡最古年に旧原田村における生存期間54年を含める必要はないと考える。恐らく、旧原田村では明治期以降の近代化に伴って、近世の宿場とは異なった状況で人の動きがあったものとする。

旧筑前国御笠郡原田村の『墓籍』について



第13図 性別死亡年分布図 (カッコ内数字は死者数)

第21表 原田第1・2・40・41号墓地出土墓石の死者年齢および平均年齢一覧表

墓地番号	墓石番号	性別	年齢	死亡年(西暦)	
第1号	第1号	女	73	慶応2(1866)年	
	第2号	女	73	嘉永5(1852)年	
	第3号	男	81	嘉永3(1850)年	
	第7号	女	49	慶応3(1867)年	
	第18号	女	47	明治33(1900)年	
	第19号	女	25	明治30(1897)年	
	第21号	女	75	明治32(1899)年	
	第22号	男	68	明治20(1887)年	
	第23号	男	4	明治35(1902)年	
		男	52	明治38(1905)年	
		女	56	大正6(1917)年	
		女	22	大正7(1918)年	
	第33号	女	70	元治2(1865)年	
	第36号	男	55	明治29(1896)年	
	第43号	女	20	天保15(1844)年	
	第44号	女	36	明治20(1887)年	
	第45号	女	6	明治22(1889)年	
	第46号	男	11	明治10(1877)年	
	第40号	第14号	女	33	明治7(1874)年
			男	74	明治40(1907)年
第41号	第3号	男	49	安政2(1855)年	
	第5号	男	55	明治29(1896)年	
	第9号	男	20	明治10(1877)年	
	第20号	男	88	明治11(1878)年	
	第26号	女	4	不明	
	第27号	女	80	明治11(1878)年	
	第32号	女	6	不明	
	第33号	女	57	明治14(1881)年	
	第43号	女	77	大正6(1917)年	
	第45号	女	47	大正7(1918)年	
	第47号	男	66	明治32(1899)年	
	第61号	女	61	慶応4(1868)年	
	不明1	男	2	文政9(1826)年	
	不明2	男	27	明治19(1886)年	
	不明3	男	34	明治28(1895)年	
	不明4	男	4	大正8(1919)年	
	不明5	女	1	万延1(1860)年	
	不明8	女	40	安政2(1855)年	
	不明9	男	7	大正2(1913)年	
	不明11	女	4	天保4(1833)年	
不明13	男	84	明治15(1882)年		
不明15	男	70	明治36(1903)年		
不明16	女	50	天保6(1835)年		
不明19	男	72	文政9(1826)年		

区分	死者数	年齢合計	平均年齢
全体	44	1935	43.977

大人	34	1886	55.471
小人	10	49	4.900

男性	20	923	46.150
女性	24	1012	42.167

大人男性	15	895	59.667
大人女性	19	991	52.158

小人男性	5	28	5.600
小人女性	5	21	4.200

近世	14	645	46.071
大人	11	638	58.000
.....男性	3	202	67.333
.....女性	8	436	54.500
小人	3	7	2.333
.....男性	1	2	2.000
.....女性	2	5	2.500

近代	28	1280	45.714
大人	23	1248	54.261
.....男性	12	693	57.750
.....女性	11	555	50.455
小人	5	32	6.400
.....男性	4	26	6.500
.....女性	1	6	6.000

第41号墓地の女子2名の死亡年は不明

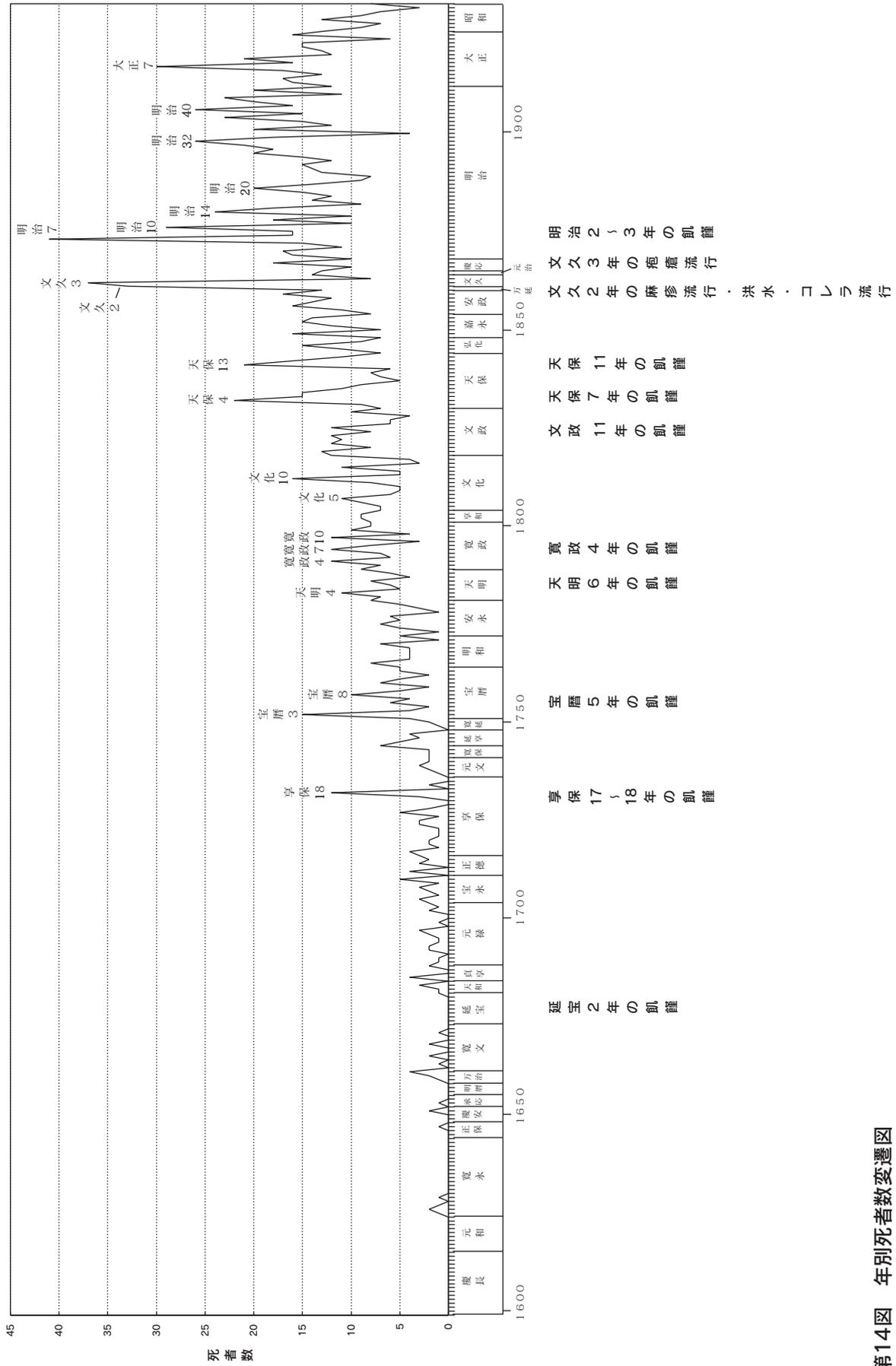
最後に、旧原田村の年ごとの死亡者数とその内訳を表したものが第22表であり、そのうち江戸時代以降の年ごとの死亡者数の変遷をたどったのが第14図である。この図表から以下のことが窺える。

- ① 全体的にみると、死亡者数も徐々に増加しているが、1600年から1750年までは毎年ほぼ5名以下で推移しているが、1750年から1900年までは増減の変動を繰り返しながらも5名前後から20名前後の数で増加している。これは、先の性別死亡者数でも述べたように、旧原田村における近世の人口増加を裏付けているものと考えられる。
- ② なお、前後年の死亡者数に比べて著しく死亡者数が突出する年がある。これを災害との関係でみると^{註7)}、享保18年は「享保17・18年の飢饉」、宝暦3・8年は「宝暦5年の飢饉」、天明4年は「天明6年の飢饉」、天保4・13年は「天保7・11年の飢饉」の影響を考えてみた。しかしながら、それ以外の死亡者数突出年は必ずしも災害史の飢饉年とは合致せず、確実性に乏しい。
- ③ 幕末から近代においても著しい死亡者数の突出がいくつもみられるが、明確に説明できない。

第22表 年別死者内訳一覧表

西暦	和 暦	総計	大 人				小 人				不明合計
			合計	女	男	不明	合計	女	男	不明	
786	延暦05	1									1
1271	文永08	1	1								
1533	天文02	1	1	1							
1538	天文07	1	1								
1573	天正01	1	1								
1582	天正10	1									1
1584	天正12	2	2		2						
1591	天正19	1	1								
1626	寛永03	1	1								
1627	寛永04	2	1	1							1
1628	寛永05	1									1
1630	寛永07	1	1	1							
1648	慶安01	1									1
1652	慶安05	2	1	1							1
1654	承應03	1	1	1							
1660	万治03	1	1								
1661	寛文01	2									2
1662	寛文02	4	2	2							2
1664	寛文04	1	1								
1666	寛文06	2	1	1							1
1669	寛文09	2	1	1							1
1672	寛文12	1									1
1682	天和02	1									1
1683	天和03	1									1
1684	天和04・貞享01	3	2	2							1
1686	貞享03	4	3	1	2						1
1689	元禄02	2	1	1							1
1690	元禄03	1	1								
1691	元禄04	1	1	1							
1693	元禄06	2	1	1							1
1694	元禄07	2	2	2							
1695	元禄08	1	1	1							
1696	元禄09	1	1								
1697	元禄10	2	1	1							1
1698	元禄11	3	1	1		1	1				1
1700	元禄13	1									1
1703	元禄16	2									2
1704	宝永01	1	1	1							
1705	宝永02	2									2
1706	宝永03	3	2	2							1
1707	宝永04	1									1
1708	宝永05	2	1	1							1
1709	宝永06	3	1	1							2
1710	宝永07	1									1
1711	正徳01・宝永08	5	1	1							4
1713	正徳03	4	1								3
1715	正徳05	3	2	2							1
1716	享保01	2	1	1							1
1717	享保02	3									3
1718	享保03	4									4
1719	享保04	1									1
1720	享保05	2	1	1							1
1721	享保06	2	1	1							1
1722	享保07	1	1								
1723	享保08	1	1								
1724	享保09	1	1								
1725	享保10	3									3
1726	享保11	3									3
1727	享保12	1	1	1							
1728	享保13	5	2	2							3
1729	享保14	2									2
1732	享保17	3	1								2
1733	享保18	12	8	3	5						4
1735	享保20	2	2	1	1						
1738	元文03	1									1
1739	元文04	2									2
1740	元文05	3	1								2
1741	寛保01	2	1								1
1742	寛保02	2	2	1							
1743	寛保03	2	2	1							
1744	寛保04・延享01	2	1	1							1
1745	延享02	7	3	1	2						4
1746	延享03	5	3	1	2						2
1747	延享04	3									3
1748	延享05・寛保01	4	4	4							
1750	寛延03	1	1								
1751	寛延04	2	1	1							1
1752	宝暦02	4	2	1	1						2
1753	宝暦03	15	8	2	6						7
1754	宝暦04	4	3	2	1						1
1755	宝暦05	2	2	2							
1756	宝暦06	6	4	2	2						2
1757	宝暦07	4	2	2							2
1758	宝暦08	10	6	1	5						4
1759	宝暦09	5									5
1760	宝暦10	2	2	1	1						
1761	宝暦11	7	2	1	1						5
1762	宝暦12	5	3	3							2

西暦	和 暦	総計	大 人				小 人				不明合計
			合計	女	男	不明	合計	女	男	不明	
1763	宝暦13	2	1	1							1
1764	宝暦14・明和01	5	4	1	4						1
1765	明和02	5	3	1	2						2
1766	明和03	8	3	1	2	1	1				4
1767	明和04	4	1	1	1						3
1768	明和05	4	3	1	2						1
1769	明和06	4	1	1							3
1770	明和07	4	4	4							
1771	明和08	7	3	3							4
1772	明和09	1	1	1							
1773	安永02	5	2	2							3
1774	安永03	1									1
1775	安永04	5	3	3							2
1776	安永05	7	2	2							5
1777	安永06	5	4	2	2						1
1778	安永07	6	4	3	1						2
1779	安永08	1	1	1							
1780	安永09	3	2	1	1						1
1781	天明01	5	3	3							2
1782	天明02	8	5	2	3						3
1783	天明03	7	4	1	3						3
1784	天明04	11	5	2	3						6
1785	天明05	5	3	1	2						2
1786	天明06	6	2	1	1						4
1787	天明07	8	6	2	4						2
1788	天明08	4	3	3							1
1789	天明09・寛政01	6	5	1	4						1
1790	寛政02	9	5	3	2						4
1791	寛政03	7	6	2	4						1
1792	寛政04	12	9	5	4						3
1793	寛政05	6	3	1	2						3
1794	寛政06	7	2	1	1	1	1				4
1795	寛政07	12	10	6	4						2
1796	寛政08	8	5	1	4						3
1797	寛政09	3	2	2							1
1798	寛政10	12	9	4	5						3
1799	寛政11	4	3	1	2						1
1800	寛政12	10	7	5	2						3
1801	享和01	8	5	3	2						3
1802	享和02	8	4	2	2						4
1803	享和03	9	8	3	5						1
1804	文化01	9	7	1	6						2
1805	文化02	7	7	5	2						
1806	文化03	7	3	2	1						4
1807	文化04	9	8	4	4						1
1808	文化05	11	6	3	3						5
1809	文化06	6	4	2	2						2
1810	文化07	5	4	1	3	1					1
1811	文化08	5	4	1	3						1
1812	文化09	8	5	2	3	1					2
1813	文化10	16	13	5	8	1	1				2
1814	文化11	5	4	1	3						1
1815	文化12	5	3	1	2						2
1816	文化13	11	11	4	7						
1817	文化14	3	2	2							1
1818	文化15・文政01	4	3	1	2						1
1819	文政02	12	10	3	7						2
1820	文政03	13	11	5	6	1	1				1
1821	文政04	8	7	2	5	1					1
1822	文政05	12	11	5	6						1
1823	文政06	11	6	1	5	3	2				2
1824	文政07	12	10	3	7						2
1825	文政08	8	7	2	5	1	1				
1826	文政09	12	11	2	9						1
1827	文政10	6	6	2	4						
1828	文政11	6	6	2	4						
1829	文政12	4	4	1	3						
1830	文政13	10	6	3	3						4
1831	天保02	7	6	4	2						1
1832	天保03	9	7	2	5						2
1833	天保04	22	18	6	12	3	3				
1834	天保05	15	13	4	9	2	1				1
1835	天保06	15	14	4	10						1
1836	天保07	11	11	7	4						
1837	天保08	9	9	3	6						
1838	天保09	5	5	3	2						
1839	天保10	7	6	1	5	1	1				
1840	天保11	8	6	2	4	2	2				
1841	天保12	6	6	3	3						
1842	天保13										



4. まとめ

以上、明治22年に編集された旧原田村の『墓籍』について、記載された項目ごとに集成・分析を行った。項目ごとの個別的な分析であったためまとまりがつかなかったが、少し感じたことを述べてまとめにかえたい。

- ① 墓地番号は第1～44号のうち、第30号墓地と第43号墓地はそれぞれ枝番号を持つが、それぞれの枝番の墓地の地番と面積はすべて同じ標記であり、枝番の墓地は独立することなく合わせて同一墓地である。しかし、「又ノ第34号」は「第34号」とは別の地番で面積も異なっており、別々の単独墓地とすべきである。よって、原田地区には45ヶ所の墓地が存在したことになる。ただし、又ノ第34号墓地は明治29年以降に使用されており、明治22年の『墓籍』編集時には44ヶ所の墓地が存在していた。
- ② 墓地所有者については、本来個人所有であったものが村共有に代わったのではないかと考えた。しかし、第30・43号墓地のような大規模墓地の存在や、使用当初から「共有」であった明治期の又ノ第34号墓地の存在から、近世における旧原田村の共同墓地(郷墓)の存在も否定できない。
- ③ 墓標については、追記分の墓標の分析から、埋葬当初の墓標は通常木標であったことが明示できた。しかし、木標から石碑に建て替える時期を年忌法要と関連付けて検討したが、典型的な建て替え時期を把握することはできなかった。
- ④ 坪数は、墓の占地範囲を示すものと考えていたが、本資料についていえば調査時に目視できた墓石の大きさを目安にして記録された感じを受ける。
- ⑤ 死者姓名からは実に多くの情報が得られた。特に印象的であったのが、大人男性と大人女性・小人との扱いの違いである。いわゆる「女・子ども」は、江戸時代では自分の名前(本人俗名)を墓石に刻んではもらえずに親族(主に大人男性)との続柄でしか表現されず、明治時代以降ようやく女性も男性と同様に本人俗名で墓碑に刻まれるようになったことが、分析から明示できた。
- ⑥ 死亡年月日も他の項目と結びつけることで、さまざまな分析を試みることができた。特に、性別と死亡年を組み合わせた結果、近世と近代における対照的な人・家の出自と消長が明示できた。これは、旧原田宿を含む旧原田村における近世と近代の異なる状況の一端を窺わせるものであろう。

先に、分析によって得られた情報と結果は完全なものではないことを前提としておいたが、やはりその通りとなった。1冊の『墓籍』という限られた資料の分析において、分析対象の1/3前後が不明(詳)であった死者姓名・死亡年月日に関しては、残り2/3の情報をもって旧原田村の真の姿とは言い切れない。

また、本資料は後世に調査され記録として残された資料であり、人の死に直接関わって残された資料(過去帳・墓地・墓石・位牌など)ではない。ここに本資料の限界があり、逆に、火災によって過去帳を失った現在においては重要な参考資料であることが改めて認識できた。

また、参考資料として補うものとして墓碑銘を刻んだ墓石がある。原田地区は昭和から平成にか

けて大規模な区画整理事業が行われ、既に20ヶ所の墓地が改葬され消滅している。JR鹿児島本線より西側に残された墓地の調査は、本資料を補い、旧原田村の家々と人々を復原する意味において、切に望まれる。

最後に、本資料の公開にあつたては、伯東寺前住職である小山憲栄氏のご理解とご協力を得た。また、本稿を書くにあつては、本資料の解読とデータの取り扱い方などについて筑紫野市歴史博物館の山村淳彦氏より多くの指導・助言を受けた。末筆ながら、両氏には感謝いたします。

註釈

- 1、浄土真宗本願寺派。山号は「日東山」。正保4（1647）年、筑後国竹野郡筒井村伯東寺より原田に移転。（文2）
- 2、明治29年以降に墓地として使用された又ノ第34号墓地の台帳には「筑紫郡筑紫村大字原田」と記載されている。これは、明治29年4月1日付けで「御笠郡」は「筑紫郡」になったためである。
- 3、『墓籍』には「死者姓名」と記載されているが、「死者姓名」の意と考える。
- 4、年忌数は、死後1年目の「1周忌」、その翌年を「3回忌」として、以後5・7・13・17・25・33・50回忌とした。（文3）
- 5、本来は墓石の配置図と『墓籍地図』の墓標配置図を重ね合わせて対比すべきであるが、不確定な部分もあり、今回は墓石の墓標銘（死者姓名・死亡年月日）と一致した『墓籍』の坪数だけを使用した。
- 6、ここでは、大人だけの平均年齢を採用し、小人は除いた。また、近世・近代における姓の消長に著しい違いがあるため、平均年齢も近世・近代別々に採用した。
- 7、立石碧氏の災害関係資料（文7）、山村淳彦氏の飢饉に関する発表資料（文8・9）、『筑紫野市史 年表』（文10）の近世・近代を参考にした。

文献

- 1、『原田第1・2・40・41号墓地 上巻 -原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告1-』筑紫野市文化財調査報告書第77集 筑紫野市教育委員会 2003
- 2、筑紫野市史編さん委員会 『筑紫野市史 民俗編』 524頁 筑紫野市 1999
- 3、文献2 425頁
- 4、山中耕作編集 『福岡県筑紫野市』 西南学院大学民俗調査報告第3輯 125頁 西南学院大学国語国文学会民俗学研究会 1984
- 5、山村淳彦編 『筑前原田宿 -歴史資料調査-』 筑紫野市文化財調査報告書第44集 7頁 筑紫野市教育委員会 1994
- 6、近藤典二 「第4章 街道と宿駅」 『筑紫野市史 下巻 近世・近現代』 361頁 筑紫野市 1999
- 7、立石 碧 『福岡県近世災異誌』 「福岡県近世災異誌」刊行会 1992
- 8、山村淳彦 「飢饉について」 八女市郷土史講座発表資料 1990
- 9、山村淳彦 「近世福岡の飢饉について -かつて飢えた時代があった-」 春日市奴国の丘歴史資料館公開講座発表資料 2003
- 10、筑紫野市史編さん委員会 『筑紫野市史 年表』 筑紫野市 1999

報告書抄録

ふりがな	はるだだい1・2・40・41ごうぼち ちゅうかん							
書名	原田第1・2・40・41号墓地 中巻							
副書名	原田駅前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	2							
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第79集							
編著者名	鷲山智英・唐木田芳文・櫻木晋一・比佐陽一郎 長岡英一・伴 清治・馬嶋秀行・森山栄一							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号							
発行年月日	平成16年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はるだだい1ごうぼち 原田第1号墓地	ふくおかけん 福岡県 ちくしのし 筑紫野市 おおあさ 大字原田 40ばんち 40番地	402176		33°27'18"	130°32'39"	1989.2 ~1991.7	148	原田駅前 土地区画 整理事業
はるだだい2ごうぼち 原田第2号墓地	42ばんち 42番地			33°27'18"	130°32'37"	1989.2 ~1990.12	67	
はるだだい40ごうぼち 原田第40号墓地	2615ばんち 2615番地			33°27'23"	130°32'23"	1988.11 ~1989.10	403	
はるだだい41ごうぼち 原田第41号墓地	2628ばんち 2628番地			33°27'22"	130°32'21"	1988.12 ~1989.10	349	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
はるだだい1ごうぼち 原田第1号墓地 はるだだい2ごうぼち 原田第2号墓地 はるだだい40ごうぼち 原田第40号墓地 はるだだい41ごうぼち 原田第41号墓地 (上巻の抄録訂正)	墓地	江戸 明治	墓石 土葬墓	陶磁器 銭貨 煙管 数珠玉 かんざし 他		人骨157体 義歯3 義眼1 毛髪		

原田第1・2・40・41号墓地 中 卷

—原田駅前土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告 2—

筑紫野市文化財調査報告書 第 79 集

平成16年11月30日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1-1

印 刷 株 式 会 社 三 光
〒812-0015 福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4
TEL 092-475-6271
FAX 092-475-6274